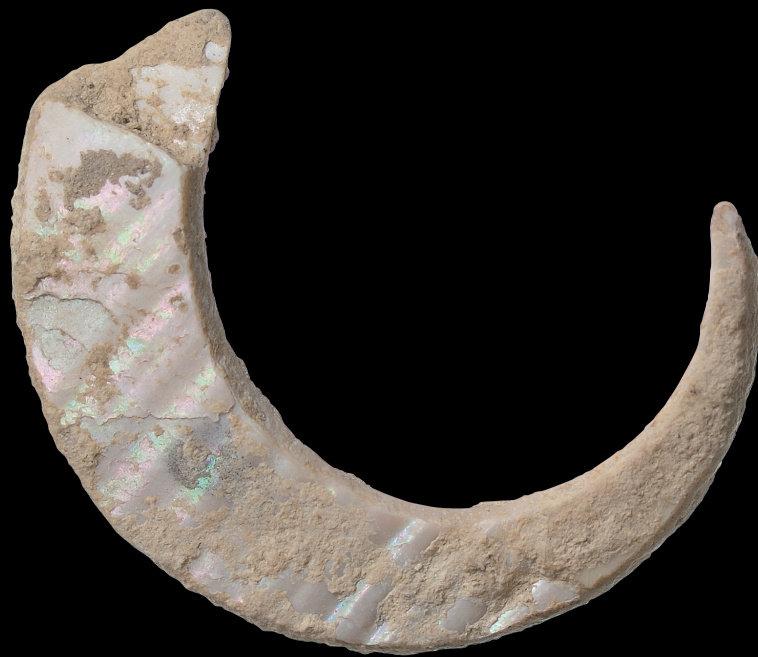


沖縄県南城市

サキタリ洞遺跡

発掘調査報告書 I

Excavation Report of the Sakitari-do Cave Site,
Nanjo city, Okinawa pref.



2018年3月

沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

沖縄県南城市

サキタリ洞遺跡

発掘調査報告書 I

Excavation Report of the Sakitari-do Cave Site,
Nanjo city, Okinawa pref.

2018年3月

沖縄県立博物館・美術館

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

序 文

更新世の隆起サンゴ礁からなる石灰岩が広く分布する沖縄では、港川人をはじめ旧石器時代の人骨が数多く発見されておりますが、旧石器時代の人々が使用した石器などの文化遺物や、生活跡は確認されておらず、また旧石器時代とその後の縄文時代との間に1万年以上にわたって人類の痕跡が全く知られてない空白の時代が介在していることも大きな課題となっていました。

こうした課題を踏まえて、沖縄県立博物館・美術館では平成19年度より、新たな人骨化石や旧石器の発見をめざして、沖縄島南部において継続的な発掘調査を実施してまいりました。本書では、平成21～29年度にかけて、9箇年8次にわたって発掘調査を実施した南城市サキタリ洞遺跡の調査成果を報告いたします。

サキタリ洞遺跡では、これまでの発掘調査・研究によって、約2万3000年前にさかのぼる世界最古の貝製釣針や、約2万年前の貝器と人骨、約1万4000年前の石器と人骨、約9000年前の押引文土器など、新たな発見が相次いでおり、沖縄だけでなく日本列島の人類史を考える上で重要な手がかりが得られております。これまで当館では、展覧会や概要報告書等を通してこうした調査成果の発信・普及にも努めてまいりましたが、今回調査成果を総覧する報告書を刊行するはこびとなりました。本書を通して、サキタリ洞遺跡の調査研究成果を多くの方々に活用いただけるよう願っております。

このたびの調査、報告に格別の御協力を賜りました国立科学博物館、東京大学総合研究博物館、南城市教育委員会、営業所内の洞穴調査を快諾していただきました株式会社南都大城宗直社長をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

また、今回の成果は、長年にわたってサキタリ洞現地の保全、管理に尽力して来られた株式会社南都大城宗憲会長の御功績なしにはあり得ませんでした。改めて、多年にわたる御尽力に深く敬意を表します。

平成30年3月

沖縄県立博物館・美術館
館長 田名 真之

目次

報告編	11	2層序	108
第1章 調査の目的	13	3遺構	112
第2章 琉球列島の旧石器時代遺跡と研究の現状	17	4遺物	124
1 琉球列島のなりたち	17	引用文献	154
2 遺跡の特徴と研究の経緯	17	第10章 調査区Ⅲ	157
3 琉球列島の旧石器時代遺跡	19	1 概要	157
4 琉球列島の旧石器人と文化をめぐる議論	20	2 層序	157
引用文献	21	3 遺構	160
第3章 発掘調査の経緯と経過	23	4 遺物	160
1 経緯	23	分析・考察編	163
2 経過	24	Ⅰ. サキタリ洞遺跡におけるテフラ検出の試み	
3 主な関連催事等	39	(早田 勉)	165
引用文献	40	1 はじめに	165
第4章 調査体制	41	2 土層の層序	165
第5章 遺跡の位置と環境	44	3 テフラ分析	166
1 地質・地理的環境	44	4 考察	169
2 歴史的環境	49	5 まとめ	171
3 新城のシーヤーマーについて (澤岬大佑)	52	文献	171
4 引用文献	55	Ⅱ. サキタリ洞遺跡出土の貝類遺体 (黒住耐二)	173
第6章 周辺の遺跡	57	1 はじめに	173
1 武芸洞遺跡 (南城市玉城字前川)	59	2 調査区Ⅰ	173
2 宇和川原半洞穴遺跡 (南城市玉城字前川)	65	3 調査区Ⅱ	183
3 ガルマンドウ原洞穴遺跡 (八重瀬町字新城)	66	引用文献	188
4 ハナンダガマ遺跡 (南城市玉城字堀川)	66	Ⅲ. サキタリ洞遺跡の調査区Ⅰより出土した動物遺骸	
5 ガラビ塚遺跡 (八重瀬町字新城)	67	(藤田祐樹)	191
6 新里洞穴遺跡 (八重瀬町字新城)	67	1 はじめに	191
7 港川遺跡 (八重瀬町字長毛)	68	2 資料と方法	191
8 ジャマシチ (南城市玉城字前川)	69	3 結果	192
9 玉泉洞 (南城市玉城字前川)	69	4 考察	195
10 雄樋川干潟	70	引用文献	199
引用文献	70	Ⅳ. サキタリ洞遺跡出土の脊椎動物遺体	
第7章 調査の方法と成果の概要	71	(菅原広史)	201
1 調査の方法	71	1 資料の概要と分析方法	201
2 成果の概要	71	2 分析結果	202
第8章 調査区Ⅰ	76	3 各調査区に見られる脊椎動物遺体の出土様相	207
1 概要	76	4 おわりに	210
2 層序と年代	76	Ⅴ. 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の焼土遺構の	
3 遺構	82	磁化研究 (酒井英男・菅頭明日香)	213
4 遺物	84	1 はじめに	213
引用文献	104	2 研究方法—残留磁化と地磁気年代推定	213
第9章 調査区Ⅱ	105	3 調査地と実験	214
1 概要	105		

4 2013 年度調査区の焼土サンプルの測定結果	215	参考文献	259
5 2014 年度の土坑の土壌試料の研究	216	IX. 沖縄・奄美の海産巻貝製釣針に関する初歩的 観察とその製作プロセスについて (山崎真治・新里亮人)	264
6 まとめ	218	1 はじめに	264
参考文献	218	2 資料の概要	264
VI. サキタリ洞遺跡の地形・地質と遺跡形成プロセス (石原与四郎・吉村和久・大岡素平・佐々木 華)	221	3 釣針の形態と製作技術について	264
1 はじめに	221	4 まとめにかえて	269
2 サキタリ洞遺跡周辺の地形・地質	221	文献	269
3 サキタリ洞の形成過程	226	X. サキタリ洞遺跡調査区Ⅱ出土の砂岩礫に 認められた赤色付着物 (山崎真治)	270
4 遺跡の堆積物	240	1 資料の概要	270
5 まとめ	249	2 所見	270
文献	250	総 括 (山崎真治)	271
VII. ガラス小玉の材質分析 (田村朋美)	253	1 調査成果の概要	271
1 はじめに	253	2 サキタリ洞遺跡における人類活動の諸相	272
2 資料の概要	253	3 今後の課題	275
3 調査の方法	253	引用文献	275
4 結果と考察	253	Abstract	276
文献	256	報告書抄録	279
VIII. サキタリ洞遺跡の放射性炭素年代測定 (國木田 大・松崎浩之)	257		
1 はじめに	257		
2 測定試料と分析方法	257		
3 測定結果および考察	257		
4 おわりに	259		

目 次

報告編

図1-1 東アジア・東南アジアの後期更新世の 人類遺跡	13	図3-10 2012年9月台風17号による被害	27
図1-2 港川人1号頭骨	14	図3-11 2012年10月調査区Ⅱ作業状況	27
図2-1 旧石器時代の琉球列島と遺跡	18	図3-12 2012年10月調査区Ⅰ削岩状況	27
図2-2 琉球列島における後期更新世～完新世 前葉の編年図	20	図3-13 2013年2月SX12 検出時の状況	27
図3-1 1970年頃のサキタリ洞	24	図3-14 2013年3月SX12・3D レーザー測量	27
図3-2 2009年11月25日講演会の様子	25	図3-15 2013年8月排土除去作業	27
図3-3 2010年調査区Ⅰ(試掘区)	25	図3-16 2013年9月調査区Ⅱコンクリート床 検出状況	27
図3-4 2010年調査区Ⅰ(試掘区)の調査	25	図3-17 2013年9月サキタリ洞遺跡発掘調査手法 検討会議(2013年度第1回)	27
図3-5 2010年調査区Ⅰ(試掘区)人骨 出土状況	25	図3-18 2013年10月小田静夫氏・春成秀爾氏 来訪	30
図3-6 2011年3月地質調査の様子(DP-B)	25	図3-19 2013年10月調査区ⅡO8・9区石灰岩 除去作業	30
図3-7 2011年3月地質調査の様子(DP-C)	25	図3-20 2013年11月地質調査の様子 (DP-E(2013))	30
図3-8 2011年7月岡村道雄氏視察	25	図3-21 2013年11月21日記者発表の様子	30
図3-9 2011年8月早田勉氏サンプリング	25		

目次

図3-22	2013年12月サキタリ洞遺跡発掘調査 手法検討会議(2013年度第2回).....30	と南島文化」会場の様子.....37	
図3-23	2014年2月ケイブカフェ特別展 「サキタリ洞遺跡の3万年」の様子.....30	図3-49	発掘調査の進捗状況.....38
図3-24	2014年2月企画展「サキタリ洞遺跡 発掘調査速報展」の様子.....30	図5-1	沖縄島の地質図とサキタリ洞遺跡の位置・44
図3-25	2014年2月酒井英男氏ら富山大学研究 チームによる地磁気分析.....32	図5-2	沖縄島南海岸の地形とサキタリ洞遺跡 の位置.....45
図3-26	2014年3月特別講演会「サキタリ洞 遺跡の3万年」の様子.....32	図5-3	サキタリ洞遺跡周辺地形図(1).....45
図3-27	2014年9月サキタリ洞遺跡発掘調査 手法検討会議(2014年度第1回).....32	図5-4	具志頭海岸の離水サンゴ礁とキノコ岩 (離水ノッチ).....46
図3-28	2014年10月白保竿根洞原洞穴遺跡 委員会メンバーによる視察.....32	図5-5	具志頭白土原の凝灰岩の露頭.....46
図3-29	2014年11月安斎正人氏、國木田大氏 調査.....34	図5-6	白土原のツノガイ類化石.....46
図3-30	2014年11月調査映像撮影の様子.....34	図5-7	雄樋川の谷筋(ガンガラーの谷近辺).....47
図3-31	2014年11月SX12人骨の3Dレーザー 測量的様子.....34	図5-8	サキタリ洞遺跡周辺地形図(2).....47
図3-32	2014年12月サキタリ洞遺跡発掘調査 手法検討会議(2014年度第2回).....34	図5-9	サキタリ洞東側開口部.....48
図3-33	2014年12月岸田徹氏、堀井雅恵氏 現地調査.....35	図5-10	玉泉洞およびサキタリ洞下層洞穴へ 続く洞穴の開口部(ガニグワーガマ).....48
図3-34	2014年12月調査区Ⅱ撮影状況.....35	図5-11	ガニグワーガマの開口部とサキタリ洞 東側開口部の位置関係.....48
図3-35	2014年12月SX12人骨の3Dレーザー 測量的様子.....35	図5-12	マルブミデラの開口部.....49
図3-36	2014年12月SX12人骨取上作業.....35	図5-13	サキタリ洞西側開口部.....49
図3-37	2015年10月調査区Ⅱ巨礫除去作業.....36	図5-14	サキタリ洞東側開口部に生じた水流.....49
図3-38	2015年10月門脇誠二氏現地調査.....36	図5-15	新城のシーヤーマー.....54
図3-39	2015年10月平成28年度特別展 「港川人の時代とその後」展示検討会議.....36	図6-1	サキタリ洞遺跡の位置と周辺の遺跡.....57
図3-40	2015年10月奈良貴史氏現地調査.....36	図6-2	武芸洞遺跡(西側洞口).....59
図3-41	2015年10月早田勉氏現地調査.....36	図6-3	洞内の様子.....59
図3-42	2015年11月石原与四郎氏現地調査.....36	図6-4	武芸洞遺跡出土の土器.....60
図3-43	2016年1月企画展「沖縄の旧石器人と 人類の起源」会場の様子.....37	図6-5	武芸洞遺跡出土の貝類・骨器類 (ヤブチ式期).....61
図3-44	2016年9月17日調査成果記者発表 の様子.....37	図6-6	第1号人骨着用品(巻貝製ビーズ).....62
図3-45	2016年11月特別展「港川人の時代と その後」開会式の様子.....37	図6-7	縄文時代晩期の石棺墓(SX2)と出土した 人骨(第1号人骨).....62
図3-46	2016年11月特別展「港川人の時代と その後」会場の様子.....37	図6-8	武芸洞遺跡出土の貝類(1).....63
図3-47	2017年7月夏期特別展「沖縄の旧石器人 と南島文化」開会式の様子.....37	図6-9	武芸洞遺跡出土の貝類(2).....64
図3-48	2017年7月夏期特別展「沖縄の旧石器人	図6-10	宇和川原半洞穴遺跡の近景.....65
		図6-11	宇和川原半洞穴遺跡出土の土器.....65
		図6-12	宇和川原半洞穴遺跡出土と推定 される土器.....66
		図6-13	ガルマンドウ原洞穴遺跡遠景.....67
		図6-14	ガルマンドウ原洞穴遺跡遠近景.....67
		図6-15	ハナンダガマ遺跡遠景.....67
		図6-16	ハナンダガマ遺跡内部のホール.....67
		図6-17	偽骨器(「叉状骨器」).....67
		図6-18	ガラビ壕遺跡近景.....68
		図6-19	新里洞穴遺跡近景.....68
		図6-20	港川遺跡のフィッシャー.....68
		図6-21	ジャマシチの景観.....69

図6-22 ジャマシチ岸辺の堆積層中に見られる カワニナ等の貝類……………69	(No. 12)に見られる加工痕と使用痕……………95
図6-23 雄樋川下流干潟……………69	図8-28 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科) 写真(1)……………96
図6-24 雄樋川下流干潟に見られるカキ、シテナ シジミの貝殻……………69	図8-29 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科) 写真(2)……………97
図7-1 サキタリ洞遺跡平面・断面図……………72	図8-30 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科: チップ)写真(3)……………97
図7-2 各調査区の層序と年代の概略……………73	図8-31 調査区I出土貝器(クジャクガイ)写真99
図8-1 調査区Iの平面図と遺構配置図……………77	図8-32 調査区I出土貝器(釣針および 関連資料)写真……………99
図8-2 調査区I南壁セクション図……………77	図8-33 調査区I出土貝ビーズ(マツムシ) 写真……………100
図8-3 調査区I J20区西壁セクションと 試掘区東壁セクションの合成図……………78	図8-34 調査区I出土貝ビーズ(シマワスレ) 写真……………100
図8-4 調査区I J19・20区南壁セクション写真79	図8-35 調査区I出土貝ビーズ(ツノガイ類) 写真……………101
図8-5 調査区I試掘区東壁セクション写真……………79	図8-36 調査区I出土貝ビーズ(巻貝)写真……………101
図8-6 調査区I試掘区北東隅セクション写真……………79	図8-37 調査区I出土甲殻類(カニ)、淡水貝類 (カワニナ)、陸産貝類(カタツムリ)写真……………102
図8-7 調査区I試掘区北壁V層の堆積状況細部 写真……………79	図8-38 調査区I出土動物骨(イノシシ)写真……………103
図8-8 調査区I(試掘区)セクション図……………80	図9-1 1970年頃のサキタリ洞……………105
図8-9 調査区Iの放射性年代測定試料採取 地点のドットマップ図……………81	図9-2 調査区IIの平面図……………106
図8-10 SX07~09検出状況写真……………83	図9-3 調査区II写真……………106
図8-11 SX08検出状況写真……………83	図9-4 調査区II・A-A'セクション図……………107
図8-12 SX17~19検出状況写真……………83	図9-5 調査区II・B-B'セクション図……………107
図8-13 SX17~19検出状況写真……………83	図9-6 調査区II O・P5区セクション図……………108
図8-14 SX18検出状況写真……………84	図9-7 調査区II O・P7区セクション写真……………109
図8-15 SX19検出状況写真……………84	図9-8 調査区IIの放射性炭素年代測定試料 採取地点のドットマップ図(東西立面)……………110
図8-16 調査区I・I~III層出土の人骨・石器・ 海産貝類ドットマップ図……………85	図9-9 調査区IIの遺構配置図……………112
図8-17 調査区I・FS層・I層出土遺物 ドットマップ図(平面図)……………86	図9-10 SX01平面図……………113
図8-18 調査区I・II層出土遺物ドットマップ図 (平面図)……………87	図9-11 SX01写真……………114
図8-19 調査区I・III~VIII層出土遺物 ドットマップ図(平面図)……………89	図9-12 SX02・14平面・立面図……………115
図8-20 調査区I・出土遺物ドットマップ図 (立面図)……………90	図9-13 SX02・14写真……………115
図8-21 調査区I出土人骨写真……………91	図9-14 P7区石棺墓(?)……………116
図8-22 調査区I出土石器(石英)写真……………92	図9-15 SX13平面図……………116
図8-23 調査区I出土石器(石英・チャート) 写真……………92	図9-16 SX13写真……………116
図8-24 調査区I出土石器(細粒砂岩)写真……………92	図9-17 SX16平面・立面図……………117
図8-25 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科) 実測図(1)……………94	図9-18 SX16写真……………117
図8-26 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科) 実測図(2)……………95	図9-19 SX16下部ウシ下顎骨(下顎肢) 検出状況写真……………117
図8-27 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科)	図9-20 SX11写真……………118

目次

図9-24 SX12 人骨微細地形図……………	121	図9-58 調査区Ⅱ出土具器写真(3)……………	149
図9-25 SX12 人骨調査状況写真……………	122	図9-59 調査区Ⅱ出土具器実測図(3)……………	150
図9-26 調査区Ⅱ主要遺物(土器)ドット マップ図(立面)……………	125	図9-60 調査区Ⅱ出土具器写真(4)……………	151
図9-27 調査区Ⅱ主要遺物(石器・石材、貝器) ドットマップ図(立面)……………	125	図9-61 調査区Ⅱ出土ガラス小玉写真……………	151
図9-28 調査区Ⅱ・Ⅱ類(押引文)土器ドット マップ図(平面)……………	127	図9-62 サキタリ洞遺跡出土銭貨・コイン写真	153
図9-29 調査区Ⅱ・Ⅲ類(条痕文)土器ドット マップ図(平面)……………	127	図9-63 サキタリ洞遺跡出土銭貨のレントゲン 写真……………	153
図9-30 調査区Ⅱ・Ⅳ類(面縄前庭式)・Ⅴ類 (縄文後期)土器ドットマップ図(平面)……	128	図9-64 サキタリ洞遺跡出土土器(1)……………	155
図9-31 調査区Ⅱ・Ⅵ類(縄文晩期)・Ⅶ類 (グスク)土器ドットマップ図(平面)……………	128	図9-65 サキタリ洞遺跡出土土器(2)……………	156
図9-32 調査区Ⅱ各時期土器ドットマップ図 (東西立面)……………	129	図10-1 調査区Ⅲの遺構配置図……………	157
図9-33 調査区Ⅱ各時期土器ドットマップ図 (O・P7区南北立面)……………	130	図10-2 調査区ⅢJ23・24区北壁セクション図 および出土遺物ドットマップ図(立面)……	159
図9-34 調査区Ⅱ各時期土器ドットマップ図 (M・N8区南北立面)……………	130	図10-3 調査区Ⅲの調査状況とJ23・24北壁 セクション写真……………	159
図9-35 調査区Ⅱ各時期土器ドットマップ図 (東西立面)……………	131	図10-4 SX05 平面・断面図と検出状況写真……………	161
図9-36 調査区Ⅱ出土土器写真(1)……………	132	図10-5 SX06 平面図と検出状況写真……………	161
図9-37 調査区Ⅱ出土土器実測図(1)……………	133	図10-6 SX10 検出状況写真……………	162
図9-38 調査区Ⅱ出土土器写真(2)……………	134	図10-7 XV層の獣骨(シカ類下顎骨)出土 状況写真……………	162
図9-39 調査区Ⅱ出土土器実測図(2)……………	134	図10-8 SX06 出土のイノシシ歯と攪乱層 出土の石英……………	162
図9-40 調査区Ⅱ出土土器写真(3)……………	135		
図9-41 調査区Ⅱ出土土器写真(4)……………	135	分析・考察編	
図9-42 調査区Ⅱ出土土器実測図(3)……………	137	図I-1 調査区Ⅰ深掘トレンチの土層柱状図……………	165
図9-43 調査区Ⅱ出土土器写真(5)……………	138	図I-2 調査区Ⅰ深掘トレンチ下部の土層柱状図……………	166
図9-44 調査区Ⅱ出土土器写真(6)……………	138	図I-3 調査区Ⅱ東壁の土層柱状図……………	166
図9-45 調査区Ⅱ出土土器写真(7)……………	139	図I-4 調査区Ⅰ深掘区の火山ガラス比 ダイアグラム(一部)……………	168
図9-46 調査区Ⅱ出土焼成粘土塊・土製品? 写真……………	141	図I-5 調査区Ⅱ東壁の火山ガラス比 ダイアグラム……………	168
図9-47 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(1)……………	141	図I-6 送付試料の火山ガラス比ダイアグラム……………	168
図9-48 雄樋川河岸敲石採集時状況の写真……………	142	図Ⅱ-1 旧石器時代層から得られた海産貝類の例 (現生標本)……………	177
図9-49 調査区Ⅱ出土石器・石材実測図……………	143	図Ⅱ-2 沖縄島から絶滅した陸産貝類……………	182
図9-50 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(2)……………	144	図Ⅲ-1 サキタリ洞調査区Ⅰ出土の動物遺骸……………	193
図9-51 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(3)……………	144	図Ⅲ-2 モクズガニの推定甲幅の分布……………	194
図9-52 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(4)……………	145	図Ⅴ-1 調査地の位置図……………	213
図9-53 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(5)……………	145	図Ⅴ-2 (a) 偏角・伏角と強度と(b) 地磁気の過去 2000年間の変化……………	213
図9-54 調査区Ⅱ出土具器実測図(1)……………	147	図Ⅴ-3 2013年度調査区での試料採取箇所……………	214
図9-55 調査区Ⅱ出土具器写真(1)……………	148	図Ⅴ-4 2014年度調査区での試料採取の様子……………	214
図9-56 調査区Ⅱ出土具器実測図(2)……………	148	図Ⅴ-5 交流消磁の結果のザイダーベルト図……………	215
図9-57 調査区Ⅱ出土具器写真(2)……………	149	図Ⅴ-6 消磁実験(交流・熱)で得た各試料の 磁化方向……………	216
		図Ⅴ-7 No22(焼土)、No26(石灰岩)の試料の	

熱消磁とテリエ法実験の結果 217

図V-8 NRMの測定結果 217

図V-9 帯磁率異方性の結果 218

図VI-1 沖縄本島と海底地形図 221

図VI-2 沖縄本島東南部の地形(上)と玉泉洞
ケイブシステムの分布(下) 222

図VI-3 沖縄本島南部の地質図 223

図VI-4 玉泉洞周辺で認められる露頭 224

図VI-5 玉泉洞ケイブシステムの発達過程と
洞穴分布 226

図VI-6 サキタリ洞平面図(沖縄県立博物館・
美術館2016)と断面図A-A'、B-B'(下) 228

図VI-7 サキタリ洞下層洞穴の平面投影図(上)
と展開縦断面図(下) 229

図VI-8 サキタリ洞下層洞穴の写真 229

図VI-9-1 ボーリングコアの記載(コアA・B) 232

図VI-9-2 ボーリングコアの記載(コアC・D) 233

図VI-9-3 ボーリングコアの記載
(コアE(2013)) 235

図VI-10 玉泉洞ケイブシステムの堆積物と洞穴 237

図VI-11 ボーリングコアの対比とその解釈 239

図VI-12 調査区Iにおける露頭写真とTOC、
TN、C/N、粒度 242

図VI-13 調査区IIにおける露頭写真とTOC、TN、
C/N、粒度 244

図VI-14 調査区IIにおけるVI層の対比と露頭中に
見られる無堆積面 245

図VI-15 調査区IIの北壁の写真 246

図VI-16 調査区I及びIIのTOC及び
TNの関係 247

図VII-1 サキタリ洞遺跡および宇堅貝塚出土
ガラス小玉の顕微鏡写真(倍率不同) 254

図VII-2 カリガラスの細分(Al₂O₃ vs. CaO) 255

図VIII-1 調査区Iの放射性炭素年代値 262

図VIII-2 調査区IIの放射性炭素年代値 263

図VIII-3 調査区IIIの放射性炭素年代値 263

図IX-1 沖縄・奄美における巻貝製釣針および
関連資料 265

図IX-2 ニシキウズ科(ギンタカハマ)製釣針
の素材の取り方 266

図IX-3 ニシキウズ科(ギンタカハマ)製釣針
の製作プロセス 266

図IX-4 ヤコウガイの貝殻 268

図IX-5 ヤコウガイ製釣針の素材の取り方 268

図X-1 調査区II・IV C層出土の砂岩礫 270

図X-2 赤色付着物の拡大写真 270

表 目 次

報告編

表1-1 これまでに発掘調査を行った遺跡 15

表2-1 琉球列島の旧石器時代遺跡 18

表6-1 周辺の遺跡リスト 58

表6-2 武芸洞遺跡の放射性炭素年代 62

表7-1 検出遺構一覧 74

表7-2 各調査区の層序と遺構・遺物の概要 75

表8-1 調査区Iの層序 81

表8-2 調査区Iの放射性炭素年代値 82

表8-3 調査区I検出遺構リスト 83

表8-4 調査区I・FS層・I層出土遺物リスト 86

表8-5 調査区I・II層出土遺物リスト 87

表8-6 調査区I・III~VIII層出土遺物リスト 90

表8-7 調査区I出土人骨リスト 91

表8-8 調査区I出土石器リスト 93

表8-9 調査区I出土貝器(マルスダレガイ科)
リスト 98

表8-10 調査区I出土貝器(クジャクガイ)
リスト 99

表8-11 調査区I出土貝器(釣針および関連資料)
リスト 99

表8-12 調査区I出土貝器(ビーズ)リスト 102

表8-13 調査区I出土動物骨(イノシシ)
リスト 103

表9-1 調査区IIの層序 109

表9-2 調査区IIの放射性炭素年代値 111

表9-3 調査区II検出遺構リスト 113

表9-4 主要遺物(実測図・写真掲載遺物)の
座標データ 124

表9-5 土器の分類 126

表9-6 土器集計表(座標記録分のみ) 126

表9-7 調査区II出土土器リスト 139

表9-8 調査区II出土焼成粘土塊・土製品?
リスト 141

目次

表9-9	調査区II出土石器・石材リスト	142
表9-10	調査区II出土貝器リスト	152
表9-11	調査区II出土ガラス小玉リスト	152
表9-12	サキタリ洞遺跡出土銭貨・コイン リスト	153
表10-1	調査区IIIの層序	158
表10-2	調査区IIIの放射性炭素年代値	158
表10-3	調査区III検出遺構リスト	160
分析・考察編		
表I-1-1	サキタリ洞におけるテフラ検出 分析結果	167
表I-1-2	サキタリ洞におけるテフラ検出 分析結果	167
表I-2-1	サキタリ洞における火山ガラス比 分析結果	169
表I-2-2	サキタリ洞における火山ガラス比 分析結果	169
表II-1	サキタリ洞遺跡から得られた 貝類遺体のリスト	174
表II-2	各種の生息場所類型	177
表II-3	サキタリ洞の調査区Iから出土した 海産貝類	178
表II-4	サキタリ洞遺跡の更新世土壌から抽出 された陸淡水産貝類の変遷	181
表II-5	サキタリ洞遺跡の調査区IIから 出土した貝類遺体	184
表III-1	サキタリ洞調査区I出土の主要な	

	無脊椎動物遺骸	193
表III-2	サキタリ洞調査区I出土脊椎動物遺骸 の識別資料数(NISP)	194
表IV-1	サキタリ洞遺跡から検出された脊椎動物 遺体の分類群一覧	201
表IV-2	水洗選別で採集された脊椎動物遺体一覧	202
表IV-3	ピックアップで採集された魚類遺体	203
表IV-4	調査区IIピックアップ資料 (魚骨以外)一覧	205
表IV-5	水洗選別資料の集計表	208
表IV-6	ピックアップ資料(魚骨)の集計表	208
表IV-7	調査区IIピックアップ資料 (魚骨以外)の集計表	209
表V-1	各siteの測定結果	215
表V-2	磁化強度と帯磁率の結果	217
表VII-1	蛍光X線分析結果	254
表VIII-1	本報告での放射性炭素年代値	258
表VIII-2	測定試料の化学処理収率	258
表VIII-3	調査区Iの放射性炭素年代値	260
表VIII-4	調査区IIIの放射性炭素年代値	260
表VIII-5	調査区IIの放射性炭素年代値	261
表IX-1	沖縄・奄美における巻貝製釣針および 関連資料リスト	266

写真図版目次

分析・考察編

写真図版I-1	調査区I深掘トレンチ・試料2 (透過光)	170
写真図版I-2	調査区I深掘トレンチ・試料26 (透過光)	170
写真図版I-3	調査区I深掘トレンチ・試料36 (透過光)	170
写真図版I-4	SAK1483(透過光)	170
写真図版I-5	SAK1485(透過光)	170
写真図版I-6	SAK1490(透過光)	170
写真図版IV-1	ウナギ属腹椎 ウナギ属尾椎 ハタ科 方骨 クロダイ属主上顎骨 ブダイ科尾椎	

	アイゴ属	211
写真図版IV-2	メジロザメ型椎骨 フェフキダイ属 口蓋骨 イロブダイ属 アオブダイ属 ハリセンボ ン科顎骨	211
写真図版IV-3	リクガメ類甲板 ヘビ類椎骨 トリ 尺骨 コウモリ亜目下顎骨 ネズミ科	211
写真図版IV-4	イヌ	211
写真図版IV-5	イノシシ	212
写真図版IV-6	イノシシ	212
写真図版IV-7	ウシ	212

例 言

- 1 本書は沖縄県南城市玉城字前川 浮花原 202 番地ほかに所在するサキタリ洞遺跡（「ガンガラーの谷」内）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、沖縄県立博物館・美術館が調査主体となって実施した。2012（平成 24）年度から 2017（平成 29）年度は、沖縄振興特別推進交付金事業「沖縄遺産のブランド開発・発信事業」の一環として調査研究を実施した。
- 3 調査期間は以下の通りである。
 - 【試掘調査】
 - 第 1 次：2009（平成 21）年 11 月 22 日～同年 11 月 30 日 調査区 I 試掘区の発掘
 - 第 2 次：2010（平成 22）年 5 月 18 日～同年 5 月 28 日 調査区 I・II 試掘区の発掘
 - 第 3 次：2011（平成 23）年 7 月 26 日～同年 8 月 10 日 調査区 I・II の発掘（範囲拡張）
 - 【本調査】
 - 第 4 次：2012（平成 24）年 8 月 2 日～ 2013（平成 25）年 3 月 22 日 調査区 I・II・III の発掘
 - 第 5 次：2013（平成 25）年 9 月 3 日～ 2014（平成 26）年 2 月 28 日 調査区 I・II の発掘
 - 第 6 次：2014（平成 26）年 9 月 9 日～ 2015（平成 27）年 2 月 18 日 調査区 I・II の発掘
 - 第 7 次：2015（平成 27）年 9 月 1 日～ 2016（平成 28）年 2 月 29 日 調査区 I・II の発掘
 - 第 8 次：2017（平成 29）年 11 月 6 日～ 2017（平成 29 年）12 月 28 日 調査区 I・II の発掘
- 4 調査後の整理作業・報告書作成は、沖縄県立博物館・美術館が関係各位の協力を得て実施した。
- 5 サキタリ洞遺跡の調査研究に関しては、これまでに以下の概要報告書を刊行している。
 - 沖縄県立博物館・美術館 2014『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅰ』
 - 沖縄県立博物館・美術館 2015『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅱ』
 - 沖縄県立博物館・美術館 2016『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅲ』
 - 沖縄県立博物館・美術館 2017『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅳ』
 本報告は沖縄振興特別推進交付金事業「沖縄遺産のブランド開発・発信事業」に関する最終的な報告書である。発掘調査や事業の進行状況との兼ね合いから、本報告書の所見、内容にはこれまでの概要報告書と異なる点もあるが、本報告書が現段階での最終的な所見となるものである。なお、サキタリ洞遺跡の調査研究自体は今後も継続が予定されているため、今後の進展によって本報告書の所見が変化することもありうる。また、時間的制約から本報告に詳細な記載を掲載できなかった調査区 I の VI 層以下の調査、調査区 II の VI 層以下の調査については、別途報告の予定である。
- 6 本書の編集は山崎真治が行った。本書は報告編と分析・考察編からなり、執筆は報告編については山崎（第 1 章～第 10 章：第 5 章 3 を除く）と澤岬大佑（第 5 章 3）が担当した。分析・考

目次

察編については、各項および目次に執筆者名を記した。総括は山崎が執筆した。本書報告編で使用した写真のうち、表記のないものは山崎真治、藤田祐樹、片桐千亜紀、大岡素平、澤岬大佑が撮影した。銭貨のレントゲン写真（図9－63）は、沖縄県立埋蔵文化財センターの機材を利用して宮城淳一氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）に撮影していただいた。本書報告編で使用した現地図面は山崎、藤田、片桐が作成した。遺物実測図は川満奈々、上原沙也加、渡邊愛依が作成し、トレース作業は山崎、上原、渡邊が行った。

7 各種遺物の分類・同定作業については、以下の方々のご協力を得た。

石器石材 宇佐美賢、宮城宏之、宮城直樹

ガラス小玉 田村朋美

貝類 黒住耐二

動物遺骸 藤田祐樹、菅原広史、樋泉岳二

このほか土器、銭貨については金城亀信氏、宮城弘樹氏、貝輪については島袋春美氏、黒住耐二氏、山野ケン陽次郎氏、岩陰囿込墓（SX14）については安里進氏、金武正紀氏、金城善氏より詳細なご教示を得た。

8 本書では真北（指示なし）と磁北（M. N.）を併用した。

9 本書での標高値は四等三角点新城（TR43927155901）を利用した。

10 本書では放射性炭素年代（ ^{14}C BP」と表記）と暦年較正年代（cal BP:「年前」と表記）を使用した。

11 本報告に係る出土遺物および写真、図面等は、沖縄県立博物館・美術館において保管している。

報 告 編

第 1 章	調査の目的	13
第 2 章	琉球列島の旧石器時代遺跡と研究の現状	17
第 3 章	発掘調査の経緯と経過	23
第 4 章	調査体制	41
第 5 章	遺跡の位置と環境	44
第 6 章	周辺の遺跡	57
第 7 章	調査の方法と成果の概要	71
第 8 章	調査区 I	76
第 9 章	調査区 II	105
第 10 章	調査区 III	157

第1章 調査の目的

現生人類 (*Homo sapiens*) は 20 万年前頃にアフリカで誕生したと考えられており、近年ではその出現は 30 万年前頃まで遡るとも言われている。彼らは、10 万～5 万年前頃までにはアフリカを出てユーラシア各地に拡散し、遅くとも 5 万～4 万年前頃までには極東アジアに到達した。その頃の東南アジアには、氷河期の海面低下によってスンダと呼ばれる広大な陸域が出現していた。当時スンダの一部だったボルネオ島のニアール洞穴 (マレーシア) では、約 4 万年前の地層から現生人類の頭骨 (Deep Skull) が発見されている (Barker ed. 2016) (図 1-1)。

東南アジアに到達した現生人類の一部は、ウォーレス線の東に広がる多島海 (ウォーレシア) を越えてサフル (パプア・ニューギニアおよびオーストラリア) に進出した。オーストラリアでは、

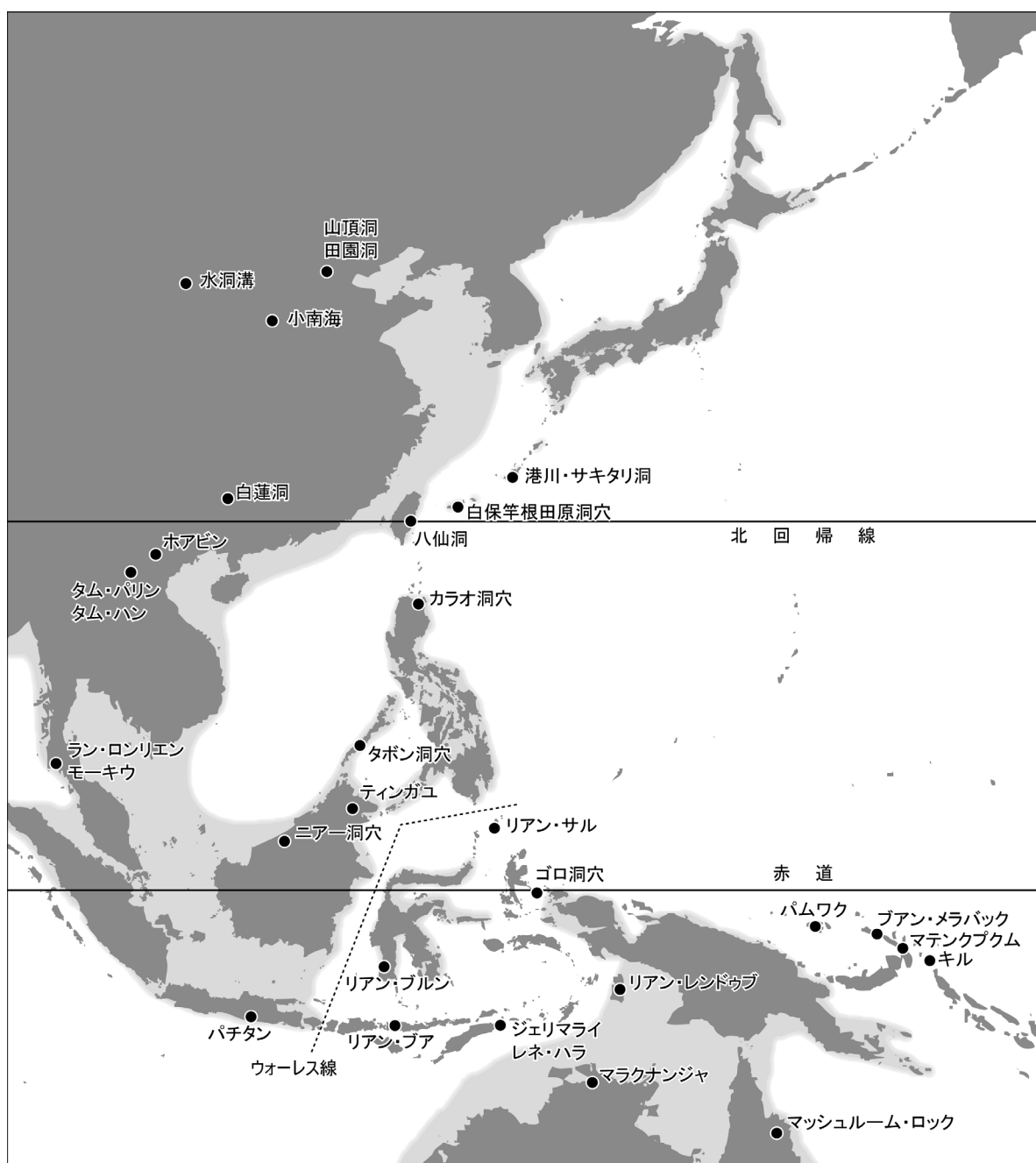


図 1-1 東アジア・東南アジアの後期更新世の人類遺跡

第1章 調査の目的

マンゴー湖遺跡群などで約5万～4万年前の人骨や文化遺物が発見されている（Dennell 2014）。一方、サフルへの到達とほぼ同じ頃、現生人類は北方にも進出した。中国周口店の田園洞でも約4万年前の人骨が発見されている（Shang et al. 2007）。この北方に進出した集団の一部が、沖縄を含む日本列島に進出したと考えられている。上記のようなシナリオに対して、近年では中国南部の智人洞やラオスのタム・パリンなどで、さらに古くさかのぼる可能性のある現生人類の部分骨が報告されており、その位置づけについて議論されている（Dennell 前掲）。

日本列島において人類の痕跡が明確になるのは、約4万～3万5000年前のことである。当時は氷河期で、海面低下によってサハリンと北海道は大陸から延びる半島（古北海道半島）となり、本州、四国、九州は一つの大きな陸塊（古本州島）となっていた。東シナ海では広大な面積の大陸棚が陸化していたが、琉球列島の島々の周囲を取り巻く海は深く、氷河期でも大陸と陸続きになることはなかったと考えられている。

日本列島への人類の渡来経路については、これまで主に次の三つのルートが議論されてきた（佐藤 2013）。

- ① 古北海道半島を経由し、津軽海峡を経て古本州島に至る「北回りルート」
- ② 当時陸化していた黄海や朝鮮半島を経由し、対馬海峡を経て古本州島に至る「西回りルート」
- ③ 琉球列島を経由して古本州島に至る「南回りルート」

日本列島に最初に足を踏み入れた現生人類が、上記のどのルートを経由して渡来したかという問題については、現在でも議論が続いている。日本列島における後期旧石器時代初頭（4万～3万5000年前）の石器群は、古本州島各地に分布する遺跡から発見されているが、古本州島では同時期の人骨は確認されておらず、石器文化の担い手が現生人類であったかどうかは明らかでない。主に火山灰からなる酸性土壌に広く覆われた古本州島では、旧石器時代の人骨や動物骨の出土例が極めて稀で、旧石器人骨としては、約1万7000年前の部分骨からなる浜北人（静岡県）が唯一の例である（Kondo and Matsu'ura 2005）。

これに対して、化石の保存に適した石灰岩が広く分布する沖縄では、旧石器時代（後期更新世）の人骨が数多く発見されている。山下町第一洞穴遺跡（那覇市）では3万6000年前頃（32100 ¹⁴C BP：TK-78）の小児骨が（鈴木 1975）、港川遺跡（八重瀬町）では2万年前頃（18250 ¹⁴C BP：TK-99、16600 ¹⁴C BP：TK-142）の4体分の全身骨格を含む人骨群（図1-2）が発見されており（鈴木 1975、Suzuki and Hanihara 1982）、いずれも現生人類のものとされている。また、近年白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）では、2万8000～2万年前頃の全



図1-2 港川人1号頭骨
東京大学総合研究博物館所蔵。

表1-1 これまでに発掘調査を行った遺跡

遺跡名	所在地	調査年度	主な時期	主な遺物・遺構
ハナダガマ遺跡	南城市玉城字堀川	2006～2007	後期更新世 弥生・平安並行時代 グスク時代 琉球王国時代 近代	シカ化石、人骨（グスク時代）
武芸洞遺跡	南城市玉城字前川	2007～2011	縄文時代早期～晩期 グスク時代 琉球王国時代	南島爪形文土器、面縄前庭式土器、仲原式土器、炉址、石棺墓、人骨
サキタリ洞遺跡	南城市玉城字前川	2009～2017	後期更新世 縄文時代早期～晩期 グスク時代 琉球王国時代	押引文土器、条痕文土器、面縄前庭式土器、仲原式土器、グスク土器、石器、貝器、崖葬墓、炉址、人骨

身骨格を含む人骨群が発見され、注目を集めている（仲座編 2013・2017a・2017b）。こうした沖縄の旧石器人骨は、旧石器人の形質的特徴や生態を解明する手がかりとなるばかりでなく、沖縄における人類の起源や日本列島の人類起源をめぐる南回りルートを検証する上で、重要な意義をもつものである。

一方、沖縄では旧石器時代の人骨が数多く発見されているにも関わらず、同時期の生活痕跡や確実な石器等の文化遺物が確認されておらず、また旧石器時代の人骨化石とその後に続く縄文時代との間に、1万年以上にわたって人骨や遺物が確認されていない「空白の時代」が介在することが長らく課題とされてきた。このため、沖縄県立博物館・美術館では、2007年度より新たな人骨や旧石器の発見をめざして、沖縄島南部の石灰岩地帯の洞穴遺跡において発掘調査を実施してきた。これまでに発掘調査を実施した遺跡を表1-1に示す。

2009年度から発掘調査を開始したサキタリ洞遺跡（南城市）では、旧石器時代（後期更新世）から縄文時代にかけての堆積層が良好な状態で保存されていることが確認された。そこで、2012年度からは沖縄振興特別推進交付金を活用した大規模な本調査と出土品に関する調査研究を実施し、サキタリ洞遺跡における過去3万年間の人類文化について詳細な知見を得ることができたので、以下ではその調査成果について報告する。なお、本報告では主に2015年度調査（第7次調査）までの内容を扱い、2017年度調査（第8次調査）については別途報告の予定である。また、サキタリ洞遺跡の調査・研究に関しては、これまでに以下のような成果を発表している。

【サキタリ洞遺跡の調査成果に関する主要文献一覧】

- 山崎真治 編 2014 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅰ』 沖縄県立博物館・美術館
 山崎真治 編 2015 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅱ』 沖縄県立博物館・美術館
 山崎真治 編 2016 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅲ』 沖縄県立博物館・美術館
 山崎真治 編 2017 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告Ⅳ』 沖縄県立博物館・美術館
 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・國木田 大・松浦秀治・諏訪 元・大城逸朗 2012 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査（2009～2011年）—沖縄諸島における新たな更新世人類遺跡—」 『*Anthropological Science (Japanese Series)*』 120: 121-134 頁
 山崎真治・西秋良宏・赤嶺信哉・片桐千亜紀・仲里 健・大城逸朗 2012 「サキタリ洞の後期更新世堆積層中より出土した石英標本に関する考古学的研究」 『*日本考古学*』 34: 71-85 頁
 山崎真治・横尾昌樹・伊藤 圭・國木田 大・新里尚美 2013 「沖縄先史土器の起源と南下仮説」 『九

第1章 調査の目的

『州旧石器』17：283-295頁

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介 2014 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」『*Anthropological Science (Japanese Series)*』122：9-27頁

山崎真治・黒住耐二・佐野勝宏・片桐千亜紀・藤田祐樹 2015 「旧石器時代の貝製ビーズー沖縄県南城市サキタリ洞遺跡からの報告」『*旧石器研究*』11：97－105頁

Fujita, M., Yamasaki, S., Katagiri, C., Oshiro, I., Sano, K., Kurozumi, T., Sugawara, H., Kunikita, D., Matsuzaki, H., Kano, A., Okumura, T., Sone, T., Fujita, H., Kobayashi, S., Naruse, T., Kondo, M., Matsu'ura, S., Suwa, G., Kaifu, Y. (2016) Advanced maritime adaptation in the western Pacific coastal region extends back to 35,000–30,000 years before present. *Proceedings of the National Academy of Sciences*. 113: 11184–11189.

引用文献

佐藤宏之 2013 「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座 日本歴史 第1巻 原始・古代1』岩波書店

鈴木 尚 1975 「沖縄に於ける洪積世人類の発見」『*人類学雑誌*』83(2)

仲座久宜 編 2013 『白保竿根田原洞穴遺跡ー新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター

仲座久宜 編 2017a 『白保竿根田原洞穴遺跡ー重要遺跡範囲確認調査報告書1 事実報告編』沖縄県立埋蔵文化財センター

仲座久宜 編 2017b 『白保竿根田原洞穴遺跡ー重要遺跡範囲確認調査報告書2 総括報告編』沖縄県立埋蔵文化財センター

Barker, G. ed. (2016) *Archaeological investigations in the Niah Caves, Sarawak, 1954-2004*. McDonald Institute for Archaeological Research, UK.

Dennel, R. (2014) Smoke and mirrors; the fossil record for *Homo sapiens* between Arabia and Australia. in *Southern Asia, Australia, and the Search for Human Origins*. Cambridge University Press

Kondo, M., Matsu'ura, S. (2005) Dating of Hamakita human remains from Japan. *Anthropological Science*. Vol. 113-2: 155-161.

Shang, H., Tong, H., Zhang, S., Chen, F., Trinkaus, E. (2007) An early modern human from Tianyuan Cave, Zhoukoudian, China. *Proceedings of the National Academy of Sciences*. 104: 6573–6578.

Suzuki, H., and Hanihara, K. (1982) The Minatogawa man : the upper pleistocene man from the island of Okinawa. *Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo*. No. 19.

第2章 琉球列島の旧石器時代遺跡と研究の現状

1. 琉球列島のなりたち

九州と台湾の間に約1100kmにわたって連なる琉球列島（琉球弧）は、ユーラシアプレートの東縁にあたり、地殻変動の激しい地域である（木崎編1985）。フィリピン海プレートの沈み込み運動に伴って、ユーラシアプレートの東縁部が隆起してできたのが琉球弧であり、約200万～100万年前にはアジア大陸の一部であったと考えられている。前期更新世以降、琉球弧の大陸側に沖縄トラフ（沖縄舟状海盆）と呼ばれる深い落ち込みが形成されると、大陸河川から吐き出される砂泥は沖縄トラフに流れ込んで遮断されるようになり、島々の周囲には造礁サンゴの生育に適した透明度の高い海が広がった。その後、地殻変動によって島嶼化が進み、約10万年前までには現在の琉球列島の原形ができあがったと考えられている。

琉球列島の地質は、概略として①四十万層群に代表される海洋堆積物の付加体からなる基盤と、②その上位を覆う新生代の地層、および③貫入岩類からなる。屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、石垣島、西表島など標高の高い島（高島）の地質は①～③の組み合わせからなり、喜界島、沖永良部島、与論島、宮古島、波照間島など標高の低い島（低島）には主に②が広く分布する。琉球列島の中で最大の島嶼である沖縄島は、北部と南部で地質が大きく異なり、北部は高島、南部は低島の特徴を合わせ持つ。石器石材として利用可能な硬質な岩石は主に高島に分布しており、チャートや石英といった打製石器に利用できる石材の分布はさらに限られている。

琉球列島の島々は、地質学・生物地理学的見地から、トカラ構造海峡（渡瀬線）とケラマ海裂（峰須賀線）によって北琉球（大隅諸島、トカラ列島）、中琉球（奄美諸島、沖縄諸島）、南琉球（宮古諸島、八重山諸島）に区分されている（図2-1）。このうち北琉球の島々は、更新世を通じて幾度か古本州島と陸続したと考えられており、種子島の^{かたのやま}形之山や^{かみよきの}上能野では、前期更新世のゾウ科やニホンムカシジカの部分骨が発見されている（西之表市教育委員会1990）。一方、長期にわたって孤立した島嶼であった中琉球や南琉球では、肉食獣などの捕食動物がほとんど分布していなかったため、ヤンバルクイナやアマミノクロウサギに代表される固有の動物相が形成されていった。特に中琉球や南琉球では、中大型の陸獣の種数が非常に乏しく、後期更新世の沖縄島ではリュウキュウジカとリュウキュウムカシキョンが、徳之島、石垣島ではリュウキュウジカが、宮古島ではミヤコノロジカが知られているのみであり、後期更新世末までにはこれらのシカ類も絶滅し、替ってイノシシが登場した。

2. 遺跡の特徴と研究の経緯

琉球列島の旧石器時代遺跡は北琉球、中琉球、南琉球のいずれの島群でも確認されているが、島群ごとにその内容には差異が見られる（図2-1、表2-1）。すなわち、奄美諸島以北の事例はすべて段丘面上の開地遺跡で、縄文時代以降の遺跡調査に伴って、その下層から旧石器時代の石器や礫群などが検出されている。一方、沖縄諸島以南の島々には、隆起サンゴ礁からなる石灰岩層（琉球石灰岩）が広く分布しており、現在までに確認されている旧石器時代遺跡はすべて石灰岩層中に形成された洞穴や^{れっか}裂罅（フィッシャー）で、かつ人骨出土地でもある。その多くは、洞穴調査や動物化石調査に伴って人骨が発見されたもので、主に第四紀学的枠組みに基づく調査研究が行われてきた。

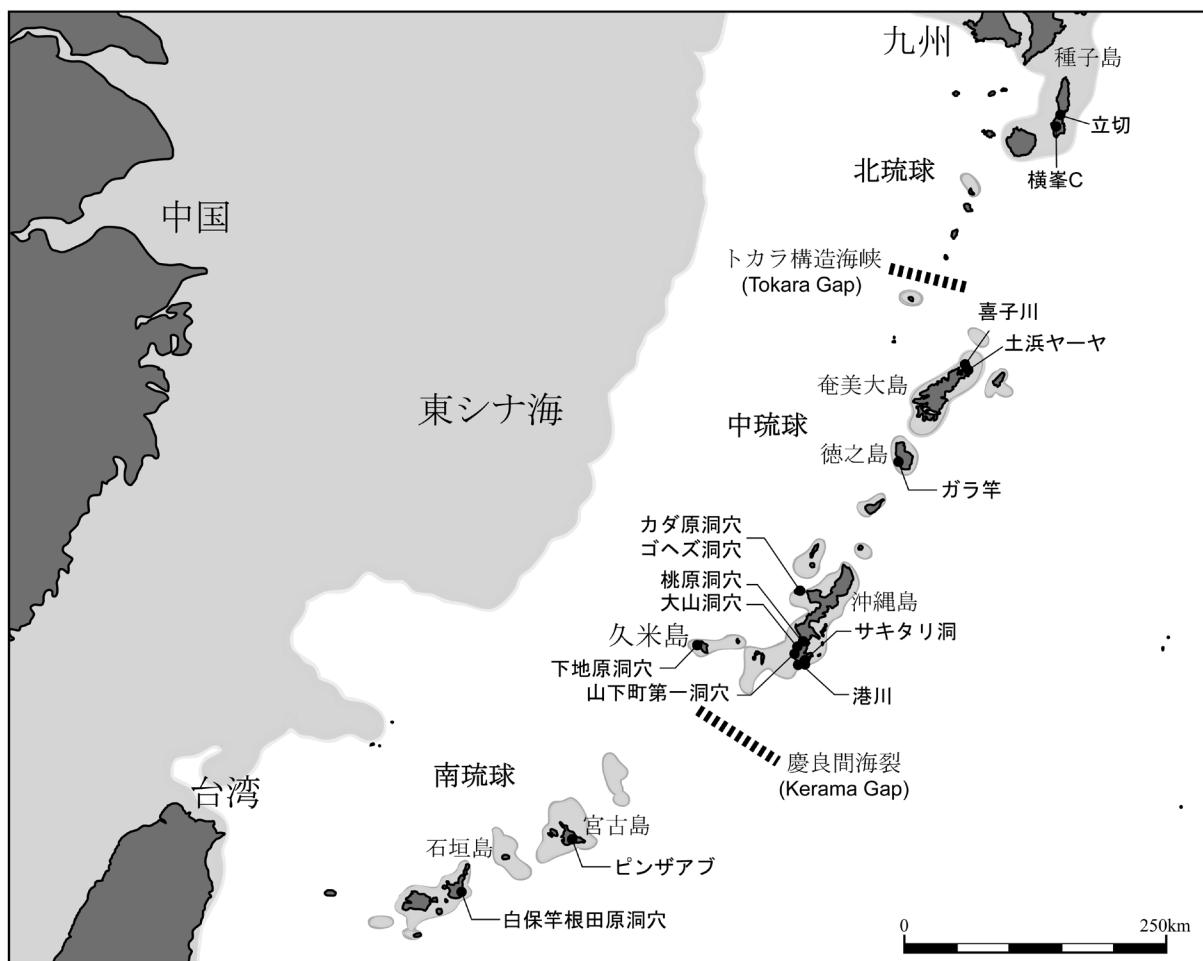


図2-1 旧石器時代の琉球列島と遺跡

薄いトーンは最終氷期最盛期（約2万年前）の陸域。

表2-1 琉球列島の旧石器時代遺跡

所在地	遺跡名	遺跡の年代	おもな遺物・遺構	発見年	指定
鹿児島県	立切遺跡（中種子町）	3万5000年前	石器・礫群	1997年	県指定史跡
	横峯C遺跡（南種子町）	3万5000年前	石器・礫群	1992年	県指定史跡
	銭亀遺跡（南種子町）	2万年前	石器	1999年	
	土浜ヤーヤ遺跡（奄美市）	後期更新世	石器	1987年	市指定史跡
	喜子川遺跡（奄美市）	後期更新世	石器・礫群	1987年	
	ガラ竿遺跡（伊仙町）	後期更新世	石器	2002年	
沖縄県	桃原洞穴遺跡（北谷町・沖縄市）	後期更新世	人骨	1966年	
	大山洞穴遺跡（宜野湾市）	後期更新世	人骨	1964年	
	山下町第1洞穴遺跡（那覇市）	3万6000年前	人骨・石器	1962年	県指定史跡
	港川遺跡（八重瀬町）	2万2000年前	人骨	1968年	町指定史跡
	サキタリ洞遺跡（南城市）	3万5000～1万年前	人骨・石器	2011年	
	カダ原洞穴（伊江村）	後期更新世	人骨	1962年	県指定史跡
	ゴヘズ洞穴（伊江村）	後期更新世	人骨	1976年	県指定史跡
	下地原洞穴（久米島町）	1万8000年前	人骨	1983年	町指定史跡
	ピンザアブ遺跡（宮古島市）	3万年前	人骨	1979年	市指定史跡
白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）	2万年前	人骨	2009年		

しかし、こうした洞穴や裂罅から発見された人骨化石の多くは、産出層準や年代が明確でなく、炉址等の生活遺構や石器等の文化遺物を伴う例もほとんどないことから、考古学的評価が困難な状況が長らく続いてきた。21世紀初頭以前に知られていた沖縄の旧石器文化に関する考古学的証拠は、山下町第一洞穴遺跡で検出された「炉址」と砂岩製の石器3点のみであり（高宮 1975a・b、小田 2003）、ピンザアブ遺跡（宮古島：沖縄県教育委員会 1985）やゴヘズ洞穴（伊江島：伊江村教育委員会 1977・1978）、港川遺跡の再調査（具志頭村教育委員会 2002）では、掘削排土について組織的なフルイがけやフローテーション作業が実施されたにも関わらず、石器類が全く発見されなかったことは、沖縄の旧石器時代研究に大きな謎を投げかけることになった。

また、沖縄では人類の渡来が旧石器時代にさかのぼる一方、完新世最古の人類文化である南島爪形文土器文化の出現は約7000年前と遅く、両者の間には1万年以上にわたって人骨や遺物が確認されていない「空白の時代」が介在することが長らく課題とされてきた。

こうした研究状況を踏まえて、沖縄県立博物館・美術館では2007年度から、新たな旧石器人骨の発見と旧石器文化の解明を目的としたプロジェクトを立ち上げ、主に沖縄島南部の洞穴遺跡を対象とした調査研究を継続的に実施してきた。

3. 琉球列島の旧石器時代遺跡

現在までに知られている琉球列島の最古段階の旧石器時代遺跡は、海洋酸素同位体ステージ3（MIS 3）（約3万5000～3万年前頃）に遡る（図2-2）。この段階の遺跡は、北琉球の種子島（横峯C、立切）、中琉球の徳之島（ガラ竿）、沖縄島（山下町第一洞穴、サキタリ洞）、南琉球の宮古島（ピンザアブ）から報告されている（図2-1、表2-1）。これらの島々は、当時も海に囲まれた孤立した島嶼だったと考えられており、旧石器人は何らかの手段で海を越えて各島々に渡来したことになる。近年、国立科学博物館が中心となって進められている「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」では、学術的知見に基づいて旧石器時代の航海再現に取り組んでおり、琉球列島に渡来した旧石器人の航海技術についても研究が進められている（海部 2017）。

続くMIS 2では北琉球では不明確な点が多いが、種子島ではMIS 2後半に細石刃石器群が古本州島から南下し、MIS 2末（縄文時代草創期・隆帯文土器文化期）には規模の大きな遺跡も出現する。中琉球では奄美大島の喜子川遺跡（喜子川遺跡調査団 1989、1995）や土浜ヤヤー遺跡（鹿児島県教育委員会編 1988）の石器群が当該期に位置づけられる可能性があるほか、沖縄島では港川人（Suzuki and Hanihara 1982）やサキタリ洞遺跡（調査区I）II層の人骨と貝器（山崎ほか 2014）、同I層の人骨と石英製石器（山崎ほか 2012）が当該期に位置づけられる。南琉球では白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）のIII C～IV層出土の人骨群が当該期に属する（仲座編 2017a・b）。

これに続く完新世前葉の様相については、中琉球、南琉球では不明な点が多い。北琉球では縄文時代草創期以降、九州南部とほぼ同様の土器文化が変遷した。沖縄では従来、約7000年前の南島爪形文土器文化が完新世最古の人類文化とされてきたが、サキタリ洞遺跡では南島爪形文土器に年代的に先行する約9000年前の押引文土器が確認され、さらに古い土器文化の存在も議論されている（山崎ほか 2013、沖縄考古学会編 2017）。

南琉球では白保竿根田原洞穴遺跡（III B層）（仲座編前掲）やツヅピスキアブ遺跡（宮古島市教育委員会 2011）において約1万年前頃の人類活動痕跡が検出されており、前者では獣骨、人骨とともに石英・チャート製の打製石器や火成岩・変成岩製の円礫石器が、後者では人為的な加工品を含むチャートや砂岩の円礫・礫片が出土している。特に前者のアッセンブリッジには少量ながらも

MIS	較正年代	¹⁴ C BP	北琉球	中琉球		南琉球					
				奄美諸島	沖縄諸島	宮古諸島	八重山諸島				
1	7000 9000 11000	4000	春日式	面縄前庭式		下田原式					
		5000	深浦・船元式	室川下層式		ツツビスキアブ	白保竿根田原洞穴 III B層				
		6000	曾畑式	曾畑式							
		7000	轟式	南島爪形文							
		8000	塞ノ神式	有肩押引文系(新)							
		8000	平栴式		有肩押引文系(古)						
		10000	貝殻文系		赤色条線文系						
		2	14000 20000 24000 28000 30000	12000	隆帯文系			土浜ヤーヤ	サキタリ洞I区I層	ピンザアブ	白保竿根田原洞穴 III C層
				14000	銭亀				下地原洞穴		
				16000					サキタリ洞 I 区 II 層 港川		
18000											
20000											
22000											
24000											
28000											
24000											
30000											
3	35000 36000	26000		喜子川?	サキタリ洞 I 区 III 層		(石城山)				
		28000		ガラ竿							
		30000	立切横峯C								
		32000			山下町第一洞穴						

図2-2 琉球列島における後期更新世～完新世前葉の編年図

MISは海洋酸素同位体ステージを示す。アミ掛けは土器文化。それ以外は遺跡名。人骨や文化遺物が得られていない化石産地は()で示した。沖縄諸島の土器文化はさらに年代が遡る可能性がある。奄美諸島のガラ竿はA T火山灰産出層準よりも下層に位置するが、数値年代は得られていない。八重山諸島の石城山(いしすくやま)からはリュウキュウジカが出土しており、白保竿根田原洞穴IV層よりも古いと考えられるが数値年代は得られていない。

土器片が含まれており、土器付着炭化物の放射性炭素年代は9268 ¹⁴C BP (Tka-16653)と報告されている(仲座編2017a)。このことは、南琉球における土器文化の起源が完新世初頭に遡る可能性を示唆している。一方、土器文化系統をめぐる問題や下田原式土器との関連など、今後に残された課題も多い。

4. 琉球列島の旧石器人と文化をめぐる議論

1991年、埴原和郎は日本列島の人類集団(日本人)の形成史を説明するにあたり、二重構造モデル(dual structure model)として今日広く知られる仮説を提唱した(Hanihara 1991)。ここでは、後期旧石器時代に日本列島に移動してきた集団と、その子孫である縄文人を日本列島の在来集団と位置付け、この在来集団と弥生時代になって押し寄せた渡来人とが混血し、現在の日本列島の人類集団が形成されてきたことが論じられた。埴原は、沖縄で発見された港川人に関する鈴木尚の形態学的研究(Suzuki and Hanihara 1982)や、宝来聡による縄文人のミトコンドリアDNA配列の分析に基づいて(Horai et al. 1989)、縄文人の祖先集団が東南アジアに由来することを推定している。

鈴木の研究以後に港川人の形態的分析を行った馬場ら(Baba et al. 1998)や海部ら(Kaifu et al. 2011)の研究においても、港川人は東南アジアをはじめとする南方系の人類集団に深い関わりをもつことが示されている。近年では、白保竿根田原洞穴遺跡出土の旧石器人骨についてミトコンドリアDNA分析が実施され、約2万年前の人骨からハプログループB4とRが検出されている(篠

田ほか 2017)。ハプログループ B 4 や R は、中国南部か東南アジアから北上して琉球列島に到達したと考えられることから、白保竿根田原洞穴の旧石器人も南方に由来する集団だったと考えられる。以上のように、琉球列島の旧石器人集団について、人類学の分野では一貫して南方起源説が支持されてきた。

一方、琉球列島の旧石器文化については、人類学の分野から提起された南方起源説に対応する形で、加藤晋平や小田静夫によっていわゆる不定形剥片石器文化の「北上仮説」(加藤 1996a・b、小田 1999) が提案されてきたが、積極的な支持は得られていない(山崎 2012)。少なくとも沖縄の旧石器時代遺跡では、台湾の長濱文化や東南アジアのホアビン文化のように打製石器類が多量に出土する事例はこれまで知られておらず、古本州島に見られるナイフ形石器をはじめとする定型的な石器類も確認されていない。近年、日本列島最古級の旧石器時代遺跡の調査が進む種子島や、サキタリ洞遺跡の調査成果から見ると、旧石器時代の琉球列島では、周辺地域(九州や台湾)と比較して石器技術を含めた生業に関わる技術部門の様相は個性的であり、良質な石器石材にこだわらないシンプルな技術体系が運用されていた可能性が考えられる(山崎印刷中)。

引用文献

- 伊江村教育委員会 1977『伊江島ゴヘズ洞の調査第1次概報』伊江村文化財調査報告書第2集
- 伊江村教育委員会 1978『伊江島ゴヘズ洞の調査第2次概報』伊江村文化財調査報告書第5集
- 沖縄県教育委員会 1985『ピンザアブ洞穴発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第68集
- 沖縄考古学会編 2017『2017年度研究発表会資料集 沖縄の土器文化の起源を探る』
- 小田静夫 1999「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』11
- 小田静夫 2003「山下町第1洞穴出土の旧石器について」『南島考古』22
- 海部陽介 2017「人類最古段階の航海—その謎にどう迫るか?」『科学』87(9)
- 鹿児島県教育委員会編 1988『土浜ヤーヤ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47
- 加藤晋平 1996a「南西諸島における土器以前の石器文化」『月刊地球』18
- 加藤晋平 1996b「南西諸島への旧石器文化の拡散」『地学雑誌』105
- 木崎甲子郎編 1985『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社
- 喜子川遺跡調査団編 1989『喜子川遺跡第1次・第2次発掘調査報告』
- 喜子川遺跡調査団編 1995「喜子川遺跡第3次・第4次発掘調査報告」『青山史学』14
- 具志頭村教育委員会編 2002『港川フィッシャー遺跡—重要遺跡確認調査報告—』具志頭村文化財調査報告書第5集
- 篠田謙一・神澤秀明・中垣裕貴・安達登・角田恒雄 2017「出土人骨のミトコンドリア DNA 分析」『白保竿根田原洞穴遺跡—重要遺跡範囲確認調査報告書2 総括報告編』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 高宮廣衛・金武正紀・鈴木正男 1975a「那覇市山下町洞穴発掘経過報告」『人類学雑誌』83(2)
- 高宮廣衛・玉城盛勝・金武正紀 1975b「山下町洞穴出土の人工遺物」『人類学雑誌』83(2)
- 仲座久宜編 2017a『白保竿根田原洞穴遺跡—重要遺跡範囲確認調査報告書1 事実報告編』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜編 2017b『白保竿根田原洞穴遺跡—重要遺跡範囲確認調査報告書2 総括報告編』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 西之表市教育委員会 1990『西之表市形之山化石群の発掘調査—第1報』
- 宮古島市教育委員会 2011『宮古島の岩陰遺跡』宮古島市文化財調査報告書第4集

第2章 琉球列島の旧石器時代遺跡と研究の現状

- 山崎真治 2012「琉球列島の旧石器人と北上仮説」『九州旧石器』16
- 山崎真治 印刷中「琉球弧における旧石器時代遺跡の諸相と特質」『古代文化』
- 山崎真治・西秋良宏・赤嶺信哉・片桐千亜紀・仲里 健・大城逸朗 2012「サキタリ洞の後期更新世堆積層中より出土した石英標本に関する考古学的研究」『日本考古学』34
- 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介 2014「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」『*Anthropological Science (Japanese Series)*』122
- 山崎真治・横尾昌樹・伊藤 圭・國木田 大・新里尚美 2013「沖縄先史土器の起源と南下仮説」『九州旧石器』17
- Baba, H., Narasaki, S., Ohyama, S. (1998) Minatogawa hominid fossils and the evolution of Late Pleistocene human in East Asia. *Anthropological Science*. 106 Supplement: 27-45.
- Hanihara, K. (1991) Dual structure model for the population history of the Japanese. *Japan Review* 2: 1-33. (埴原和郎 1994「二重構造モデル：日本人集団の形成に関わる一仮説」*Anthropological science (Japanese series)*. 102(5): 455-47 頁に和文再録)
- Horai, S., Hayasaka, K., Murayama, K., Wate, N., Koike, H., Nakai, N. (1989) DNA amplification from ancient human skeletal remains and their sequence analysis. *Proceedings of the Japan Academy*, (Series B). 65: 229-233.
- Kaifu, Y., Fujita, M., Kono, R. T., Baba, H. (2011) Late Pleistocene modern human mandibles from the Minatogawa Fissure site, Okinawa, Japan: morphological affinities and implications for modern human dispersals in East Asia. *Anthropological science*. 119: 137-157
- Suzuki, H., and Hanihara, K. (1982) The Minatogawa man : the upper pleistocene man from the island of Okinawa. *Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo*. No. 19.

第3章 発掘調査の経緯と経過

1. 経緯

化石の保存に適した石灰岩が広く分布する沖縄では、港川人をはじめとする旧石器時代（後期更新世）人骨が数多く発見されており、日本列島人の起源をめぐる人類学研究において重要な位置を占めてきた。沖縄県立博物館・美術館では、こうした人類学研究上の実績および今後の発見の可能性に鑑み、新たな人骨化石の発見を目的とした調査研究事業を企画した。

その一環として、2006年から2007年にかけて沖縄更新世人類遺跡調査団（団長：馬場悠男 国立科学博物館人類研究部長：当時）との共同研究事業として、港川人が発見された港川遺跡（八重瀬町）の近隣に位置するハナダガマ遺跡（南城市）の発掘調査を実施した。2次に及ぶ調査の結果、2500点を越える多量の動物化石とともに少量の断片的な人骨が回収された。動物化石の多くは更新世の絶滅シカ類（リュウキュウジカおよびリュウキュウムカシキョン）のもので、明らかな人為的解体痕は確認できなかった。また、人骨の放射性炭素年代測定結果は990 ¹⁴C BP（Beta-208322）というもので、出土状況や形態分析から見ても絶滅シカ類と同時期の所産とみなすことは難しいものであった（山崎編 2009）。

こうした結果を踏まえて、より人類の居住に適した洞穴を探索し、2007年には新たな候補地として雄樋川^{ゆうひがわ}の上流に位置する玉泉洞^{ぎよくせんどう}ケイブシステムの一洞穴である武芸洞を選定した。武芸洞では、以前から洞穴の地権者である株式会社南都の関係者によって石器やイノシシ骨等の遺物が採集されており、1982年頃までには遺跡の存在が推定されていた。2007年から2011年にかけて沖縄県立博物館・美術館が実施した5次におよぶ発掘調査の結果、武芸洞遺跡は主に縄文時代から近世にかけて利用された複合遺跡であることが明らかになり、最古の人類痕跡は約7000年前の南島爪形文土器文化期に遡ることが判明した（山崎編 2010）。一方、南島爪形文土器包含層の下位には水成堆積物と考えられる無遺物のシルト層が数mの厚さで堆積しており、旧石器時代の人類痕跡を見出すことは困難と考えられた。

地質学的観点から、玉泉洞ケイブシステムの洞穴群は、その形成過程から3時期に区分できることが論じられており（鹿島・山内 1971）、武芸洞はそのうちの第2相に属することから、旧石器時代の人類痕跡を探索するためには、武芸洞よりも形成時期の古い第1相の洞穴を調査する必要性が考えられた。こうした知見を踏まえて、玉泉洞ケイブシステムの中では最も標高の高い場所に位置し、形成時期も古いと考えられていたサキタリ洞を調査対象として選定し、2009年から発掘調査を開始した。以降、2017年度まで9箇年にわたって8次に及ぶ調査を実施している。

サキタリ洞遺跡は、かつてはサキタルガマ^{とうぎゅうどう}、斗牛洞などの名称で呼ばれていた（山内編 1992）。「サキタリ」は「酒造り」の意で、洞穴で酒造りが行われていたことに由来する。また、斗牛洞は洞穴付近で闘牛が行われていたことにちなんだ名称ということである。沖縄県教育委員会による洞穴実態調査報告では前川第4洞と呼称されている（沖縄県教育委員会 1978）。サキタリ洞が遺跡として認識された経緯は、洞穴の地権者である株式会社南都の当時社員であった島袋林信氏が、洞穴の開発に際して土器等の遺物を採集したことによる。おきなわワールドの収蔵庫には、1983～1984年にかけて島袋氏によってサキタリ洞（斗牛洞）で採集された土器、石器、貝類等の遺物が多数保管されており、その頃までには遺跡として認識されていたようである。沖縄県立博物館・美術館の調査においても、調査区Ⅲの攪乱層中から昭和58（1983）年5月の日付のあるタバコのパッケージ

第3章 発掘調査の経緯と経過

ジが回収されており、その頃に洞穴の開発が行われたことがうかがえる。

1972年の玉泉洞（現 おきなわワールド）開園前後に撮影されたサキタリ洞の写真をみると、すり鉢状に窪んだ洞床に大小の石灰岩礫が散乱している状況が確認でき、洞内には通路や階段、電燈が整備されている（図3-1）。通路や階段が整備される以前は、西側洞口部には土砂が厚く堆積しており、開口部も現在よりかなり狭かったようである。現在、ガンガラーの谷のツアーコースとなっている遊歩道の基本的な部分も、「自然公園」としてこの頃に整備されたものである。

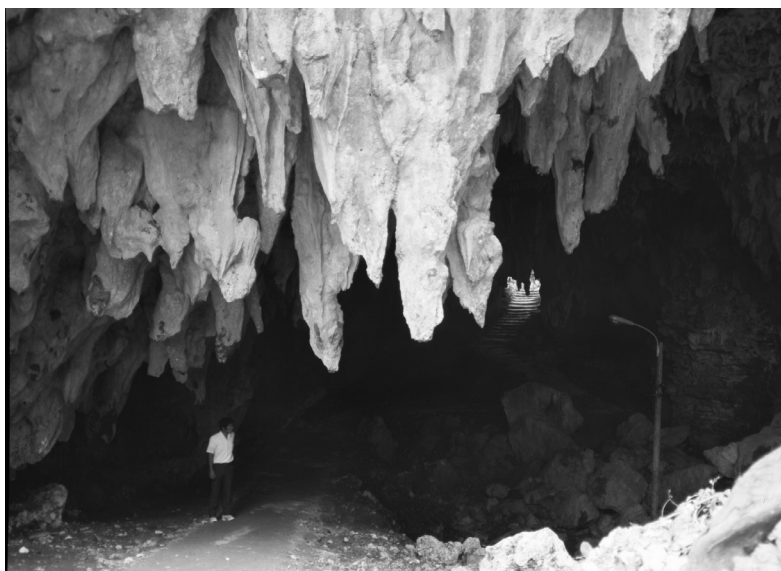


図3-1 1970年頃のサキタリ洞

東側洞口より内部を見る。（株）南都提供。

1973年7月にはサキタリ洞の洞床を埋め立てて平場にする工事が行われ、洞内の測量図も作成されている。東側洞口部（調査区Ⅱ）の造成土は、この頃に流入したものと考えられる。1983年7月には洞床にコンクリートが打設されており、この頃に島袋林信氏による遺物の採集が行われたと考えられる。その後は洞穴内外の大きな改変は行われておらず、現在に至っている。

2. 経過 ※所属等は当時のまま記載した。来訪者は多数にのぼるため、選択して記載した。

【試掘調査】

第1次：2009（平成21）年11月22日～同年11月30日：調査区Ⅰ（試掘区）の発掘

武芸洞遺跡と並行して調査を実施した。西側洞口内北壁際に調査区Ⅰ（試掘区）を設定し、発掘を行った。Ⅱ層まで掘削し、動物遺骸や炭化物等を回収した。Ⅱ層出土の炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、調査区Ⅰの堆積層が旧石器時代（後期更新世）のものであることが判明した。

・11月25日 サキタリ洞にて特別講演会「沖縄から探る最初の日本人の謎」（講師：海部陽介氏・国立科学博物館・主催：南城市教育委員会）を開催。

第2次：2010（平成22）年5月18日～同年5月28日：調査区Ⅰ・Ⅱ試掘区の発掘

武芸洞遺跡と並行して調査を実施した。

調査区Ⅰ（試掘区）：引き続き掘り下げを実施し、地表下2.5mまで掘削し、人骨（椎骨・肋骨からなる幼児の部分骨）を確認した。人骨出土層（Ⅶ層）の下部（Ⅷ層）からはシカ類化石が出土。放射性炭素年代測定の結果、Ⅶ層の人骨付近採取の炭化物は24410 ¹⁴C BP（PLD-16224）、Ⅷ層のシカ類化石に伴出した炭化物は32650 ¹⁴C BP（PLD-16469）であることが明らかになった。調査区Ⅱ（試掘区）：新たに東側洞口北壁際に調査区Ⅱ（試掘区）を設定し、地表下約1.5mまで掘削し、



図3-2 2009年11月25日講演会の様子

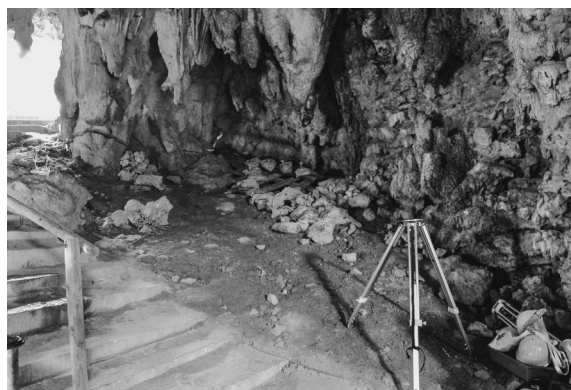


図3-3 2010年調査区Ⅰ（試掘区）



図3-4 2010年調査区Ⅰ（試掘区）の調査



図3-5 2010年調査区Ⅰ（試掘区）人骨出土状況（写真中央）



図3-6 2011年3月地質調査の様子(DP-B)



図3-7 2011年3月地質調査の様子(DP-C)

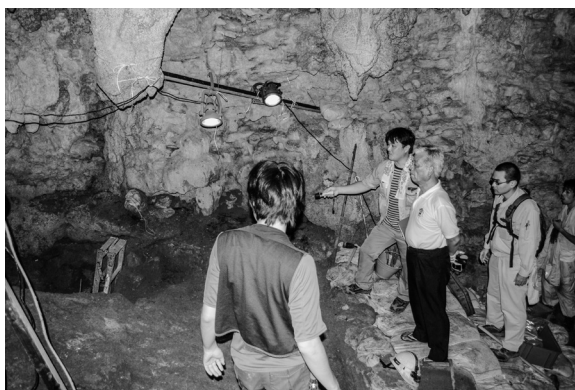


図3-8 2011年7月岡村道雄氏視察

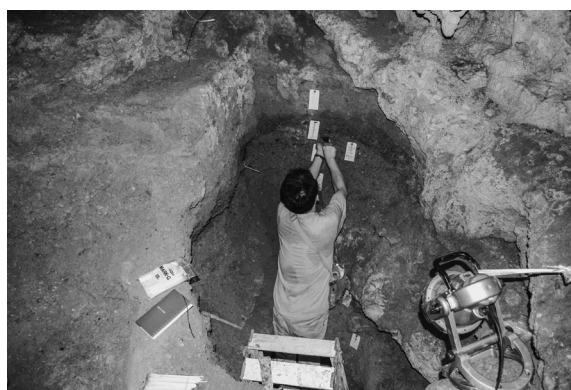


図3-9 2011年8月早田勉氏サンプリング

第3章 発掘調査の経緯と経過

I～IV層まで4枚の堆積層を確認した。II～III層から土器片（無文）や人骨、IV層から条痕文土器や獣骨（イノシシ）が出土することを確認した。

- ・2011年3月 洞穴内外の4箇所地質調査（ボーリング掘削）を実施した（DP-A・B・C・D）。

第3次：2011（平成23）年7月26日～同年8月10日：調査区I・IIの発掘（範囲拡張）

調査区I：発掘区を拡張しJ・K／19・20区をI層まで掘削。I層中から石英製石器や人骨（ヒト右上顎乳犬歯）、海産貝、獣骨等が出土した。

調査区II：発掘区を拡張してO・P7区をIV層まで掘削。II層中よりSX01、02検出。IVC層中から多量の条痕文土器、海産貝、獣骨等が出土した。O7区北側にトレンチを設定し、V層を一部調査。

※期間中、バスツアー「港川人発見の旅」（沖縄バス株式会社主催）が実施された。

- ・7月28日 岡村道雄氏来訪。
- ・7月29日 調査区II・IIA層より石積遺構（SX01）を検出。
- ・7月30日 講演会「港川人の時代の世界と沖縄」（講師：馬場悠男氏・国立科学博物館、片桐千亜紀・沖縄県立博物館・美術館 主催：八重瀬町教育委員会 於：八重瀬町保健センター）開催。I層中より石英製石器出土。
- ・8月2日 早田勉氏（火山灰考古学研究所）現地調査。
- ・8月3～4日 國木田大氏（東京大学）現地調査。
- ・8月4日 調査成果について記者発表を実施（19000 ¹⁴C BPの地層（II層）の発見とその上層（I層）からの石英・人骨の発見）。
- ・8月4～6日 台風9号接近のため作業中止。
- ・8月7日 発掘調査見学会開催（参加者70名）。P7区II層中から礫集中部とそれに伴う人骨（SX02）を検出。
- ・8月10日 調査区養生作業、機材撤収。
- ・11月下旬 放射性炭素年代測定の結果、I層出土の炭化物から12445 ¹⁴C BP（PLD-19423）、12475 ¹⁴C BP（PLD-19425）の年代値が得られた。

【本調査】

第4次：2012（平成24）年8月2日～2013（平成25）年3月22日：調査区I～IIIの発掘

調査区I：J・K／19・20区をII～2層まで掘削。II層中からは人骨、海産貝類、動物遺骸等が出土した。北半のフローストーン除去作業を実施。

調査区II：O7・8区をVII層まで掘削した。VB層より押引文土器が出土。さらに下位のVII層中からも人骨の左腕部分が検出された（SX12）。北壁際のP7・8区II層のSX2からは多数の人骨が検出され、その下部から石囲いを伴う人骨群（SX14）が検出された。SX14内からはグスク土器が出土した。

調査区III：攪乱が著しい状態であったが、トレンチ内では地表下約1.5mまで掘削した。最下部（XV層）からシカ類化石がまとまって出土した。

- ・8月2日 機材搬入。調査区I・II層掘削。高校教員研修受け入れ（3名）。
- ・8月3日 西洞口外に調査区IIIを設定し、発掘開始。
- ・8月14日 調査区III・XV層中よりシカ類化石（顎骨、角）出土。



図3-10 2012年9月台風17号による被害



図3-11 2012年10月調査区II作業状況



図3-12 2012年10月調査区I削岩状況



図3-13 2013年2月SX12検出時の状況



図3-14 2013年3月SX12・3Dレーザー測量



図3-15 2013年8月排土除去作業



図3-16 2013年9月調査区IIコンクリート床検出状況



図3-17 2013年9月サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議(2013年度第1回)

第3章 発掘調査の経緯と経過

- ・8月17日 調査区Ⅲ・XIII層中よりレンズ状の赤変部(SX05)を確認。
- ・8月20日 沖縄タイムス取材
- ・8月21日 調査区Ⅰ・Ⅱ-1C層中より人骨(歯)出土。
- ・8月23日 調査区Ⅰ・Ⅱ-1C層中より人骨(足根骨)出土。
Ⅱ-2層取り上げ遺物の整理を実施、巻貝製釣針を確認。大いに驚く。
- ・8月26～27日 台風15号接近。
- ・9月4日 調査区Ⅲ・XIV層中より赤化面(SX06)を確認。
- ・9月5日 調査区Ⅰ・Ⅱ-2層中より3カ所の炭化物集中部(SX07～09)を確認。
- ・9月11日 調査区Ⅱの養生を撤去。調査区を08・09区まで拡張して掘削開始。
- ・9月12日 調査区Ⅲ・XIV層中より海産二枚貝出土。
- ・9月14日 調査区Ⅲの放射性炭素年代測定結果について報告あり。層序とよく対応している。
- ・9月18日 調査区Ⅱ・V層掘削。SX02人骨検出作業。まとめて置かれた状態の長管骨を確認。
武芸洞遺跡のグスク～琉球王国時代の崖墓とよく似ている。
- ・9月19日 調査区Ⅲ・J23区XIV層中にて赤色・黒色の土壌粒、炭化物の集中部(SX10)を確認。
- ・9月20日 調査区Ⅱ・V層中より土器片(無文)、人骨(歯)出土。
- ・9月25日 調査区Ⅱ・SX02人骨取り上げ。國木田大氏(東京大学)現地調査。
- ・9月26日 調査区Ⅱ・07・P7区中間ベルト除去作業。
- ・9月27日 調査区Ⅱ・SX02人骨取り上げ(2回目)。能城修一氏(森林総合研究所)現地調査。
- ・9月29日 台風17号接近。大規模な被害をもたらした。サキタリ洞遺跡周辺でも倒木等の被害甚大。
- ・10月2日 調査区Ⅱ・08・9区畦除去作業。この部分は堆積層が攪乱されている。
- ・10月5日 調査区Ⅱ・08・9区攪乱土の下からコンクリート床面の延長部を検出。破碎して撤去。
- ・10月9日 調査区Ⅰ北半のフローストーン削岩作業。
調査区Ⅱ・VB層下面出土の土器片等遺物取り上げ。押引文の施文を確認。
- ・10月12日 調査区Ⅰ北半のフローストーン削岩作業。機材撤収。
- ・10月19日 調査成果について記者発表を実施(12000¹⁴C BPの人骨と石器を発見)。
沖縄考古学会10月定例会にて調査成果報告(山崎)
- ・10月20・21・27・28日 サキタリ洞遺跡現地にて速報展を開催(来場者400名)。
- ・10月23日～2013年1月20日 沖縄県立博物館・美術館および八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館にて企画展「大山盛保生誕100年記念 発見への情熱」を開催。(来場者:県博会場3296名、具志頭会場1672名)
- ・2月1日 機材搬入。調査区Ⅱ・VB、VI層掘削。SX02掘り下げ。
- ・2月5日 調査区Ⅱ・07区VII層中にて赤化面(SX11)を確認。VI層中より泥岩(クチャ)円礫検出。
- ・2月7日 調査区Ⅰ試掘区断面に赤化面(SX15)を確認。
- ・2月8日 調査区Ⅱ東側(O・P/4・5・6区)を拡張。造成土除去。
- ・2月13日 調査区Ⅱ・07・8区北壁のクリーニング中にVII層中より交連した状態の人骨(上腕骨・橈骨・尺骨)(SX12)を確認。壁面奥に個体骨格が埋没していることが予想された。
調査区Ⅲ南側拡張部攪乱部掘削。
- ・2月15日 調査区Ⅱ・SX02人骨取り上げ(3回目)。
- ・2月19日 調査区Ⅱ・SX02内よりグスク土器検出。

- ・2月21日 調査区Ⅱ・O8区ⅤB層下のⅥ層の落ち込んだ地形について検討する。
- ・2月26日 調査区Ⅱ・P5区Ⅱ層中より石灰岩礫集中部（SX13）を検出。
調査区Ⅱ・SX02の下部より石囲いを検出。SX14とする。
- ・3月5日 調査区ⅡO・P6区Ⅱ層掘削。
- ・3月8日 調査区ⅡN・O／6・7区ⅣA層掘削。
- ・3月15日 調査区Ⅱ・O・P5区Ⅱ層中より獣骨検出。ガチャピン訪問。
- ・3月15日 調査区Ⅱ・SX12の3Dレーザー測量を実施。
- ・3月19日 養生・撤収作業。

第5次：2013（平成25）年9月3日～2014（平成26）年2月28日：調査区Ⅰ・Ⅱの発掘

調査区Ⅰ：Ⅲ層（上部）まで掘削。

調査区Ⅱ：発掘区の拡張作業を実施。

調査区Ⅲ：作業なし。

洞内で地質調査（ボーリング掘削）を実施（DP-E（2013））。

- ・8月22日 排土除去作業
- ・9月2日 NHK取材（いまココ！・HOT eye 中継）
- ・9月3日 養生撤去作業。調査区Ⅱ南半造成土除去作業。
- ・9月6日 調査区Ⅱ・N7・8・9区の造成土下よりコンクリート床延長部を検出。
- ・9月10日 調査区Ⅱ・P6・P7・O6区ⅣA層掘削。N6区ⅡA・ⅣA層掘削。
- ・9月11日 調査区Ⅱ・N6・7区掘削作業。
- ・9月18日 調査区Ⅱ・N7区ⅣB層、O5区ⅣA層、O6区ⅣC層、P7区ⅣB層掘削。
玉泉洞（東洋一洞）のカニ堆積層調査。カラガマ第一洞調査。
- ・9月19日 調査区Ⅱ・O7・P6・P7区ⅣC層掘削。
- ・9月24日 調査区Ⅱ南半造成土（Ⅰ層）除去作業着手。
- ・9月24～25日 サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議（2013年度第1回）開催
- ・9月26日 調査区Ⅰ小グリッド（25cmメッシュ）導入。
- ・9月27日 調査区Ⅰ・Ⅲ層掘削。
- ・10月1日 調査区Ⅱ・N7・O7区中間ベルト除去作業。
- ・10月2日 調査区Ⅱ・P7区ⅣC層中よりイヌ下顎骨検出。
- ・10月3日 小田静夫氏・春成秀爾氏来訪。
- ・10月4日 向陽高校出前授業（山崎）。
- ・10月5～7日 台風23・24号接近。遺跡には大きな被害なし。
- ・10月9日 向陽高校学生現地見学
- ・10月10日 調査区Ⅱ・P5区よりグスク土器底部と礫が配置された状態で検出された（SX16）。
下部よりウシ下顎肢片が出土。
- ・10月11日 探検洞（カニグラーガマ）測量作業
- ・10月29日 調査区Ⅱ・N7・8区で検出されたコンクリート床延長部の一部を除去。
- ・10月30日 調査区Ⅱ・N8区攪乱部除去作業。攪乱土中には人骨や土器片、貝類等の遺物が多く含まれている。攪乱土除去後、攪乱坑西壁に褐色粘質土（Ⅴ層相当）が確認できた。これを一部掘り下げたところ、非常に分厚い大型の土器片が出土した。



図3-18 2013年10月小田静夫氏・春成秀爾氏来訪



図3-19 2013年10月調査区Ⅱ O8・9区石灰岩除去作業



図3-20 2013年11月地質調査の様子(DP-E(2013))



図3-21 2013年11月21日記者発表の様子



図3-22 2013年12月サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議(2013年度第2回)



図3-23 2014年2月ケイブカフェ特別展「サキタリ洞遺跡の3万年」の様子



図3-24 2014年2月企画展「サキタリ洞遺跡発掘調査速報展」の様子

- ・10月31日 調査区Ⅱ・O8・O9区Ⅵ層掘削。壁石または崩落した壁石とみられる板状の石灰岩塊が何面かにわたって平面的に検出された。折り重なる岩塊の間に土が入り込んでいるという状態である。
- ・11月6日 調査区Ⅱ・N8区の大型土器片が出土した褐色土（Ⅴ層相当）の下より、Ⅵ層相当の黄褐色のコンクリーションの顕著な層が検出された。この層の上部より人骨(手掌骨)、炭化物出土。
調査区Ⅱ・P7区ⅣC層掘削。ⅣC層中には焼土粒あるいは土器細片とみられる赤色・黒色の土壌粒顕著。ツノガイ類出土。
- ・11月7日 調査区Ⅰ・Ⅲ層JK19区より赤化面を検出。炉址の可能性について検討。
- ・11月8日 調査区Ⅱ・N7・8・9区で検出されたコンクリート床面を除去。地質調査（ボーリング掘削）実施（DP-E（2013））（～10日）。
- ・11月15日 調査区Ⅰ・Ⅲ層の赤化面3カ所をSX17～19として測量。
調査区ⅡN9区Ⅰ層除去。Ⅰ層下のしまった褐色土中より人骨(頸骨、下顎骨等)出土。P7区ⅤA層掘り下げ。遺物はカタツムリのみ。
- ・11月19日 調査区Ⅱ・N8・9区Ⅰ層掘削。
- ・11月20日 調査区Ⅱ・N8・9区Ⅰ層掘削。焼けた人骨、海産貝類等出土。この部分の攪乱は南壁際では深く、コンクリート床面下1.0mほどに達する。攪乱の底面はⅤ層またはⅥ層に達している。
- ・11月21日 調査成果について記者発表を実施（沖縄最古の土器（押引文土器）を発見）。
調査区Ⅱ・N8・9区Ⅱ層人骨出土状況記録。
- ・11月24日 現地見学会を開催（参加者480名）。
- ・12月3日～10日 サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議（2013年度第2回）開催
A日程：12月3・4日、B日程：12月5・6日、C日程：12月7・8日、D日程：12月9・10日
- ・2月15日 調査成果について記者発表を実施（約2万年前の人骨と貝器を発見）。
- ・2月18日～3月16日 沖縄県立博物館・美術館にて企画展「サキタリ洞遺跡発掘調査速報展—島に生きた旧石器人とその文化を探る—」を開催（来場者2912名）。サキタリ洞遺跡現地にてケイブカフェ特別展「サキタリ洞遺跡の3万年」（ガンガラーの谷コラボレーション企画）を同時開催。
- ・2月24日～25日 酒井英男氏ら富山大学研究チームによる古地磁気分析用サンプリング（サキタリ洞）、レーダー探査（武芸洞）。
- ・3月1日 サキタリ洞にてケイブカフェ特別講演会「サキタリ洞遺跡の3万年」（講師：山崎）（ガンガラーの谷コラボレーション企画）を開催（来場者114名）。

第6次：2014（平成26）年9月9日～2015（平成27）年2月18日：調査区Ⅰ・Ⅱの発掘

調査区Ⅰ：Ⅲ層以下の掘削。

調査区Ⅱ：調査区の拡張作業を実施。P7・8区ではⅤB層以下の掘削とⅦ層中より検出されたSX12人骨の調査・取り上げを実施。M・N／7・8区掘削作業実施。

- ・9月9日 機材搬入。
- ・9月12日 調査区Ⅱ・P7区ⅤB層掘削。北東側でⅥ層上面を検出。



図3-25 2014年2月酒井英男氏ら富山大学
研究チームによる地磁気分析



図3-26 2014年3月特別講演会「サキタリ
洞遺跡の3万年」の様子

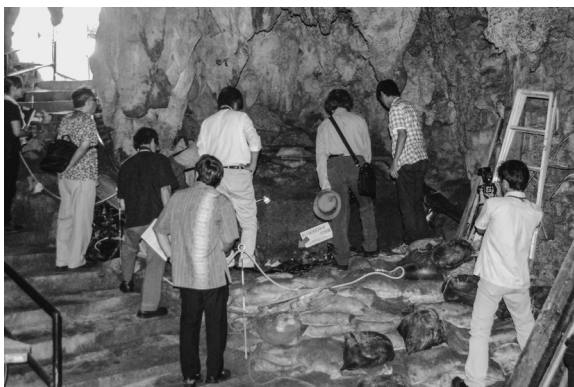


図3-27 2014年9月サキタリ洞遺跡発掘調
査手法検討会議(2014年度第1回)

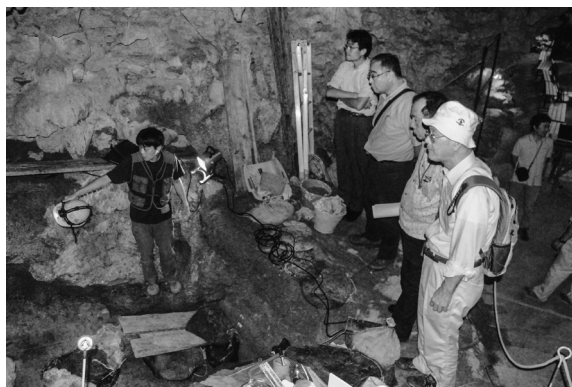


図3-28 2014年10月白保竿根田原洞穴遺
跡委員会メンバーによる視察

M・N8区I層掘削。焼けた人骨、土器片等出土。M・N6区I層掘削。

- ・9月17日 調査区II南半造成土(I層)除去作業。
- ・9月18日 調査区II・P7区VB層下部掘削。VI層は壁際でコンクリーションが顕著。
- ・9月24日 P7区V層下部でVI層上面に張り付くように土器片出土。土器片の位置はSX12の直上にあたり、VB層より上位から掘り込まれたものでないことを確認した。P7区はVB層の斜面部にあたるためか遺物は少ない。
- ・9月25～26日・10月2～3日 サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議(2014年度第1回)開催
- ・10月1日 調査区II・P7区VB層下部掘削。VB層とVI層の境界面を検出。
調査区II南半N6・7区にかけて巨礫(落下したつらら石)を検出。
- ・10月7日 白保竿根田原洞穴遺跡委員会メンバーによる視察。
- ・10月10日台風19号対策作業。
- ・10月14日調査区II・O・P/7・8区小グリッド(25cmメッシュ)設定。VI層掘削。カタツムリ破片や粒径1cm程度の石灰質円礫目立つ。
- ・10月16日調査区II・O7区VI層掘削。SX12直上のVI層下面で大型の石灰岩礫を検出。ちょうどSX12の頭部の位置にあたる。VI層は固結部や粘土質の部分が入り交じり、複雑な堆積。作業終了後、高所作業車にて東側洞口部撮影。
- ・10月28日調査区II南半造成土除去作業。M7・8区コンクリート床面除去。O・P/7・8区VI層掘削。SX12直上は複数の礫で覆われていて、人骨は全く見えない。

- ・ 11月4日 調査区Ⅱ・O8区Ⅵ層下部（SX12直上）土壌ブロックサンプリング。サンプリング土塊の直下より長さ5cm程の砂岩礫出土。人為的な持ち込みと考えられる。Ⅵ層中には砂礫がパッチ状に見られる部分がある。砂礫中には石灰質の円礫やカタツムリ破片が多く見られる。
- ・ 11月5日 調査区Ⅱ・O8区Ⅵ層掘削中に骨片検出。後にSX12人骨の大腿骨の一部であることが判明。
- ・ 11月6日 調査区Ⅱ・M8区付近で天井から落下した大型のつらら石岩塊の下に空洞が開口。内部は斜面となって南西方向に延びている。
- ・ 11月11日 調査区Ⅱ・M8区掘削。上層の黒色土層（Ⅱ層相当）と下層の赤褐色土層（Ⅳ層相当）を識別。
- ・ 11月12日 調査区Ⅱ・M8区Ⅱ層掘削。O・P／7・8区SX12検出作業。右肩と胸部の上位で石灰岩礫を検出。胸部の上の礫は頂部のレベルがやや高く、他の礫はほぼ平面的に検出。
- ・ 11月13日 調査区Ⅱ・M8区Ⅱ層人骨とりあげ。M8区の開口部内を調査。すぐに進入不可能となるが、空洞は奥に続いている。天井から落下した岩塊と洞床との間にできた空間である。
- ・ 11月14日 調査区Ⅱ・SX12周囲のⅦ層上面では、焼土や炭化物が面的に分布しており、これらの測量を行う。Ⅶ層上面は不整合面と考えられ、焼土や炭化物はこの不整合面に沿って分布している。
- ・ 11月18日 調査区Ⅱ・O8区でSX12人骨の寛骨の一部を検出。Ⅵ層の浸潤でコンクリーションしている。SX12人骨検出作業の記録撮影を開始。
- ・ 11月19日 調査区Ⅱ・SX12人骨の寛骨臼（右側）を検出。右脚はⅥ－Ⅶ層間の不整合形成時に失われたと考えられる。
- ・ 11月20日 調査区Ⅱ・M8区Ⅳ層掘削。人骨（大腿骨）とともに頸部の屈曲した器形の土器片（無文）が出土。
安斎正人氏（東北芸術工科大学）、國木田大氏（東京大学）現地調査。
- ・ 11月21日 調査区Ⅰ北壁際Ⅱ層中出土の海産貝類取り上げ。調査区ⅡM8区Ⅳ層よりゴホウラ貝輪出土。N8Ⅳ・Ⅴ層掘削。SX12半裁作業。
- ・ 11月26日向陽高校出前授業（山崎）。SX12の3Dレーザー測量実施。
- ・ 11月27日 調査区Ⅱ・SX12頭部の礫を除去。頭骨、下顎骨を検出。歓声があがる。
- ・ 11月28日 調査区Ⅱ・SX12について、掘り方（土坑）の有無を検討。土色、硬度を測定。
- ・ 12月1日 調査区Ⅱ・SX12検出作業。
- ・ 12月4～5日・8～9日 サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議（2014年度第2回）開催。
- ・ 12月5・6日 岸田徹氏（同志社大学）、堀井雅恵氏（名古屋大学）現地調査。古地磁気分析用サンプリング実施。
- ・ 12月5日 向陽高校生現地見学。
- ・ 12月9日 調査区Ⅱ・SX12について、サブトレンチを設定し、人骨周囲の埋土と地山の差異を確認。やはり色調、土質（しまり、粒度）等に違いが見られる。
- ・ 12月10日 調査区Ⅱ・SX12検出作業。頭頂部は保存がよく丸い形を保ったまま検出された。寛骨も非常に保存が良く、立体的な状態で検出された。
- ・ 12月11日 調査成果について記者発表を実施（9000年前以前の1体分の人骨を発見）。

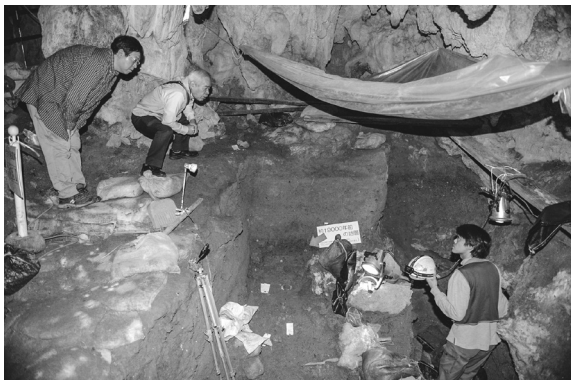


図3-29 2014年11月安斎正人氏、國木田大氏調査



図3-30 2014年11月調査映像撮影の様子



図3-31 2014年11月SX12人骨の3Dレーザー測量の様子

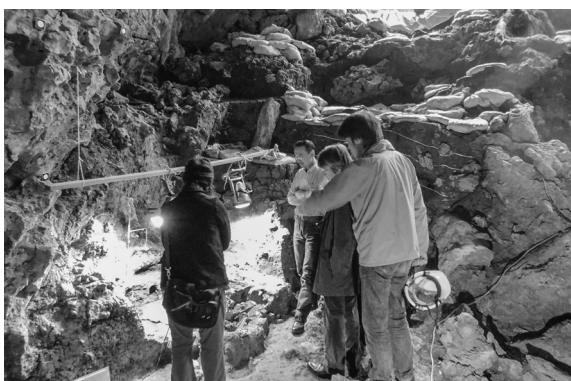


図3-32 2014年12月サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議（2014年度第2回）

- ・12月12日 調査区Ⅱ・SX12 検出状況の写真、映像撮影。2012年度に検出した左腕も再配置して撮影。
- ・12月13日・14日 現地見学会を開催（参加者869名）。
- ・12月16日 調査区Ⅱ・SX12人骨の取り上げ作業に入る。胸部の礫を除去し、椎骨、肋骨を検出。
- ・12月17日 肋骨取り上げの後、腹部の礫を除去。寛骨に礫が食い込んでいたため、礫を取り外す際に寛骨を破損してしまった。
- ・12月18日 右手検出作業。右肩付近で掌を握りしめた状態である。
- ・12月19日 SX12人骨の3Dレーザー測量実施。

以降、2015年2月18日まで断続的にSX12人骨取り上げ作業実施。

第7次：2015年（平成27年）9月1日～2016年（平成28年）2月29日：調査区Ⅰ・Ⅱの発掘
調査区Ⅰ：Ⅲ層以下の掘削。

調査区Ⅱ：調査区の拡張作業を実施（洞外調査区：O・P・Q／4・5区）。調査区内に露出した巨礫（落下したつらら石）の除去作業、M・N／7・8区の掘削作業を実施。

- ・9月1日 機材搬入。調査区Ⅰ崩落土除去作業。調査区Ⅱ養生撤収。
- ・9月2日 調査区Ⅰ壁面さらに崩落。調査区Ⅱ07・8区南ベルトに沿ってサブトレンチを掘削。調査区Ⅱ洞外（O・P・Q／4・5区）造成土（Ⅰ層）除去作業に着手。
- ・9月3日 調査区Ⅱ・07・8区サブトレンチ内V B層中より押引文土器とともにサメ類の椎骨出土。



図3-33 2014年12月岸田徹氏、堀井雅恵氏現地調査

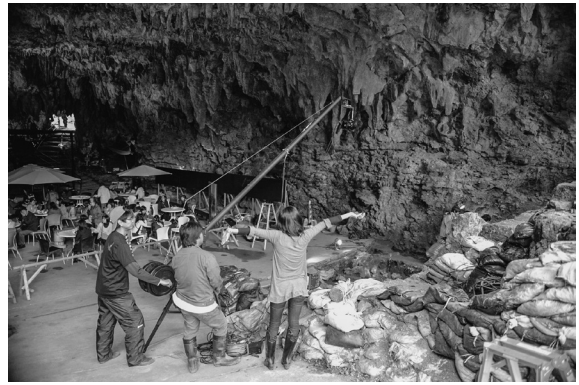


図3-34 2014年12月調査区II撮影状況



図3-35 2014年12月SX12人骨の3Dレーザー測量の様子



図3-36 2014年12月SX12人骨取上作業

調査区I 排土の水洗フルイ作業開始。

- ・9月8日 調査区II・07・8区サブトレンチVI・VII層掘削。VII層は急傾斜でN7・8区方向へ落ち込んでいる。VII層中には炭化物、焼土粒、カタツムリ、砂利石多い。
- ・9月9日 N8区V層掘削。
- ・9月18日 高橋健氏（横浜市歴史博物館）現地調査。
- ・9月24日 調査区II・M8区IV A層掘削。ガラスビーズ1点出土。排土の水洗フルイによりさらに3点検出。
- ・9月29日 調査区II・M8区IV C層掘削。
- ・10月7日 調査区II・N6・7区の巨礫（つらら石）除去作業着手。
- ・10月8日 昼頃北西の空に漏斗雲出現。
- ・10月9日 東側洞口部の造成土除去作業（重機使用）。
- ・10月14～15日 門脇誠二氏（名古屋大学）現地調査。微細形態分析用土壌サンプリング。
- ・10月16日 調査区II巨礫除去後清掃作業。NHKさあたまちゃん取材（朝）。NHK記者取材（夕）。
- ・10月19日 平成28年度特別展「港川人の時代とその後」展示検討会議開催。
- ・10月20日 堤隆氏（御代田町教育委員会）、柳田裕三氏（佐世保市教育委員会）現地調査。
- ・10月23日 奈良貴史氏（新潟医療福祉大学）現地調査。
- ・10月27日 航海プロジェクト関連取材で海部陽介氏（国立科学博物館）、門田修氏（海工房）ら来訪。早田勉氏（火山灰考古学研究所）現地調査。調査区IIサンプリング。
- ・11月4日 調査区II・M8区V層相当流土除去作業。VI層上面検出作業。

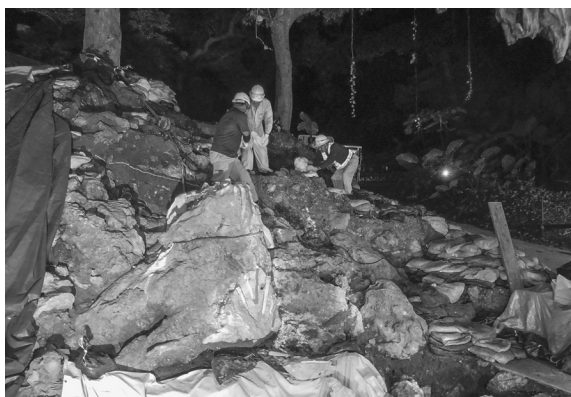


図3-37 2015年10月調査区II巨礫除去作業



図3-38 2015年10月門脇誠二氏現地調査



図3-39 2015年10月平成28年度特別展「港川人の時代とその後」展示検討会議



図3-40 2015年10月奈良貴史氏現地調査



図3-41 2015年10月早田勉氏現地調査



図3-42 2015年11月石原与四郎氏現地調査

- ・11月5日 石原与四郎氏（福岡大学）現地調査。橋本真紀夫・上田圭一氏（パリオ・サーヴェイ株式会社）現地調査。機材撤収作業。
- ・11月10日 coral way 取材。
- ・1月27日～2月28日 九州歴史資料館（福岡県小郡市）にて企画展「沖縄の旧石器人と人類の起源」を開催（来場者2700名・関連イベント参加者314名）

第8次：2017年(平成29年)11月6日～2017年(平成29年)12月28日：調査区Ⅰ・Ⅱの発掘
調査区Ⅰ：Ⅲ層以下の掘削。

調査区Ⅱ：調査区の拡張作業を実施(洞外調査区：O・P 4区)。M・N8区V・VI層掘削。



図3-43 2016年1月企画展「沖縄の旧石器人と人類の起源」会場の様子
九州歴史資料館(福岡県小郡市)。



図3-44 2016年9月17日調査成果記者発表の様子



図3-45 2016年11月特別展「港川人の時代とその後」開会式の様子



図3-46 2016年11月特別展「港川人の時代とその後」会場の様子



図3-47 2017年7月夏期特別展「沖縄の旧石器人と南島文化」開会式の様子
大阪府立弥生文化博物館(大阪府和泉市)。



図3-48 2017年7月夏期特別展「沖縄の旧石器人と南島文化」会場の様子

調査区・遺構	年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
		試掘区 J・K/ 19・20 南半 北半	掘削作業	表土・FS層・I層掘削作業	II層掘削作業 SX7・8・9・15 Flowstone 前岩作業	III層掘削作業 SX17・18・19 I～III層掘削作業	VI・VII・VIII層掘削作業	発掘作業休止		IV層掘削作業
調査区 I	試掘区		掘削作業		V・VI・VII層掘削作業 SX11	V・VI・VII層掘削作業				
調査区 II	07・8			I～IV層掘削作業	V・VI・VII層掘削作業 SX11	V・VI・VII層掘削作業				
	P5			I～II層掘削作業 SX13	I・II層掘削作業 SX13	II層掘削作業 SX16				
	P7・8			I～IV層掘削作業 SX01・02	SX02・14 人骨群調査 SX14	I～IV層掘削作業 I～IV層掘削作業	V～VI層掘削作業			
	0・N6					I～IV層掘削作業		巨礫(つらら石) 除去作業		
	M・N/ 7・8					I層(造成土)除去作業	II～V層掘削作業	II～V層掘削作業		VI層掘削作業 I層(造成土) 除去作業
	0・P4									
SX12				部分的に確認			プラン 検出 調査			
調査区 III					FS～XV層掘削作業 SX05・06・10					
地質調査 (ボーリング)			DP-A～D			DP-E				

図3-49 発掘調査の進捗状況

3. 主な関連催事等

- 2011年8月4日 調査成果について記者発表を実施（人骨と石英の発見）。
- 2011年8月7日 発掘調査見学会を開催（参加者70名）。
- 2012年10月19日 調査成果について記者発表を実施（約1万4000年前の人骨と石器を発見）。
- 2012年10月20・21・27・28日 サキタリ洞にて速報展を開催（来場者400名）。
- 2012年10月23日～2013年1月20日 沖縄県立博物館・美術館および八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館にて企画展「^{おやませいほ}大山盛保生誕100年記念発見への情熱」を開催（来場者：県博会場3296名、具志頭会場1672名）。
- 2013年11月21日 調査成果について記者発表を実施（約9000年前の押引文土器を発見）。
- 2013年11月24日 現地見学会を開催（参加者480名）。
- 2014年2月15日 調査成果について記者発表を実施（約2万年前の人骨と貝器を発見）。
- 2014年2月18日～3月16日 沖縄県立博物館・美術館にて企画展「サキタリ洞遺跡発掘調査速報展—島に生きた旧石器人とその文化を探る—」を開催（来場者2912名）。サキタリ洞遺跡現地にてケイブカフェ特別展「サキタリ洞遺跡の3万年」を同時開催。
- 2014年3月1日 ケイブカフェ特別講演会「サキタリ洞遺跡の3万年」（講師：山崎真治）を開催（参加者114名）。
- 2014年12月11日 調査成果について記者発表を実施（9000年前以前の1体分の人骨を発見）。
- 2014年12月13日・14日 現地見学会を開催（参加者869名）。
- 2016年1月27日～2月28日 九州歴史資料館（福岡県小郡市）にて企画展「^{おごおり}沖縄の旧石器人と人類の起源」を開催（来場者2700名・関連イベント参加者314名）
- 2016年9月17日 調査成果について記者発表を実施（沖縄旧石器人の意外な先進性：3万年前以前に遡る島への到達・世界最古の釣針・旬の食材を利用した食生活の証拠）。
- 2016年11月15日～2017年1月15日 沖縄県立博物館・美術館にて特別展「港川人の時代とその後—琉球弧をめぐる人類史の起源と展開」を開催（来場者5253名）。
- 2016年12月17日・18日 現地見学会を開催（参加者680名）。
- 2017年7月1日～9月18日 大阪府立弥生文化博物館（大阪府和泉市）にて夏期特別展「沖縄の旧石器人と南島文化」を開催（来場者11608名）。

【展示会図録等】

- 山崎真治 編 2012『平成24年度 沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展 大山盛保生誕100年記念 発見への情熱 図録』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 編 2014『平成25年度 沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展 サキタリ洞遺跡発掘調査速報展—島に生きた旧石器人とその文化を探る 図録』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 編 2016『サキタリ洞遺跡の発掘 パンフレット』 沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 編 2016『平成27年度 九州歴史資料館×沖縄県立博物館・美術館 企画展 沖縄の旧石器人と人類の起源 図録』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 編 2016『平成28年度 沖縄県立博物館・美術館 特別展 港川人の時代とその後—琉球弧をめぐる人類史の起源と展開 図録』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 編 2017『大阪府立弥生文化博物館×沖縄県立博物館・美術館 大阪府立弥生文化博物館夏季特別展 沖縄の旧石器人と南島文化 図録』沖縄県立博物館・美術館

引用文献

沖縄県教育委員会 1978『沖縄県洞穴実態調査報告 I』

鹿島愛彦・山内平三郎 1971「沖縄島ユヒ川地下川洞穴」『愛媛大学紀要 自然科学 D シリーズ (地学)』IV (4)

山内平三郎 編 1992『玉泉洞ケイブシステム』日本洞窟学会・日本ケイビング協会・日本洞窟協会・玉城村教育委員会・南都ワールド株式会社

山崎真治 編 2009『沖縄県南城市ハナダガマ遺跡発掘調査報告書』沖縄県立博物館・美術館

山崎真治 編 2010『沖縄県南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』沖縄県立博物館・美術館

第4章 調査体制

サキタリ洞遺跡の発掘調査は、沖縄県立博物館・美術館が調査主体となって実施し、2012（平成24）年度からは、沖縄振興特別推進交付金事業「沖縄遺産のブランド開発・発信事業」の一環として発掘調査・研究を実施した。調査体制は以下の通りである。

2013・2014年度には、調査区Ⅱ・Ⅶ層から検出された人骨（SX12）の重要性に鑑みて、その発掘・分析手法の妥当性を検討するとともに、さらなる向上をはかるため、考古学、人類学、地質学の各分野の専門研究者による検討会議を開催した（各年度2回開催）。

調査主体

沖縄県立博物館・美術館（2009～2017年度）

館長 牧野浩隆（2009～2010年度）

館長 白保台一（2011～2012年度）

館長 安里 進（2013～2015年度）

館長 田名真之（2016～2017年度）

調査担当 主任 山崎真治（2009～2017年度）

調査員 主任 藤田祐樹（2009～2016年度）

主任学芸員 片桐千亜紀（2011～2016年度）

臨 任 澤岬大佑（2017年度）

サキタリ洞遺跡発掘調査手法検討会議（2013・2014年度）

松浦秀治（人類学・年代学） お茶の水女子大学 教授（当時）

土肥直美（人類学） 琉球大学 非常勤講師

西秋良宏（考古学） 東京大学総合研究博物館 教授

小口 高（地理学） 東京大学空間情報科学研究センター 教授

海部陽介（人類学） 国立科学博物館 人類研究部 研究主幹（当時）

金城亀信（考古学） 沖縄県立埋蔵文化財センター 班長（2013年度）

沖縄県教育庁文化財課 班長（2014年度）

2013（平成25）年度

第1回 9月24・25日

第2回 A日程：12月3・4日（小口）、B日程：12月5・6日（西秋・金城）、C日程：12月7・8日（松浦）、D日程：12月9・10日（海部・土肥）

2014（平成26）年度

第1回 A日程：9月25・26日（土肥・西秋・松浦）、B日程：10月2・3日（海部・小口）

第2回 A日程：12月4・5日（松浦・金城）、B日程：12月8・9日（西秋・土肥・海部・小口）

第4章 調査体制

調査協力

国立科学博物館、東京大学総合研究博物館、沖縄県教育庁文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センター、南城市教育委員会、八重瀬町教育委員会、株式会社南都（おきなわワールド・ガンガラーの谷）、青山直弘、赤嶺信哉、新垣義夫、安斎正人、池原悠貴、石田 肇、出穂雅実、泉 吉紀、李 鮮鰻、稲田孝司、井上奈々、上田圭一、宇佐美 賢、江上幹幸、大岡素平、大城逸朗、大城一成、大城さとし、大城宗憲、大城秀子、大堀皓平、大山盛弘、岡村道雄、小田静夫、門脇誠二、金澤英作、狩野彰宏、川崎一雄、木口裕史、岸田 徹、木下正樹、木村謙介、金城 達、金武正紀、久高 健、国武貞克、河野礼子、小林 哲、小林達雄、近藤 恵、相美伊久雄、佐川正敏、佐々木由香、佐藤宏之、佐野勝宏、設楽博己、篠田謙一、島袋春美、島袋 洋、島袋林信、新里貴之、新里尚美、高橋 健、高橋 巧、高宮広土、知念 勇、堤 隆、樋泉岳二、徳嶺里江、長井謙治、仲里 健、仲座久宜、仲地政英、長嶺清喜、夏木大吾、波木基真、奈良貴史、成瀬 實、新田重清、能城修一、橋本真紀夫、長谷川善和、馬場悠男、春成秀爾、深瀬 均、堀井雅恵、堀川恵司、麻柄一志、宮城明恵、宮城清志、宮城淳一、宮城直樹、宮城弘樹、宮城宏之、宮里知恵、盛本 勲、役重みゆき、柳田俊雄、柳田裕三、山内平三郎、山崎仁也、山野ケン陽次郎、横山幸平、吉村和久、米田 穰

作業員

- (2011年度) 奥間俊光、澤岷光盛、渡久地政武
(2012年度) 遠藤輝彦、大城逸朗、大田亀助、久我谷溪太、具志堅正光、瀬底正幸、澤岷光盛、照屋清吉、當山信政、仲村常光、嶺井 猛
(2013年度) 稲福 正、大城逸朗、具志堅正光、嶺井 猛
(2014年度) 稲福 正、具志堅正光、嶺井 猛、照屋清吉、瀬底正幸、川満奈々
(2015年度) 澤岷光盛、照屋清吉、福田憲一、與儀美奈、石川七恵
(2016年度) 上原沙也加
(2017年度) 渡邊愛依

業務委託

- (2009年度)
平成 21 年度 沖縄県南部の洞穴遺跡出土遺物の自然科学分析業務（株式会社 パレオ・ラボ）

(2010年度)
平成 22 年度 博物館共同研究事業に伴う年代測定業務（株式会社 パレオ・ラボ）
平成 22 年度 博物館共同研究事業に伴う雄樋川流域の地質調査業務（株式会社 沖縄設計センター）
平成 22 年度 博物館共同研究事業に伴う南城市サキタリ洞の地質調査業務（株式会社 沖縄設計センター）

(2011年度)
平成 23 年度 博物館共同研究事業に係る発掘調査支援業務（株式会社 南都）

(2012年度)

- 平成24年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘調査支援業務（株式会社 南都）
平成24年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う年代測定業務（株式会社 パレオ・ラボ）
平成24年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴うフローテーション業務（パリーノ・サーヴェイ株式会社）

(2013年度)

- 平成25年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘調査支援業務（株式会社 南都）
平成25年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う年代測定等業務（株式会社 パレオ・ラボ）
平成25年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘品整理作業支援業務（株式会社 パスコ）
平成25年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴うレプリカ・遺跡模型製作業務（株式会社 パスコ）

(2014年度)

- 平成26年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘調査支援業務（株式会社 南都）
平成26年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘調査支援業務（その2）（株式会社 パスコ）
平成26年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う年代測定業務（株式会社 パレオ・ラボ）
平成26年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う情報発信コンテンツ制作業務（有限会社 ワイズ）

(2015年度)

- 平成27年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う発掘調査支援業務（株式会社 南都）
平成27年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う人骨出土状況模型製作業務（株式会社 パスコ）
平成27年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う転石撤去業務（松田都市開発株式会社）
平成27年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う年代測定業務（株式会社 パレオ・ラボ）
平成27年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う土壌薄片製作業務（株式会社 ニチカ）

(2016年度)

- 平成28年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に係る自然科学分析業務（株式会社 火山灰考古学研究所）
平成28年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う土壌薄片製作業務（株式会社 ニチカ）
平成28年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に係る情報発信コンテンツ制作業務（文進印刷株式会社）

(2017年度)

- 平成29年度 沖縄遺産のブランド開発・発信事業に伴う年代測定業務（株式会社 加速器分析研究所）

第5章 遺跡の位置と環境

サキタリ洞遺跡は、南城市玉城字前川^{うきはなばる}浮花原 202 番地ほかに位置し、おおよその緯度経度は以下の通りである。

東側洞口：北緯 26 度 8 分 31 秒 東経 127 度 44 分 49 秒

西洞口：北緯 26 度 8 分 31.4 秒 東経 127 度 44 分 46.5 秒

現在、サキタリ洞遺跡は観光施設「おきなわワールド」に隣接するガイドツアーコース「ガンガラーの谷」の一部として公開されており、サキタリ洞遺跡（ケイブ・カフェ）を起点として武芸洞遺跡まで約 1 km のツアーコースが整備されている。

1. 地質・地理的環境

サキタリ洞遺跡が位置する沖縄島の地質は、西海岸では嘉手納町^{かてな}と読谷村^{よみたん}、東海岸ではうるま市石川付近を境として北部と中南部で大きく異なっており、北部には主に新生代古第三紀以前、南部にはそれ以降の地層が分布する。中南部の基盤となる地質は主に島尻層群や琉球層群で、砂岩、泥岩、凝灰岩、石灰岩などの堆積岩類が産出する。北部には主に本部層群、国頭層群（嘉陽層・名護層）、貫入岩類が分布し、古期石灰岩、チャート、変成岩類、砂岩、火成岩類など、石器石材としても有用な多様な岩石が産出する（図 5-1）。サキタリ洞遺跡から出土した石器石材のうち、石灰岩や砂岩などごく一部の石材を除く大多数は、沖縄島北部あるいは慶良間諸島^{けらま}方面から搬入されたものと推定される。

サキタリ洞遺跡は、沖縄島南海岸に流出する雄樋川の左岸、標高約 40m の石灰岩台地上に位置する洞穴遺跡である（図 5-2・3）。遺跡の南東約 1.5km の雄樋川河口右岸には、港川人骨の発見地として著名な港川遺跡（Suzuki and Hanihara 1982、具志頭村教育委員会 2002）があり、雄樋川流域一帯は、旧石器人の活動範囲に含まれていたと考えられる。沿岸海底地形図から判断すると、最終氷期最盛期の低海水準期の海岸線は現海岸線からさらに 2～3 km ほど沖合に位置していたと考えられ（図 5-2 参照）、サキタリ洞遺跡も標高 100 m 以上の高所に位置していたことになるが、当時でもサキタリ洞遺跡から海岸線までは、十分日帰り可能な距離であったと思われる。

雄樋川河口西側の具志頭海岸一帯には、完新世の高潮位期に形成されたと考えられる離水ノッチや離水サンゴ礁が発達していることから（図 5-4）、沖縄島南部では縄文海進期以降、数 m 程度の地盤の隆起があったと考えられている（河名 1988）。また、雄樋川下流の干潟地点には、カキやシレナシジミ、マクガイなどの貝殻の自然散布（おそらく河川工事に伴って掘りあげられ

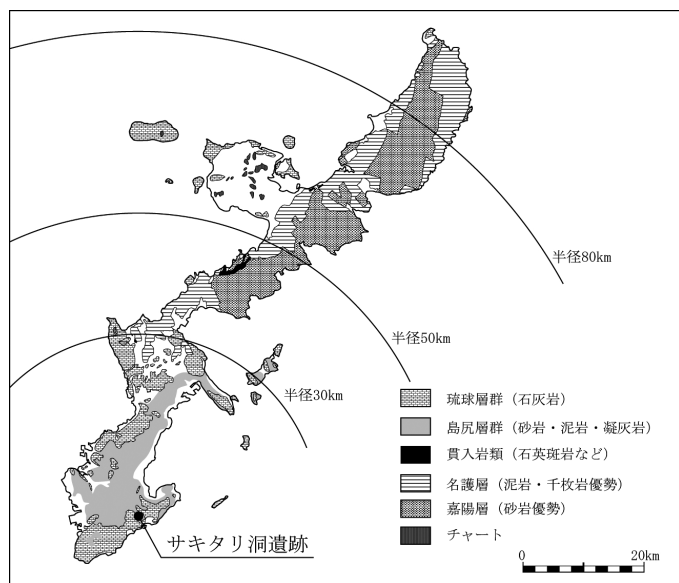


図 5-1 沖縄島の地質図とサキタリ洞遺跡の位置

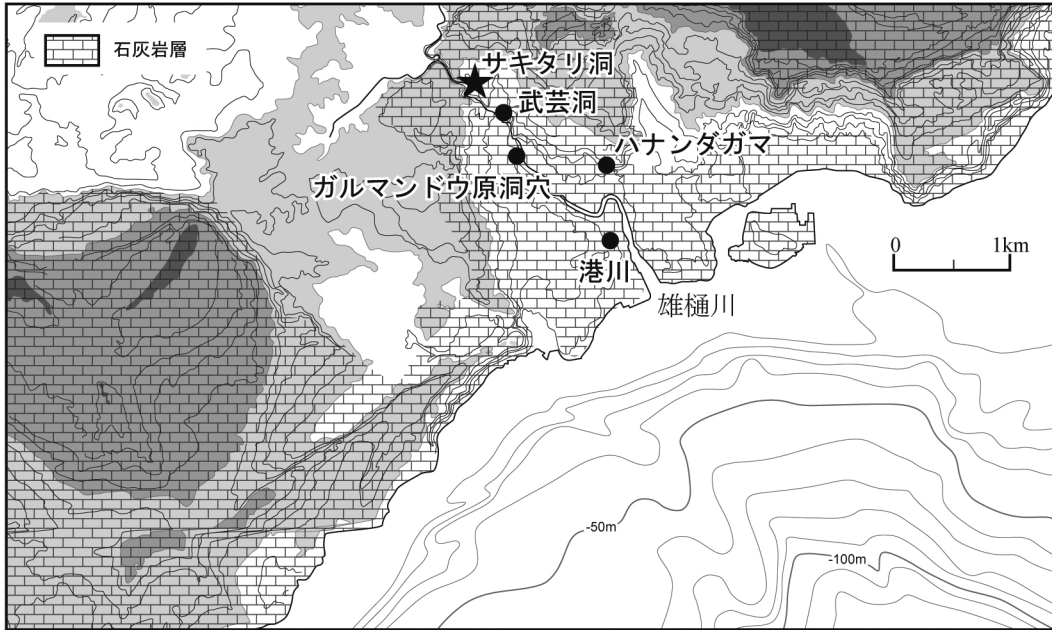


図5-2 沖縄島南海岸の地形とサキタリ洞遺跡の位置
等高線は10m間隔。

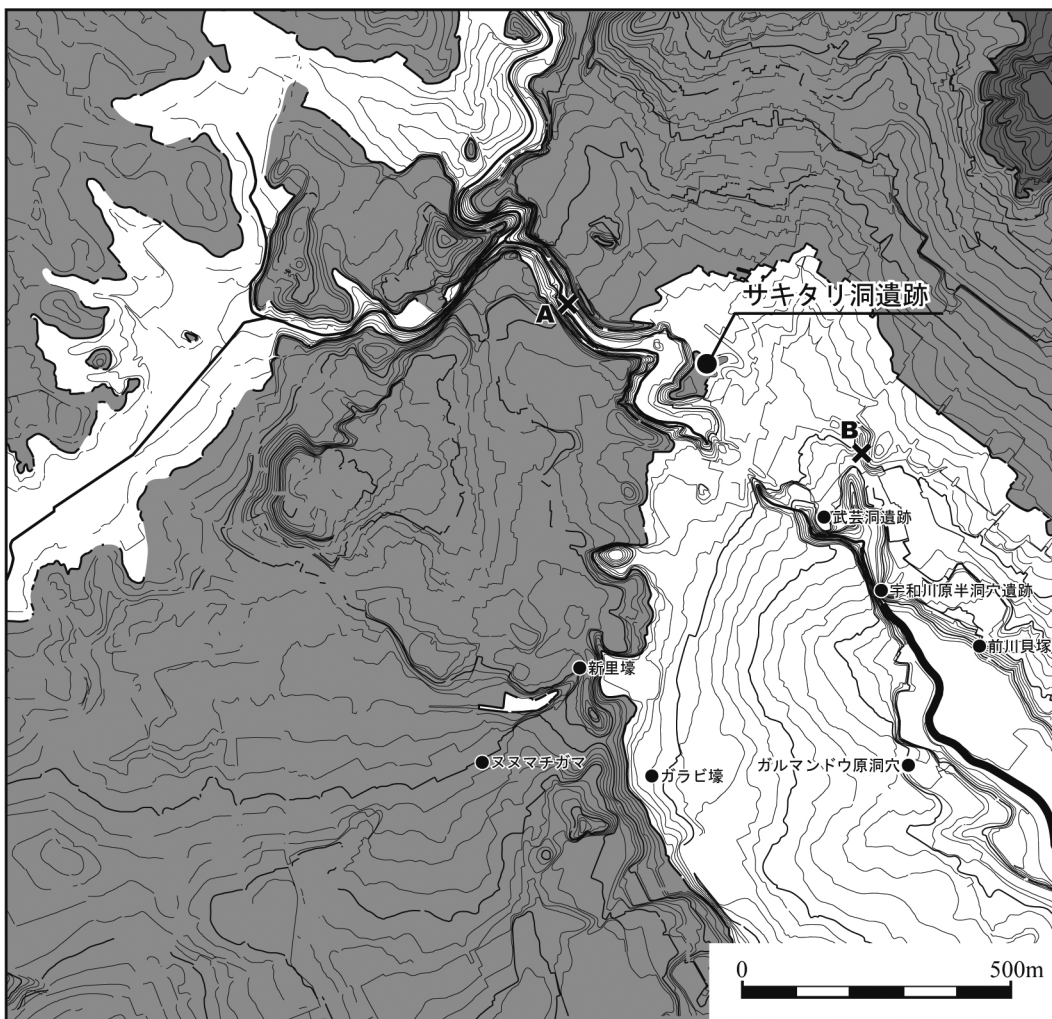


図5-3 サキタリ洞遺跡周辺地形図(1)
A: ジャマシチ、B: 玉泉洞(観光洞の入口)。等高線は2m間隔。

たもの)が見られ、その放射性炭素年代はカキが 6735 ^{14}C BP (PLD-27740)、マクガイが 6110 ^{14}C BP (PLD-30875) で、縄文海進期の年代を示している。このことから、当時この一帯が海水の影響を強く受ける汽水域であったことがわかる(第6章も参照)。

サキタリ洞遺跡周辺の基盤には島尻層群の泥岩が分布しており、その上位を琉球層群の石灰岩が覆っている。最上部には弱アルカリ性土壌の島尻マーヅ(赤土)が分布しており、リュウキュウガキ、クスノハカエデ、オオバギ、ガジュマル、アカギなどが混在した植生が見られる。一方、サキタリ洞遺跡近隣の具志頭の白土原(図6-1:F)には、局所的に島尻層群新里層の凝灰岩層が分布しており、沖縄島南部では珍しい酸性土壌となっている(具志頭村史編集委員会 1995)(図5-5)。近隣の新城集落には、「新城のシーヤマー」と呼ばれる伝統芸能が伝わっており、かつてこの一帯にはシイの山があったと言われている。こうした島尻層群の分布域からは各種の海産貝類化石が産出し、特に白土原周辺ではツノガイ類の化石を多く採集することができる(図5-6)。島尻層群中のツノガイ類化石は、先史時代には装飾品として利用されていたようである。

島尻層群の泥岩層は不透水層であり、その上位の琉球層群の石灰岩層中には水流の作用によって石灰岩洞穴(鍾乳洞)が発達している。サキタリ洞遺跡の位置する「ガンガラーの谷」近辺では特



図5-4 具志頭海岸の離水サンゴ礁とキノコ岩(離水ノッチ)



図5-5 具志頭白土原の凝灰岩の露頭(写真中央)



図5-6 白土原のツノガイ類化石



図5-7 雄樋川の谷筋（ガンガラーの谷近辺）

サキタリ洞の北側上空から南海岸を見る。

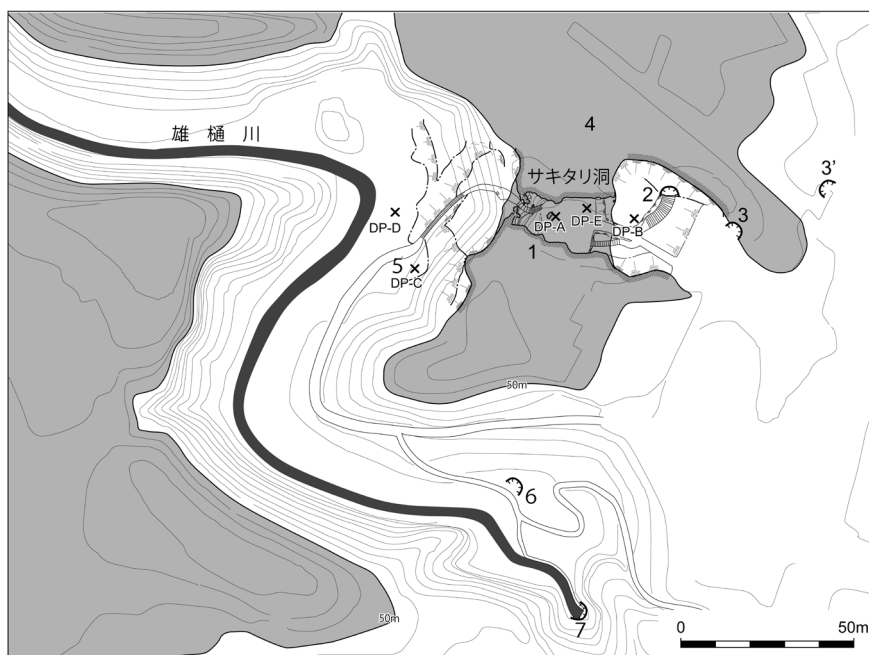


図5-8 サキタリ洞遺跡周辺地形図（2）

に石灰岩層が厚く、雄樋川の水流によって網目状の洞穴群が形成されている（図5-7・8）。観光洞として公開されている玉泉洞とその周辺の洞穴群は、玉泉洞ケイブシステムと呼ばれており、サキタリ洞はその一画に位置している。

サキタリ洞は総面積約 620m²と大規模なホールを有する洞穴であり、洞穴中央部で天井までの高さは約 7m を測る。洞床の標高は約 38 m で、ボーリング調査の成果によれば、現洞床から - 10m ほどで基盤の石灰岩に到達する。洞口は東西に 2 箇所あり、貫通型の洞穴となっている。東側洞口（図5-9）は直径 40 m ほどの陥没ドリーネ内に開口しており、幅約 20 m、高さ約 7 m と大規模



図5-9 サキタリ洞東側開口部



図5-10 玉泉洞およびサキタリ洞下層洞穴へ続く洞穴の開口部（ガニグワーガマ）



図5-11 ガニグワーガマの開口部（右下）とサキタリ洞東側開口部（左上奥）の位置関係

なものである。ドリーネ部分から洞内までは斜面となっているため、豪雨の際には雨水が水流となって流れ込むことがある（図5-14）。同一ドリーネ内には玉泉洞から続く洞穴の開口部があり、洞穴探検イベントのルートとなっている（図5-10・11）。この洞穴はかつてガニグワーガマ（カニのいる洞穴）と呼ばれていたもので、その奥部はサキタリ洞の下部を通して雄樋川方向に延びており、本報告ではこの部分をサキタリ洞下層洞穴と呼称する（分析・考察編VIでも同様）。かつては、後述するムイクチ（漏口）の吸い込み穴と接続していたと考えられ、ムイクチに流れ込んだ水流の流路となっていたと考えられるが、現在はムイクチが閉塞されたため、平常時には水流は見られな



図5-12 マルブミデラの開口部



図5-13 サキタリ洞西側開口部



図5-14 サキタリ洞東側開口部に生じた水流
2014年11月28日の豪雨時。

い。

西側洞口は雄樋川の川筋にあたるカルスト谷壁面に開口しており、現在は幅約2m、高さ約1.9mほどで普通に歩行して通過できる状態であるが、開発前は堆積物によって洞口が狭まっており、這って通り抜ける状態だったようである(図5-13)。洞口前にはやや平坦な前庭部があり、そこから雄樋川流路までは斜面となっている。雄樋川河床と西側洞口との比高差は約10mを測る。洞口の底部下は雨水が流れ込むことはなく乾燥しており、かつては風葬墓として利用されていた。

西側洞口外の前庭部から斜面を下った雄樋川左岸には、かつてムイクチと呼ばれる吸い込み口があり(図5-8:5)、雄樋川の水はそこから地下に伏流していた。ムイクチは1971年頃に閉塞されたため、現在では水流は谷筋に沿って下流のイキガ洞に流れ下っている。しかし、豪雨の際には雄樋川が著しく増水することがあり、そのような場合には、ムイクチ付近からサキタリ洞の下層洞穴を経て玉泉洞にバイパスする水の流れが生じるようである。なお、サキタリ洞の形態や周辺地形に関しては、本書分析・考察編VIにおいて詳述されている。

2. 歴史的環境

次に、歴史的環境について述べる。個々の遺跡の所在地や内容については次章も合わせて参照い

ただきたい。

旧石器時代（後期更新世）

絶滅シカ類の化石がサキタリ洞遺跡、ハナンダガマ遺跡、港川遺跡、玉泉洞、前川鹿化石出土地、タマイ洞（タマインガマ）、具志頭海岸、ガラビ塚、ターガーなどで発見されているが、詳細な調査が実施されているのはサキタリ洞遺跡、ハナンダガマ遺跡、港川遺跡のみである。絶滅シカ類化石産地の多くは、自然の営力によって形成された非人為的な化石の集積地と考えられるが、そうした化石産地から人骨が発見されることもあり、埋蔵文化財保護の観点からは注意が必要である。

港川人の発見地として知られる港川遺跡は、1960年代から70年代にかけて山下町第一洞穴遺跡と並んで詳細な調査が行われ、化石群の年代が明らかにされた基準的遺跡である。近年刊行された長谷川善和らの地形・地質に関する報告（長谷川ほか2017）によれば、港川遺跡のフィッシャー（裂罅）地点では、裂罅堆積物の下部から上部までイノシシが出土し、特に上部では集中して産出する。人骨は上部から中部を中心に出土しており、人骨とともに回収された木炭の放射性炭素年代測定結果は18250 ¹⁴C BP（TK-99）、16600 ¹⁴C BP（TK-142）である。下部ではイノシシとともにシカ類が見られるが、イノシシには交連した頭頸骨や指骨といった一次的な埋没状況を示す標本が見られるのに対して、シカ類は遊離した歯や部分骨ばかりで、そのほとんどが磨耗していることから、長谷川らはシカ類が二次堆積物であったことを指摘している。

一方、シカ類が堆積物の下部に集中し、上部に見られないことから考えると、シカ類は年代的に古いものと考えられる。下部でイノシシとシカ類、人骨が共存することの解釈が問題となるが、長谷川らが論じているように、沖縄ではイノシシとシカ類の共産例は港川遺跡のほかには知られておらず、山下町第一洞穴遺跡の層序・年代を考慮すると、シカ類はおおよそ3万年前頃までには絶滅し、イノシシは2万年前頃に出現したと考えるのが妥当と思われる。こうしたシカ類、イノシシの絶滅交替説は、これまでに筆者らが調査を実施した真栄平鉦山（糸満市）（Fujita et al. 2014）やサキタリ洞遺跡の層序・年代とも整合的である。したがって、港川遺跡下部のイノシシとシカ類の共存は、年代的な同時性を示すものではなく、何らかの理由で両者が混在したためと考えられるが、詳細については今後の検討を待ちたい。

港川遺跡からは人骨やイノシシ、シカ類の化石のほかに、小動物化石も数多く出土している。それらの中には現在の沖縄島北部のヤンバルに生息する種が多く含まれており、かつては沖縄島南部にもヤンバルのような環境が広がっていたと考えられている（長谷川ほか前掲）。また、サキタリ洞遺跡からもシイ属の炭化材（能城2015）やオキナワジイの可能性のある果実片（松元・宮城2017）が検出されている。一方、石灰岩地帯でアルカリ性土壌が広く分布する南部の植生は、北部の酸性土壌地域の植生とは異なる。しかし、サキタリ洞遺跡や港川遺跡に近い八重瀬町白土原（図5-5）には、島尻層群新里層の凝灰岩層が分布しており、周囲の土壌は酸性であることからかつては椎の木が見られたようである。そのことにちなんだ新城のシーヤーマーと呼ばれる民俗芸能が新城集落に伝わっている（次節参照）。かつての雄樋川流域の環境を考える上で、興味深い伝承と言えよう。

縄文時代

沖縄の土器文化については、従来約7000年前に出現する南島爪形文土器やその下層から出土する「無文土器」が最も古いと考えられてきたが、近年ではこれに先行する土器群が各地で検出され

ており、活発な議論が行われている。現在のところ、南島爪形文土器に先行する土器群（先爪形文土器）は、赤色条線文系と有肩押引文系の二者に区分でき、前者が後者に先行するものと考えられる（山崎 2015）。雄樋川流域では赤色条線文系を出土する遺跡として港川遺跡が知られており、土器とともに海産貝類や獣骨が出土している（具志頭村教育委員会 2002）。また、サキタリ洞遺跡の東方約 3.5 km に位置する親慶原^{おやげぼる}のティーラガマ遺跡でも、海産・汽水産貝類、淡水貝類や獣骨とともに同種の土器が採集されている（山崎ほか 2010）。このほか、断片的なものであるがサキタリ洞遺跡、ガルマンドウ原洞穴遺跡でも赤色条線文系の可能性が考えられる土器片が出土している。

これに続く有肩押引文系の遺跡としては、サキタリ洞遺跡が代表的なものである。

約 7000 年前の南島爪形文土器期の遺跡には武芸洞遺跡（沖縄県立博物館・美術館 2010）、具志頭グスク崖下地点（山崎ほか 2009）があり、武芸洞遺跡では動物骨（イノシシ）を中心に遺物量も多い。縄文時代前期の遺跡としてはサキタリ洞遺跡、宇和川原半洞穴遺跡（玉城村教育委員会 1979）があり、曾畑式期あるいは条痕文期の資料が見られる。縄文時代中期前葉（室川下層式期）の遺跡は乏しく、武芸洞遺跡などでその可能性のある小片が出土しているのみである。縄文時代中期後葉（面縄前庭式期）の遺跡としてはサキタリ洞遺跡、武芸洞遺跡、宇和川原半洞穴遺跡^{うわがわぼる}が知られており、武芸洞遺跡では小型の石敷炉を含む炉址群が検出されている。

雄樋川流域では縄文時代後期の遺跡は少なく、武芸洞遺跡、サキタリ洞遺跡で面縄東洞式や伊波式、室川式と考えられる零細な資料が出土している程度である。武芸洞遺跡ではこの頃の炉址も検出されている。縄文時代晩期にはガルマンドウ原洞穴遺跡（松下編 2007）、武芸洞遺跡、サキタリ洞遺跡で人骨を伴う墓域が形成されているが、それを残した集団の居住地は明らかでない。実態不明ながら、近隣に位置するガンデ原遺跡^{しけんぼる}（具志頭村教育委員会 1986）や港川遺跡（琉球政府文化財保護委員会 1960）、志堅原遺跡（南城市教育委員会 2012）といった開地遺跡が、当時の居住地に対応するのかも知れない。

弥生～平安並行時代

宇和川原半洞穴遺跡や、前川貝塚、堀川貝塚などでこの時期の土器等の遺物が検出されている。また、いわゆるくびれ平底系統の土器を出土する遺跡として、ハナンダガマ遺跡（沖縄県立博物館・美術館 2009）が知られているが、遺跡の主体は洞穴内ではなく崖上の台地平坦面にあったと考えられる。現在台地上には採石場があり、遺跡は損壊している。2006～2007 年の沖縄県立博物館・美術館によるハナンダガマ遺跡の調査では、台地上および崖線部において土器、石器等の遺物の散布が確認できた。

グスク時代

グスク時代の人骨がハナンダガマ遺跡（沖縄県立博物館・美術館 2009）、武芸洞遺跡（沖縄県立博物館・美術館 2010）、サキタリ洞遺跡で検出されている。いずれも崖葬墓的性格の遺跡と考えられ、サキタリ洞遺跡では石囲いを伴う墓（岩陰囲込墓）も見られる。人骨の放射性炭素年代値は、グスク時代初期に相当するものが多く、サキタリ洞遺跡では同時期の家畜骨（ウシ）も検出されている。また、サキタリ洞遺跡の上流に位置するジャマシチ（ザマヒチ）地点（図 6-1 : B）では、川岸に粘土質の厚い堆積が見られ、カワニナなどの淡水貝類が多く含まれているのが観察された。そこから回収された巻貝（カバクチカノコ）の放射性炭素年代値は 955 ¹⁴C BP (PLD-24992) であり、やはりグスク時代初期に相当する。

琉球王国時代～近代

琉球王国時代から近代にかけては、雄樋川沿いの谷間に数多くの風葬墓が営まれており、墓にまつわる伝承も多い（遠藤編 2002）。ガンガラーの谷内や新里洞穴には現在でも木棺（板厨子）が残されており、石製や陶製の厨子も多く見られる。サキタリ洞遺跡をはじめ、近辺の洞穴も開口部付近は風葬墓として利用されたものが多く、石積みを伴う墓も多い。サキタリ洞遺跡でも東西の洞口付近は、風葬墓として利用された痕跡が見られる。

サキタリ洞遺跡は、かつてはサキタルガマ、斗牛洞などの名称で呼ばれていた（山内編 1992）。「サキタリ」は「酒造り」の意で、洞穴で酒造りが行われていたことに由来する。また、斗牛洞は洞穴付近で闘牛が行われていたことにちなんだ名称ということである。

サキタリ洞遺跡の近隣に位置する前川集落は、糸数から分村して成立した集落で、1713年に編纂された『琉球国由来記』にその名が見える。サキタリ洞遺跡や武芸洞遺跡では、青磁や染付などの陶磁器類はほとんど確認されておらず、こうした状況は一带の開発が近世以降に活発化したことを物語っているのかも知れない。サキタリ洞のすぐ上の台地上には、前川集落の馬場があり、1967年に運動場として整備された（前川誌編集委員会 1986）。

サキタリ洞の西側洞口外には、かつてムイクチ（漏口）と呼ばれる吸い込み穴があり、サキタリ洞下層洞穴を通じてガニグラーガマ（カニのいる洞穴）につながっていた（図5-8）。前川区の字誌には以下のような記述が見える。「旧暦の9月、タカ（サシバ）が飛来する頃、雨が降ると上流の方から大量の田ガニが下って来てムイクチに這っていった。特に夜下るのが多かった。村人たちは、あかりを灯して待ちうけカニが水に流されまいと石にしがみつき、ゆっくり石の隙間に入る前に甲を掴みとり、一晩に麻袋一杯獲る者もいた」（前川誌編集委員会 1986：78頁）。これは近代の様子を記録したものであるが、サキタリ洞遺跡の旧石器人の生態を考える上でも興味深いエピソードである。

3. ^{あらぐすく}新城のシーヤーマーについて

澤岬大佑（沖縄県立博物館・美術館）

伝統芸能「新城のシーヤーマー」は、琉球王国時代から継承されてきたとされる女性踊りである。その昔、村の女性達が椎（しい）の実を拾い、収穫を楽しむ姿をもとに作られた型踊りとされており、決して派手ではないが、その素朴でかわいらしい踊りは、当時ののどかな生活を表現しているように思える。

調査のきっかけは、サキタリ洞遺跡の調査に関連して「新城のシーヤーマー」の存在を知ったことが始まりであるが、調査を進めると伝承記録や文献資料などはほとんど残されておらず、その全貌を捉えるにはあまりにも不確定な要素が多い状況であることが分かった。しかしその反面、新城地域内では積極的に公演活動を行っており、地域主体で新しい教本を作成し、芸能継承のための刊行物も作成するなど、伝統芸能に対する意識が高まっている事がうかがえた。

今回、筆者は「新城のシーヤーマー」の現状と歴史的背景、そしてその普及の経緯や事業活動について調査を行い、地域の方々や保存会などの自治会組織が行ってきた事業や普及活動をもとに、文化継承に効果的な事業とは何か、そしてその波及効果について考えてみた。本稿ではそうした調

査をもとに、「新城のシーヤーマー」について紹介する。昨今の民俗芸能の大きな課題として「芸能文化の普及・継承」がよく挙げられるが、歴史的記録が少ないながらも「新城のシーヤーマー」を継承・発信し続け、今日まで残してきたことは貴重な一例と私は考えている。

シーヤーマーとは

沖縄県島尻郡八重瀬町新城において継承・保存されている伝統舞踊である。1994年(平成6年)に町の無形民俗文化財に指定されている。

その由来は、琉球王国時代にあり、新城の若い女性達が椎の実の収穫を楽しむ様子を踊遊びで表現し、女性たち皆で即興的に踊り始めた事が由来とされている。いつ頃から始まったのか具体的な年代は不明だが、1838年(天保9年)には^{さくほうし}冊封使をもてなすために披露されたと伝えられている(具志頭村史 1961:323頁)。この舞踊の特徴として椎の実を拾う所作や山を歩く様子が表現されている。また、シーヤーマーという名称も、その昔新城の近隣にあったという椎の木が生えている山(白土山)のことをシーヤーマー(椎山)と呼び、その踊りもまたシーヤーマーと呼ばれるようになったということである。

踊りの構成

シーヤーマーは、元々三部構成の踊りとされており、踊りの主体は三番目の女性踊りとなる。現在は、女性踊りの後に再度男性踊りが披露されることとなっている。その構成は以下の通りである。

①前踊り(歌:シーヤーマー前踊りの歌)

シーヤーマーの最初に踊られる型踊り。女性4人が^{びんがた}紅型衣裳に傘を持った姿で登場し、歌に合わせて踊りを披露する。この踊りの歌は、シーヤーマー前踊りの歌と呼ばれており、王国時代に首里城警護に勤める新城出身の4人の若者が故郷へ思いを馳せて作った歌とされているが、前踊りとして含まれた時期に関しては不明である。

②男踊り(歌はないが、シーヤーマーの曲に合わせて踊る)

前踊りの次に踊られる、男性のみで構成される男性踊り。バサー(^{ぼしょう}芭蕉)衣を着た3~4人の男性が頭に鉢巻、手には斧や鋸を持った姿で現れる。踊りでは草刈りや耕作、山道を拓くような所作をみせる。現在は男性も演じるが、元々は女性のみで構成されていた事が伝わっている。

③シーヤーマー女性踊り(歌:シーヤーマー)

椎の実を拾う所作を由来とした女性踊り。男踊りの退場と共に藍の紺地緋を着た女性の踊り手が大勢(20人ほど)現れる。2列の隊列を組み、手には笠を持って動きを合わせて踊る。踊りの内容は、村の女性が椎の山に集まり、皆で椎の実を拾い楽しむ姿が型踊りで表現される。その後、カチャーシーへと踊りが変わり、椎の実の収穫を喜び祝う様子が踊りで表現される。

④男踊り(歌:カチャーシー)

シーヤーマー女性踊りの後に、再度男性たちが現れ、カチャーシーを披露する。シーヤーマー同様、収穫を祝う踊りであり、この踊りを以て締めくくられる。「男踊りカチャーシー」に関しては最初からあった踊りではなく、アレンジされた後付の踊りである。後付された時期は不明である。



図5-15 新城のシーヤーマー

シーヤーマーに関する伝承

シーヤーマーにまつわる伝承として以下の内容が伝えられている(具志頭市史：1961)。

1838年(天保9年)尚育王冊封の際、冊封使一行をもてなすために、首里王府は新城村に食糧と踊りの提供を命じた。それに応えるために、新城村中の美人の女性達を集め、シーヤーマーを披露した。その結果大変喜ばれ、首里王府は褒美として、

新城村内の馬場の土地を新城の私有地として譲渡した。その土地は集落の人々から「御拝領馬場(方言名：グヘーローンマイー)」と称されるようになった。

この伝承に関しては、文献等の記録が確認できていないため定かではないが、村の踊り遊びであったシーヤーマーが、冊封使への披露を契機として伝統芸能として確立されていったことがうかがえる。

また、2010年(平成22年)に発刊されたシーヤーマー教本「172年のあゆみ」(新城伝統芸能シーヤーマー保存会2010)によると、戦前の頃から他地域との交流や大正天皇即位を祝う祝賀会でもシーヤーマー公演が行われたという伝承もあり、戦前の時点で村内外においても、新城の芸能文化としてシーヤーマーが注目されていたことが分かる。

組織

「新城のシーヤーマー」が1994年に町指定の無形民俗文化財に登録された後、2000年にシーヤーマー保存会が結成され、公民館を拠点としてシーヤーマーの公演・保存活動を行っている。会員は新城地域に住む全員とされており、シーヤーマーを踊る際は地域の方々から参加者を募っている。

保存会では村内のイベント以外でも活動しており、「シーヤーマー由来劇」の製作・上演(2003年)や糸満市で行われた「祈りの祭典」への出演(2007年)、首里城での公演(2010年)、国立劇場公演の「八重瀬民俗芸能祭」への出演(2014年)、近年では県外でも公演活動を行うなど、芸能発信活動を積極的に行っている。また、2008年に新城村の芸能文化継承・人材育成を目的とした『子供シーヤーマークラブ』が公民館事業として始まり、子どもたちだけで構成されたシーヤーマーの公演活動も行っていった。積極的な活動を行っているシーヤーマー保存会だが、保存会メンバーの高齢化、それに伴う体力的な問題や参加者の減少があるため、世代交代についての課題を抱えている。

公演時期

現在は、シーヤーマー保存会あてに祭事への参加依頼がきた時や、イベント参加募集がある時に参加申請を行い、公演を行うこととなっている。そのため公演は不定期で、主に地域の夏祭り・八重瀬祭・アブシバレー等で踊られる。時には公的イベントや文化事業のために踊ることもある。しかし、依頼を受けて踊りの準備を行うため、踊り手の参加人数や都合に左右され、毎年必ず上演されるというわけではない。

シーヤーマーの普及・継承について

シーヤーマー保存会では、伝統芸能に対する意識の向上や継承・保存のきっかけを作るために、保存会の定例会などで集まる際には、保存会で作製した「新城伝統芸能シーヤーマー豆知識」という資料を用いて情報の共有、普及をはかっている。

その資料のなかで、シーヤーマーが何を表現しているかについては「働く喜び、その場に憩う心の豊かさ、安寧と繁盛を願う心」としており、地域行事への積極的な参加に関しても「他地域間の交流・文化の振興に寄与するため」という目的があげられている。シーヤーマー保存会の公演活動は、踊りの形態だけの保存ではなく、生きた文化として継承する事を目的としているため、参加者が踊る事に対し意義や誇りを見出せるよう、踊りの型のみではなく歴史的経緯や、当事者として芸能文化と関わる喜びや重要性の共有に重点を置いているのが特徴である。

また、今回の聞き取り調査では、八重瀬町観光振興課に勤める神谷武史氏にご協力を頂き、シーヤーマーの公演活動についてお話を伺った。神谷氏は2007年のふるさと文化再興事業にてシーヤーマー普及に携わり、保存会と共にシーヤーマー公演活動に尽力された方である。神谷氏によると、シーヤーマー公演活動の中で大切にしていたことは、参加者の演じ手としての自覚・モチベーションの向上と積極的に公演機会をつくる事としていた。保存会と連携をとり、地元の村行事やイベントだけでなく、外部からの公演依頼や大きなイベントにも積極的に参加し、その経験を通して芸能集団としての自信と組織力の向上を図った。

助成金や芸能事業の紹介・手続きなど行政側でできるサポートを積極的に行い、保存会の地盤を固めることから始め、公演会や文化事業には保存会と連携して取り組み、公演活動の範囲を広げていった。その結果、地域の伝統芸能への意識は少しずつ高まり、芸能に対する意識の高まりは技術の向上につながり、公演を重ねるにつれ、地域の方々から「やってみたい」という声も上がるようになり、村内外においてシーヤーマーに対する反響も増えたようである。また、神谷氏は、伝統芸能の普及・継承には芸能を扱う演者・団体と行政の連携が重要であると考えており、今後は行政側にも芸能発振のキーマンとなる人材の育成も必要になるとしていた。

今回の調査で、新城シーヤーマーの継承は、保存会と行政の連携を主体とした公演活動・事業を通して芸能の普及・継承が続いていることが分かった。村内の行事に加え、国立劇場や首里城での公演、村外のイベントや事業への参加など伝統芸能に触れる機会を多く設定し、広く周知されるよう公演活動を続けたからこそ、地域の方々の芸能に対する意識が高まり、記録や伝承が少なくても、シーヤーマーを今日まで残していったのであろう。現在でも積極的な公演活動を行っているため、今後のシーヤーマーの発展に期待する。

引用文献

- 新城伝統芸能シーヤーマー保存会 2010『172年の歩み(教本・歴史総合編)』
- 遠藤正治 編 2002『たまぐすくの民話』玉城村教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1978『沖縄県洞穴実態調査報告Ⅰ』
- 沖縄県立博物館・美術館 2009『沖縄県南城市ハナダガマ遺跡発掘調査報告書』
- 沖縄県立博物館・美術館 2010『沖縄県南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』
- 鹿島愛彦・山内平三郎 1971「沖縄島ユヒ川地下川洞穴」『愛媛大学紀要 自然科学Dシリーズ(地学)』Ⅳ(4)
- 河名俊男 1988『琉球列島の地形』新星図書出版
- 具志頭村教育委員会 1986『具志頭村の遺跡』

第5章 遺跡の位置と環境

- 具志頭村教育委員会 2002『港川フィッシャー遺跡—重要遺跡確認調査報告—』具志頭村文化財調査報告書第5集
- 具志頭村史編集委員会 1961『具志頭村史』
- 具志頭村史編集委員会 1993『具志頭村史 第3巻 芸能・方言編』
- 具志頭村史編集委員会 1995『具志頭村史 第4巻 村落編1』
- 玉城村教育委員会 1979『玉城村の遺跡—第1次分布調査概報』
- 南城市教育委員会 2012『市内遺跡発掘調査報告書II 志堅原遺跡第2次・第3次・中山小祿原遺跡・ティーラガマ試掘』
- 能城修一 2015「サキタリ洞遺跡出土炭化材の樹種」『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書II』沖縄県立博物館・美術館
- 長谷川善和・鎮西清高・野原朝秀・池谷仙之・和田秀樹・大山盛弘 2017「沖縄の更新世港川人遺跡の地形と地質」『群馬県立自然史博物館研究報告』第21号
- 前川誌編集委員会 1986『玉城村字前川誌』
- 松下孝幸編 2007「ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第2号 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 松元美由紀・宮城ゆりか 2017「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の大型植物遺体」『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書IV』沖縄県立博物館・美術館
- 山内平三郎 編 1992『玉泉洞ケイブシステム』日本洞窟学会・日本ケイビング協会・日本洞窟協会・玉城村教育委員会・南都ワールド株式会社
- 山崎真治 2015「沖縄先史文化起源論をめぐる近年の動向と課題」『南島考古』第34号
- 山崎真治・新里尚美・金城 達・山田浩久・藤田祐樹 2009「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館博物館 博物館紀要』第2号
- 山崎真治・横尾昌樹・大城秀子 2010「南城市親慶原ウフニクガマ採集の遺物について」『南島考古』第29号
- 琉球政府文化財保護委員会 1960『文化財要覧 1960年版』
- Suzuki, H., and Hanihara, K. (1982) The Minatogawa man : the upper pleistocene man from the island of Okinawa. *Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo*. No. 19.
- Fujita, M., Yamasaki, S., Sugawara, H., Eda, M. (2014) Body size reduction in wild boar (*Sus scrofa*) from the late Pleistocene Maehira Fissure Site in Okinawa-jima Island, Japan, with relevance to human arrival. *Quaternary International* xxx: 1-11.

第6章 周辺の遺跡

サキタリ洞遺跡の周辺には、先史時代～歴史時代の遺跡が多く分布しており、雄樋川流域には洞穴・岩陰遺跡も多く見られる（図6-1、表6-1）。遺跡の分布を見ると、前川・新城地区、具志頭地区、糸数・船越地区などに集中部が見られ、グスク時代以降のものが多い。一方、前川・新城地区には、先史時代の遺跡が比較的多く見られる。以下ではそうした遺跡のうち、サキタリ洞遺跡に関連する先史時代の遺跡で、これまでに発掘調査が実施され内容がある程度判明しているものについて紹介する。また、合わせてサキタリ洞遺跡近隣の洞穴遺跡や地質学的なサイトについても取り上げる。

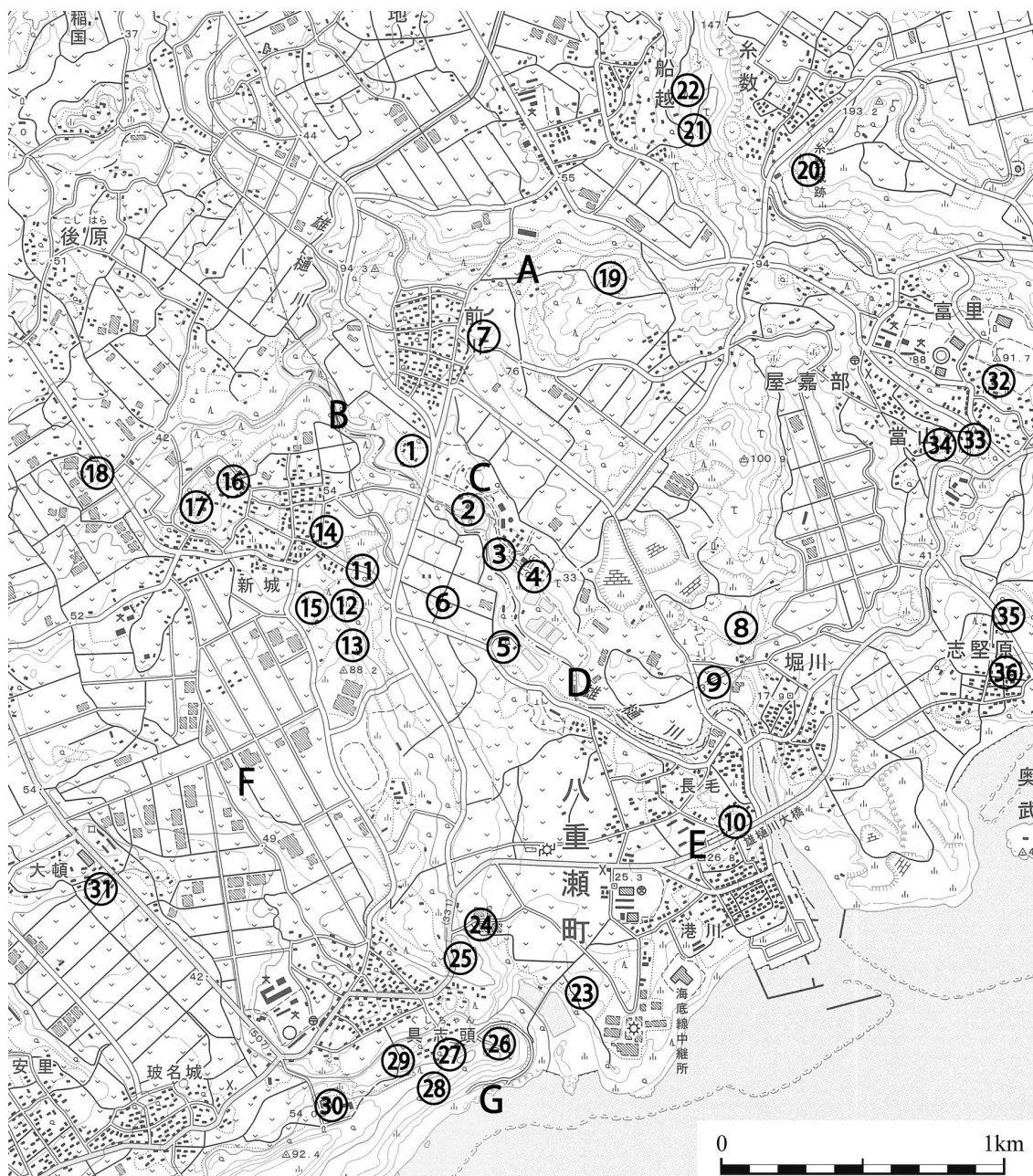


図6-1 サキタリ洞遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院の電子地形図25000「知念」「糸満」を使用。

第6章 周辺の遺跡

表6-1 周辺の遺跡リスト

(表中の番号は図6-1中の番号に対応)

番号	遺跡名	所在地	(旧石器※ 更新世)	縄文時代					平安並行時代 弥生	グスク時代	琉球王国時代	文献
				早期	前期	中期	後期	晩期				
1	サキタリ洞遺跡	南城市玉城字前川	○	○	○	○	○	○	○	○	○	本報告
2	武芸洞遺跡	南城市玉城字前川		○	?	○	○	○		○	○	(13)
3	字和川原半洞穴遺跡	南城市玉城字前川		?	○	○			○		○	(3) (5)
4	前川貝塚	南城市玉城字前川							○			(3) (5)
5	ガルマンドウ原洞穴遺跡	八重瀬町字新城						○				(9)
6	ガルマンドウ原遺物散布地	八重瀬町字新城							○	○		(1)
7	前川鹿化石出土地(膝城小洞穴)	南城市玉城字前川	○									(5) (10)
8	ハナダガマ遺跡	南城市玉城字堀川	○						○	?		(12)
9	堀川貝塚	南城市玉城字堀川			?				○			(3) (5)
10	港川遺跡	八重瀬町字長毛	○					?				(2) (16)
11	ガンデ原遺跡	八重瀬町字新城					○	○				(1)
12	新里洞穴遺跡	八重瀬町字新城					○					(1) (8)
13	ガラビ塚遺跡	八重瀬町字新城	○		○		○					(1)
14	新城B遺跡	八重瀬町字新城								○		(1)
15	十柱洞遺跡・十柱洞向い貝塚	八重瀬町字新城							○			(1)
16	新城A遺跡	八重瀬町字新城							○	○		(1)
17	新城グスク	八重瀬町字新城							○			(1)
18	ユリー原遺物散布地	八重瀬町字新城								○	○	(1)
19	フルティラ遺跡	南城市玉城字前川								○		(3) (5)
20	糸数城跡	南城市玉城字糸数								○	○	(4)
21	船越A遺跡	南城市玉城字船越								○		(3) (5)
22	船越グスク	南城市玉城字船越										(5)
23	ユッタチジョウ	八重瀬町字具志頭								○	○	(1)
24	志保土原遺物散布地	八重瀬町字具志頭									○	(1)
25	ミドリグスク	八重瀬町字具志頭								○		(1)
26	具志頭グスク・具志頭グスク崖下	八重瀬町字具志頭		○						○		(1) (7) (15)
27	仲村渠遺跡	八重瀬町字具志頭								○	○	(1)
28	ウブブリ下洞穴遺跡	八重瀬町字具志頭									○	(1)
29	屋富祖村跡	八重瀬町字具志頭								○	○	(14)
30	坂名城古島遺跡	八重瀬町字具志頭・坂名城								○	○	(1)
31	大頓遺跡	八重瀬町字大頓								?		(1)
32	仲栄真グスク	南城市玉城富里									○	(5)
33	安次富グスク	南城市玉城富山									○	(5)
34	大川グスク	南城市玉城富山									○	(5)
35	志堅原遺跡	南城市玉城志堅原						○		○		(6) (9)
36	志堅原根屋遺物散布地	南城市玉城志堅原								○	○	(5)
A	ターガー	南城市玉城字前川	○									
B	ジャマシチ	南城市玉城字前川										
C	玉泉洞	南城市玉城字前川	○									
D	雄樋川干潟											
E	タマイ洞	八重瀬町字長毛	○									
F	白土原	八重瀬町字具志頭										
G	具志頭海岸	八重瀬町字具志頭	○									

※動物化石出土地を含む

文献(番号は表6-1の文献番号に対応)

- (1) 具志頭村教育委員会 1986『具志頭村の遺跡』
- (2) 具志頭村教育委員会 2002『港川フィッシャー遺跡-重要遺跡確認調査報告-』具志頭村文化財調査報告書 第5集
- (3) 玉城村教育委員会 1979『玉城村の遺跡-第1次分布調査概報』
- (4) 玉城村教育委員会 1991『国指定史跡糸数城跡:発掘調査報告書』
- (5) 玉城村教育委員会 1995『玉城村の遺跡-詳細分布調査報告書』
- (6) 玉城村教育委員会 2002『志堅原遺跡:個人住宅建築工事に係る発掘調査報告』
- (7) 當眞嗣一 1997「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」『沖縄県立博物館紀要』第23号

- (8) 仲座久宜・羽方 誠 2011 「八重瀬町新里洞穴遺跡で採集された銅鉄」『沖縄県立博物館・美術館博物館 博物館紀要』第4号
- (9) 南城市教育委員会 2012 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 志堅原遺跡第2次・第3次・中山小禄原遺跡・ティエラガマ試掘』
- (10) 前川誌編集委員会 1986 『玉城村字前川誌』
- (11) 松下孝幸編 2007 「ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第2号 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- (12) 沖縄県立博物館・美術館 2009 『沖縄県南城市ハナダガマ遺跡発掘調査報告書』
- (13) 沖縄県立博物館・美術館 2010 『沖縄県南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』
- (14) 八重瀬町教育委員会 2017 『屋富祖村跡：琉名城の郷整備事業に係る緊急発掘調査報告書』
- (15) 山崎真治・新里尚美・金城 達・山田浩久・藤田祐樹 2009 「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館博物館 博物館紀要』第2号
- (16) 琉球政府文化財保護委員会 1960 『文化財要覧 1960年版』

1. 武芸洞遺跡（南城市玉城字前川）（図6-1：②）

南城市玉城字前川に位置する洞穴遺跡で、この洞穴は、近隣の住民によって武芸や踊りの稽古の場として利用されていたことから、武芸洞と呼ばれている。2007年から2011年にかけて沖縄県立博物館・美術館が4次におよぶ発掘調査を実施した（沖縄県立博物館・美術館2010）。その結果、縄文時代早期の南島爪形文期以降の各時期の遺構や遺物が検出されている。遺跡の主体となる時期は、①南島爪形文期、②面縄前庭式期、③室川式～仲原式期、④グスク時代、⑤琉球王国時代である。

このうち、南島爪形文期には東側洞口から洞内にかけて広い範囲に遺物の分布が認められ、土器、石斧、砥石、骨針、貝鏃、貝刀、貝玉（ツノガイ類）などとともに多量の獣骨（イノシシ）が出土した。続く面縄前庭式期の遺物は少ないが、東側洞口の庇部下で数基の炉址が検出されている。室川式～仲原式期には東側洞口部と西側洞口部が利用されており、西側洞口部では仲原式期の重層構造の石



図6-2 武芸洞遺跡（西側洞口）

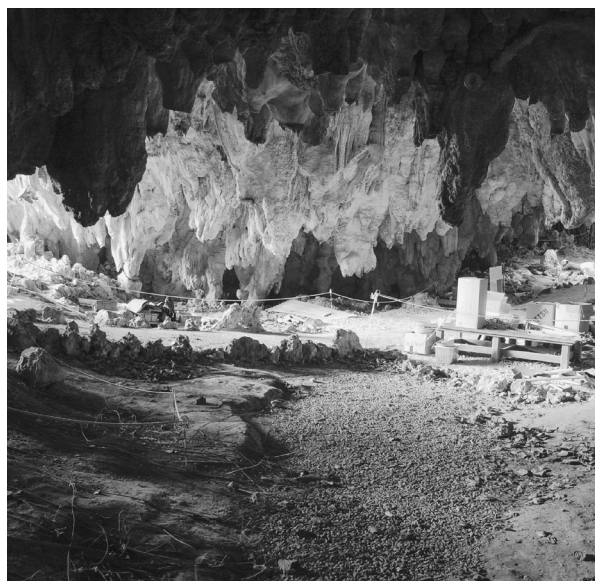


図6-3 洞内の様子

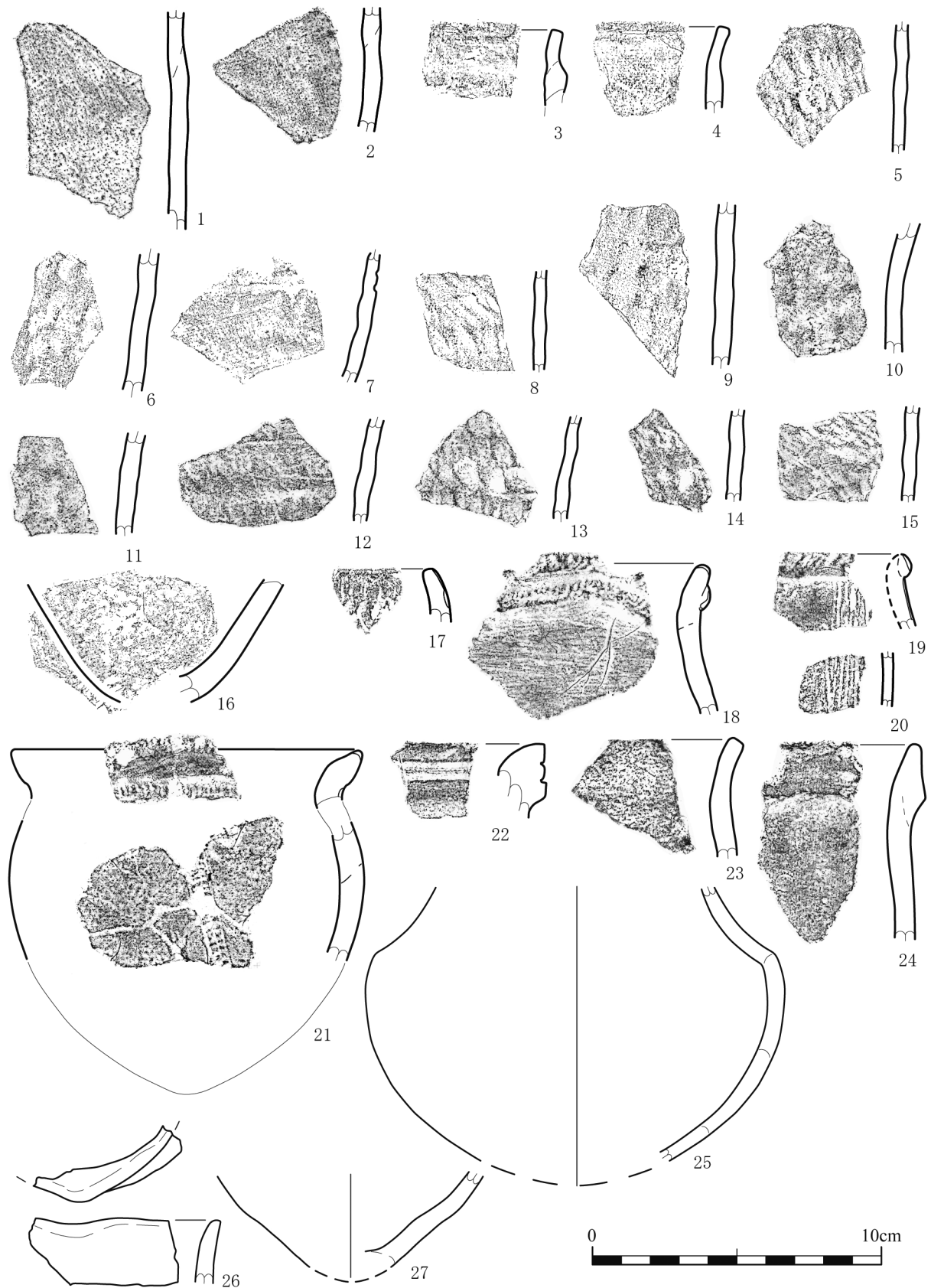


図6-4 武芸洞遺跡出土の土器

1～2：無文土器？、3～16：ヤブチ式土器、17：室川下層式？、18～21：面縄前庭式土器、22：室川式、23～27：宇佐浜式～仲原式土器。

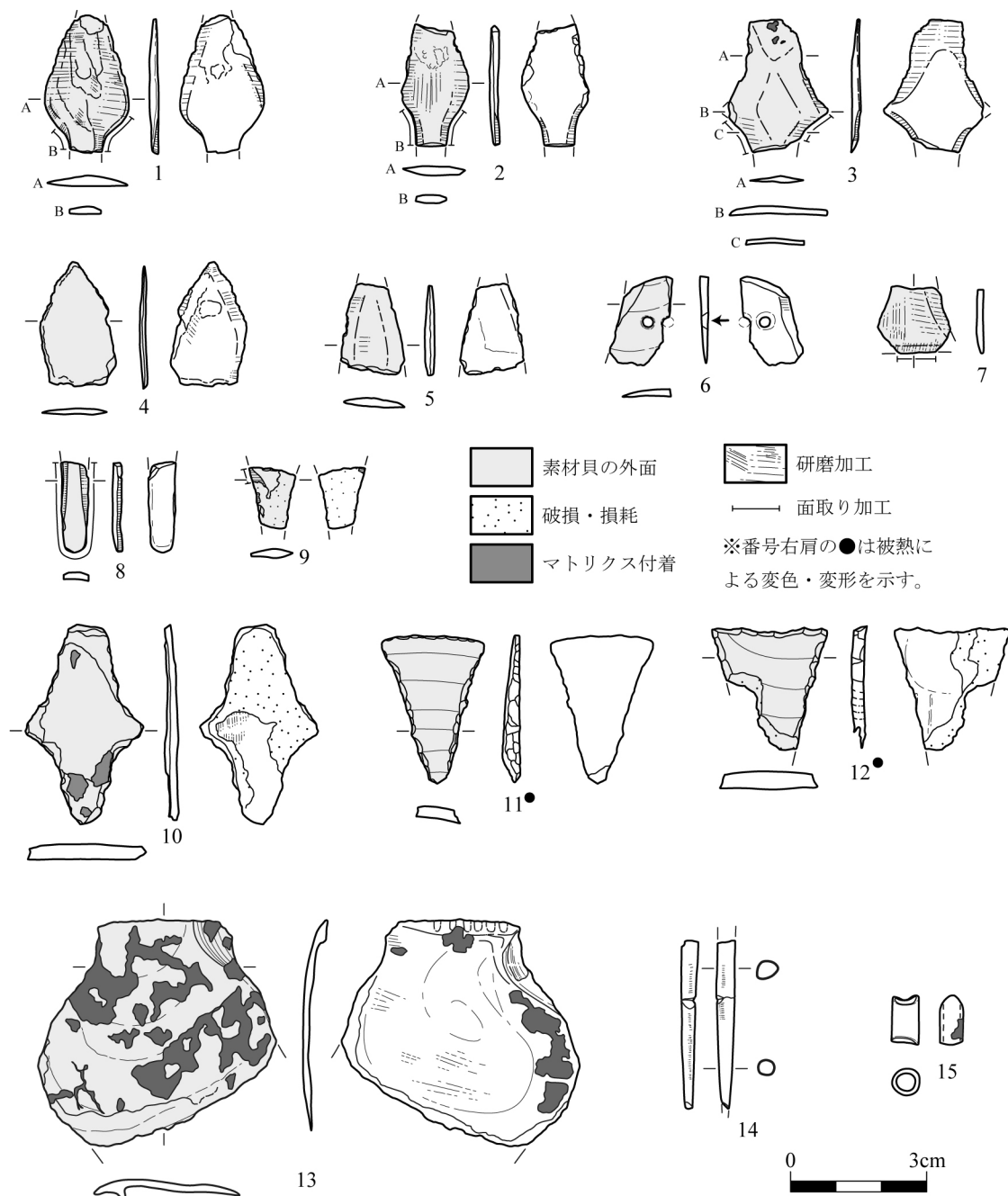


図6-5 武芸洞遺跡出土の貝器・骨器類（ヤブチ式期）

1～9：貝鏃、10～12：貝鏃未製品、13：貝刀、14：骨針、15：ツノガイ類。

棺墓と人骨が検出されている。石棺墓内からは副葬されたシャコガイやカサガイをはじめ、人骨に装着された状態で12点の巻貝製ビーズが検出された。また、製品ではないがゴホウラ（幼貝）やホラガイの破片が出土しており、後述するガルマンドウ原洞穴遺跡の状況と合わせて興味深い事例と言えよう。

グスク時代には東側洞口部に墓域が形成されており、いわゆる崖葬墓としての利用が主体となっている。グスク時代の墓域の上層からは琉球王国時代の人骨も検出されている。

表6-2 武芸洞遺跡の放射性炭素年代

調査区	遺構・層序	試料の種類	測定番号	年代値 ¹⁴ C BP
調査区Ⅲ	SX1-3(27)	人骨	PLD-14286	366±20
調査区Ⅲ	SX1-4(34)	人骨	PLD-14287	660±20
調査区Ⅲ	SX1-4(37)	人骨	PLD-14288	760±20
調査区Ⅲ	SX1-1(10)	人骨	PLD-14284	995±20
調査区Ⅲ	SX1-2(16)	人骨	PLD-14285	1010±20
調査区Ⅳ	SX2(30)	人骨(第1号人骨)	PLD-14289	2535±20
調査区Ⅲ	SF5	炭化物	PLD-14290	3195±20
調査区Ⅲ	SF7	炭化物	PLD-15687	3325±25
調査区Ⅴ	Ⅳ層	南島爪形文土器 付着炭化物	PLD-16226	5980±25
調査区Ⅲ	Ⅳ層	炭化物(南島爪形文期)	PLD-14291	6000±25
調査区Ⅲ	Ⅳ層	炭化物(南島爪形文期)	PLD-23292	6030±25
調査区Ⅲ	Ⅳ層	炭化物(南島爪形文期)	PLD-23293	6035±30
J7区	Ⅱ層	炭化物(南島爪形文期)	PLD-15688	6115±30
調査区Ⅲ	Ⅳ層	歯(イノシシ犬歯)	PLD-23307	5960±25

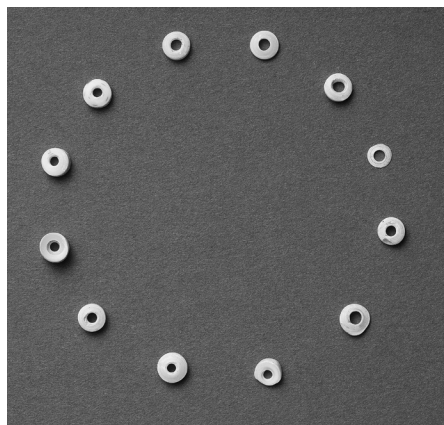


図6-6 第1号人骨着用品
(巻貝製ビーズ)

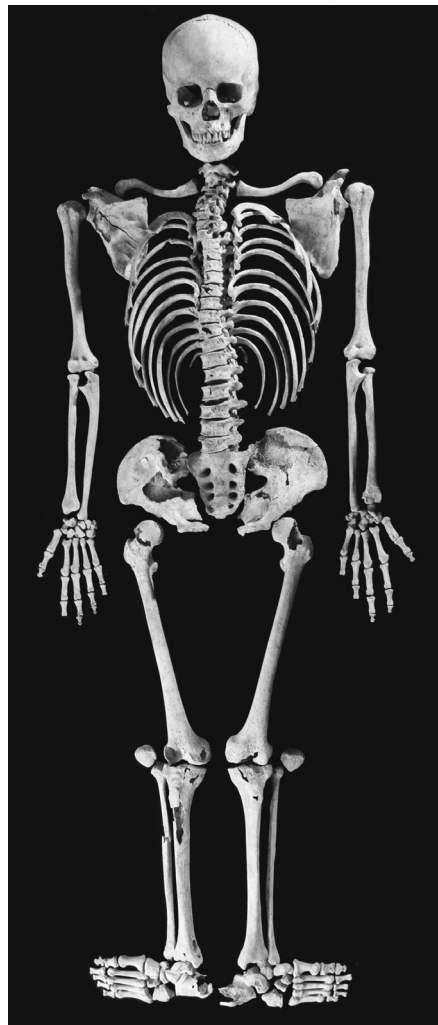


図6-7 縄文時代晩期の石棺墓(SX2)(左)と出土した人骨(第1号人骨)(右)

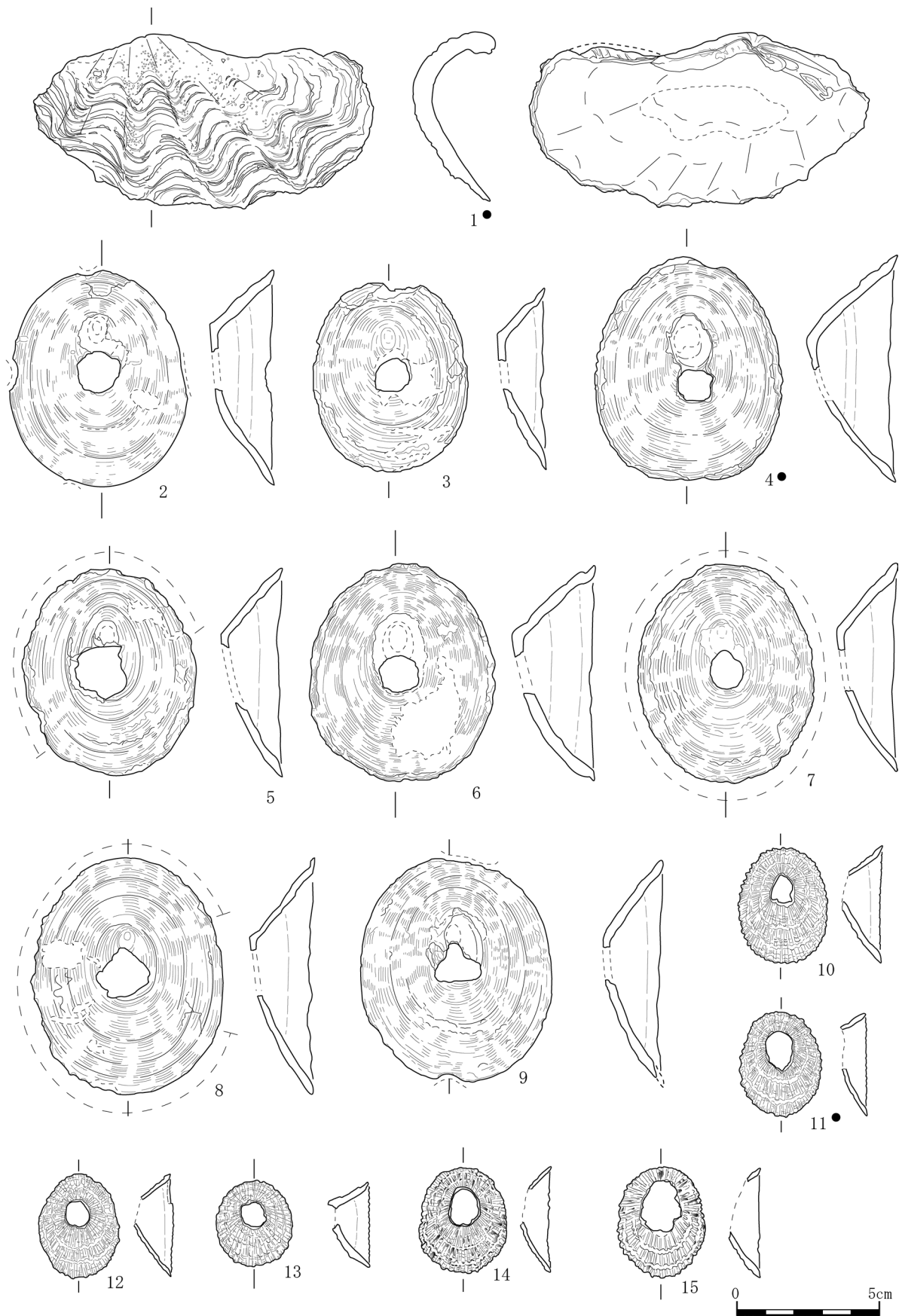


図6-8 武芸洞遺跡出土の貝類(1)

石棺墓(SX2)およびその周辺から出土した貝類を示す。番号右肩の●は、SX2第1号人骨に伴出したもの。

1:シャコガイ(シラナミ)、2~9:オオベッコウガサ(有孔)、10~15:アミガサガイ(有孔)。



図6-9 武芸洞遺跡出土の貝類（2）

1：アツソデガイ背面貝輪未製品（表面採集品）、2：ホラガイ、3：ゴホウラ

2. 宇和川原半洞穴遺跡（南城市玉城字前川）（図6-1:③）

南城市玉城字前川に位置する。1970年、愛媛大学学術探検部のメンバーによって発見された遺跡で、雄樋川谷内の氾濫原に面した崖面の岩陰内に形成されている。岩陰は風葬墓としても利用されており、現在でも開口部前面には石積が残る。岩陰内の一画を掘り返した際に土器などの遺物が採集されており、出土品はおきなわワールドおよび南城市教育委員会に保管されている。現在でも遺跡はほぼ当時のまま残されており、周辺には土器片や貝類、獣骨が多く散布している。

出土品のうち、主要なものは『玉城村の遺跡－第1次分布調査概報』（玉城村教育委員会1979）に掲載されているが、おきなわワールド所蔵資料のうち、筆者がこれまでに確認できた資料について図6-11・12に再録する。1～5は『玉城村の遺跡』掲載資料、6、7は本遺跡出土と推定される資料である。これまでたびたび指摘されてきたように、この遺跡から出土した土器の大半は型式未定のもので、現在のところ類例が知られていないものが多い。高宮廣衛氏は縄文時代



図6-10 宇和川原半洞穴遺跡の近景

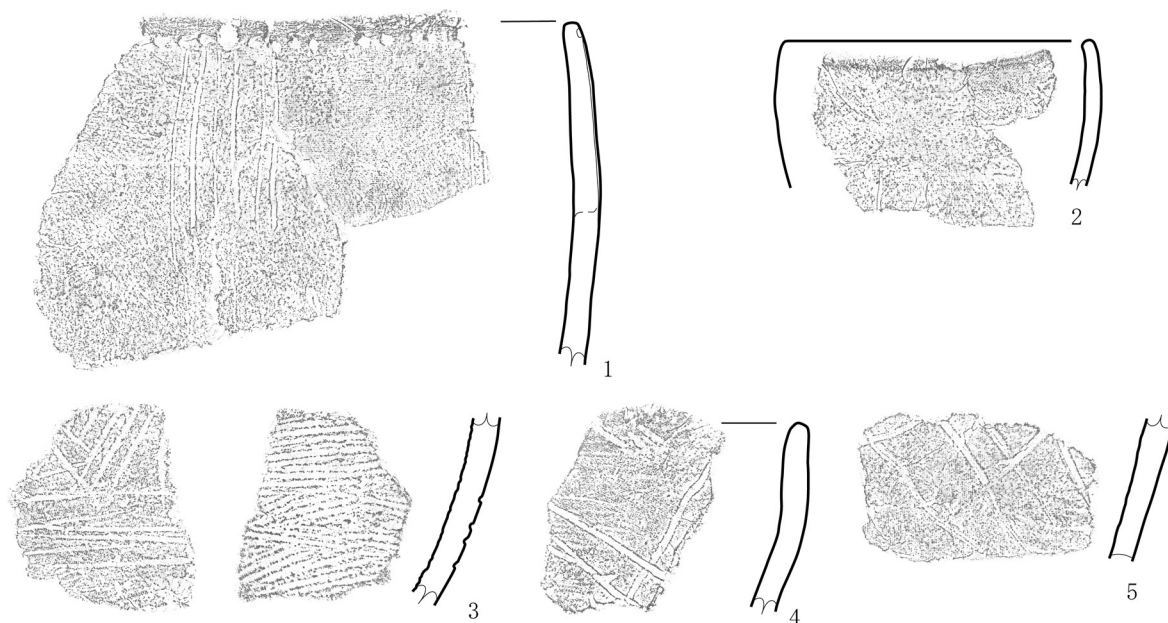


図6-11 宇和川原半洞穴遺跡出土の土器

おきなわワールド保管資料。『玉城村の遺跡』（玉城村教育委員会1979）掲載資料を再実測。

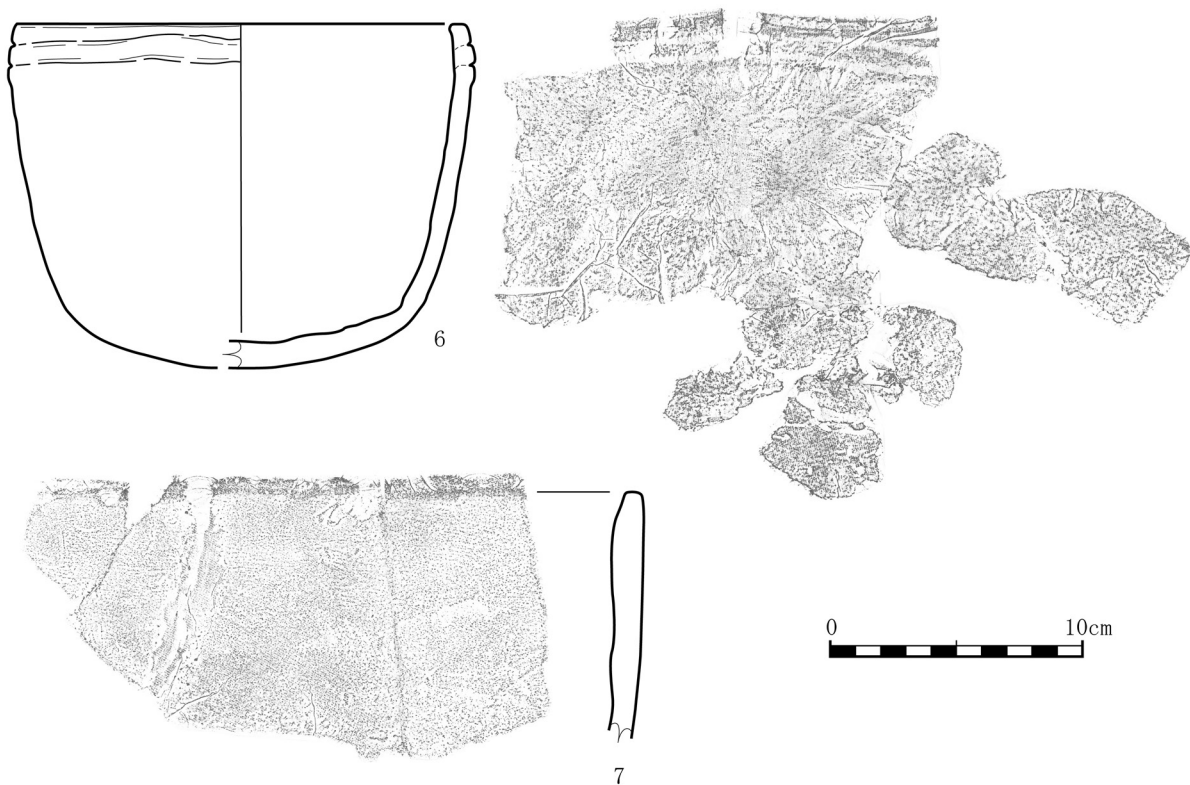


図6-12 宇和川原半洞穴遺跡出土と推定される土器
おきなわワールド保管資料。

前期の曾畑式や轟B式～曾畑式移行期の沈線文土器などとの関連を想定したが（高宮1991）、なお検討の余地がある。唯一時期比定の可能な資料は図6-11の3で、外面には条痕地に沈線文、内面には条痕が施されている。器壁は厚く、胎土中には石灰質粒子を多く含み、いわゆる条痕文土器の胎土とは異なっている。文様、胎土の特徴から曾畑式期のもと思われる。同図4、5には条痕は見られないが、胎土は3と類似しており、やはり曾畑式頃に位置づけられる可能性がある。図6-12の6は、器形は曾畑式土器に類似するが、文様や胎土は曾畑式の通例とはやや異なる。7は一見浜屋原式のような器壁は厚く、検討の余地がある。

3. ガルマンドウ原洞穴遺跡（八重瀬町字新城）（図6-1：⑤）

八重瀬町字新城に位置する。1998～1999年の2次にわたって土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムによる発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土器とともに18個体分の人骨が出土した（松下編2007）。人骨のコラーゲンにもとづいて放射性炭素年代測定が実施されており、2720 ¹⁴C BP (Beta-217084) の年代値が得られている。土器類には小型の壺形土器が目立ち、葬送に伴うものと考えられている。このほか、ホラガイ、ゴホウラ（幼貝）有孔製品が出土しており、やはり供献されたものと考えられている。ホラガイやゴホウラ幼貝は、近隣の武芸洞遺跡でも石棺墓内からの出土例があり、縄文晩期の葬送様式に関連して今後注意が必要であろう。

4. ハナダガマ遺跡（南城市玉城字堀川）（図6-1：⑧）

南城市玉城字堀川に位置する洞穴遺跡で、2006年から2007年にかけて沖縄更新世人類遺跡調査団（団長：馬場悠男 国立科学博物館人類研究部長：当時）と沖縄県立博物館・美術館との共同研究事業として2次におよぶ発掘調査が実施された（沖縄県立博物館・美術館2009）。2次に及ぶ



図6-13 ガルマンドウ原洞穴遺跡遠景
八重瀬町教育委員会提供。



図6-14 ガルマンドウ原洞穴遺跡近景
写真中央の崩落岩と洞床との間の空間から縄文時代晩期の人骨群が検出された。八重瀬町教育委員会提供。

調査の結果、偽骨器（いわゆる「叉状骨器」）を含む2500点を越える多量の動物化石とともに、少量の断片的な人骨が回収された。動物化石の多くは更新世の絶滅シカ類（リュウキュウジカおよびリュウキュウムカシキョン）のもので、明らかな人為的解体痕は確認できなかった。

また、人骨の放射性炭素年代測定結果は990¹⁴C BP (Beta-208322)であり、グスク時代前後のものと考えられる。

5. ガラビ塚遺跡（八重瀬町字新城）（図6-1：⑬）

八重瀬町字新城に位置する大規模な洞穴遺跡である。洞穴内に貝塚があり、弥生～平安並行時代の土器が採集されている。縄文時代前期の条痕文土器も採集されており、シカ類化石の産地としても知られている（大城・野原1977、具志頭村教育委員会1986）。内部でヌヌマチガマと接続している。

6. 新里洞穴遺跡（八重瀬町字新城）（図6-1：⑫）

八重瀬町字新城に位置する大規模な洞穴遺跡である。開口部付近が弥生～平安並行時代の遺跡となっており、開口部から100mほど奥部では銅鏃が採集されている（仲座・羽方2011）。同様の銅鏃は、沖縄ではうるま市宇堅貝塚や読谷村浜



図6-15 ハナンダガマ遺跡遠景

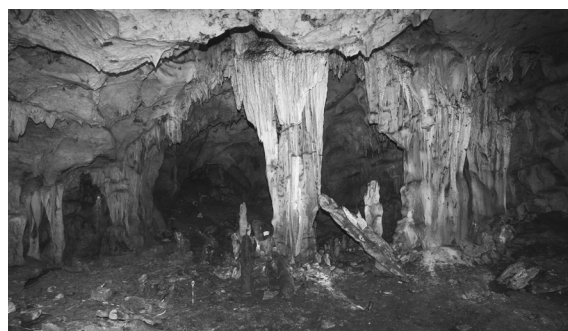


図6-16 ハナンダガマ遺跡内部のホール
ホール内に堆積した褐色土中から多数の動物化石が出土した。

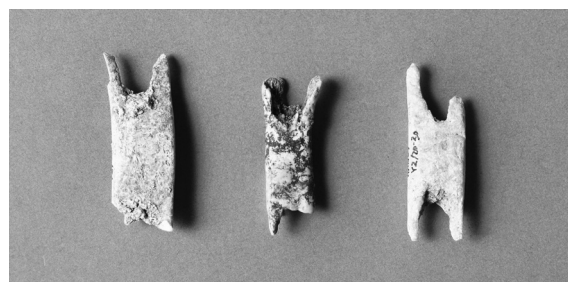


図6-17 偽骨器（「叉状骨器」）
シカ類が仲間の骨を噛むことによって生じた偽骨器。



図6-18 ガラビ壕遺跡近景

開口部底部下の石積み（右写真）は風葬墓。

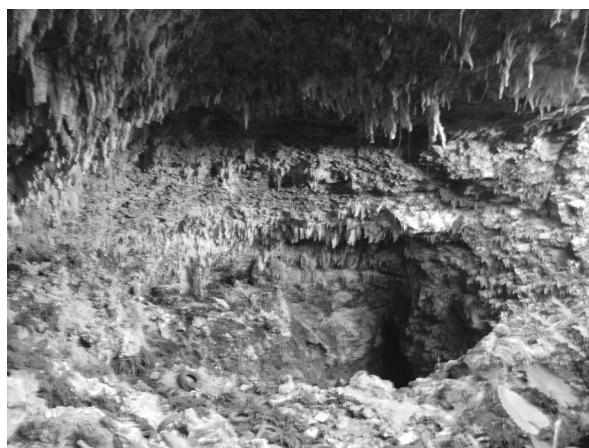
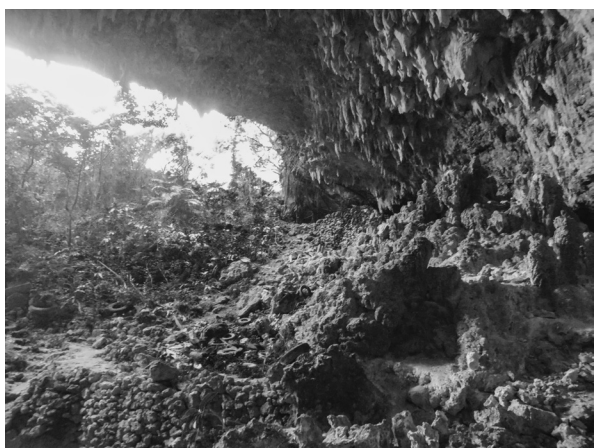


図6-19 新里洞穴遺跡近景

開口部は底部を伴う大規模なドリーネになっている。

屋原貝塚B地点など弥生時代並行期の遺跡から発見されている。

7. 港川遺跡（八重瀬町字^{ながも}長毛）（図6-1：⑩）

八重瀬町字長毛に位置する。この遺跡は当初、^{たわだ}多和田^{しんじゆん}真淳氏によって貝塚時代中期の遺跡として記載された（琉球政府文化財保護委員会 1960）。発見当時から、石灰岩（粟石）の採石によって破壊が進んでいたようである。その後、1970年には那覇市の実業家^{せいほ}大山盛保によって、石灰岩採石場内に開口したフィッシャー内から、港川人の4体分の骨格が発見された（Suzuki and Hanihara 1982）。フィッシャー内の堆積物中からは、イノシシやトリなど多くの動物化石も発見されている（長谷川ほか 2017）。また、1998～2002年にかけて具志頭村教育委員会が実施した確認調査では、崖上地点から1個体分の土器（波状文土器）が検出されており、

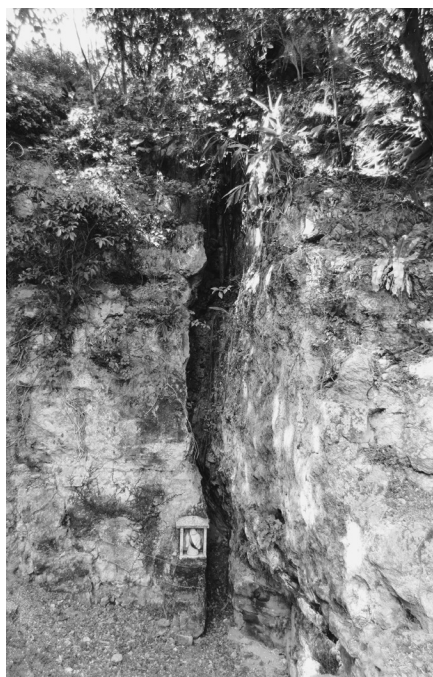


図6-20 港川遺跡のフィッシャー

土器に伴出したシレナシジミから 8100 ^{14}C BP (PLD-18269) の放射性炭素年代が得られている (具志頭村教育委員会 2002)。

8. ジャマシチ (南城市玉城字前川) (図6-1:B)

ジャマシチ (ザマヒチ) は、南城市玉城字前川にあるクムイ (小堀) で、サキタリ洞の上流側に位置する。水深が深く、かつては川エビやギンブナなどもいて、村人たちの憩いの場となっていた。現在は汚濁が進んでいる (図6-21)。

ジャマシチ周辺の川岸には粘土質の厚い堆積が見られ、カワニナなどの淡水貝類が多く含まれているのが観察できる (図6-22)。そこから回収された巻貝 (カバクチカノコ) の放射性炭素年代値は 955 ^{14}C BP (PLD-24992) で、グスク時代初期に相当する。なお、ジャマシチとサキタリ洞の中間地点の川岸 (右岸) 粘土層中からは敲石が採集されている (第9章: 図9-48 参照)。

9. 玉泉洞 (南城市玉城字前川) (図6-1:C)

総延長 5 km に達する沖縄県内最大の石灰岩洞穴 (鍾乳洞) で、約 800 m が観光用に公開されている。下流洞口部には前川貝塚があり、上流部はガニグワーガマ (サキタリ洞下層洞穴)、イナグ洞と接続している (図VI-2 も参照)。

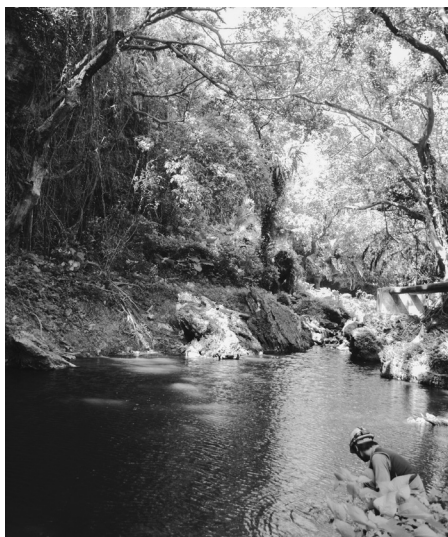


図6-21 ジャマシチの景観



図6-22 ジャマシチ岸辺の堆積層中に見られるカワニナ等の貝類



図6-23 雄樋川下流干潟



図6-24 雄樋川下流干潟に見られるカキ、シレナシジミの貝殻

10. 雄樋川干潟 (図6-1:D)

雄樋川下流には現在マングローブは分布していないが、河床にはカキやシレナシジミ、マクガイなどの貝殻の自然散布（おそらく河川工事に伴って掘りあげられたもの）が見られる（図6-23・24）。貝殻の放射性炭素年代はカキが6735 ¹⁴C BP (PLD-27740)、マクガイが6110 ¹⁴C BP (PLD-30875) で、縄文海進期の年代を示している。このことから、当時この一帯が海水の影響を強く受ける汽水域であったことがわかる。

引用文献

- 大城逸朗・野原朝秀 1977「琉球列島における鹿化石産出地について」『沖縄県立博物館紀要』第3号
- 河名俊男 1988『琉球列島の地形』新星図書出版
- 具志頭村教育委員会 1986『具志頭村の遺跡』
- 具志頭村教育委員会 2002『港川フィッシャー遺跡—重要遺跡確認調査報告—』具志頭村文化財調査報告書第5集
- 高宮廣衛 1991「南島考古雑録(1)」『南島考古』11号
- 玉城村教育委員会 1979『玉城村の遺跡—第1次分布調査概報』
- 玉城村教育委員会 1991『国指定史跡糸数城跡：発掘調査報告書』
- 玉城村教育委員会 1995『玉城村の遺跡—詳細分布調査報告書』
- 玉城村教育委員会 2002『志堅原遺跡：個人住宅建築工事に係る発掘調査報告』
- 當眞嗣一 1997「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」『沖縄県立博物館紀要』第23号
- 仲座久宜・羽方 誠 2011「八重瀬町新里洞穴遺跡で採集された銅鏃」『沖縄県立博物館・美術館博物館 博物館紀要』第4号
- 南城市教育委員会 2012『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 志堅原遺跡第2次・第3次・中山小祿原遺跡・ティーラガマ試掘』
- 長谷川善和・鎮西清高・野原朝秀・池谷仙之・和田秀樹・大山盛弘 2017「沖縄の更新世港川人遺跡の地形と地質」『群馬県立自然史博物館研究報告』第21号
- 前川誌編集委員会 1986『玉城村字前川誌』
- 松下孝幸編 2007「ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第2号 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 沖縄県立博物館・美術館 2009『沖縄県南城市ハナンダガマ遺跡発掘調査報告書』
- 沖縄県立博物館・美術館 2010『沖縄県南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』
- 八重瀬町教育委員会 2017『屋富祖村跡：坡名城の郷整備事業に係る緊急発掘調査報告書』
- 山崎真治・新里尚美・金城 達・山田浩久・藤田祐樹 2009「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館博物館 博物館紀要』第2号
- 琉球政府文化財保護委員会 1960『文化財要覧 1960年版』
- Suzuki, H., and Hanihara, K. (1982) The Minatogawa man : the upper pleistocene man from the island of Okinawa. *Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo*. No. 19.

第7章 調査の方法と成果の概要

第2章で述べたように、沖縄の石灰岩地域に分布する洞穴や裂罅からは多くの旧石器人骨が発見されているが、その多くは、産出層準や年代が明確でなく、炉址等の生活遺構や石器等の文化遺物を伴う例もほとんどないことから、考古学的評価が困難な状況が長らく続いてきた。

近年調査が進められているサキタリ洞遺跡や白保竿根田原洞穴遺跡では、こうした課題を受けて、遺跡の堆積状況に基づいて層序区分を実施しつつ掘り下げを行う考古学的な手法が導入され、組織的なフローテーション作業も行われている。以下では、サキタリ洞遺跡における調査の方法と成果の概要について述べる。

1. 調査の方法

サキタリ洞遺跡は総面積約620㎡と大規模なホールを有する洞穴であり、天井までの高さは洞穴中央部で約7mを測る(図7-1)。洞床の標高は約38mで、ボーリング調査の成果によれば、現洞床から-10mほどで基盤の石灰岩に到達する。

調査にあたっては、光波測距儀を用いて東側開口部に設定した基準点(P0)から、洞穴を縦断する任意の基準線を設定し、これに基づいて2×2mのグリッドを設定した。グリッドによって区切られた区画には、東西方向(X軸)に1、2、3…のアラビア数字を、南北方向(Y軸)にA、B、C…のアルファベットを割りあて、測量原点(P0)をJ・K列と0・1列の交点とした(図7-1)。

現在サキタリ洞の中央部にはコンクリート床が貼られているため、発掘作業は地表面が露出していた西側洞口内斜面部(調査区Ⅰ)、東側洞口内斜面部(調査区Ⅱ)、西側洞口外岩陰部(調査区Ⅲ)の3箇所で行った。各調査区の掘り下げにあたっては、投光器を使用して表土から人力による掘り下げを行った。落盤礫の除去にはハンマーや金棒、削岩機を使用した。掘削深度の深い調査区Ⅱでは、安全確保のために掘削の進行に合わせて適宜段掘りや土留めを行った。

層位区分については、人工層位と自然層位を併用しつつ、可能な限り自然層位に基づいた発掘を心がけたが、調査区Ⅱなど層位区分の難しい地区では遺物の産状等も加味した層位区分を行った。遺物の取り上げは2m四方のグリッドを基本とし、調査区ⅠのⅢ層および調査区ⅡのⅦ層については25×25cmグリッドも併用した。主要遺物については光波測距儀による3次元測量を実施して回収したほか、調査区ⅡのⅦ層から検出されたSX12人骨については、3次元レーザー測量を実施した。

発掘に伴って掘り上げた土壌のうち、調査区Ⅰ、Ⅲの旧石器時代(後期更新世)の堆積物および調査区ⅡのⅣC層(条痕文土器包含層)以下の堆積物は、その一部または全部について、主に1mmメッシュでのフローテーション(水洗選別・フルイ)作業を実施して、細かな遺物の回収に努めた。

2. 成果の概要

サキタリ洞遺跡ではこれまでの調査によって、約4万年間に及ぶ堆積層が良好な状態で保存されていることが明らかになっており、旧石器時代から近現代まで断続的かつ長期にわたって利用されてきた複合遺跡と評価することができる。特に各時期の遺構・遺物が、層位的に検出されたことにより、沖縄における考古学的編年に関して重要な知見を得ることができた。

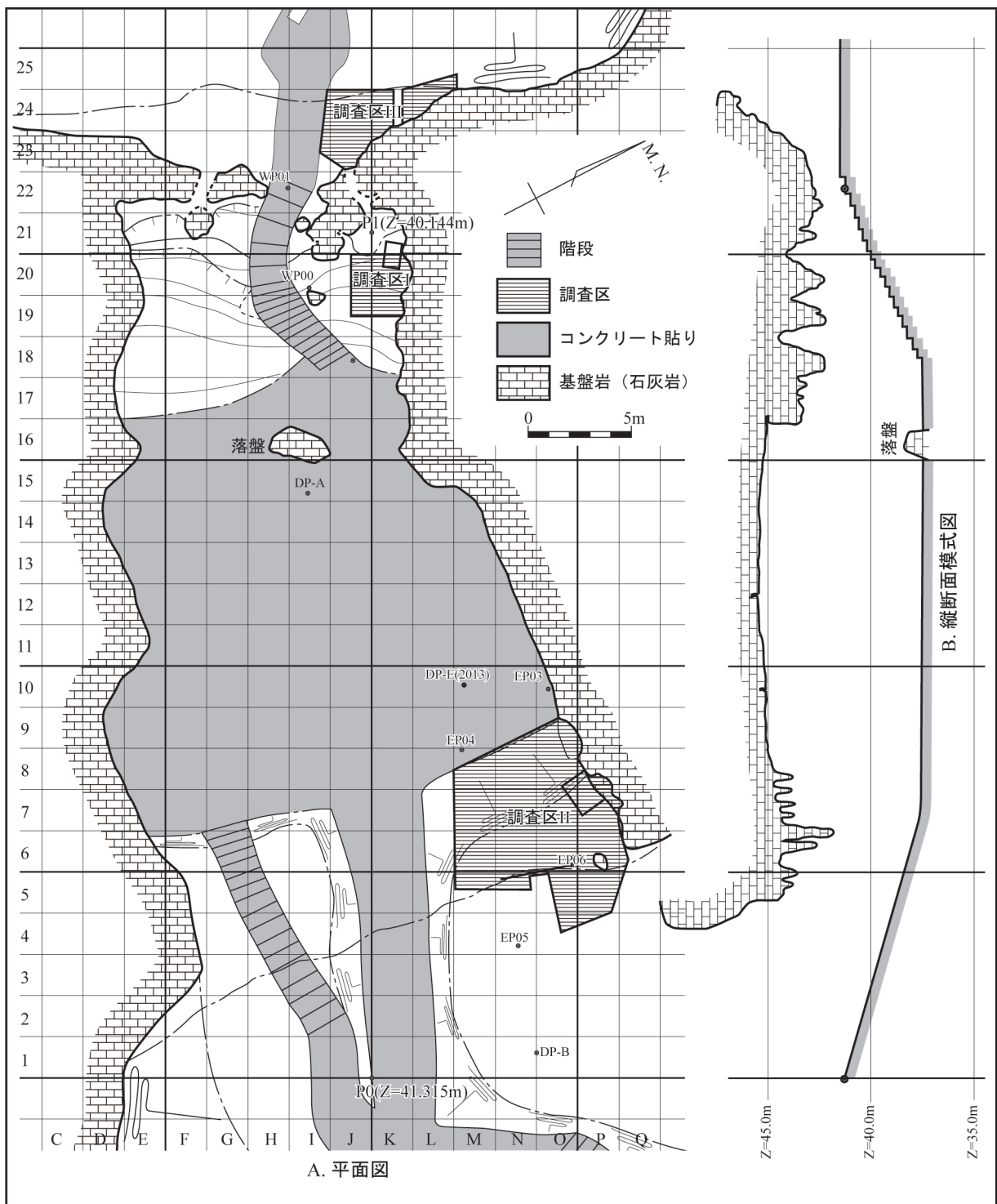


図7-1 サキタリ洞遺跡平面・断面図

図7-2に示すように、西側洞口部に位置する調査区I・IIIでは主に旧石器時代の堆積層が、東側洞口部に位置する調査区IIでは主に完新世の堆積層が確認されている。サキタリ洞遺跡において、現在までに得られた放射性炭素年代のうち最も古い年代は、調査区IIIのXV層から得られた約3万9000年前(34110 ^{14}C BP (PLD-23430))というものであり、37000年前以降の年代値は調査区IIIのXIV・XIII層や調査区IのVII・VIII層から複数得られている。調査区IIIや調査区Iでは発掘底面が基盤層まで到達しておらず、今後の調査によってさらに古い堆積層が確認できる可能性がある。

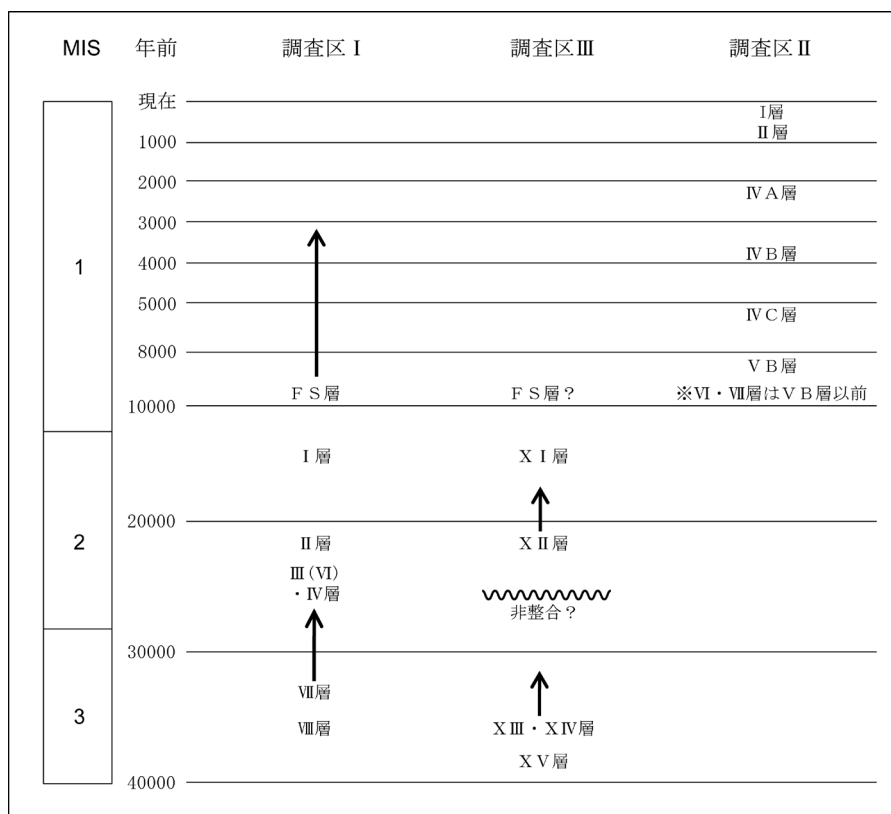


図7-2 各調査区の層序と年代の概略

MISは海洋酸素同位体ステージ。

調査区 I の表土及び調査区 III の I 層には、近現代の遺物も含まれているが、縄文時代晩期頃の土器片等の遺物も多く含まれており、完新世後期以降も西側洞口部が断続的に利用されていたことがわかる。また、調査区 II の VI・VII 層の年代については現在分析中であるが、V B 層が約 9000 年前のものであることから、それ以前にさかのぼるものと考えられる。

調査区 I・III の旧石器時代の堆積層中には、人骨だけでなく、人類活動に関わるさまざまな遺物・遺構が包含されており、中でも豊富な貝器や動物遺骸の出土は、国内では他に類を見ないものである。また、従来沖縄における人類史研究上の課題となってきた、旧石器時代末から縄文時代初期にかけてのいわゆる「空白の時代」についても、調査区 I の I 層から出土した約 1 万 4000 年前の人骨と石英製石器、調査区 II の V B 層から出土した約 9000 年前の押引文土器など、点的ではあるが人類と文化の存在を示す物証が得られており、空白は埋められつつある。

各調査区の各層からは、これまでの調査によってさまざまな構築物あるいは空間利用の痕跡（行動軌跡）が確認されており、ここではそれらを遺構としてまとめた（表 7-1）。検出された遺構は、①墓、②炉址あるいは火の使用に関連する遺構、③その他の遺構の三者に大別できる。墓にはグスク時代以降のもの（SX2・14）、縄文時代晩期？（調査区 II 石棺墓？）、縄文時代早期以前（SX12）のものがある。後二者はいわゆる埋葬と考えられるものであり、調査区 II から検出された岩陰囲込墓（SX14）や崖葬墓（SX02）は近世の風葬につながるタイプの墓である。このほかにも断片的な人骨が各区より検出されている。

炉址あるいは火の使用に関連する遺構としたものは、見かけ上は赤色土や炭化物が平面的な集中部を形成するもので、赤色土はいわゆる焼土と考えられるものである。一般的な地床炉のように一定範囲の地面全体がよく焼けたような状態ではないが、灰と考えられる白色物を伴うものもあり、

表7-1 検出遺構一覧

遺構番号	調査区	層	検出年月日	種別	規模	放射性炭素年代	備考
SX01	II	II A層	20110729	石列	(L3.0m×W0.5m)		
SX02	II	II A-II B層	20120807	崖墓	L2.0m×W0.5m		
SX05	III	XIV層上部	20120817	赤色土・炭化物集中部	L0.57m×(W0.34m)	27380 ¹⁴ C BP (PLD-23428)	
SX06	III	XIV層下部	20120904	赤色土・炭化物集中部	L0.83×(W0.53m)	30273 ¹⁴ C BP (PLD-23291) 33043 ¹⁴ C BP (PLD-23290)	磁化研究実施
SX07	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	L0.45m×(W0.26m)		J20区
SX08	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	(L0.55m)×(W0.24m)		JK20区
SX09	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	L0.51m×(W0.26m)		JK20区
SX10	III	XIV層	20120919	赤色土・炭化物集中部	L1.1m×(W0.70m)	28682 ¹⁴ C BP (PLD-23429)	
SX11	II	VII層	20130205	赤色土集中部	L0.24m×(W0.17m)		磁化研究実施
SX12	II	VII層	20130219	埋葬人骨	(L1.03m×W0.62m)		磁化研究実施
SX13	II	II層	20130226	礫集中部	L1.23m×W0.70m	168 ¹⁴ C BP (IAAA-170781)	
SX14	II	II B-III層	20130226	岩陰囲込墓	L1.45m×W0.47m	995 ¹⁴ C BP (PLD-25000)	「規模」は石囲いの外径を示す。
SX15	I	IV層	20130207	赤色土・炭化物集中部	(L0.52m)	21010 ¹⁴ C BP (PLD-23424)	K21区 セクション面での確認
SX16	II	II層	20131010	土器・獣骨集積	L0.22m×W0.20m	990 ¹⁴ C BP (PLD-26377)	
SX17	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	(L0.42m)×W0.32m		J20区 磁化研究実施
SX18	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	L0.48m×W0.30m		J20区
SX19	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	(L0.39m×W0.23m)	17290 ¹⁴ C BP (PLD-24993) 19550 ¹⁴ C BP (PLD-24994)	J19区 磁化研究実施
-	II	IV層		石棺墓?			IV層中に構築されている
-	II	VII層上面		赤色土・炭化物集中部	径約1.0m		

※「規模」の項目の()は調査区内において確認できた規模を示す。Lは長さ、Wは幅。

いくつかの例(SX6・11・17・19)について磁化研究を実施したところ、弱い被熱を示唆する結果が得られている(分析・考察編V参照)。

その他の遺構には、石列や礫集中部、土器片・獣骨の配置があり、いずれもグスク時代以降のものである。調査区IIで検出された石列(SX01)は土留めのための施設と考えられる。調査区IIのP5区で検出された礫集中部(SX13)と土器・獣骨遺構(SX16)は、何らかの呪術的行為を思わせるが、その性格についてはなお検討が必要である。

出土した遺物には土器、陶磁器、石器、貝器、金属製品、ガラス製品、人骨、動物遺骸などがある(表7-2)。現在のところ最も古く確実性の高い人類の痕跡は、調査区III・XIV層から検出された赤色土・炭化物集中部で、約3万7500～3万1000年前のものと考えられる。また、調査区IのVII層からは約3万年前の断片的な人骨が検出されている。これよりも下層にあたる調査区IIIのXV層、調査区IのVIII層からは、シカ類化石が検出されており、少数ながら焼けた骨も見られる。調査面積が狭小で、なお精査を要するが、このことは、沖縄における人類の登場がさらに古くさかのぼる可能性を示唆している。

調査区I・IIIの旧石器時代の堆積層中からは甲殻類、陸産・淡水貝類が多く出土しており、特に調査区IのII層(約2万3000～2万年前)では顕著である。甲殻類や淡水貝類は食料資源として利用されたものと考えられ、サキタリ洞遺跡の旧石器人は水産資源を活発に利用していたことが読み取れる。またII層からは、このほかに約2万3000年前の世界最古の巻貝製釣針を含む貝器類がまとまって出土しており、九州以北の打製石器技術を基盤とした旧石器文化とは異なる個性的な貝器文化の存在が推定される。

完新世の人類文化については、①縄文時代早期相当期(押引文土器)、②縄文時代前期(条痕文土器)、③縄文時代中後期、④縄文時代晩期、⑤グスク時代、⑥琉球王国時代、⑦近現代の各時期の遺物が主に調査区IIから検出されている。調査区IIのV層から出土した押引文土器(1個体分)

表7-2 各調査区の層序と遺構・遺物の概要

調査区 I				調査区 III			
層序	遺構	人工・人為遺物	人骨・動物遺骸	層序	遺構	人工・人為遺物	人骨・動物遺骸
表土		※近現代遺物とともに土器、人骨、動物遺骸を含む。		I		※近現代遺物とともに土器、人骨、動物遺骸を含む。	
FS		土器、石器	人骨、獣骨（イノシシ）、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	FS			陸産貝類
I		石英製石器、貝器	人骨、獣骨（イノシシ）、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	X I			陸産貝類
II	SX07・08・09	貝器、石器（砂岩）、炭化物多	人骨、獣骨（イノシシ）、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	X II		貝器、炭化物	骨片、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類
III (VI)	SX15・17・18・19	貝器	人骨、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	X III			獣骨（シカ類）
VII			人骨、小動物骨、甲殻類、陸産貝類	X IV	SX05、06、10		小動物骨、陸産貝類
VIII			獣骨（シカ類）、陸産貝類	X V			獣骨（シカ類）、陸産貝類
調査区 II							
層序	遺構	人工・人為遺物	人骨・動物遺骸				
I		※近現代遺物とともに土器、石器、動物遺骸含む					
II	SX01、02、13、14、16	土器、石器、貝器、銭貨	人骨、動物骨、海産・陸産・淡水貝類				
	A	石棺墓？	土器、石器、貝器				
	B		土器、石器、貝器				
	C		土器、石器、貝器				
V		土器、石材	動物骨、海産・陸産・淡水貝類				
VI		石材	人骨、陸産貝類				
VII	SX11、12、赤色土・炭化物集中部		人骨、陸産貝類				

は、縄文時代早期相当期（約9000年前）のものと考えられ、従来沖縄最古の土器と考えられてきた南島爪形文土器よりも古い土器文化の存在を示すものである。これよりも古いと考えられる土器も検出されているが、いずれも断片的で今後の精査が必要である。ある程度まとまった遺物が見られるのは縄文時代前期（条痕文）、縄文時代晩期、グスク時代、琉球王国時代であり、縄文時代晩期、グスク時代、琉球王国時代には洞穴内は生活拠点というよりも主に墓域として利用されていたと考えられる。なお、今回の発掘資料では明確でないが、おきなわワールド保管資料中には弥生～平安並行時代の土器も少量見られ、この時期にも何らかの人的活動が展開していたようである。

第8章 調査区 I

1. 概要

調査区 I (図 8-1) は、西側洞口から洞内にかけての緩斜面部に設定した発掘区で、発掘面積は約 8 m² である。地表下約 2.5m まで掘削したが、まだ基盤には到達していない。

現在西側洞口は堆積物によって大部分が閉塞された状態となっており、洞外からの堆積物の流入はほとんど認められないが、旧石器時代(後期更新世)の段階では現在ほど堆積が進行しておらず、開口部もより大きかったと考えられる。

この地点では、まず 2009～2010 年度にかけて試掘区を地表下約 2 m まで発掘し、後述する I～VI 層の層序を確認した。2009 年度調査期間終了後には、出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施し、約 2 万年前の年代値を得たことで、この場所に旧石器時代の堆積層が分布していることが明らかになった。2010 年度には、試掘区の堆積層下部(VII 層)から人骨(幼児環椎・肋骨)が出土すること、さらに試掘区の下底部付近(VIII 層)からシカ類化石が出土することを確認し、追加の放射性炭素年代測定を実施した。

2011 年度からは調査区を拡張して J・K / 19・20 区の発掘を実施した。この区域では、表土下に厚さ約 30cm の FS (フローストーン) 層が全面に分布しており、この FS 層を除去したところ、南半部ではこの FS 層下に軟質の堆積物が確認できた。一方、北半部には厚いフローストーンが発達していたため、まず南半部を II 層下面まで調査した後、北半部のフローストーンを削岩し、III 層以下の調査を実施した。北半部のフローストーン下には、壁面から張り出した石灰岩や、径 1m を超えるような石灰岩塊(転石?)が分布していた。調査区南半では、III 層上部より赤色土・炭化物集中部(SX17～19)が検出されたため、いったん掘削作業を停止し、2013 年度以降は主に調査区北半(K20 区北半)の深掘りを行っている。このため、III 層以下は部分的な調査に留まっている。本報告では主に I～III 層の調査状況について報告する。

2. 層序と年代

調査区 I の層序は地点によってやや異なるが、試掘区南壁および調査区(J・K / 19・20)南壁の層序(図 8-2・4)を標準層序とした。一方、試掘区内では後述するようにやや異なる堆積状況が認められた。いずれの堆積層も、基本的には洞外から洞奥に向かって 20 度ほど傾斜しているが、下層ではやや傾斜が緩やかになるようである。以下ではまず標準層序について述べる。

調査区 I (J・K / 19・20 区)では、表土直下に石灰分によって固結化したフローストーン(FS 層)が、約 30cm の厚さでほぼ全面に分布していたため、ツルハシや削岩機を使用してこの FS 層を除去し、下層の調査を実施した。その結果、FS 層下位の堆積物は、I～III 層に区分することができた(表 8-1)。I～III 層は、いずれも淘汰の悪い褐色のシルト～粘土からなり、石灰岩礫や二次生成物の破片を多く含む。土層のしまりは悪く、場所によっては団粒状を呈することもあり、堆積層中の所々には透かし礫や水流の影響によると見られる空洞や空隙が形成されていたほか、発掘中もしばしば壁面の崩落が生じた。このうち II 層は、炭化物を多く含み黒色を呈する堆積層で、非常に多くのカニの爪(鉗脚)、カタツムリ、カワニナ等の動物遺骸を含む。この II 層の上位に位置する褐色土層を I 層、下位に位置する褐色土層を III 層とした。II 層は J・K / 19・20 区西壁では単層であるが(図 8-3)、南壁では II-1 層と II-2 層に分層でき、前者については II-1 B 層とした炭化物集

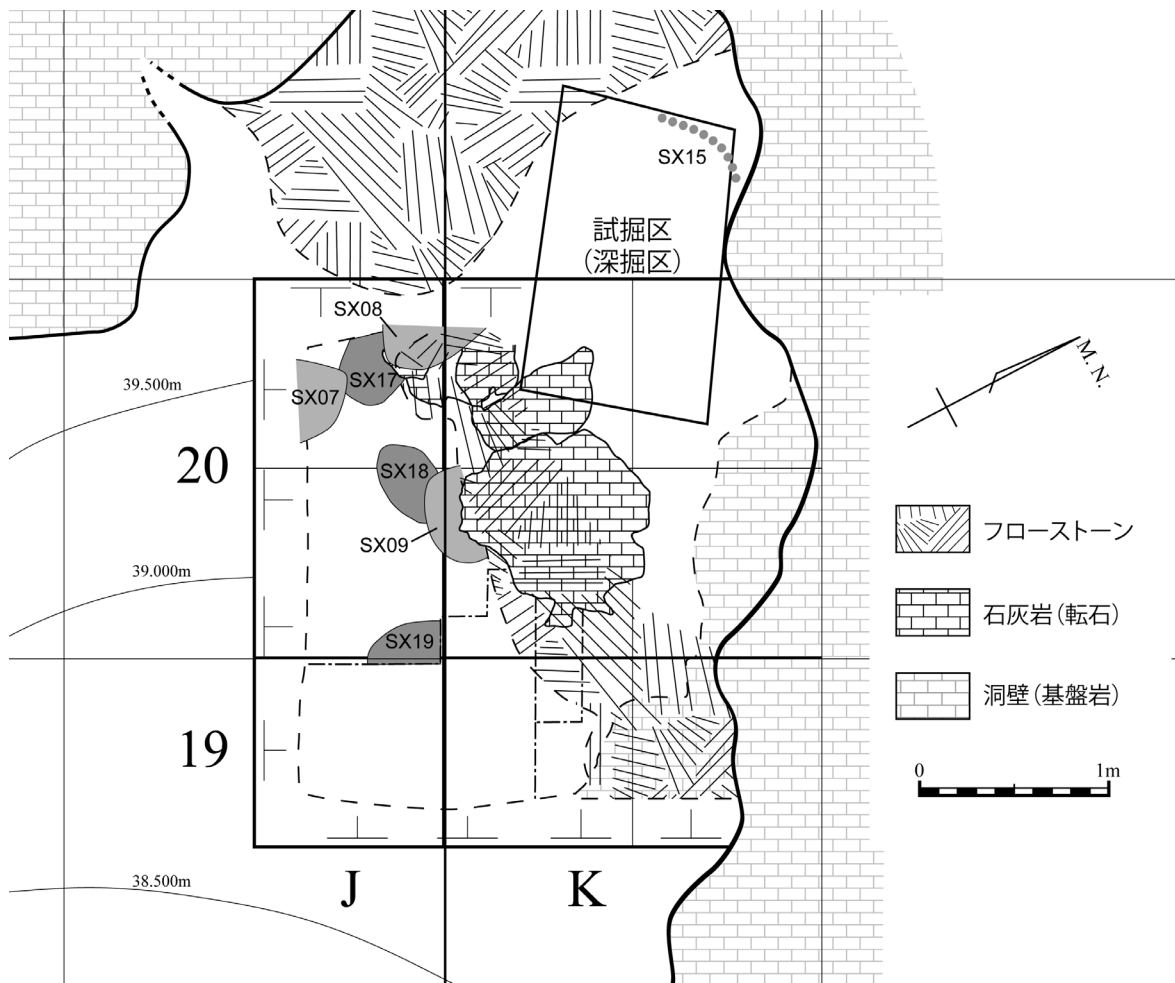


図8-1 調査区Iの平面図と遺構配置図

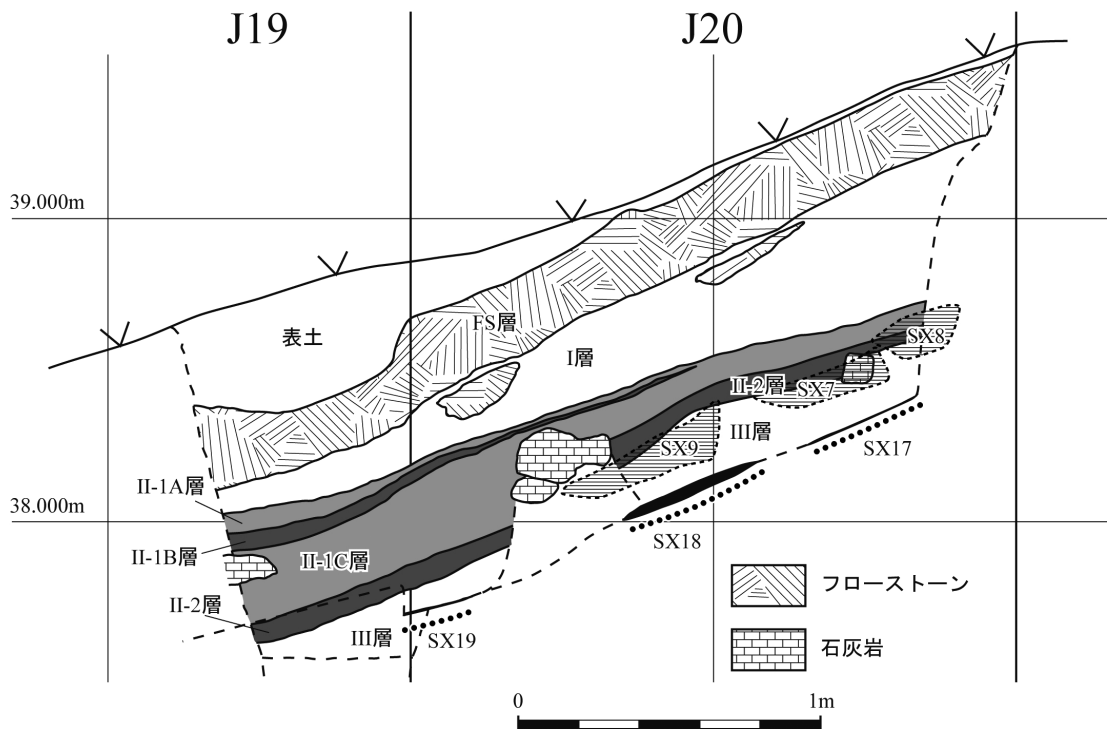


図8-2 調査区I南壁セクション図

中部を基準に、Ⅱ-1A層とⅡ-1C層に区分できた。Ⅲ層については、現在のところ部分的な調査に留まっている。表8-1には、各層の層相、出土遺物、年代をまとめた。なお、堆積物の特徴については分析・考察編Ⅵにおいて詳しく記載されている。

次に、試掘区の堆積状況(図8-8)について述べる。ここではFS層の下位にⅡ層(Ⅱ-1・Ⅱ-2層)があり、その下位にⅢ層およびⅣ層が分布する。Ⅲ層とⅣ層の区分は、堆積層中に見られた団粒構造の発達程度の差異にもとづくもので、基本的な層相は類似している。その下位、標高38.4m前後のレベルにはⅡ層に類似したⅤ層が見られ(図8-6)、その下位(おおよそ図8-8中の■より下位)には再びⅢ層類似の褐色土が見られたので、これをⅥ層とした。その下位のⅦ層中からは、2010年度の調査で人骨(幼児の環椎・肋骨)を検出した。さらにその下位のⅧ層中からは、保存の良いシカ類化石(部分骨)がまとまって検出されている。

標準層序と異なる点として、この地点では炭化物層が間層を隔ててⅡ層とⅤ層の2枚認められる点あげられる(図8-6・7)。壁面の観察から、Ⅱ層とⅤ層は一連の堆積物と考えられ、特に試掘区の南東隅から東壁、北壁にかけて、Ⅱ層上面あるいはⅡ層およびⅤ層の周囲に地層の乱れが観察された。Ⅱ・Ⅴ層周囲のⅣ層やⅠ層中にはパッチ状の灰色土が混在しており(図8-8)、これらはⅡ層のリワークに伴って生成されたものと考えられる。試掘区地点は洞穴壁際にあたっており、フローストーンの発達が顕著で、堆積層中には大型の転石も見られることから、こうした構造体がずれ動いた場合、堆積層はその影響を被りやすい条件にあったと思われる。また、J20区西壁セクションと試掘区東壁セクションを比較すると、調査区中央部の転石を挟んでⅡ層の傾斜方向が異なっており(図8-3)、このことも、Ⅱ層が二次的な変形を受けた可能性を示唆している。

以上のことからⅤ層は、Ⅱ層が二次的に生じた空隙や吸い込み穴の影響を受けて下方にリワークしたものと考えられ、二次的な堆積層(再堆積)と考えられる。しかし堆積構造自体が大きく攪乱されているわけではなく、基本的な層序は維持されており(図8-5・8)、このことは、試掘区下部の放射性炭素年代からも支持される。地層のリワークがいつ頃生じたかは重要な問題であるが、Ⅰ層以下の基本的な堆積構造が維持されていることから考えて、Ⅰ層堆積後、おそらくFS層の堆積前後のことではなかったかと思われる。試掘区におけるⅡ層とⅤ層の問題については、現段階では一応、以上のように解釈しておく。

次に、各層の年代について述べる。調査区 I では45点の放射性炭素年代が得られており、それらの試料採取地点(座標値記録分のみ)を図8-9に、結果を表8-2に示す。FS層からは約1万1000～3000年前、Ⅰ層からは約1万6000～1万3000年前、Ⅱ層からは約2万3000～2万年前、Ⅲ～Ⅷ層からは約3万7000～2万3000年前の年代が得られており、おおむね層序と矛盾のない結果と言える。

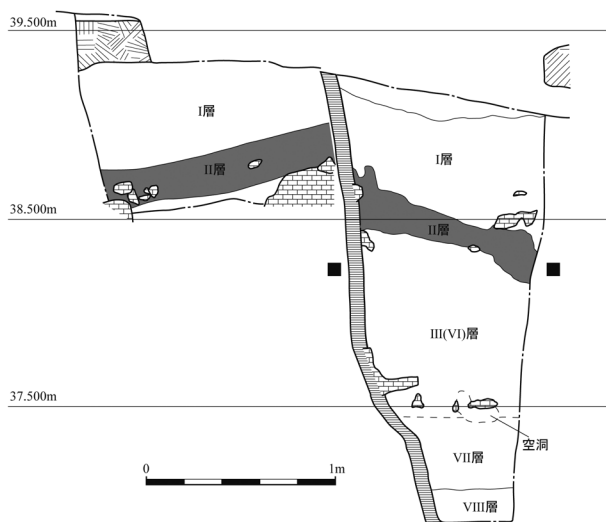


図8-3 調査区 I J20区西壁セクションと試掘区東壁セクションの合成図



図8-4 調査区I J19・20区南壁セクション写真



図8-5 調査区I 試掘区東壁セクション写真



図8-6 調査区I 試掘区北東隅セクション写真
II層とV層の関係を示す。



図8-7 調査区I 試掘区北壁V層の堆積状況細部写真
上部には空隙が見られる。

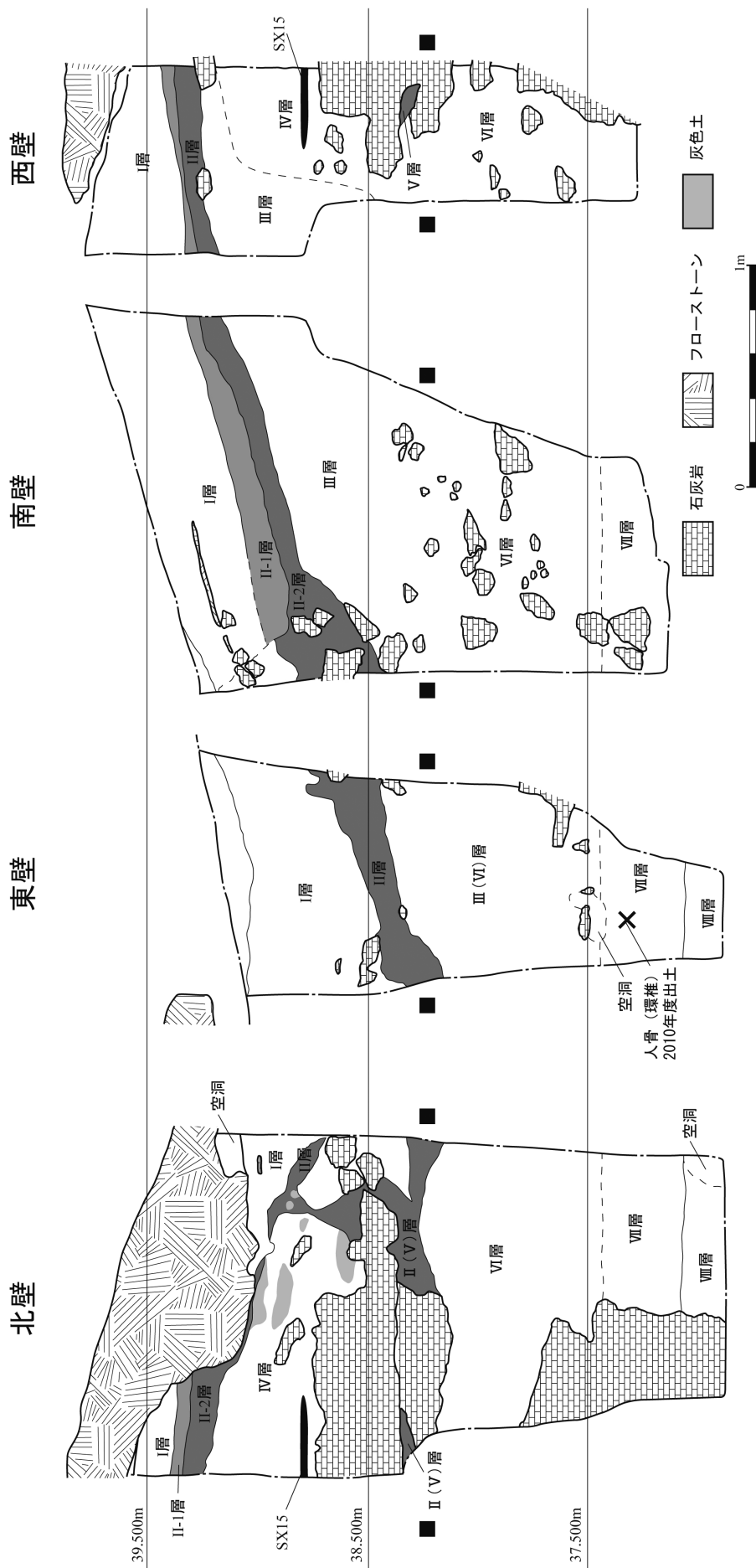


図8-8 調査区I (試掘区) セクション図

表8-1 調査区 I の層序

層名	色調	記載	遺構	人工・人為遺物	動物遺骸	年代(層年)
表土	黒色粘質土	ガラス瓶や茶碗等の現代遺物とともに縄文土器、獣骨、貝類、カニ(鉗脚)、カタツムリ等を含む。			人骨、獣骨、貝類	
FS層	フローストーン(縄文時代の遺物包含層)	石灰分によって固結したフローストーンの層。固結部と未固結部が互層になる部分も認められる。フローストーン中には、土器片や海産貝、獣骨、石器、人骨、カタツムリなどが含まれている。		土器、石器	人骨、獣骨(イノシシ)、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	11000~3000年前
I層	褐色粘質土(10YR4/4)	シルト質粘土。粘性中、しまり中、砂粒含む。炭化物、カニ(鉗脚)、カタツムリ、カワニナ含む。		石英製石器、貝器	人骨、獣骨(イノシシ)、小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	16000~13000年前
II層	炭化物層	上下の土層に比べて炭化物を多く含み、黒色を呈する。カニの爪(鉗脚)、カタツムリ、カワニナを非常に多く含む。非現地性の海産貝類がまとまって出土した。J19・20区南壁では第II層は上部(II-1層)、下部(II-2層)に区分でき、II-1層はさらに炭化物の密度によってII-1A、II-1B、II-1C層に区分できる。		貝器、石器(砂岩)、炭化物多	小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	23000~20000年前
II-1A層	にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)	シルト質粘土。粘性中、しまりやや強い。炭化物を多く含みやや暗い色調である。上位のI層との境界は漸移的である。			同上 獣骨(イノシシ)	
II-1B層	暗褐色粘質土(10YR3/3)	シルト質粘土。粘性中、しまりやや強い。炭化物を非常に多く含み暗い色調である。			同上	20000年前
II-1C層	にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)	シルト質粘土。砂粒含む。粘性中、しまり中。人骨(歯、足根骨)が出土した。			同上 人骨	22000~21000年前
II-2層	にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)	シルト質粘土。砂粒含む。粘性中、しまり弱。炭化物、カワニナ、カニ(鉗脚)、カタツムリを非常に多く含む。下位のIII層との境界は明瞭で、非整合(小規模な非整合)と考えられる。	SX07・08・09		同上	23000年前
III層(VI層)	褐色粘質土(10YR4/4)	シルト質粘土。粘性中、しまり弱。I層に比較してやや赤みを帯びている。貝器のほかカニ(鉗脚)、カワニナ、カタツムリ、炭化物などを含む。	SX17・18・19	貝器	小動物骨、甲殻類、海産・陸産・淡水貝類	24000~19000年前
IV層		III層に類似するが、団粒構造が顕著。	SX15			25000年前
V層	褐色粘質土	シルト質粘土。粘性中、しまり中。遺物は少ないが、炭化物を含む。			人骨、小動物骨、甲殻類、陸産貝類	35000~24000年前
VI層	褐色粘質土	VI層に比較して褐色が強い色調である。シカ類化石が特地的に含まれている。			獣骨(シカ類)、小動物骨、甲殻類、陸産貝類	37000~33000年前

※各層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色粘2007年版」に基づく。

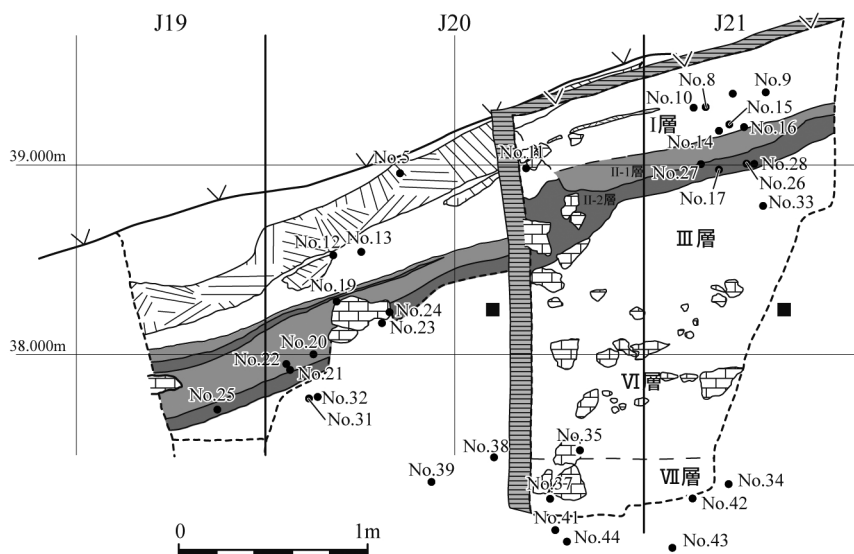


図8-9 調査区 I の放射性年代測定試料採取地点のドットマップ図

図中の番号は表8-2の番号に対応する。

第8章 調査区 I

表8-2 調査区 I の放射性炭素年代値

通番	Lab-no.	試料名	調査区	層	種類	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	校正用年代	年代値	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
									1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
									cal BC (68.2%)	cal BC (95.4%)
1	MTC-16900	SKT-t10	I	表土	海産貝類 (ハイガイ)	-4.5	8907±50	8910±50	Marine13: 7661-7546	Marine13: 7746-7510
2	PLD-15689	—	I	表土	淡水貝類 (カワニナ)	-8.32±0.16	19,911±72	19,910±70	22,134-21,899	22,251-21,765
3	MTC-16902	SKT-t12	I	FS層上部	炭化物 (固結化)	-26.2	2696±37	2695±35	894-810	913-802
4	MTC-16901	SKT-t11	I	FS層上部	海産貝類 (ハイガイ: 固結化)	-5.0	8603±50	8600±50	Marine13: 7412-7243	Marine13: 7456-7155
5	PLD-23299	SAK006	I	FS層上部	海産貝類 (ハイガイ)	-1.39±0.60	8718±36	8720±35	Marine13: 7503-7410	Marine13: 7525-7342
6	MTC-16903	SKT-t13	I	FS層上部	海産貝類 (ハイガイ: 固結化)	-4.3	8965±49	8970±50	Marine13: 7727-7587	Marine13: 7845-7556
7	MTC-16904	SKT-t6	I	FS層下部	汽水貝類 (シテナシジミ)	-7.9	10,227±52	10,230±50	10,102-9875	10,201-9801
8	MTC-16135	DK004	I	I層上部	カニ (腹節)	-5.4	11,511±72	11,510±70	11,478-11,342	11,532-11,246
9	MTC-16133	DK001	I	I層上部	炭化物	-27.4	12,203±61	12,200±60	12,231-12,056	12,360-11,904
10	MTC-16134	DK003	I	I層上部	陸産貝類 (カタツムリ)	-8.36	12,238±59	12,240±60	12,279-12,092	12,500-12,006
11	PLD-19423	SAK009	I	I層上部	炭化材	-26.26±0.12	12,443±39	12,445±40	12,785-12,420	12,962-12,288
12	PLD-19425	SAK065	I	I層上部	炭化材	-26.02±0.12	12,475±38	12,475±40	12,905-12520	13,040-12,344
13	PLD-19424	SAK048	I	I層上部	海産貝類 (マルス ダレガイ科)	1.82±0.11	23,373±74	23,370±70	Marine13: 25,466-25,271	Marine13: 25,547-25,157
14	MTC-16136	DK005	I	I層下部	カニ (鉗脚)	-4.3	12,591±58	12,590±60	13,151-12,866	13,253-12,659
15	MTC-16138	DK007	I	I層下部	陸産貝類 (カタツムリ)	-7.4	13,368±62	13,370±60	14,247-14,036	14,331-13,909
16	MTC-16137	DK006	I	I層下部	炭化物	-27.8	13,675±75	13,680±80	14,676-14,386	14,856-14,286
17	MTC-17125	DK009	I	II層	カニ (鉗脚)	-8.6	15,570±88	15,570±90	16,960-16,788	17,055-16,684
18	PLD-19992	20110810 採取	I	II-1B層	炭化材	-27.66±0.27	16,374±55	16,370±60	17,917-17,693	18,026-17,619
19	PLD-19991	SAK185	I	II-1B層	炭化材	-23.26±0.32	16,908±56	16,910±60	18,553-18,351	18,632-18,230
20	PLD-23423	SAK305	I	II-1C層	炭化材	-28.26±0.17	17,563±49	17,565±50	19,392-19,154	19,498-19,041
21	PLD-23422	SAK311	I	II-1C層	炭化材	-27.58±0.19	17,869±50	17,870±50	19,827-19,612	19,905-19,501
22	PLD-24989	SAK850	I	II-2層再堆積	炭化材	-24.82±2.24	11,084±1454	11,080±1450	13,345-9152	15,900-7600
23	PLD-23289	SAK302	I	II-2層上面	炭化材	-25.06±0.34	18,591±66	18,590±70	20,570-20,436	20,673-20,374
24	PLD-23288	SAK301	I	II-2層上面	炭化材	-25.88±0.24	18,818±55	18,820±60	20,817-20,597	20,940-20,527
25	PLD-21783	SAK259	I	II-2層	炭化材	-26.73±0.21	18,946±61	18950±60	20,980-20,741	21,081-20,619
26	MTC-17128	DK013	I	II層	陸産貝類 (カタツムリ)	-5.7	19,043±87	19,040±90	21,119-20,832	21,305-20,663
27	MTC-17126	DK010	I	II層	淡水貝類 (カワニナ)	-11.4	19,157±104	19,160±100	21,302-20,959	21,493-20,834
28	MTC-17127	DK012	I	II層	炭化物	-28.4	19,193±99	19,190±100	21,342-21,011	21,510-20,895
29	PLD-15690	—	I	II層 (試掘区)	炭化材	-24.17±0.15	19,259±70	19,260±70	21,393-21,105	21,521-21,001
30	PLD-16225	20100602採取 (38.450m地点)	I	II層 (試掘区)	炭化材	-27.62±0.17	19,344±53	19,340±50	21,482-21,210	21,584-21,094
31	PLD-24993	SAK1079	I	SX19 (III層)	炭化材	-85.99±0.56	17,293±699	17,290±700	19,860-18,141	20,717-17,337
32	PLD-24994	SAK1080	I	SX19 (III層)	炭化材	-30.45±0.19	19,549±54	19,550±50	21,719-21,496	21,847-21,356
33	PLD-23424	SAK719	I	IV層 (SX15)	炭化材	-24.87±0.20	21,014±61	21,010±60	23,535-23,315	23,623-23,209
34	PLD-27744	SAK1175	I	VII層	淡水貝類 (カワニナ)	-12.57±0.13	19,993±78	19,990±80	22,225-21,983	22,351-21,869
35	PLD-24990	SAK830	I	VII層	淡水貝類 (カワニナ)	-11.27±0.14	24,171±78	24,170±80	26,397-26,104	26,546-25,976
36	PLD-16224	20100525 採取	I	VII層	炭化材	-26.41±0.21	24,410±74	24,410±70	26,655-26,405	26,756-26,271
37	PLD-24991	SAK831	I	VII層	淡水貝類 (カワニナ)	-10.94±0.21	24,644±82	24,640±80	26,844-26,624	26,942-26,495
38	PLD-30878	SAK1488	I	VII A層	炭化材	-25.90±0.25	24,912±74	24,910±70	27,090-26,842	27,256-26,730
39	PLD-30879	SAK1491	I	VII A層	炭化材	-27.56±0.25	26,455±83	26,460±80	28,925-28,714	29,026-28,606
40	PLD-30880	—	I	VII B層	炭化材	-30.62±0.24	27,598±89	27,600±90	29,503-29,312	29,598-29,212
41	PLD-27745	SAK1237	I	VII層下面	淡水貝類 (カワニナ)	-10.73±0.17	27,733±153	27,730±150	29,642-29,352	29,872-29,227
42	PLD-27743	SAK1179	I	VII層	炭化材	-27.73±0.18	30,693±211	30,690±210	32,893-32,476	33,086-32,238
43	PLD-27741	SAK1216	I	VII層	陸産貝類 (カタツムリ)	-8.52±0.21	29,482±180	29,480±180	31,911-31,589	32,080-31,374
44	PLD-27742	SAK1240	I	VII層	陸産貝類 (カタツムリ)	-6.11±0.15	30,845±206	30,850±210	33,015-32,616	33,250-32,373
45	PLD-16469	20100525採取・シ カ骨共伴	I	VII層	炭化材	-24.09±0.16	32,650±125	32,650±130	34,746-34,389	35,010-34,246

3. 遺構

調査区 I では炭化物集中部 3 箇所、赤色土・炭化物集中 4 箇所の計 7 箇所の遺構を確認した (図 8-1・2、表 8-3)。炭化物集中部は II-2 層、赤色土・炭化物集中部は III・IV 層から検出されている。このうち、SX15 は試掘区北西隅の断面で確認されたもので (図 8-8 北壁・西壁)、詳細な調査は未実施である。SX07~09 は、II-2 層中で特に炭化物が集中していた箇所 (図 8-10・11) であり、炉址の可能性も考慮して調査を実施したが焼土等の分布は確認できず、二次的な炭化物の集中と判断した。これらの近辺では海産貝類や魚骨、炭化物等が回収されている。

SX17~19 は III 層を 10cm ほど掘り下げた際にまとまって検出されたもので、赤色土 (焼土?) や炭化物が集中していたことから、炉址の可能性が考えられる (図 8-12~15)。SX17、19 については磁化研究を実施した結果、被熱の可能性が示されている (分析・考察編 V 参照)。これらの周囲では遺物の出土は散漫で、焼骨等の遺物も検出されていない。

表8-3 調査区 I 検出遺構リスト

遺構番号	調査区	層	検出年月日	種 別	規 模	放射性炭素年代	備 考
SX07	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	L0. 45m×(W0. 26m)		J20区
SX08	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	(L0. 55m)×(W0. 24m)		JK20区
SX09	I	II-2層	20120905	炭化物集中部	L0. 51m×(W0. 26m)		JK20区
SX15	I	IV層	20130207	赤色土・炭化物集中部	(L0. 52m)	21010 ¹⁴ C BP (PLD-23424)	K21区 セクション面での確認
SX17	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	(L0. 42m)×W0. 32m		J20区 磁化研究実施
SX18	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	L0. 48m×W0. 30m		J20区
SX19	I	III層-10cm	20131107	赤色土・炭化物集中部	(L0. 39m×W0. 23m)	17290 ¹⁴ C BP (PLD-24993) 19550 ¹⁴ C BP (PLD-24994)	J19区 磁化研究実施

※「規模」の項目の()は調査区内において確認できた規模を示す。Lは長さ、Wは幅。



図8-10 SX07～09 検出状況写真(東より)



図8-11 SX08 検出状況写真(東より)

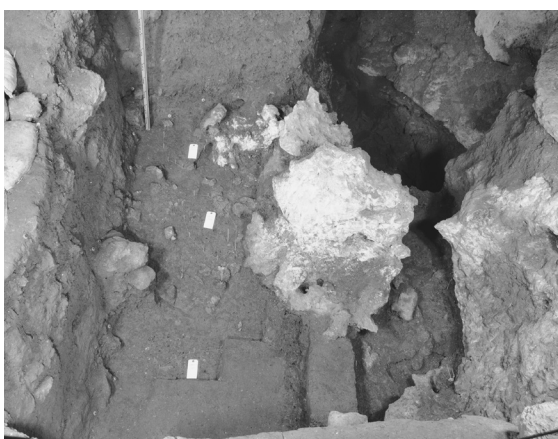


図8-12 SX17～19 検出状況写真(東より)



図8-13 SX17～19 検出状況写真(南より)

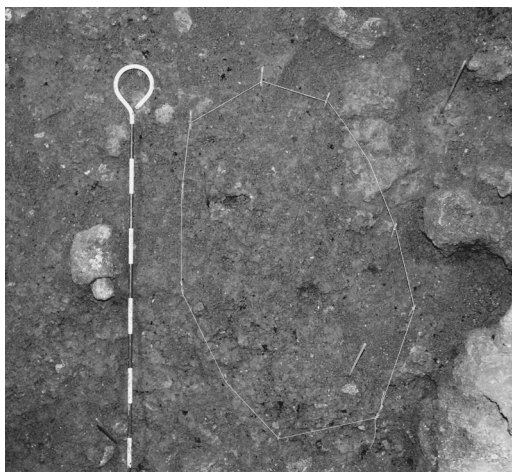


図8-14 SX18 検出状況写真 (南より)



図8-15 SX19 検出状況写真 (南より)

4. 遺物

調査区 Iからは、動物遺骸や炭化物をはじめ、多数の遺物が出土した。座標を記録して取り上げた遺物は239点にのぼる。I～III層出土の人骨、石器、海産貝類のドットマップ図を図8-16に示す。また、図8-17～20に各層の出土遺物ドットマップ図を、表8-4～6に各層の出土遺物リストを示す。

出土遺物の主体を占めるのは甲殻類や貝類の遺骸で、それらを含む動物遺骸については分析・考察編Ⅲ、同Ⅳ、貝類については同Ⅱで詳細に報告されているので、以下では文化遺物、人為遺物を中心に、主だった出土品について記載する。なお石器、貝器類については、既発表の論文等でも詳しく取り上げられているので、ここでは概要をカタログ的に紹介するに留めた。

4-1 人骨 (図8-21、表8-7)

I層から2点(1、2)、II層(II-1C層)から2点(3、4)、VII層から2点(5、6)、計6点の断片的な人骨が出土した。付近に墓が営まれていた可能性が考えられるが、調査区内では遺構としては確認できていない。成人骨の他に乳歯が含まれていることは注目される。

4-2 石器 (図8-22～24、表8-8)

I層から非現地性の石英を利用した小型の剥片類が3点(1～3)出土したほか、FS層～I層から石英、チャートのチップ、碎片類が出土した(4～9)(山崎ほか2012a、b)。これらの具体的用途は不明であるが、チップや碎片類の出土から、この場所で打製石器を利用した何らかの活動が行われていたと考えられる。また、II層からは非現地性の細粒砂岩礫が出土しており(10)、貝器や釣針の製作に関わるリタッチャーや砥石として利用された可能性が考えられる(Fujita et al. 2016)。このほか、表土中から緑色岩片等若干の石材が出土している。

石英は主に沖縄島北部に分布しており、サキタリ洞遺跡から30km以上離れた場所から持ち込まれたものと考えられる。細粒砂岩は、サキタリ洞遺跡の直近には分布していないが、沖縄島南部～中部に広く見られ、サキタリ洞遺跡から数km程度の場所でも入手可能である。

4-3 貝器

調査区 IのI～III層からは、100点ほどの海産貝類が出土しており(沖縄県立博物館・美術館

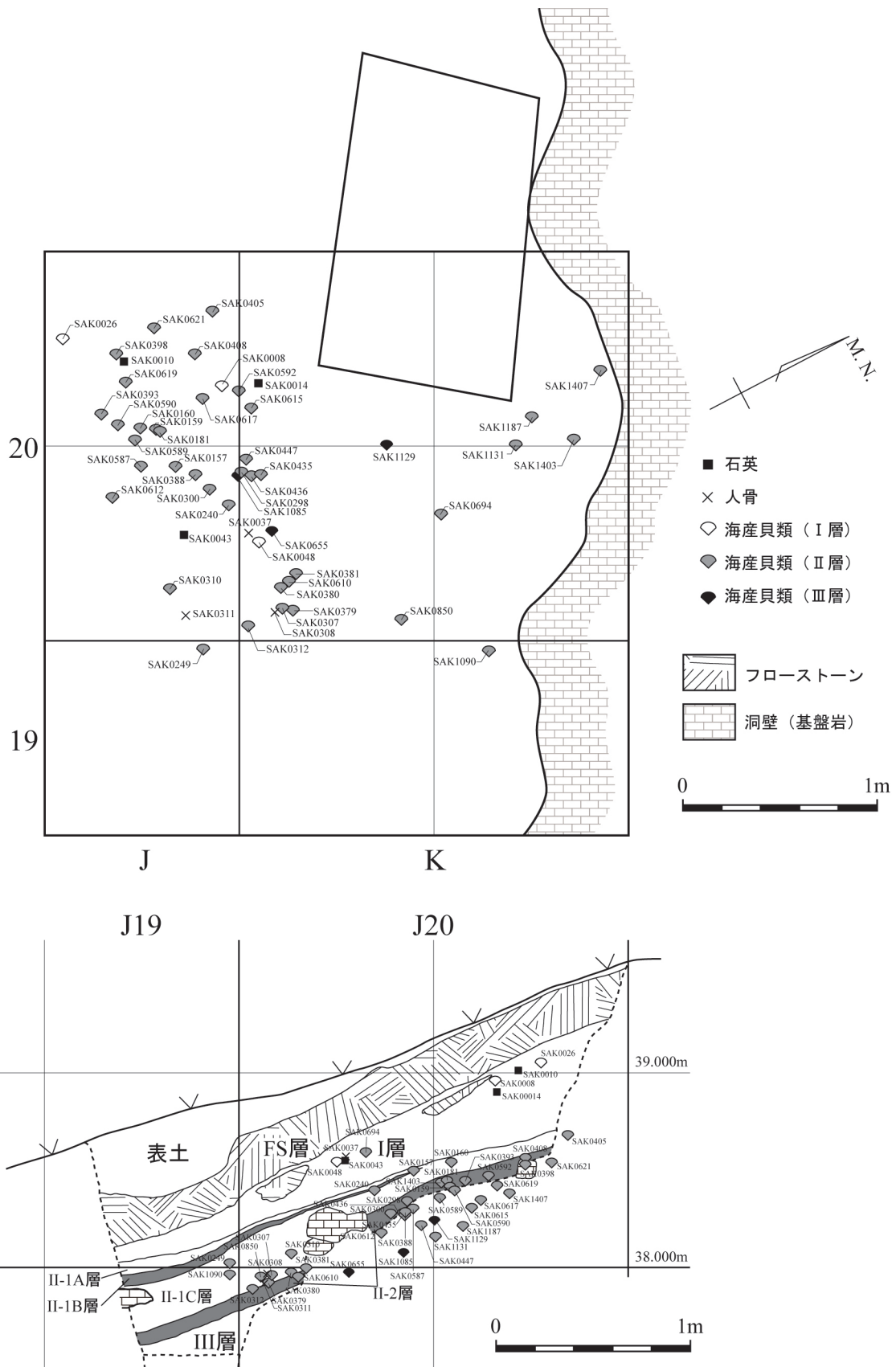


図8-16 調査区I・I～III層出土の人骨・石器・海産貝類ドットマップ図

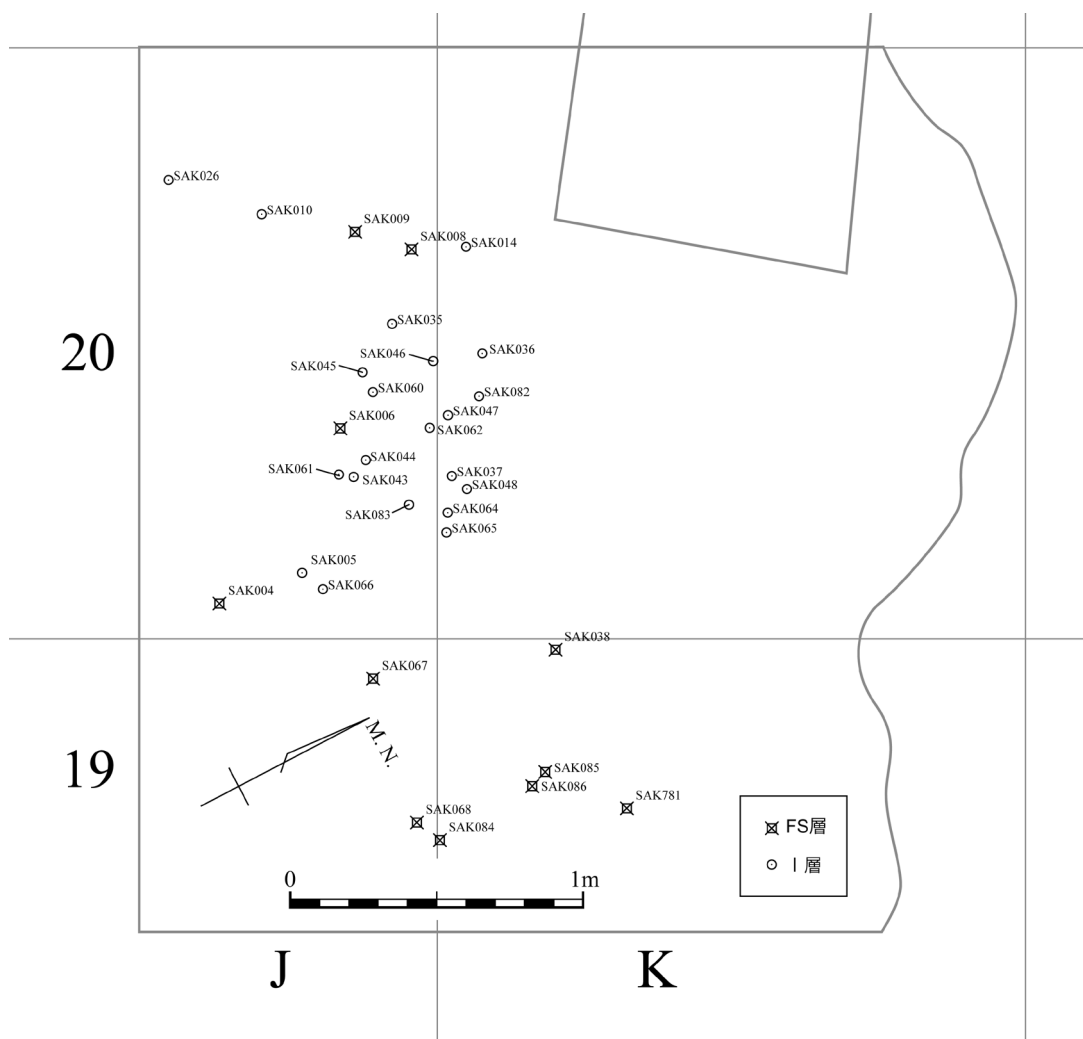


図8-17 調査区 I・FS層・I層出土遺物ドットマップ図 (平面図)

表8-4 調査区 I・FS層・I層出土遺物リスト

点名	X	Y	Z	層	種別
SAK004	38.119	-0.737	38.561	動物骨	FS下部
SAK005	38.223	-0.457	38.561	動物骨 (イノシシ)	I層
SAK006	38.712	-0.328	38.955	海産貝類	FS上部
SAK008	39.318	-0.087	38.955	海産貝類	FS下面
SAK009	39.377	-0.278	38.98	炭化物	FS下面
SAK010	39.436	-0.593	39.011	石英	I層
SAK014	39.326	0.098	38.899	石英	I層
SAK026	39.552	-0.908	39.049	海産貝類	I層
SAK035	39.065	-0.152	38.597	動物骨	I層
SAK036	38.965	0.153	38.644	動物骨	I層
SAK037	38.55	0.05	38.569	人骨(乳犬歯)	I層
SAK038	37.963	0.4	38.312	動物骨	FS直下
SAK043	38.547	-0.282	38.547	石英	I層
SAK044	38.604	-0.241	38.557	動物骨	I層
SAK045	38.901	-0.252	38.56	炭化物	I層
SAK046	38.939	-0.013	38.608	炭化物	I層
SAK047	38.756	0.037	38.568	炭化物	I層
SAK048	38.506	0.101	38.539	海産貝類	I層
SAK060	38.834	-0.217	38.526	炭化物	I層
SAK061	38.555	-0.332	38.533	動物骨	I層
SAK062	38.713	-0.025	38.515	動物骨	I層
SAK064	38.426	0.036	38.511	甲殻類	I層
SAK065	38.359	0.032	38.522	炭化物・ 骨片	I層
SAK066	38.167	-0.386	38.14	動物骨	I層
SAK067	37.865	-0.217	38.271	海産貝類	FS層またはI層
SAK068	37.378	-0.069	38.096	土器	FS (I層)
SAK082	38.82	0.142	38.555	炭化物	I層
SAK083	38.453	-0.095	38.456	炭化物	I層
SAK084	37.318	0.009	38.119	炭化物	FS層またはI層
SAK085	37.549	0.365	38.168	土器	FS層またはI層
SAK086	37.501	0.321	38.154	海産貝類	FS層またはI層
SAK781	37.426	0.641	38.292	石英	FS層またはI層

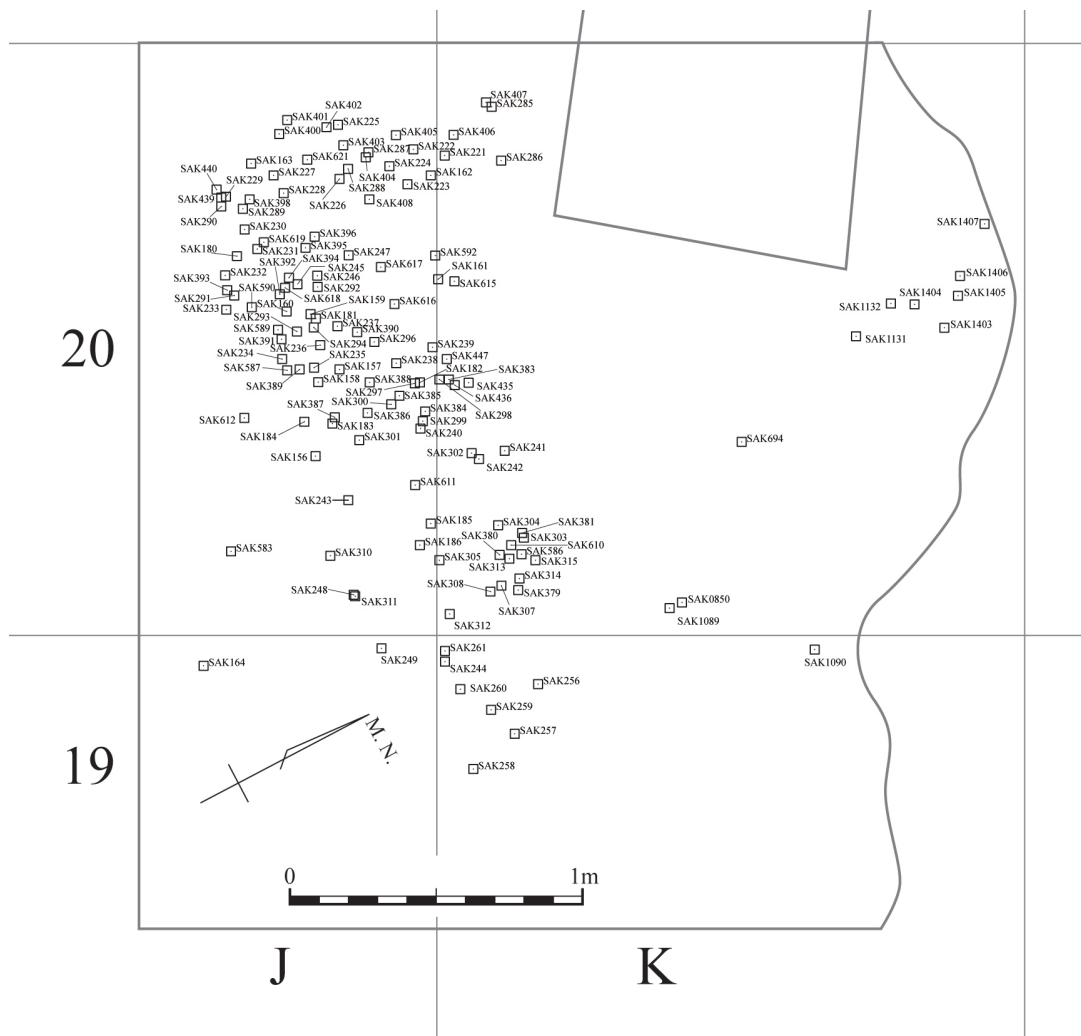


図8-18 調査区 I・II層出土遺物ドットマップ図 (平面図)

表8-5 調査区 I・II層出土遺物リスト

点名	X	Y	Z	層	種別
SAK156	38.605	-0.41	38.364	II-1層	動物骨 (イノシシ)
SAK157	38.898	-0.329	38.492	II-1層	海産貝類
SAK158	38.855	-0.401	38.482	II-1層	炭化物
SAK159	39.085	-0.427	38.41	II-1層	海産貝類
SAK160	39.094	-0.508	38.536	II-1層	海産貝類
SAK161	39.203	0.005	38.58	II-1層	炭化物
SAK162	39.554	-0.02	38.781	II-1層	炭化物
SAK163	39.594	-0.628	38.72	II-1層	甲殻類
SAK164	37.896	-0.789	38.088	II-1層?	土器
SAK180	39.281	-0.676	38.62	II-1層	炭化物
SAK181	39.07	-0.409	38.442	II-1層	海産貝類
SAK182	38.854	-0.057	38.496	II-1層	炭化物
SAK183	38.715	-0.353	38.406	II-1層	炭化物
SAK184	38.721	-0.448	38.435	II-1層	甲殻類
SAK185	38.377	-0.02	38.277	II-1B層	炭化物
SAK186	38.304	-0.057	38.25	II-1B層	炭化物
SAK221	39.621	0.027	38.714	II-2層上面	炭化物
SAK222	39.642	-0.079	38.686	II-2層上面	甲殻類
SAK223	39.524	-0.099	38.643	II-2層上面	炭化物
SAK224	39.585	-0.16	38.67	II-2層上面	炭化物
SAK225	39.725	-0.334	38.663	II-2層上面	炭化物
SAK226	39.542	-0.329	38.583	II-2層上面	炭化物
SAK227	39.554	-0.552	38.586	II-2層上面	炭化物
SAK228	39.494	-0.518	38.564	II-2層上面	炭化物
SAK229	39.482	-0.713	38.559	II-2層上面	炭化物
SAK230	39.371	-0.65	38.499	II-2層上面	甲殻類
SAK231	39.305	-0.607	38.479	II-2層上面	甲殻類
SAK232	39.216	-0.716	38.452	II-2層上面	陸産貝類
SAK233	39.1	-0.712	38.418	II-2層上面	甲殻類 石片
SAK234	38.933	-0.523	38.391	II-2層上面	甲殻類
SAK235	38.904	-0.415	38.367	II-2層上面	淡水貝類
SAK236	38.98	-0.394	38.384	II-2層上面	陸産貝類
SAK237	39.044	-0.336	38.389	II-2層上面	淡水貝類
SAK238	38.919	-0.137	38.424	II-2層上面	甲殻類
SAK239	38.973	-0.014	38.482	II-2層上面	甲殻類
SAK240	38.698	-0.055	38.392	II-2層上面	海産貝類
SAK241	38.623	0.23	38.422	II-2層上面	甲殻類
SAK242	38.595	0.143	38.384	II-2層上面	甲殻類 陸産貝類
SAK243	38.456	-0.299	38.186	II-2層上面	甲殻類
SAK244	37.91	0.028	38.05	II-2層上面	貝類
SAK245	39.186	-0.471	38.439	II-2層上面	甲殻類

表8-5 調査区 I・II層出土遺物リスト (続き)

点名	X	Y	Z	層	種別
SAK246	39.215	-0.404	38.443	II-2層上面	陸産貝類
SAK247	39.284	-0.298	38.476	II-2層上面	甲殻類
SAK248	38.136	-0.281	38.063	II-1A層	甲殻類
SAK249	37.955	-0.187	38.017	II-1A層	海産貝類
SAK256	37.834	0.343	37.76	II-2層	貝類
SAK257	37.666	0.264	37.665	II-2層	甲殻類
SAK258	37.547	0.124	37.624	II-2層	陸産貝類
SAK259	37.747	0.184	37.708	II-2層	炭化物
SAK260	37.817	0.08	37.721	II-2層	甲殻類
SAK261	37.946	0.028	37.766	II-2層	甲殻類
SAK285	39.786	0.186	38.739	II-2層上面	甲殻類
SAK286	39.604	0.218	38.738	II-2層上面	甲殻類
SAK287	39.632	-0.231	38.645	II-2層上面	甲殻類
SAK288	39.576	-0.3	38.6	II-2層上面	甲殻類
SAK289	39.441	-0.656	38.513	II-2層上面	炭化物
SAK290	39.449	-0.729	38.51	II-2層上面	甲殻類
SAK291	39.148	-0.685	38.419	II-2層上面	淡水貝類
SAK292	39.177	-0.403	38.423	II-2層上面	甲殻類
SAK293	39.026	-0.473	38.38	II-2層上面	甲殻類
SAK294	39.04	-0.416	38.382	II-2層上面	炭化物
SAK296	38.991	-0.211	38.386	II-2層上面	炭化物
SAK297	38.851	-0.074	38.312	II-2層上面	動物骨
SAK298	38.864	0.009	38.34	II-2層上面	海産貝類
SAK299	38.723	-0.047	38.253	II-2層上面	陸産貝類
SAK300	38.78	-0.154	38.275	II-2層上面	海産貝類
SAK301	38.659	-0.262	38.222	II-2層上面	炭化物
SAK302	38.615	0.118	38.164	II-2層上面	炭化物
SAK303	38.329	0.295	38.107	II-1C層	石灰岩
SAK304	38.371	0.208	38.022	II-1C層	炭化物
SAK305	38.253	0.009	37.998	II-1C層	炭化物
SAK307	38.167	0.219	37.957	II-1C層	海産貝類
SAK308	38.147	0.182	37.966	II-1C層	人骨(臼歯)
SAK310	38.268	-0.36	38.071	II-1C層	海産貝類
SAK311	38.131	-0.276	37.915	II-1C層	人骨(足根骨)
SAK312	38.071	0.044	37.886	II-1C層	海産貝類
SAK313	38.258	0.246	37.982	II-1C層	石
SAK314	38.191	0.28	37.953	II-1C層	石灰岩?
SAK315	38.253	0.334	37.99	II-1C層	石灰岩
SAK379	38.152	0.276	37.917	II-2層	海産貝類
SAK380	38.271	0.213	37.969	II-2層	海産貝類
SAK381	38.345	0.289	37.992	II-2層	海産貝類
SAK383	38.864	0.041	38.317	II-2層	動物骨
SAK384	38.756	-0.039	38.262	II-2層	炭化物
SAK385	38.809	-0.126	38.294	II-2層	小動物骨
SAK386	38.751	-0.234	38.263	II-2層	炭化物
SAK387	38.736	-0.345	38.256	II-2層	陸産貝類
SAK388	38.854	-0.227	38.283	II-2層	海産貝類
SAK389	38.898	-0.464	38.33	II-2層	炭化物
SAK390	39.024	-0.269	38.394	II-2層	甲殻類
SAK391	39	-0.525	38.37	II-2層	炭化物
SAK392	39.152	-0.531	38.399	II-2層	炭化物
SAK393	39.166	-0.709	38.442	II-2層	海産貝類
SAK394	39.208	-0.5	38.437	II-2層	炭化物
SAK395	39.309	-0.444	38.461	II-2層	炭化物
SAK396	39.347	-0.413	38.487	II-2層	炭化物
SAK398	39.473	-0.633	38.522	II-2層	海産貝類
SAK400	39.694	-0.533	38.621	II-2層	炭化物
SAK401	39.741	-0.506	38.652	II-2層	動物骨
SAK402	39.717	-0.373	38.65	II-2層	石
SAK403	39.656	-0.316	38.629	II-2層	炭化物
SAK404	39.615	-0.24	38.614	II-2層	炭化物
SAK405	39.69	-0.138	38.674	II-2層	海産貝類
SAK406	39.691	0.057	38.707	II-2層	炭化物
SAK407	39.801	0.167	38.757	II-2層	炭化物
SAK408	39.473	-0.228	38.56	II-2層	海産貝類
SAK435	38.853	0.108	38.268	SX09	海産貝類
SAK436	38.845	0.061	38.276	SX09	海産貝類
SAK439	39.479	-0.729	38.469	SX07	魚骨
SAK440	39.506	-0.745	38.477	SX07	炭化物
SAK447	38.933	0.034	38.219	SX09	海産貝類
SAK583	38.283	-0.696	37.919	II-2層	魚骨
SAK586	38.273	0.287	37.95	II-2層	石灰岩
SAK587	38.895	-0.506	38.299	II-2層	海産貝類
SAK589	39.032	-0.537	38.357	II-2層	海産貝類
SAK590	39.108	-0.626	38.393	II-2層	海産貝類
SAK592	39.283	-0.005	38.471	II-2層	海産貝類
SAK610	38.304	0.252	37.947	II-2層	海産貝類
SAK611	38.507	-0.073	38.042	II-2層	魚骨
SAK612	38.734	-0.651	38.172	II-2層	海産貝類
SAK615	39.196	0.06	38.307	II-2層	海産貝類
SAK616	39.119	-0.143	38.391	II-2層	炭化物
SAK617	39.244	-0.189	38.346	II-2層	海産貝類
SAK618	39.174	-0.513	38.35	II-2層	動物骨
SAK619	39.328	-0.585	38.417	II-2層	海産貝類
SAK621	39.607	-0.438	38.536	II-2層	海産貝類
SAK694	38.653	1.032	38.591	II-2層	海産貝類
SAK0850	38.11	0.83	37.951	II-2層	海産貝類
SAK1089	38.091	0.788	37.768	壁際II-2層	動物骨
SAK1090	37.951	1.279	37.962	壁際II-2層	海産貝類
SAK1131	39.01	1.419	38.156	落ち込みII層	海産貝類
SAK1132	39.121	1.537	38.27	落ち込みII層	木材?
SAK1403	39.039	1.718	38.435	II層	海産貝類
SAK1404	39.118	1.617	38.327	II層	淡水貝類
SAK1405	39.147	1.764	38.373	II層	甲殻類
SAK1406	39.214	1.771	38.417	II層	海産貝類
SAK1407	39.39	1.854	38.38	II層	海産貝類

2017)、その一部は人為的に加工・使用された貝器と考えられる(山崎ほか 2014・2015、Fujita et al. 2016)。特に多く見られるのはマルスダレガイ科の二枚貝を打ち割ったもので、破片の一端に二次加工によって凹状の刃部が設けられた扇形貝器も見られる。一部のものには使用痕も観察できたほか(図8-27)、二次加工の際のチップと考えられる貝片(図8-30)も回収されている。この種の貝器の素材となった貝は、主としてマツヤマワスレと考えられ(分析・考察編Ⅱ参照)、放射性炭素年代測定の結果、23,370 ¹⁴C BP (PLD-19424)、34,000 ¹⁴C BP (TKA-18561)、23,210 ¹⁴C BP (TKA-18563)の年代が得られている(分析・考察編Ⅷ参照)。この年代は、貝器の出土層準(I・II層)の年代よりも大幅に古く、化石資料が持ち込まれた可能性が考えられる。

このほか、クジャクガイ製の貝器、ニシキウズ科の巻貝(ギンタカハマ)製釣針および関連資料(未成品・原材)、マツムシやシマワスレ、ツノガイ類を利用したビーズがある。中でもII-2層(約2万3000年前)から出土した釣針は、東ティモールのジェリマライ岩陰出土品(O'Connor et al. 2011)と並んで世界最古の釣針となるものである。また、釣針未成品や原材の出土は、この場所で釣針の製作が行われていたことを示唆している。

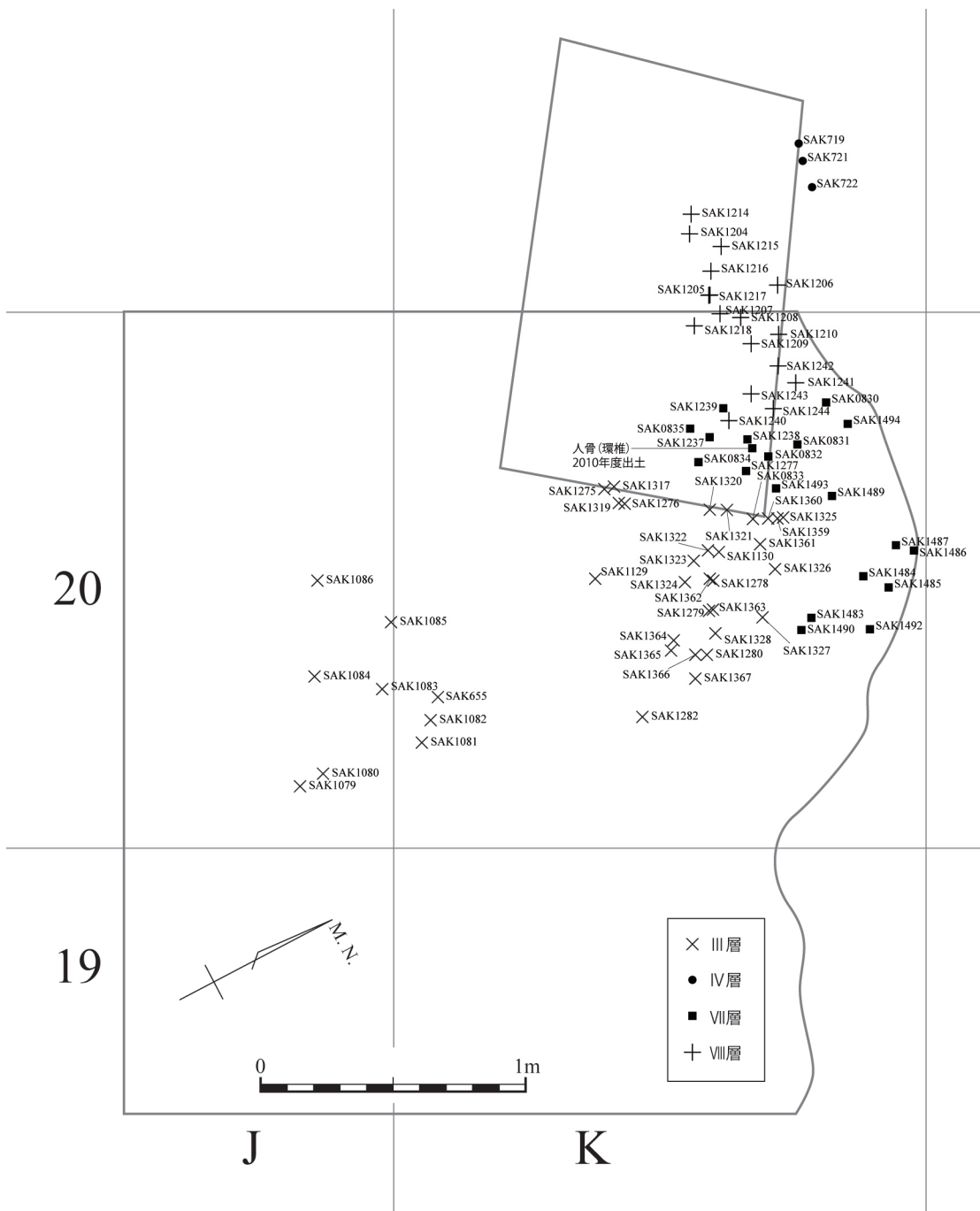


図 8 - 19 調査区 I ・ III ~ VIII 層出土遺物ドットマップ図 (平面図)
III 層と VI 層の出土遺物は、一括して III 層として図示した。

表8-6 調査区 I・Ⅲ～Ⅷ層出土遺物リスト

点名	X	Y	Z	層	種別
SAK655	38.563	0.166	37.972	Ⅲ層上面	海産貝類
SAK719	40.63	1.514	38.786	SX15	炭化物
SAK721	40.565	1.529	38.772	SX15	炭化物
SAK722	40.467	1.564	38.775	SX15	炭化物
SAK0830	39.664	1.616	37.493	VII	淡水貝類
SAK0831	39.507	1.509	37.236	VII	淡水貝類・骨
SAK0832	39.462	1.4	37.19	VII	骨
SAK0833	39.408	1.317	37.307	VII	陸産貝類・甲殻類
SAK0834	39.441	1.139	37.229	VII	陸産貝類
SAK0835	39.566	1.108	37.194	VII	陸産貝類
SAK1079	38.23	-0.349	37.766	Ⅲ層-0-10cm	炭化物
SAK1080	38.277	-0.263	37.775	Ⅲ層-0-10cm	炭化物
SAK1081	38.393	0.106	37.789	Ⅲ層-0-10cm	甲殻類
SAK1082	38.477	0.139	37.822	Ⅲ層-0-10cm	炭化物
SAK1083	38.593	-0.042	37.976	Ⅲ層-0-10cm	動物骨
SAK1084	38.64	-0.295	37.949	Ⅲ層-0-10cm	甲殻類
SAK1085	38.843	-0.009	38.075	Ⅲ層-0-10cm	海産貝類
SAK1086	38.998	-0.284	38.122	Ⅲ層-0-10cm	海産貝類
SAK1129	39.005	0.754	38.242	Ⅲ層-0-10cm	貝類
SAK1130	39.105	1.216	38.167	Ⅲ層-0-10cm	動物骨 (イノシシ)
SAK1204	40.292	1.106	37.04	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1205	40.064	1.182	37.081	VIII層	炭化物
SAK1206	40.101	1.435	37.116	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1207	39.994	1.22	36.989	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1208	39.98	1.297	36.991	VIII層	骨片
SAK1209	39.882	1.336	37.043	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1210	39.917	1.439	37.027	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1214	40.366	1.112	37.051	VIII層	炭化物
SAK1215	40.245	1.224	37.014	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1216	40.153	1.186	36.977	VIII層	陸産貝類
SAK1217	40.063	1.178	36.913	VIII層	炭化物
SAK1218	39.949	1.124	36.914	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1237	39.534	1.181	37.071	VII層下面	陸産貝類
SAK1238	39.526	1.322	37.107	VII層下面	炭化物
SAK1239	39.642	1.232	37.097	VII層下面	炭化物
SAK1240	39.595	1.253	37.011	VIII層	陸産貝類

点名	X	Y	Z	層	種別
SAK1241	39.736	1.503	37.08	VIII層	炭化物
SAK1242	39.799	1.437	36.975	VIII層	炭化物
SAK1243	39.695	1.336	36.937	VIII層	陸産貝類
SAK1244	39.64	1.419	36.943	VIII層	動物骨 (シカ類)
SAK1275	39.34	0.788	38.103	Ⅲ層10-30cm	炭化物
SAK1276	39.285	0.864	38.065	Ⅲ層10-30cm	炭化物
SAK1277	39.228	1.343	37.985	Ⅲ層10-30cm	土塊
SAK1278	38.998	1.195	37.892	Ⅲ層10-30cm	炭化物
SAK1279	38.885	1.179	37.824	Ⅲ層10-30cm	木材?
SAK1280	38.721	1.171	37.639	Ⅲ層10-30cm	炭化物
SAK1282	38.489	0.93	37.678	Ⅲ層10-30cm	陸産貝類
SAK1317	39.349	0.824	37.855	Ⅲ層40-50cm	貝類
SAK1319	39.288	0.842	37.74	Ⅲ層40-50cm	陸産貝類
SAK1320	39.263	1.182	37.749	Ⅲ層40-50cm	陸産貝類
SAK1321	39.262	1.246	37.744	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1322	39.111	1.175	37.7	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1323	39.072	1.122	37.729	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1324	38.992	1.089	37.7	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1325	39.234	1.456	37.732	Ⅲ層40-50cm	甲殻類 炭化物
SAK1326	39.041	1.426	37.715	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1327	38.861	1.379	37.684	Ⅲ層40-50cm	甲殻類
SAK1328	38.801	1.203	37.623	Ⅲ層40-50cm	炭化物
SAK1359	39.23	1.435	37.603	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1360	39.23	1.4	37.658	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1361	39.134	1.37	37.446	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1362	39.005	1.182	37.541	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1363	38.89	1.194	37.447	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1364	38.775	1.047	37.499	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1365	38.737	1.037	37.49	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1366	38.721	1.128	37.452	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1367	38.632	1.128	37.495	Ⅲ層40-70cm	炭化物
SAK1483	38.86	1.561	37.361	VIIA層	土壌サンプル
SAK1484	39.015	1.755	37.38	VIIA層	炭化物
SAK1485	38.973	1.85	37.372	VIIA層	土壌サンプル
SAK1486	39.111	1.944	37.466	VIIA層	動物骨?
SAK1487	39.131	1.877	37.477	VIIA層	土壌サンプル
SAK1489	39.315	1.638	37.464	VIIA層	土壌サンプル
SAK1490	38.814	1.524	37.372	VIIA層	土壌サンプル
SAK1492	38.817	1.78	37.336	VIIA層	土壌サンプル
SAK1493	39.343	1.429	37.334	VIIA層	炭化物
SAK1494	39.584	1.697	37.473	VIIA層	動物骨

※Ⅲ層とⅥ層の出土遺物は、一括してⅢ層とした。

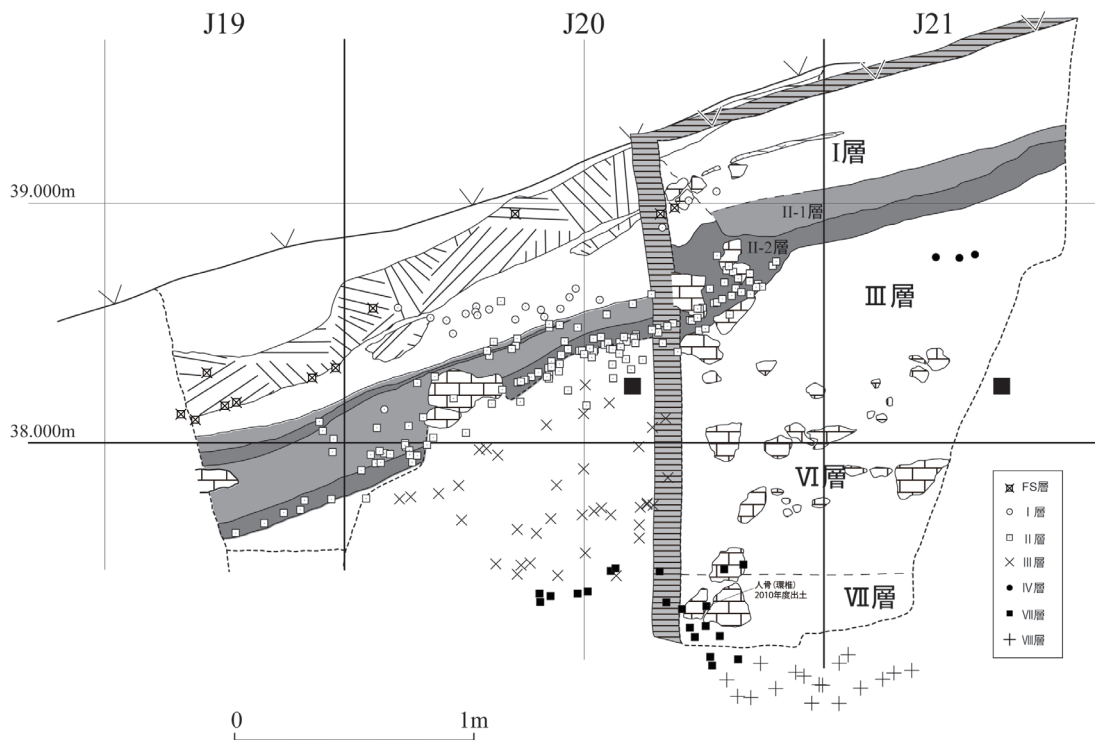


図8-20 調査区 I・出土遺物ドットマップ図 (立面図)

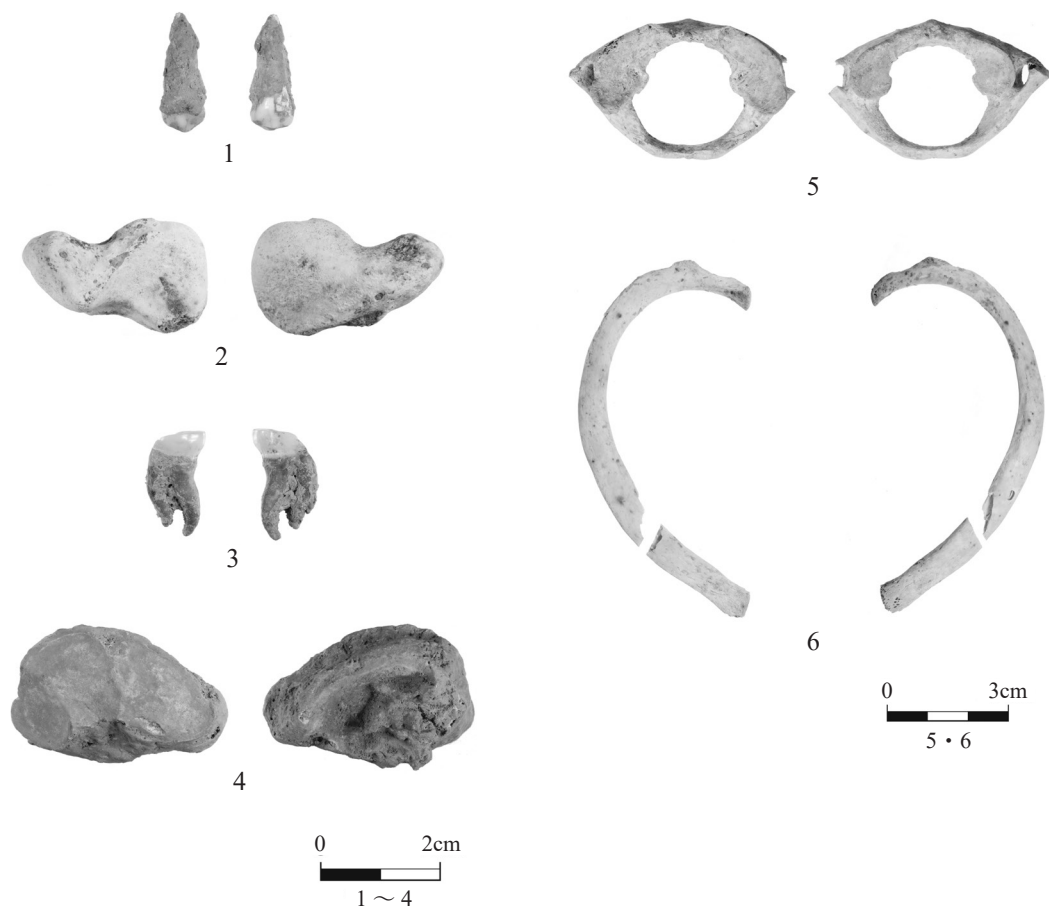


図8-21 調査区 I 出土人骨写真

表8-7 調査区 I 出土人骨リスト

番号	遺物名	調査区	層	日付	分類	部位
1	SAK037	I	I	20110801	人骨	右上顎乳犬歯
2		I (JK19)	I	20110731	人骨	右手根骨
3	SAK308	I	II-1C	20120822	人骨	右下顎第3大臼歯
4	SAK311	I	II-1C	20120824	人骨	右足根骨
5		I (試掘区)	VII	20100525	人骨	環椎
6		I (試掘区)	VII	20100526	人骨	肋骨

※番号は図8-21に対応。



図8-22 調査区I出土石器（石英）写真

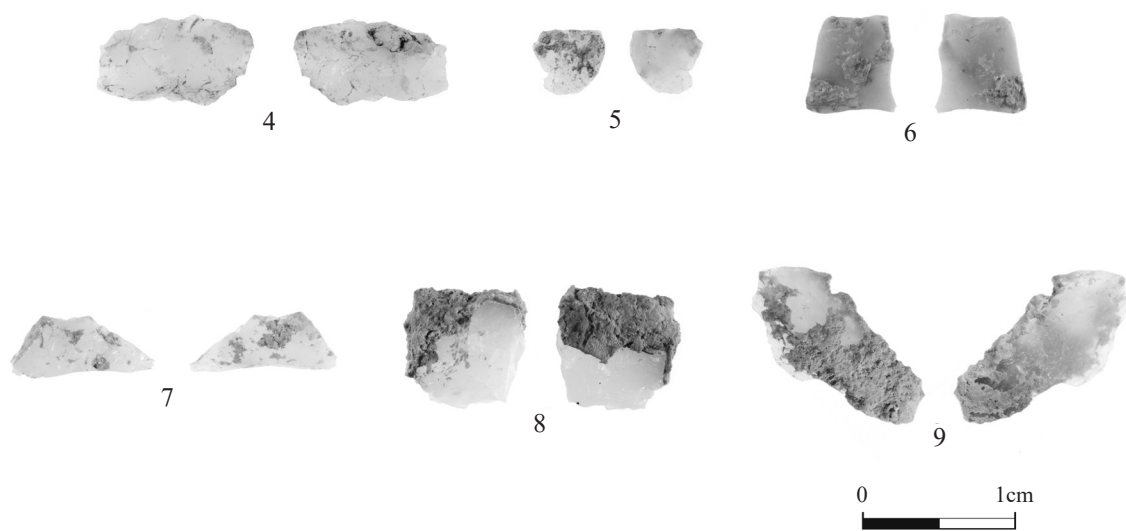


図8-23 調査区I出土石器（石英・チャート）写真

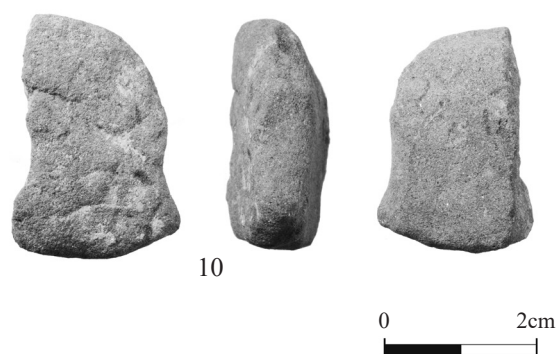


図8-24 調査区I出土石器（細粒砂岩）写真

表8-8 調査区 I 出土石器リスト

番号	遺物名	調査区	層	日付	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	分類	石材	器種
1	SAK010	I	I	20110730	22.7	14.8	22.7	3.5	石器	石英	剥片
2	SAK043	I	I	20110801	28.0	28.0	18.5	10.0	石器	石英	剥片
3	SAK014	I	I	20110730	14.0	14.0	11.5	6.0	石器	石英	楔形石器
4	No. 172-2HF	I (JK20)	I	2011	10.0	5.6	2.8	0.2	石器	石英	碎片
5	No. 172-2HF	I (JK20)	I	2011	4.7	4.4	1.0	0.2	石器	石英	チップ
6	No. 406HF	I (JK19)	I	2011	6.9	5.8	1.5	0.1	石器	チャート	チップ
7	No. 428HF	I	I	2011	9.7	4.0	2.2	0.1	石器	石英	チップ
8	SAK781	I	FS~I	20130318	8.1	8.1	4.0	0.3	石器	石英	碎片
9	No. 180HF	I (JK19)	FS		14.3	6.2	1.5	0.1	石器	石英	チップ
10	No. 84HF	I (JK19)	II-2	2012	30.5	20.8	14.1	9.8	石器	砂岩	砥石?

※番号は図8-22～24に対応。

マルスダレガイ科貝器 (図8-25～30、表8-9)

調査区の層序出土品のほか、排土出土品、採集品を含めて主要なものを図示した。II層から多く出土しておりI層、III層からも出土した。多くはマツヤマワスレと推定できるものであるが、オキシジミ類が1点見られる(4)。1～9は蝶番部利用品で、全て右殻である。腹縁側に二次加工によって凹状部を作り出すものが多い。10～19は扇形貝器。20～28は破断面の一部に加工が見られるもの。25のみ調査区III(XIID層)出土品。7、27は黒色化しており、火熱を被ったものと考えられる。

クジャクガイ貝器 (図8-31、表8-10)

特に目立った加工はないが、腹縁部に使用痕と考えられる摩滅や線条痕が認められる(山崎ほか2014)。いずれもII-2層出土。

釣針および関連資料 (図8-32、表8-11)

1は釣針成品。基部がわずかに欠損しているが、ほぼ完形である。側縁(周縁)に研磨が見られるが、表裏面には研磨痕は見られない。素材はニシキウズ科の巻貝(ギンタカハマ)である。2は側縁(周縁)から裏面にかけて研磨が施された未成品で、1よりもやや大型の釣針になるものと見られる。3は打ち割られた巻貝の底部円盤部分の破片で、原材と考えられる。

貝ビーズ (図8-33～36、表8-12)

図8-33はマツムシの背面に穿孔したビーズで、I層より2点出土している。図8-34はシマワスレに穿孔したもので、穿孔の際の破損品と考えられるものも含まれている。3～7はII層、8はI層出土。9は排土回収資料。図8-35は、特段の加工は認められないが、ビーズとして利

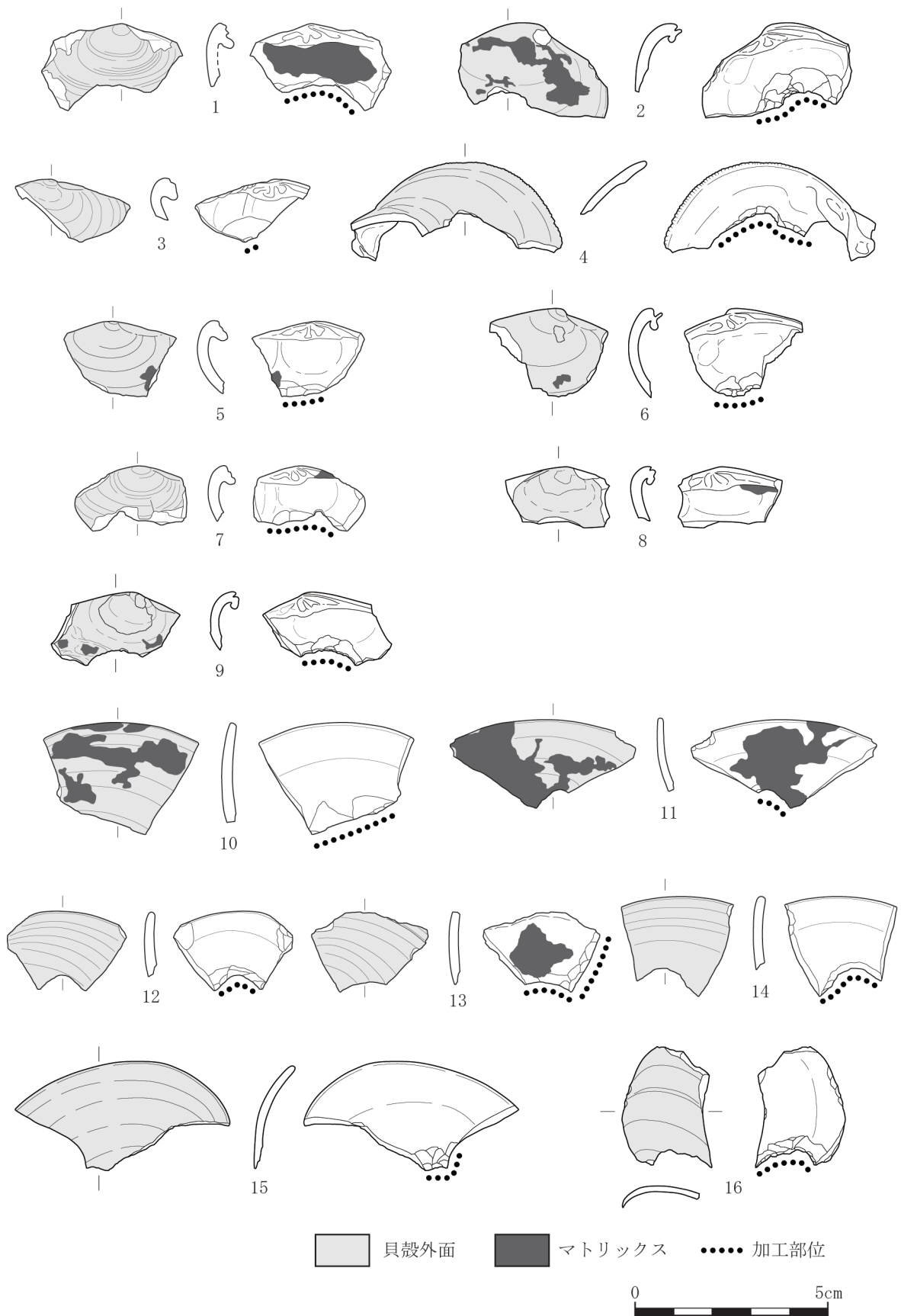


図8-25 調査区 I 出土貝器 (マルスダレガイ科) 実測図 (1)

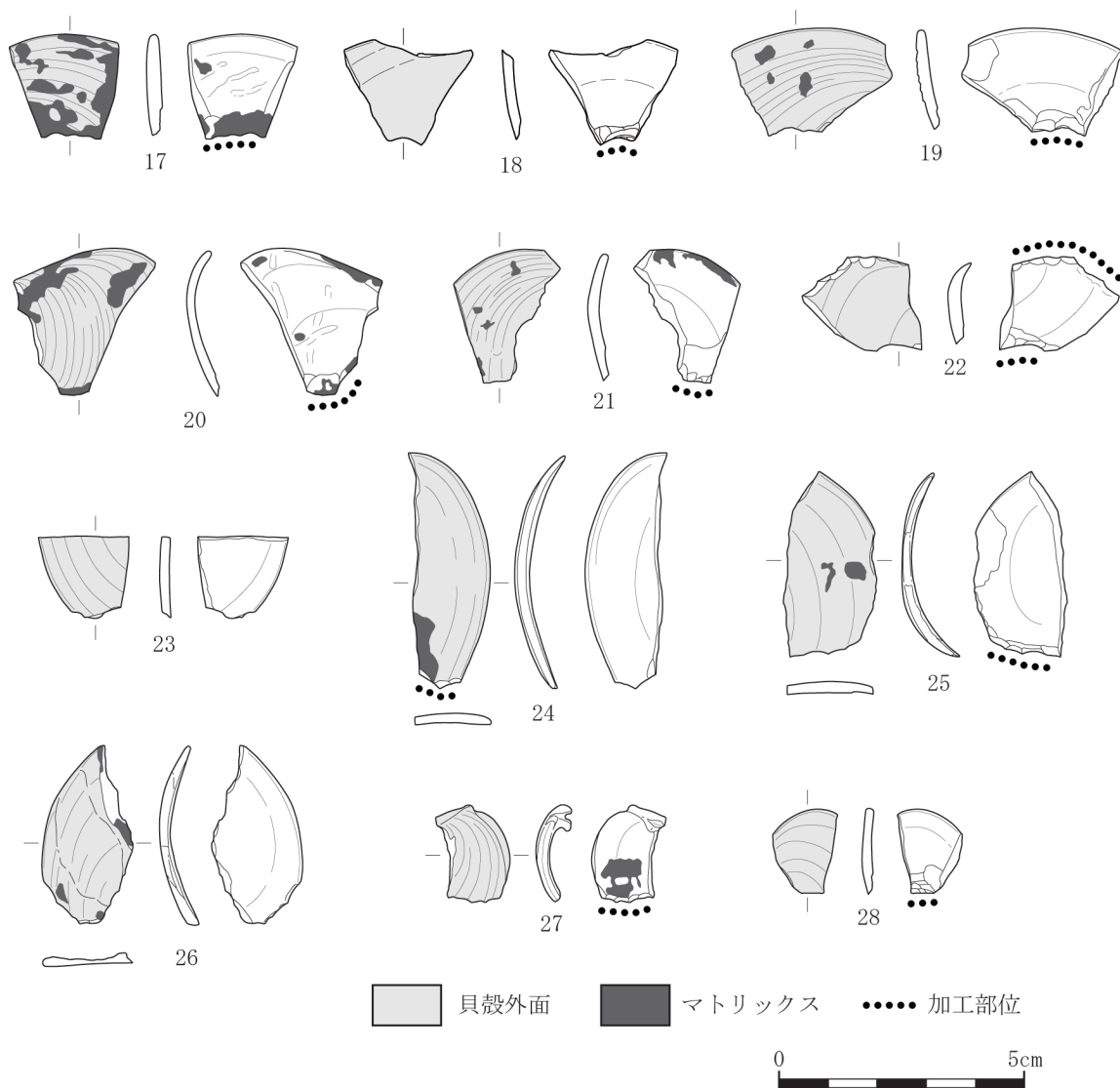


図8-26 調査区I出土貝器（マルスダレガイ科）実測図（2）

25のみ調査区III出土。

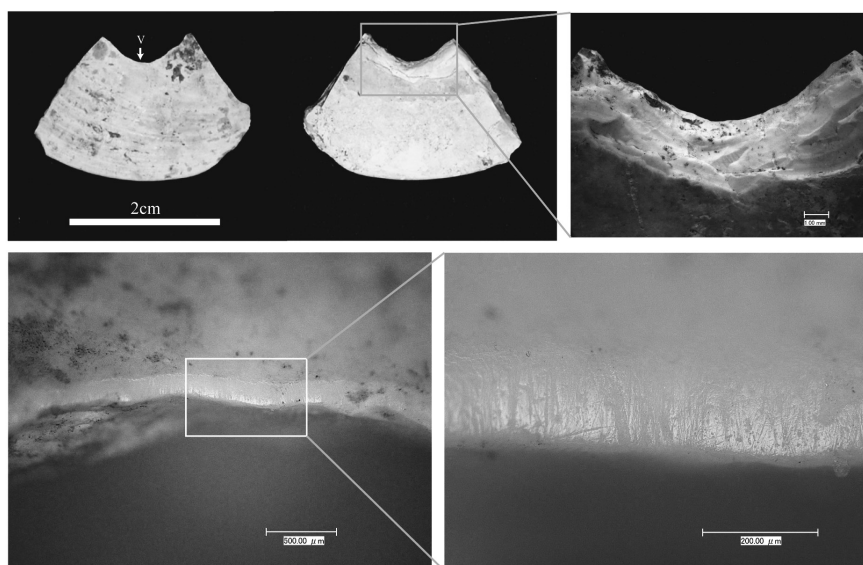


図8-27 調査区I出土貝器（マルスダレガイ科）（No.12）に見られる加工痕と使用痕

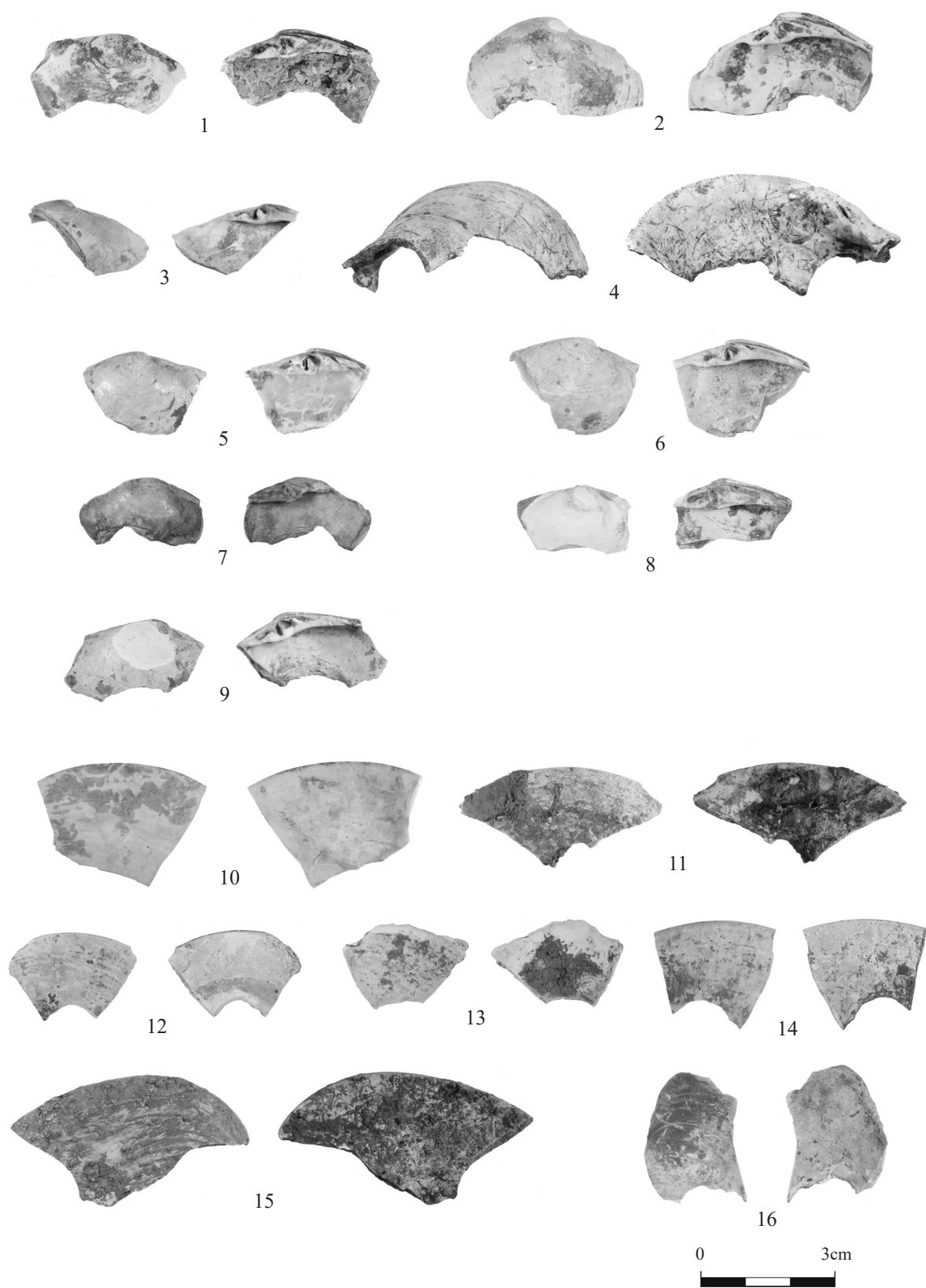


図8-28 調査区 I 出土貝器 (マルスダレガイ科) 写真 (1)

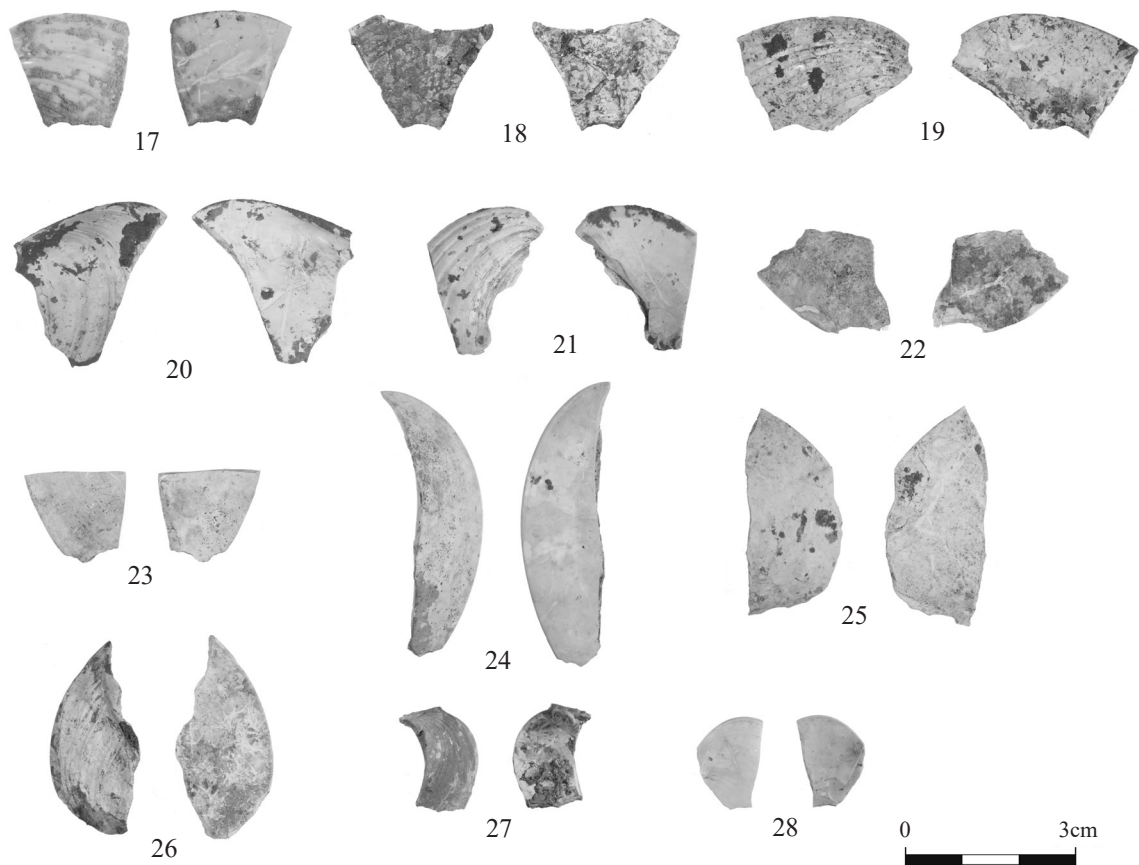


図8-29 調査区I出土貝器（マルスダレガイ科）写真（2）
25のみ調査区III出土。

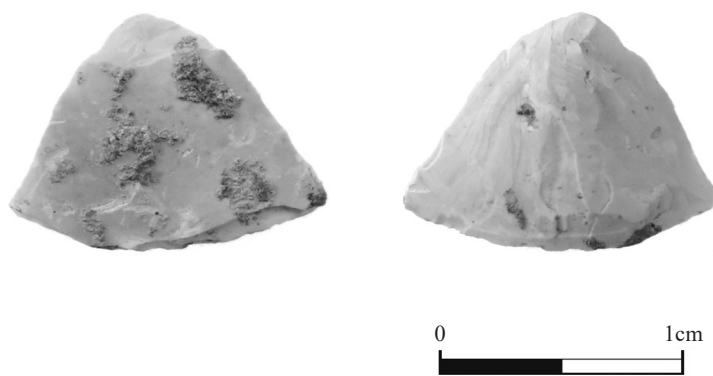


図8-30 調査区I出土貝器（マルスダレガイ科：チップ）写真（3）

表8-9 調査区 I 出土貝器 (マルスダレガイ科) リスト

番号	概報IV 番号	遺物名	出土区	層位	日付	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	分類	部位	貝種	備考
1	103	SAK048	I	I	20110801	19.5	34.7	7.8	4.2	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
2	502	ID349	I (試掘区 東ベルト)	II	20131010	40.0	22.3	9.2	4.6	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
3	325	SAK587	I	II-2	20120919	14.2	26.0	6.3	1.5	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
4	501	SAK1090	I (北半)	II-2	20131115	55.1	24.3	21.8	6.4	二枚貝	蝶番部	オキシジミ	
5	604	SAK655	I	III上面	20121009	17.9	27.7	7.3	2.8	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
6			I	排土		29.8	22.0	6.7	2.7	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
7			I (試掘区)	表土	20091122	15.2	28.0	7.2	2.1	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
8			I (試掘区)	排土	20130906	25.2	15.0	7.0	2.0	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	
9			I	排土		31.8	14.8	6.5	2.5	二枚貝	蝶番部	マルスダレガイ科	HF059
10	302	SAK398	I	II-2	20120904	27.3	38.3	3.3	3.3	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
11	318	SAK240	I	II-2 上面	20120803	22.5	46.4	3.0	2.6	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
12	301	SAK405	I	II-2	20120904	19.8	28.9	2.5	1.9	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
13	401		I	II	20100518	20.2	28.6	3.0	1.9	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
14	327	SAK379	I	II-2	20120904	24.8	27.6	2.0	1.9	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
15	503	SAK1131	I (北半)	II (III層中への 落ち込み)	20140919	54.0	28.6	4.0	4.9	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
16		SAK256	I	II-2層	20120814	28.5	22.0	4.5	1.9	二枚貝	後背縁	マルスダレガイ科	
17	310	SAK393	I	II-2	20120904	20.5	21.2	2.3	1.5	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
18	602	SAK1085	I	III (0-10cm)	20131115	25.5	19.4	2.0	1.1	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
19			西側洞口	表面採集品	2012	20.2	29.0	2.5	2.1	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
20	202	SAK160	I (JK20)	II-1	20110809	27.7	27.9	2.2	1.8	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
21	201	SAK159	I (JK20)	II-1	20110809	24.4	21.0	2.5	1.1	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
22	319	SAK408	I	II-2	20120904	18.0	21.2	2.3	1.1	二枚貝	破片	マルスダレガイ科	
23	313	SAK621	I	II-2	20121003	16.2	17.9	2.3	0.8	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
24	321	SAK612	I	II-2	20121003	47.2	14.2	2.3	2.7	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
25		SAK432	III	X II D	20120905	36.8	17.4	2.0	2.0	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
26	214	SAK157	I (JK20)	II-1	20110809	34.3	17.5	2.2	1.3	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	
27	207	SAK249	I	II-1 A	20120809	18.4	14.7	6.0	0.8	二枚貝	蝶番部残る	マルスダレガイ科	
28	309	SAK436	I (SX9)	II-2	20120911	16.6	11.1	1.5	0.5	二枚貝	腹縁	マルスダレガイ科	

※番号は図8-25～26に対応。

用されたと考えられるツノガイ類。10、13はニシキツノガイ、11、12、14、15はヤカドツノガイ類で、10～12はII層出土品、13～15は排土回収資料。図8-36はイモガイやマガキガイを利用した円盤状のビーズ。いずれも排土回収資料で、形態的には縄文時代後晩期に多く見られる円盤状ビーズに類似する。

4-4 動物遺骸

非常に多くの甲殻類や貝類(図8-37)を含む動物遺骸が出土している。それらについては分析・考察編II、III、IVで詳細に報告されているので、ここでは動物骨(イノシシ)のうち、主要な資料について取り上げる。

動物骨(イノシシ)(図8-38、表8-13)

主要なものを図8-38に図示し、リストを表8-13に示す。調査区Iではイノシシの出土量は全体的に少なく、特にII層以下では極めて稀かつ断片的である。この点は、調査区IIの縄文時代の様相とは対照的である。なお、FS層では加工痕のある動物骨も見られた。VI層以下では現在のところイノシシの出土は確認されていない。VIII層からはシカ類(部分骨)の保存の良い化石がまとめて検出されている。シカ類については十分な検討を行うことができていないため、別途報告の機会を得たい。

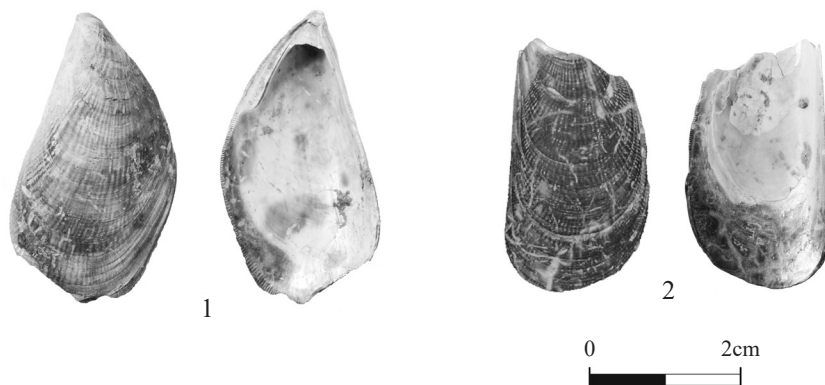


図8-31 調査区 I 出土貝器 (クジャクガイ) 写真

表8-10 調査区 I 出土貝器 (クジャクガイ) リスト

番号	概報IV 番号	遺物名	調査区	層	日付	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	分類	部位	貝種	備考
1	333	SAK589	I	II-2	20120919	40.5	21.9	7.9	2.0	二枚貝	殻頂あり	クジャクガイ	
2	331	SAK610	I	II-2	20121003	33.2	19.3	7.2	1.5	二枚貝	腹縁	クジャクガイ	

※番号は図8-31に対応。



図8-32 調査区 I 出土貝器 (釣針および関連資料) 写真

表8-11 調査区 I 出土貝器 (釣針および関連資料) リスト

番号	概報IV 番号	遺物名	調査区	層	日付	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	分類	部位	貝種	備考
1	335	SAK300	I	II-2 上面	20120822	12.5	14.0	2.0	0.2	巻貝		ニシキウズ科	釣針(成品)
2	402	No. 64-1・2HF	I(試掘区)	清掃 I ~ II-1 B 混合(壁面)		20.5	8.4	2.2	0.5	巻貝		ニシキウズ科	釣針(未成品)
3	510	SAK850	I(K19壁際)	II-2 再堆積	20130917	24.9	15.7	6.0	1.3	巻貝	底部	ニシキウズ科	原材

※番号は図8-32に対応。



図8-33 調査区I出土貝ビーズ（マツムシ）写真

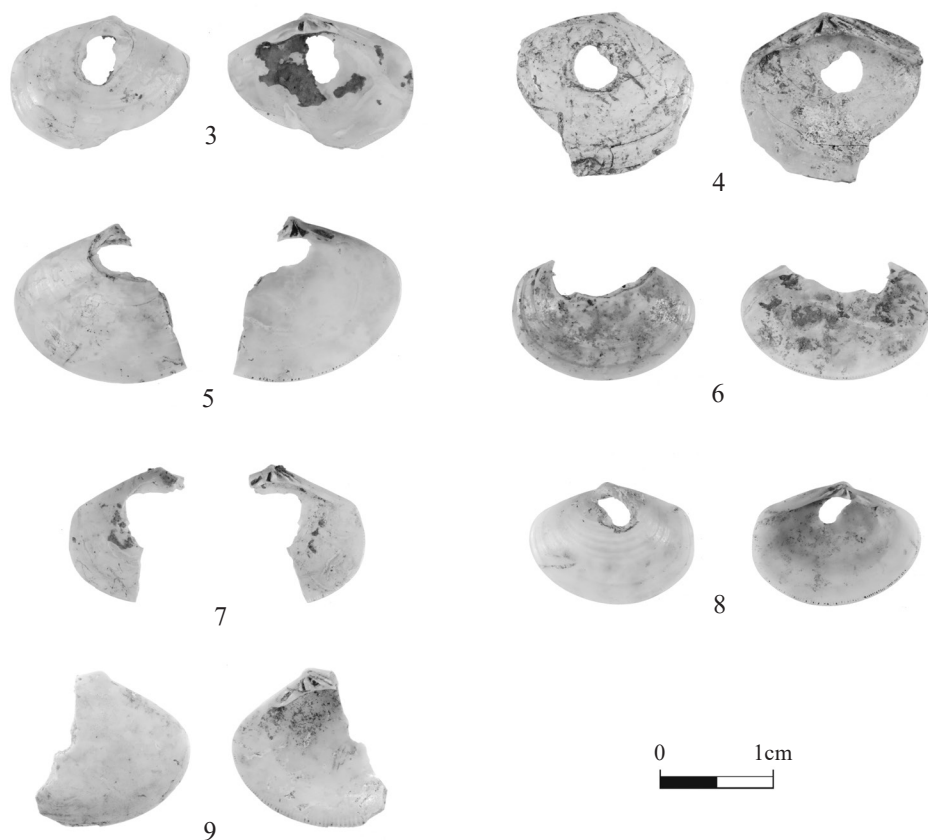


図8-34 調査区I出土貝ビーズ（シマワスレ）写真

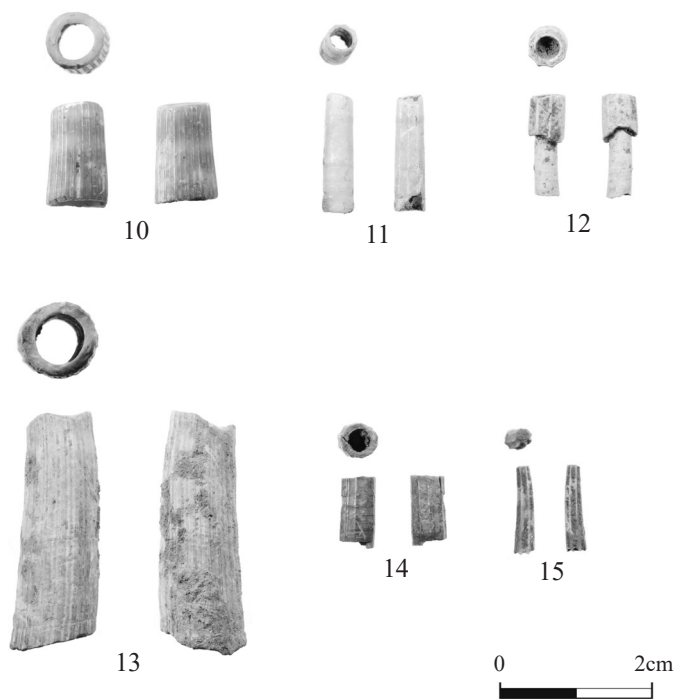


図8-35 調査区I 出土貝ビーズ（ツノガイ類）写真

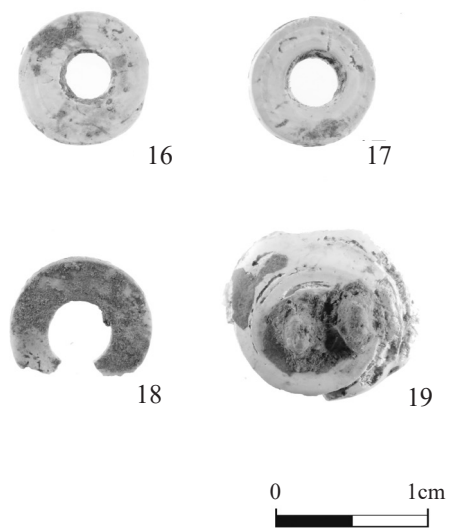


図8-36 調査区I 出土貝ビーズ（巻貝）写真

表8-12 調査区 I 出土貝器 (ビーズ) リスト

番号	概報IV 番号	遺物名	調査区	層	日付	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	分類	部位	貝種	備考
1	104	No. 430HF	I (JK20)	I		14.5	7.1		0.3	巻貝	殻頂あり	マツムシ	
2	112		I (JK20)	I	20110803	14.3	7.3		0.4	巻貝	殻頂あり	マツムシ	
3	508	ID366	I (北東角)	II-2 再堆積	20130904	16.3	11.5	2.4	0.2	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	右殻
4	506	SAK1403	I (北半)	II	20141121	15.9	15.0	3.4	0.4	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	右殻
5	403	ID62	I	岩石破砕時岩石下 II-1 ~ II-2	20121009	16.3	14.0	2.8	0.3	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	左殻
6	404	No. 148HF	I	南側サブトレ		16.4	10.5	2.9	0.2	二枚貝	蝶番部欠	シマワスレ	右殻
7	405	No. 93HF	I	破砕岩下 (吸込穴あり) II-1 B ~ II-2		11.1	12.0	2.5	0.1	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	右殻
8		No. 305HF	I (試掘区) 東ベルト	I	20131003	14.7	10.1	2.4	0.2	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	左殻
9			I	排土		11.7	13.7	3.1	0.3	二枚貝	蝶番部あり	シマワスレ	右殻
10	316	No. 54HF	I	II-2 上面		12.8	7.9		0.7	ツノガイ		ニシキツノガイ	
11	329		I	II-2	20120814	15.4	4.4		0.2	ツノガイ		ヤカドツノガイ類	
12	507	SAK1407	I (北半)	II	20141121	13.3	5.0		0.2	ツノガイ		ヤカドツノガイ類	
13			I	排土		29.8	10.7		2.7	ツノガイ		ニシキツノガイ	
14			I	排土		11.1	2.6		0.1	ツノガイ		ヤカドツノガイ類	
15			I	排土		9.0	4.4		0.2	ツノガイ		ヤカドツノガイ類	

※番号は図8-33 ~ 35 に対応。

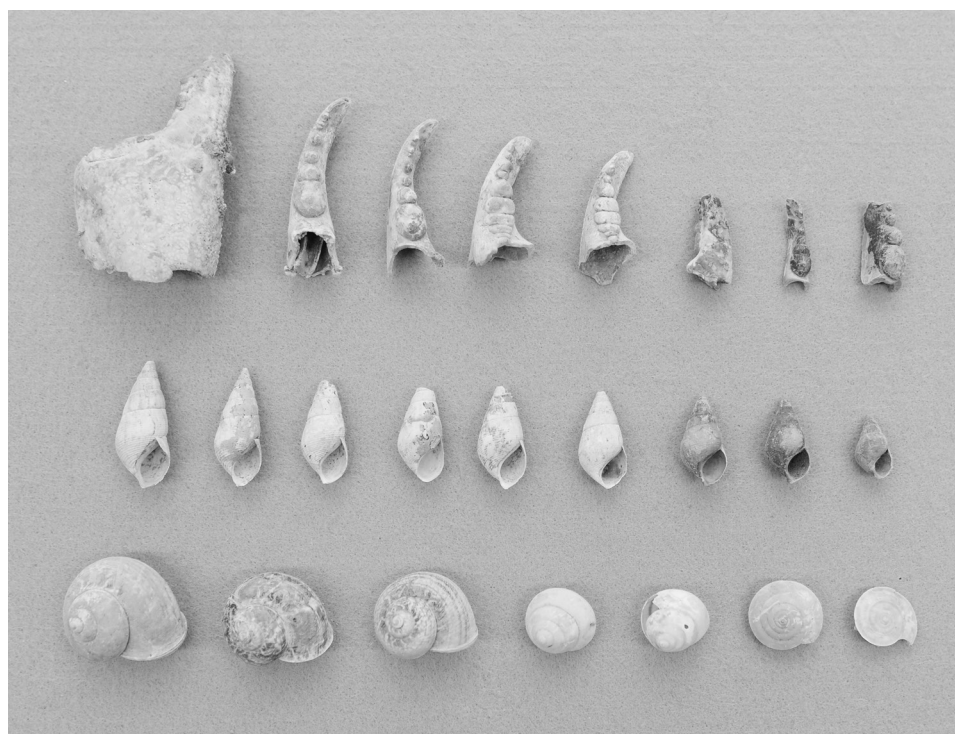


図8-37 調査区 I 出土甲殻類 (カニ) (上段)、淡水貝類 (カワニナ) (中段)、陸産貝類 (カタツムリ) (下段) 写真



図8-38 調査区I出土動物骨（イノシシ）写真

表8-13 調査区I出土動物骨（イノシシ）リスト

番号	遺物名	調査区	層	日付	分類	部位	備考
1		I	FS上部	20110730	動物骨	イノシシ長管骨	半截・加工痕あり
2	SAK005	I	I	20110729	動物骨	イノシシ下顎骨	
3	No. 508HF	I	II-1		動物骨	イノシシ上顎犬歯	
4	SAK1130	I (北半)	II~III	20140919	動物骨	イノシシ歯	
5		I	II-1 A	20110810	動物骨	イノシシ指骨	
6	SAK156	I	II-1	20110810	動物骨	イノシシ肩甲骨	

※番号は図8-38に対応。

引用文献

- 沖縄県立博物館・美術館 2014 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告 I』
- 沖縄県立博物館・美術館 2015 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告 II』
- 沖縄県立博物館・美術館 2016 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告 III』
- 沖縄県立博物館・美術館 2017 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告 IV』
- 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・國木田 大・松浦秀治・諏訪 元・大城逸朗 2012a 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査 (2009 ~ 2011 年) - 沖縄諸島における新たな更新世人類遺跡 -」『*Anthropological Science (Japanese Series)*』 120 : 121-134 頁
- 山崎真治・西秋良宏・赤嶺信哉・片桐千亜紀・仲里 健・大城逸朗 2012b 「サキタリ洞の後期更新世堆積層中より出土した石英標本に関する考古学的研究」『*日本考古学*』 34 : 71-85 頁
- 山崎真治・横尾昌樹・伊藤 圭・國木田 大・新里尚美 2013 「沖縄先史土器の起源と南下仮説」『*九州旧石器*』 17 : 283-295 頁
- 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介 2014 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」『*Anthropological Science (Japanese Series)*』 122 : 9-27 頁
- 山崎真治・黒住耐二・佐野勝宏・片桐千亜紀・藤田祐樹 2015 「旧石器時代の貝製ビーズ-沖縄県南城市サキタリ洞遺跡からの報告」『*旧石器研究*』 11 : 97 - 105 頁
- Fujita, M., Yamasaki, S., Katagiri, C., Oshiro, I., Sano, K., Kurozumi, T., Sugawara, H., Kunikita, D., Matsuzaki, H., Kano, A., Okumura, T., Sone, T., Fujita, H., Kobayashi, S., Naruse, T., Kondo, M., Matsu'ura, S., Suwa, G., Kaifu, Y. (2016) Advanced maritime adaptation in the western Pacific coastal region extends back to 35,000-30,000 years before present. *Proceedings of the National Academy of Sciences*. 113: 11184-11189.
- O'Connor, S., Ono, R., Clarkson, C. (2011) Pelagic fishing at 42,000 years before the present and the maritime skills of modern humans by 50,000. *Science*. 334: 1117-1121

第9章 調査区Ⅱ

1. 概要

調査区Ⅱは、東側洞口から洞内にかけての斜面部に設定した発掘区で、実質的な発掘面積は約52㎡である（図9-2・3）。地表面からの最大掘削深度は約3mに達しているが、まだ基盤には到達していない。この地点では、発掘着手以前には洞外から洞奥にかけて流入した厚い造成土が堆積しており、旧地形をうかがうことは難しい状況であった。1970年頃に撮影された写真を見ると、洞外から洞奥にかけて階段状の斜面となっていたことがわかる（図9-1）。この階段状の地形は人為的に造成された地形と考えられ、石列を伴うものも見られる。石列の一部（SX01）は、今回の発掘調査でも検出されている。

発掘は2010年度から開始し、試掘区を地表下約1mまで発掘してⅠ～Ⅳ層の堆積層を確認した。2011年度からは調査区を拡張してO・P7区の発掘を実施し、順次調査区の拡張を行いつつ掘り下げを行った。地点によっては崩落岩塊によって掘り下げが困難な箇所や、攪乱が著しい箇所も認められ、組織的な発掘は主にO・P／6・7・8区、M・N8区、P5区で実施した。調査区の西半は広範に攪乱されており、現洞床に貼られたコンクリート床に続くコンクリート面が検出されたが、M・N・O／8・9区ではコンクリートを除去して調査を行った。攪乱はO8・9区ではⅥ層（標高38m付近）まで及んでおり、堆積層の斜面下方に位置するM・N8区では、比較的堆積層の残存状況は良好であったが、N8区付近には攪乱坑があり、その底部は標高37m付近まで達していた。この攪乱坑を利用してM・N7・8区では深掘りを行った。この深掘区とその周囲には、天井から落下した巨大な鍾乳石が多数分布しており、特にM8区では、落下した岩塊と洞床との間に空隙（開口部）が形成されていた（図9-3右写真参照）。この空隙は、現洞床下にある程度の広がりをもつようであるが、人が侵入できるのは開口部付近のみである。造成土の流入以前にはこの開口部は洞床に露出していたものと考えられ、Ⅱ層以下の堆積層はO7・8区側からこの開口部に向かって傾斜した状態であった。また、N7区では天井から落下した径2mに達する巨大なつらら石が検出されたが、安全確保の上で支障があるため、2015年度に削岩・分解し、撤去した。



図9-1 1970年頃のサキタリ洞

洞内より東側洞口を見る。（株）南都提供。

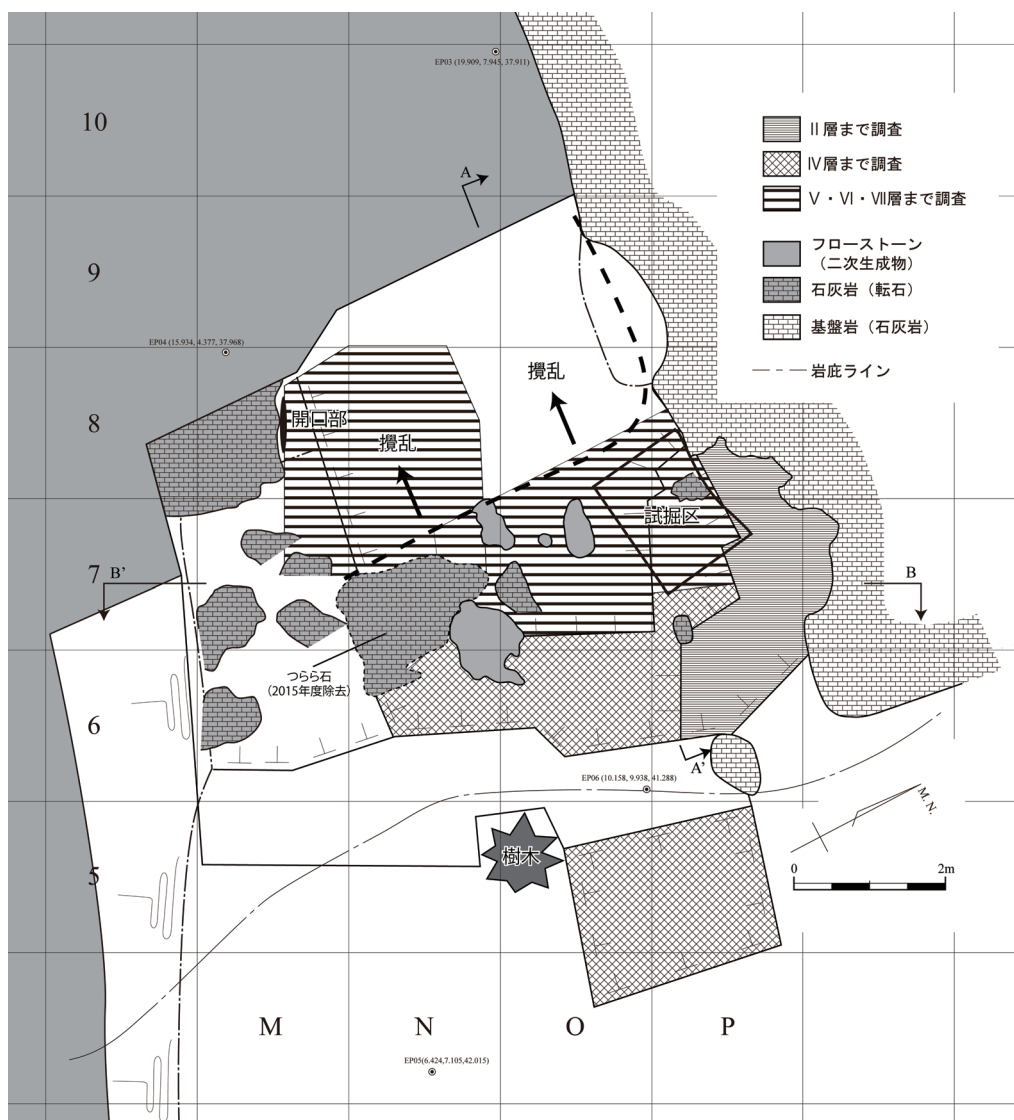


図9-2 調査区IIの平面図

図中のA-A'、B-B'はセクション（立面図）軸を示す。



図9-3 調査区II写真（左：近景・南西より、右：M・N8区・東より）

右写真左端には開口部が見える。

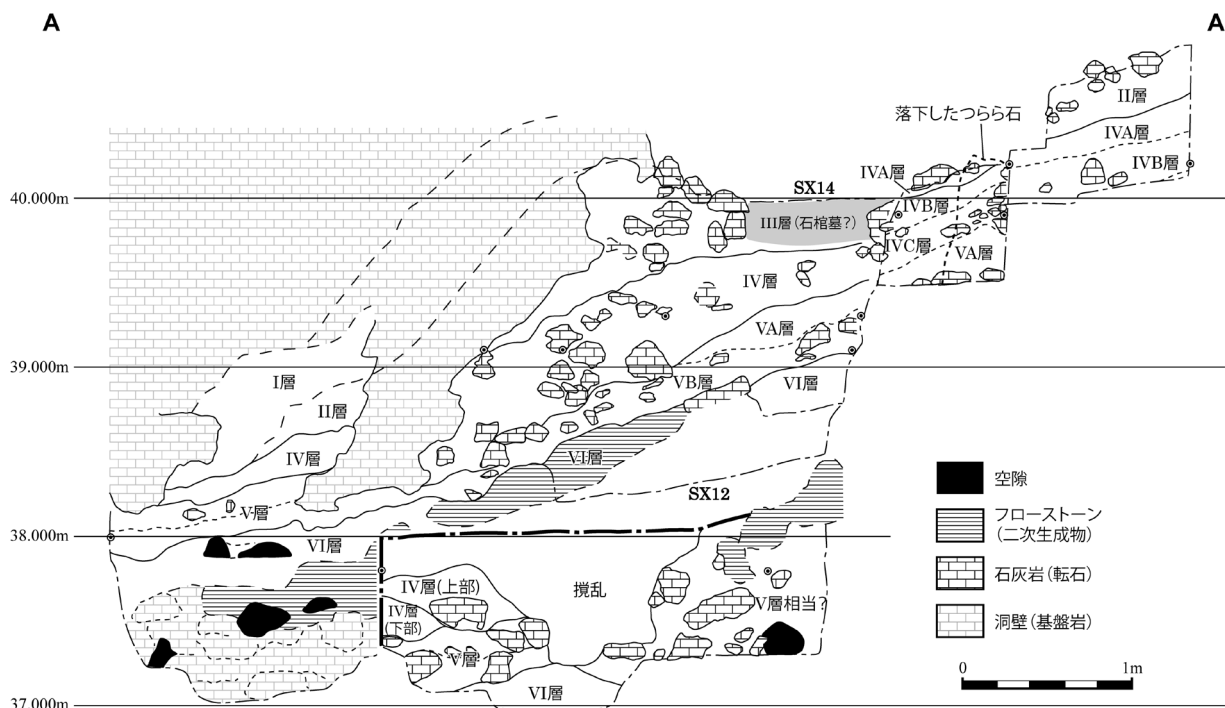


図9-4 調査区II・A-A'セクション図

中央下部はN8区北壁を合成。

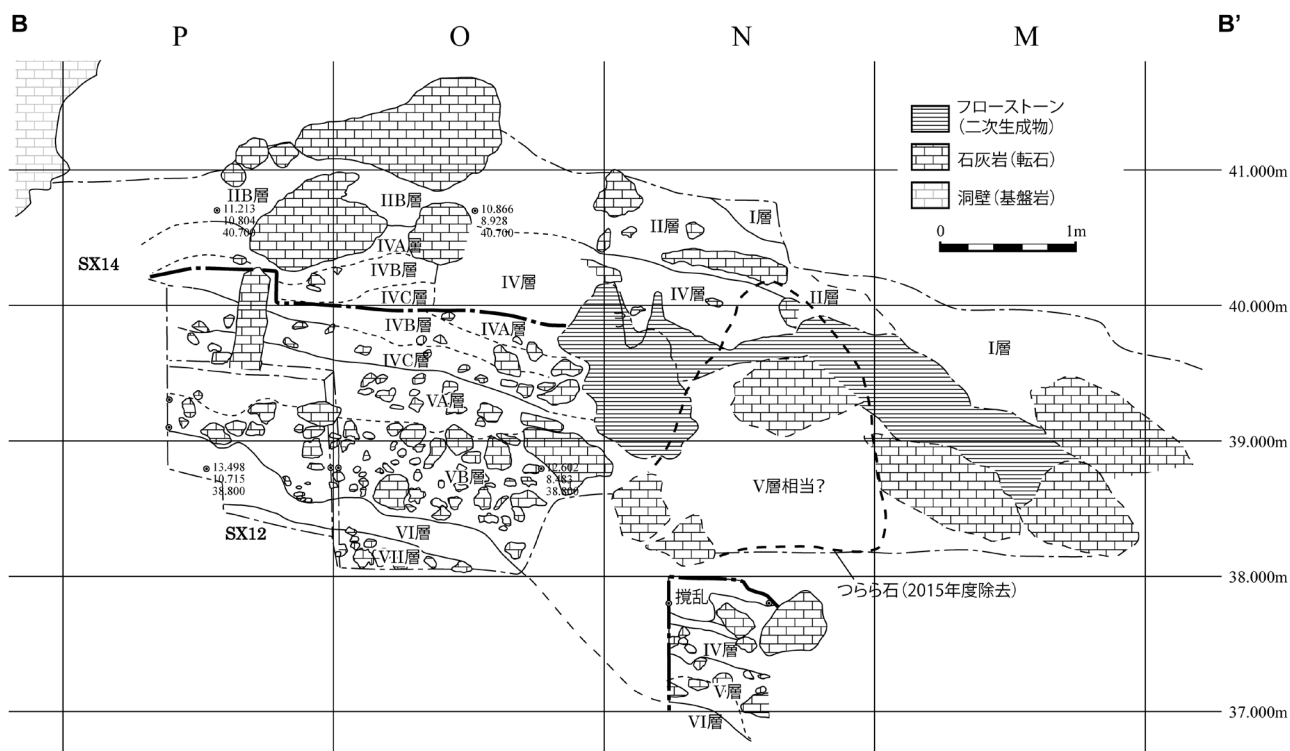


図9-5 調査区II・B-B'セクション図

上部はN・O・P6区東壁、下部はN8区西壁を合成。

2. 層序

調査区Ⅱでは、地表下約3mまで発掘し、層相の差異に基づいてⅠ層～Ⅶ層まで7枚の堆積層を識別した(図9-4・5)。さらに包含遺物等に基づいて、Ⅱ層を上部(ⅡA)と下部(ⅡB)、Ⅳ層を上部(ⅣA)、中部(ⅣB)、下部(ⅣC)、Ⅴ層を上部(ⅤA)と下部(ⅤB)に、それぞれ区分した。なお、Ⅲ層はⅣA層中の石棺墓(?)の埋土であり、P7・8区のみ分布する。各層の層相、遺構、出土遺物等は表9-1の通りである。堆積物の特徴については分析・考察編Ⅵにおいて詳しく記載されている。各堆積層は、全体として洞口側(東側)から洞奥側(西側)にかけて傾斜しており、07・8区付近では上位の地層ほど傾斜が大きくなるようである。

出土遺物から、Ⅱ層は近代～グスク時代、ⅣA層は縄文時代晩期(仲原式前後)、ⅣC層は縄文時代前期(条痕文)、ⅤB層は縄文時代早期相当(押引文)の堆積層と考えられる。また、放射性炭素年代測定の結果、ⅡB層からは10～12世紀、ⅣA層からは3200～2500年前、ⅣB層からは約5600～4000年前、ⅣC層からは約6500～4000年前、ⅤB層からは9700～8700年前の年代値が得られている(表9-2)。ⅤB層よりも下位に位置するⅥ層、Ⅶ層については部分的な調査に留まっており年代についても未確定であるが、ⅤB層(約9000年前)以前の堆積層であることは明確である。

なお、O・P5区ではⅠ～Ⅱ層の堆積が厚く、Ⅱ層が3層程度に分層可能であった(図9-6：Ⅱ層上部・中部・下部)。Ⅱ層下部からはグスク土器やウシ下顎骨が検出されており(SX16)、ⅡB層相当と考えられる。地表下約2mまで掘削したが、掘削底面はⅣ層上面に達したかどうかというところである。掘削範囲が狭く、堆積状況についてもまだ十分検討できていないので、標準層序との対応関係については今後の課題としておきたい。

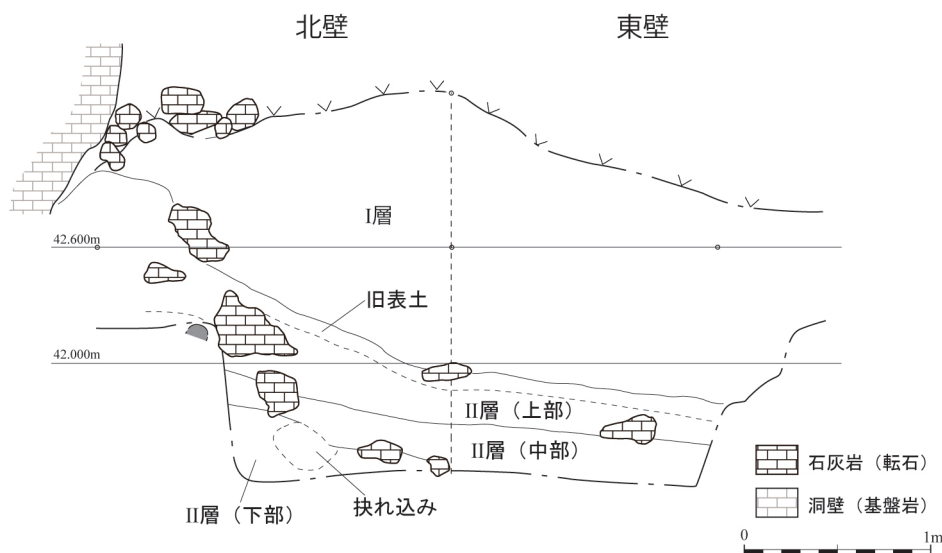


図9-6 調査区Ⅱ O・P5区セクション図

表9-1 調査区IIの層序

層名	色調	記載	遺構	人工・人為遺物	動物遺骸	年代(暦年)
I層		ガラス瓶や茶碗等の現代遺物を含む。洞内の整備に伴う造成土。				
II層	暗褐色 (10YR3/3)	粘性中、しまり良。上部をIIA、下部をIIBとする。下部 (IIB層) では炭化物や黒色・赤色の土壌粒目立つ。樹根顕著。40～20cm大の崩落岩塊を多く含む。グスク時代以降の包含層である。	SX01、SX02、SX13、SX14、SX16	土器、石器、貝器、銭貨	人骨、獣骨(ウシ、イノシシ)、海産・陸産貝類	10～12世紀以降
IV層	褐色 (7.5YR4/4)	粘性中、しまり良。粘土質の堆積物。上部をIVA、中部をIVB、下部をIVCとする。層相の変化はほとんど見られないが、IVA層は下位の土層に比べてやや暗い色調で、縄文晩期頃の遺物を含む。またIVC層には糸痕文期の遺物が多量に含まれている。IVB層は縄文中期～後期の包含層と見られる。	石棺墓?	土器、石器、貝器、サンゴ、軽石、石材、ガラス小玉	人骨、獣骨(イノシシ、イヌ)、魚骨、海産・陸産貝類	IVA層: 3200～ 2500年前 IVB層: 5600～ 4000年前 IVC層: 6500～ 4000年前
V層	褐色 (10YR4/4)	粘性中、しまり良。粘土質の堆積物。40～20cm大の崩落岩塊多く含む。上部をVA、下部をVBとする。VB層を中心に押し引文土器が出土した。		土器、石材	獣骨(イノシシ)、海産・陸産貝類	VB層: 9700～ 8700年前
VI層	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘性中、しまり良。やや砂質の堆積物で、部分的に固結している。土石流堆積物と推定される。石灰岩礫の混入は少ない。VI層下面は凹凸が顕著で、下位のVII層とは非整合の関係にあると見られる。基本的に無遺物層であるが、陸産貝類が含まれているほか、非現地性の砂岩礫が1点出土した(図9-52:22)。		石材	陸産貝類	
VII層	褐色 (10YR4/4)	粘性中、しまり良。拳大の石灰岩礫を多く含む。炭化物、赤色・黒色の土壌粒目立つ。	SX11、SX12、赤色土・炭化物集中		人骨、陸産貝類	

※動物遺骸の出現頻度は「◎多い、○含まれる、+少ない」ことを示す。

※各層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖2007年版」に基づく。

※III層はP7・8区のみで局所的に分布(石棺墓?の覆土と推定)するため、この表では割愛した。



図9-7 調査区II O・P7区セクション写真(西より)

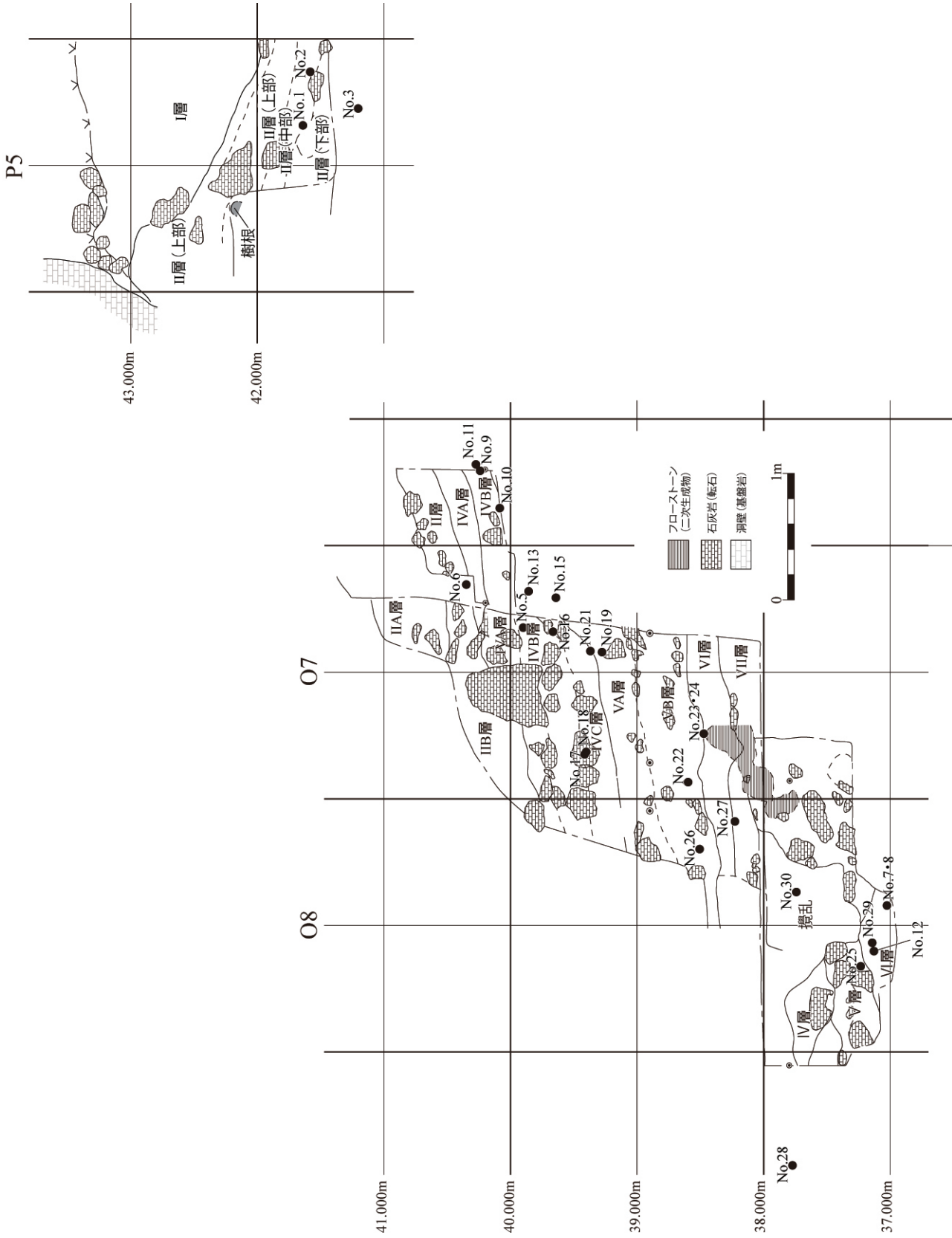


図9-8 調査区IIの放射性炭素年代測定試料採取地点のドットマップ図 (東西立面)

06・7・8区北壁、P5区北壁、N8区北壁への投影図。図中の番号は表9-2の番号に対応する。

表9-2 調査区IIの放射性炭素年代値

通番	Lab-no.	試料名	調査区	層	種類	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	校正用年代	年代値	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲		備考
									1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
1	IAAA-170781	SAK733	II	SX13(IIA層)	炭化材	-21.70±0.27	168±19		1670-1682 cal AD (11.9%) 1736-1779 cal AD (43.3%) 1799-1805 cal AD (5.9%) 1935-1943 cal AD (7.2%)	1666-1693 cal AD (17.2%) 1727-1785 cal AD (48.0%) 1795-1813 cal AD (10.4%) 1919- cal AD (19.8%)	
2	IAAA-170782	SAK736	II	SX13の下(IIA層)	炭化材	-23.58 ± 0.25	192±18		1665-1679 cal AD (16.0%) 1764-1786 cal AD (22.9%) 1793-1801 cal AD (7.3%) 1939- cal AD (22.1%)	1661-1684 cal AD (20.3%) 1736-1806 cal AD (51.3%) 1934- cal AD (23.8%)	
3	PLD-26377	SAK1076	II	II層	獣骨(ウシ下顎骨)	-15.25±0.24	989±18	990±20	1016-1040 cal AD (64.1%) 1110-1115 cal AD (4.1%)	997-1048 cal AD (75.9%) 1090-1123 cal AD (16.5%) 1139-1149 cal AD (3.1%)	
4	PLD-25000	SX14-③ No. 16	II	SX14-③(II B層)	土器付着炭化物(グスク土器)	-20.77±0.21	996±18	995±20	1015-1038 cal AD (68.2%)	991-1045 cal AD (86.6%) 1096-1120 cal AD (7.9%) 1142-1147 cal AD (0.9%)	
5	PLD-23295	SAK016	II	II B層下面	海産貝類(ヘメジヤコ)	2.97±0.26	1283±20	1285±20	Marine13: 1077-1159 cal AD (68.2%)	Marine13: 1050-1190 cal AD (95.4%)	
6	PLD-23294	SAK088	II	II B層	海産貝類(マガキ)	1.57±0.24	1426±19	1425±20	Marine13: 957-1022 cal AD (68.2%)	Marine13: 911-1035 cal AD (95.4%)	
7	MTC-17928	SAK1390-2	II	IVA層	炭化物	-29.0	2583±41	2580±40	811-756 cal BC (63.2%) 679-671 cal BC (3.2%) 604-599 cal BC (1.8%)	828-742 cal BC (69.5%) 687-664 cal BC (6.3%) 645-550 cal BC (19.6%)	
8	MTC-17927	SAK1390-1	II	IVA層	炭化物	-34.0	2768±46	2770±45	974-956 cal BC (9.7%) 942-843 cal BC (58.5%)	1016-816 cal BC (95.4%)	
9	IAAA-170783	SAK767	II	IVA層	炭化材	-26.67±0.26	2866±21		1082-1065 cal BC (8.1%) 1058-1001 cal BC (60.1%)	1115-975 cal BC (93.7%) 953-945 cal BC (4.7%)	
10	IAAA-170785	SAK809	II	IVA層	炭化材	-26.99±0.21	2884±23		1109-1099 cal BC (7.9%) 1089-1017 cal BC (60.3%)	1189-1180 cal BC (0.9%) 1155-1148 cal BC (0.7%) 1128-994 cal BC (93.3%) 986-980 cal BC (0.5%)	
11	IAAA-170784	SAK770	II	IVA層	炭化材	-29.91±0.26	2889±22		1111-1031 cal BC (68.2%)	1190-1179 cal BC (1.3%) 1157-1146 cal BC (1.3%) 1129-1001 cal BC (92.8%)	
12	IAAA-170786	SAK1465	II	IVA層	炭化材	-26.95±0.25	2948±20		1207-1124 cal BC (68.2%)	1224-1072 cal BC (94.0%) 1066-1056 cal BC (1.4%)	
13	PLD-23427	SAK709	II	IVB層	炭化材	-27.20±0.18	3588±21	3590±20	1962-1900 cal BC (68.2%)	2018-1994 cal BC (10.0%) 1981-1887 cal BC (85.4%)	
14	PLD-25002	面縄前庭式共伴	II		陸産貝類(カタツムリ)	-12.08±0.21	3659±21	3660±20	2121-2094 cal BC (23.1%) 2042-2013 cal BC (27.4%) 1999-1979 cal BC (17.7%)	2133-2082 cal BC (31.8%) 2058-1955 cal BC (63.6%)	
15	PLD-25009	SAK141	II	IVB層	獣骨(イノシシ)	-22.46±0.20	4852±22	4850±20	3655-3637 cal BC (68.2%)	3695-3678 cal BC (6.2%) 3669-3632 cal BC (84.7%) 3554-3540 cal BC (4.5%)	
16	IAAA-170787	SAK888	II	IVC層	炭化材	-27.86±0.27	3703±22		2136-2119 cal BC (15.4%) 2096-2040 cal BC (52.8%)	2195-2175 cal BC (5.1%) 2145-2028 cal BC (90.3%)	
17	PLD-24999	SAK1022	II	IVC層	炭化材	-27.47±0.21	4587±22	4585±20	3483-3476 cal BC (7.2%) 3371-3348 cal BC (61.0%)	3495-3467 cal BC (18.6%) 3376-3336 cal BC (70.3%) 3210-3192 cal BC (3.9%) 3152-3137 cal BC (2.6%)	
18	IAAA-170788	SAK1003	II	IVC層	炭化材	-25.89±0.25	4617±23		3492-3469 cal BC (44.6%) 3374-3362 cal BC (23.6%)	3499-3437 cal BC (63.3%) 3379-3353 cal BC (32.1%)	
19	MTC-16905	SAK152	II	IVC層	汽水貝類(シレナジミ)	-6	4759±38	4760±40	3634-3619 cal BC (10.3%) 3612-3552 cal BC (43.3%) 3542-3521 cal BC (14.8%)	3640-3505 cal BC (82.4%) 3428-3381 cal BC (13.0%)	
20	MTC-16907	SKT-t9	II	IVC層	炭化物、イノシシ骨付着	-28.7	4760±39	4760±40	3634-3619 cal BC (10.1%) 3611-3550 cal BC (43.2%) 3543-3521 cal BC (14.9%)	3640-3503 cal BC (82.3%) 3428-3381 cal BC (13.1%)	
21	PLD-23296	SAK144	II	IVC層	汽水貝類(シレナジミ)	-4.47±0.37	5605±29	5605±30	4461-4440 cal BC (19.6%) 4425-4371 cal BC (48.6%)	4492-4361 cal BC (95.4%)	
22	PLD-23297	SAK656	II	V層	汽水貝類?(シレナジミ?)	-11.16±0.31	4823±25	4825±25	3649-3632 cal BC (35.3%) 3558-3538 cal BC (32.9%)	3656-3627 cal BC (42.3%) 3586-3530 cal BC (53.1%)	
23	PLD-24985	SAK595	II	V層	陸産貝類(カタツムリ)	-12.38±0.16	6044±24	6045±25	4922-4931 cal BC (59.8%) 4922-4911 cal BC (8.4%)	5008-4848 cal BC (95.4%)	
24	PLD-24986	SAK595	II	V層	陸産貝類(カタツムリ)	-11.62±0.14	7561±26	7560±25	6451-6419 cal BC (68.2%)	6461-6397 cal BC (95.4%)	

表9-2 調査区Ⅱの放射性炭素年代値(続き)

通番	Lab-no.	試料名	調査区	層	種類	$\delta^{13}C$ (‰)	校正用年代	年代値	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲 1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	備考
25	PLD-24995	SAK1009	Ⅱ	VB層?	炭化材	-28.18±0.29	3206±22	3205±20	1499-1451 cal BC (68.2%)	1511-1428 cal BC (95.4%)	
26	PLD-27739	SAK1163	Ⅱ	VB層	炭化材	-27.53±0.15	7903±33	7905±35	6820-6682 cal BC (68.2%)	7024-6966 cal BC (7.2%) 6948-6935 cal BC (1.2%) 6916-6880 cal BC (6.1%) 6842-6649 cal BC (80.8%)	
27	PLD-23298	SAK675	Ⅱ	VB層	陸産貝類(カタツムリ)	-9.57±0.25	7928±27	7930±25	6908-6886 cal BC (7.4%) 6828-6695 cal BC (60.8%)	7028-6931 cal BC (18.5%) 6921-6877 cal BC (11.3%) 6858-6685 cal BC (65.6%)	
28	MTC-16906	SAK696	Ⅱ	VB層	陸産貝類(カタツムリ)	-10.7	7938±46	7940±45	7022-6968 cal BC (14.9%) 6945-6937 cal BC (2.1%) 6914-6882 cal BC (9.8%) 6837-6700 cal BC (41.4%)	7036-6686 cal BC (95.4%)	
29	PLD-24996	SAK1010	Ⅱ	VB層?	炭化材	-27.42±0.22	8672±28	8670±30	7705-7698 cal BC (4.6%) 7681-7604 cal BC (63.6%)	7735-7598 cal BC (95.4%)	
30	PLD-30877	SAK1442	Ⅱ	VB層 サメ椎骨共伴	陸産貝類(カタツムリ)	-13.04±0.31	9288±30	9290±30	8606-8533 cal BC (45.4%) 8515-8480 cal BC (22.8%)	8629-8441 cal BC (94.4%) 8365-8355 cal BC (1.0%)	

3. 遺構

調査区Ⅱでは計9箇所の遺構を確認した。その内容は多様であるが、大別すると、①人骨を伴う墓、②炉址あるいは火の使用に関連する遺構、③その他の遺構の三者に区分できる。

墓はSX02、SX12、SX14、P7区石棺墓(?)が該当し、すべて調査区北側の洞壁際で検出されている。このほかにも、断片的な人骨は各所から少量ずつ検出されている。SX02とSX14は重複しており、SX14が下位、SX02が上位にあり、継続的(厳密な意味で連続的かどうかは定かでない)に利用された一連の墓と考えられる。P7区石棺墓(?)は、SX14の下位に位置するが、断面での確認に留まっており、全容は明らかでない。SX12はⅦ層中から検出された埋葬人骨で、VB層(約9000年前)よりも下位に位置することから、9000年前以前のものと考えられる。炉址あるいは火の使用に関連する遺構としては、SX11、O・P/7・8区Ⅶ層上面の赤色土・炭化物集中があり、後者はSX12直上で検出されている。いずれもⅦ層に関連する遺構である。その他の遺構としては、SX01の石列、SX13の礫集中部、SX16の土器・獣骨集積があり、いずれもグスク時代以降のものである。以下、個別の遺構について記載する。

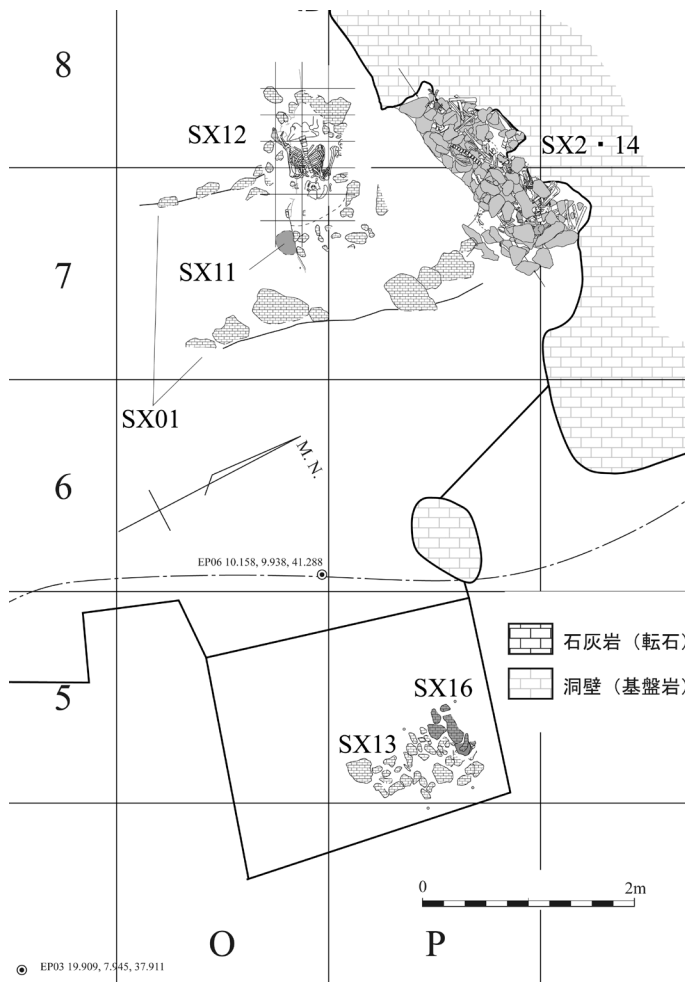


図9-9 調査区Ⅱの遺構配置図

P7区石棺墓(?)はSX14の下位、O・P/7・8区Ⅶ層上面の赤色土・炭化物集中はSX12直上で検出された。

表9-3 調査区II検出遺構リスト

遺構番号	調査区	層	検出年月日	種別	規模	放射性炭素年代	備考
SX01	II	II A層	20110729	石列	(L3.0m×W0.5m)		
SX02	II	II A-II B層	20120807	崖葬墓	L2.0m×W0.5m		
SX11	II	VII層	20130205	赤色土集中部	L0.24m×(W0.17m)		磁化研究実施
SX12	II	VII層	20130219	埋葬人骨	(L1.03m×W0.62m)		磁化研究実施
SX13	II	II層	20130226	礫集中部	L1.23m×W0.70m	168 ¹⁴ C BP (IAAA-170781)	
SX14	II	II B-III層	20130226	岩陰囲込墓	L1.45m×W0.47m	995 ¹⁴ C BP (PLD-25000)	「規模」は石囲いの外径を示す。
SX16	II	II層	20131010	土器・獣骨集積	L0.22m×W0.20m	990 ¹⁴ C BP (PLD-26377)	
—	II	IV層		石棺墓?			P7区IV層中に構築されている。遺構覆土はIII層。
—	II	VII層上面		赤色土・炭化物集中部	径約1.0m		O・P/7・8区

※「規模」の項目の()は調査区内において確認できた規模を示す。Lは長さ、Wは幅。

3-1 SX01 (図9-10・11)

O・P/7・8区のII A層中から検出された石列である。長さ2～3m程度のものが二列確認でき、階段状に造成された段部の土留めとして構築されたものと考えられる。1970年頃に撮影された写真中にも、この石列らしきものが見える(図9-1)。伴出遺物はないが、II A層には主に近世～近代の遺物が含まれているため、近代以前の遺構と考えられる。

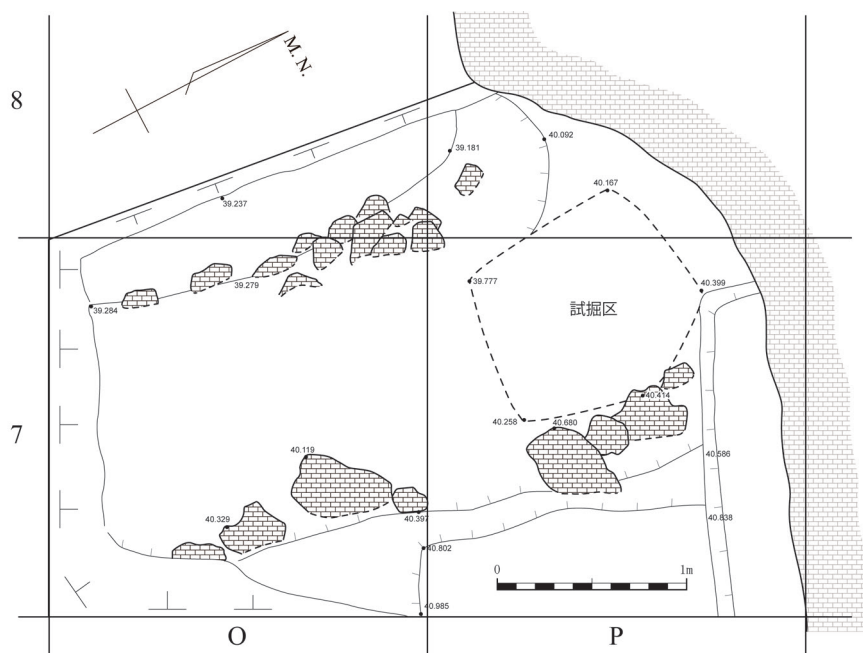


図9-10 SX01平面図

図中の数字は標高を示す。

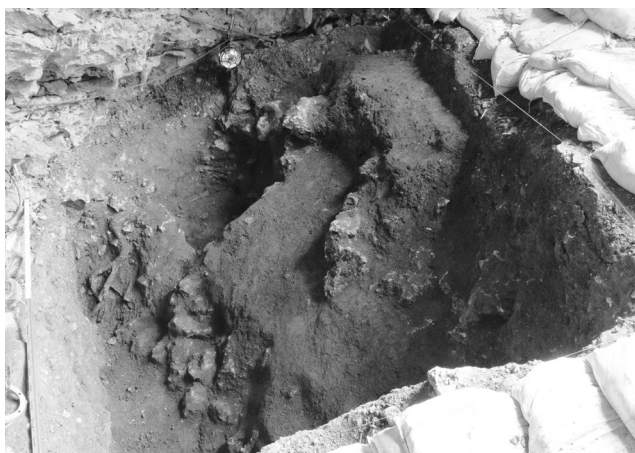


図9-11 SX01 写真（南より）

3-2 SX02・14（図9-12・13）

洞穴北壁際 P7・8 区のⅡ層中より検出された崖葬墓（SX02）と岩陰囲込墓（SX14）である。両者は重複しており、SX14 が下位、SX02 が上位にあり、継続的に利用された一連の墓と考えられる。便宜的に、下部で検出された石囲いを伴う人骨群（図9-12：A）を SX14、その上位の人骨群（図9-12：B～D）を SX02 とした。

人骨が包含されていたⅡ層は締まりの強い粘土質の堆積物で、骨の保存状態

は不良であった。また、場所によっては骨よりも土の方が固く締まった状態で、検出・取り上げの際に骨が破損することも多かった。全体としては、石灰岩礫を多く含む 30cm ほどの厚さの堆積層中に、平面的な広がりをもった人骨集中部が、何面かにわたって検出される状態であった。人骨を取り上げつつ発掘を行った結果、人骨群の下部から 10～30cm 大の石灰岩礫からなる、平面規模 150cm × 50cm 程度の長方形の石囲い（SX14）を検出した。この石囲い検出面で発掘を停止したため、石囲い内部の詳しい調査は未実施であるが、石囲い内部には人骨が多く見られた。

SX02、14 人骨群に伴う遺物は非常に乏しく、特に蔵骨器や陶磁器類は全く検出されていない。しかし、石囲い内部や周辺からは 1 個体分のグスク土器の破片（図9-42：52）や砂岩礫（砥石）（図9-49：7）、海産貝類などの遺物が少量検出されており、石囲い内部から出土したグスク土器の付着炭化物からは 995 ¹⁴C BP（PLD-25000）の放射性炭素年代が得られている。したがって、SX14 はグスク時代初期の岩陰囲込墓と考えられる。これとほぼ同時期の人骨は、サキタリ洞遺跡近隣の武芸洞遺跡やハナダガマ遺跡でも検出されている。一方、SX02 の年代については決定的な物証はないが、SX14 とさほど大きな時期差はないのではないと思われる。

SX02・14 から検出された人骨は、成人、幼児を含む複数個体からなり、その多くは骨化後に集骨された状態であったが、部分的に交連した状態のものも見られた。出土した人骨については現在整理中であり、詳細については別途報告の機会を得たい。

SX14 に類似した囲込墓の例として、銘刈墓跡群（那覇市）南 B 地区（4 号墓下位墓）（那覇市教育委員会 2007・1998）があげられる。石製や陶製の蔵骨器を伴わない囲込墓（チンマーサー）が確認されており、36 体の人骨（一次葬、二次葬）が確認された。二次葬のものでは四肢骨を下にし、最上位に頭骨が置かれていた。平面規模は約 5 m × 約 3 m と大きく、石積みも強固である。年代は 16 世紀以前と推定されており、近世以前の風葬のあり方を示す重要な事例である。サキタリ洞遺跡の囲込墓は銘刈墓跡群の例に比較すると小規模で、一次葬であれば一体分の遺体を収容する程度と考えられるが、中世にさかのぼる囲込墓の事例として注目される。

3-3 P7区石棺墓（？）（図9-14）

岩陰囲込墓（SX14）の下部からもヒト寛骨（左）と大腿骨（左）が交連した状態で検出されており、さらに古い時期の埋葬人骨と考えられる。この人骨は、当初試掘区壁面で検出されたもので、人骨周囲の土層をⅢ層として区分したが、Ⅲ層は人骨の周辺に限定的に分布しており、埋葬人骨に伴う

遺構覆土と考えられる。上位で検出されたSX14を保護するため、部分的な調査に留めたことから詳細は不明であるが、人骨の周囲では板状の石灰岩礫が立った状態で検出されており、武芸洞遺跡で検出されているような石棺墓（図6-7参照）である可能性が高い。遺構自体はIV層を掘り込んで構築されているようである。体幹部の体位から推測して、頭位はおおよそ北東を向いているものと推定される。

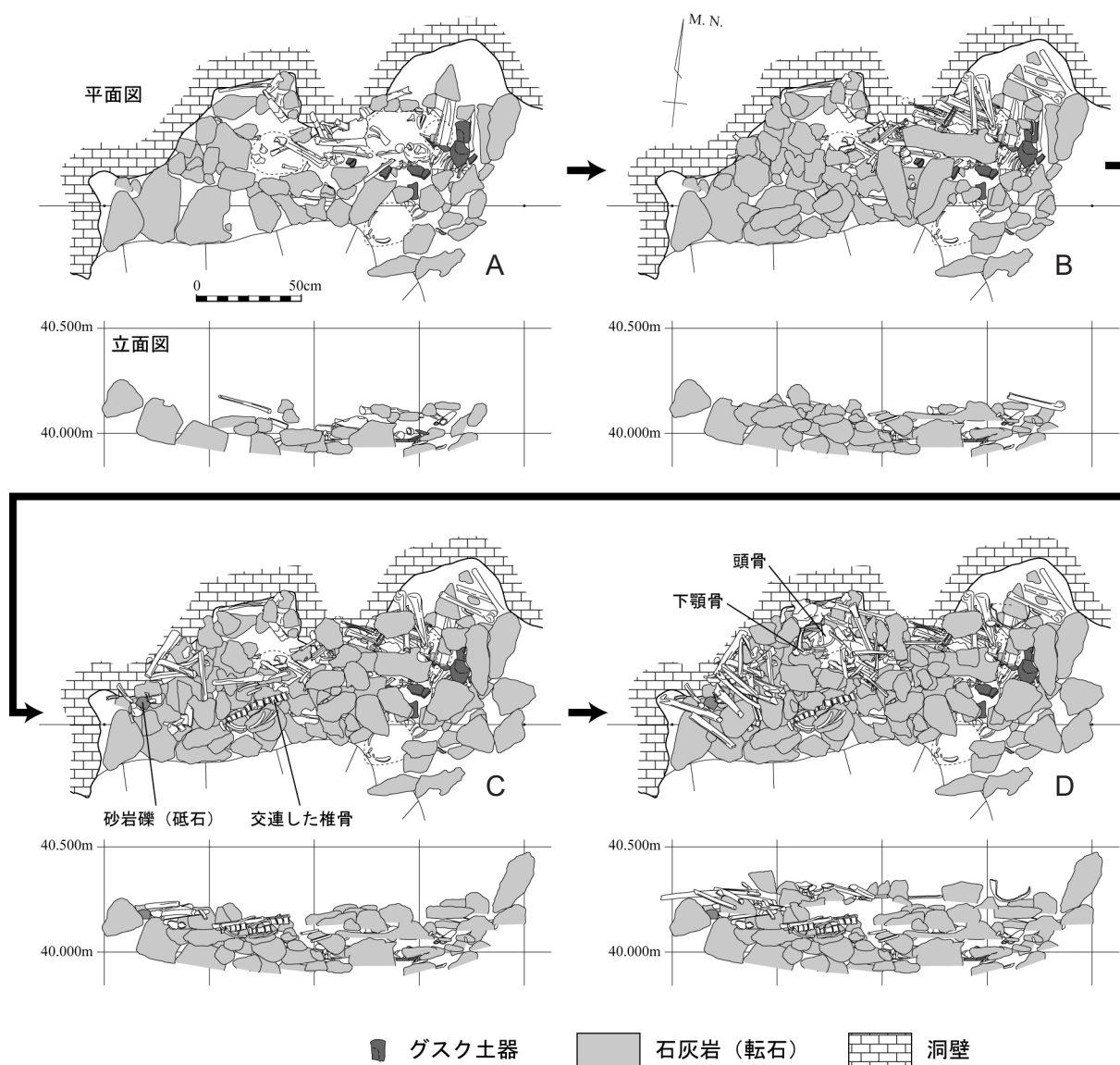


図9-12 SX02・14平面・立面図



図9-13 SX02・14写真（左はSX02、右はSX14）



図9-14 P7区石棺墓(?)

▽は石棺墓の壁材と思われる石灰岩礫。△は大腿骨。

3-4 SX13 (図9-15・16)

P5区のⅡ層中から検出された10~20cm程の石灰岩礫の集中部からなる遺構で、平面規模は120cm×70cm程度である。平面形は柄鏡形を呈し、意図的に石灰岩礫を配置したものと考えられる。礫の上部から壺屋焼(碗)の底部片が1点出土した。近辺から採取した炭化物から168¹⁴C BP (IAAA-170781)の放射性炭素年代が得られている。掘り方等は確認できなかった。遺構の用途は不明である。

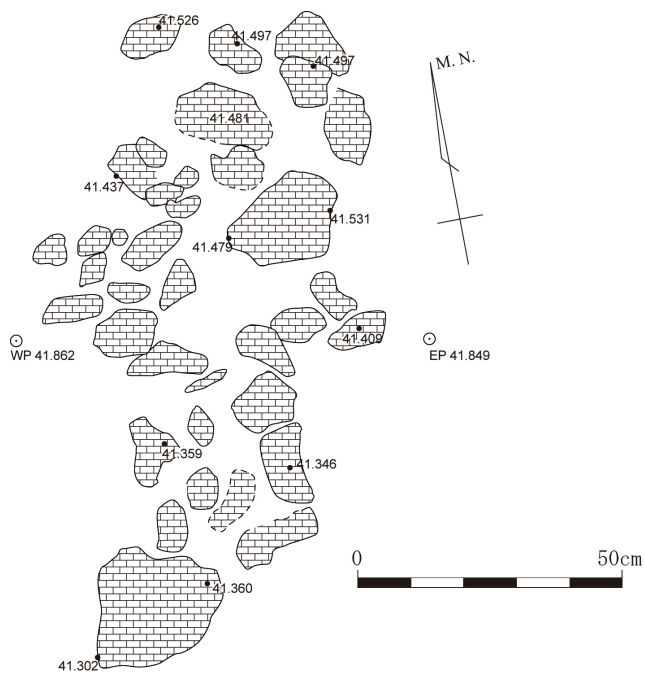


図9-15 SX13平面図

図中の数字は標高を示す。



図9-16 SX13写真(南より)

3-5 SX16 (図9-17~19)

P5区のII層中から検出された土器・獣骨の集積で、層位的にはSX13の下位にあたる。上方から①石灰岩礫、②グスク土器底部片(図9-42:53)、③ウシ下顎骨(下顎肢)(分析・考察編IV写真図版IV-7:2)が折り重なるように検出されたことから、意図的に置かれたものと考えられる。層位的にSX13の下位に位置する。プランや掘り込みは確認できなかった。ウシ下顎骨から990¹⁴C BP (PLD-26377)の放射性炭素年代が得られており、グスク時代初期に位置づけられる。

グスク時代の土器や獣骨の特殊な検出例として、近年調査された鹿児島県鳳雛洞(知名町)の事例があげられる。鳳雛洞では、洞穴奥部においてグスク時代の土器やカムイヤキ、人骨、獣骨(ウシ)の散布が確認されており、土器や獣骨(ウシ)を用いた農耕に関する儀礼や祭祀との関連が指摘されている(新里編2014)。立地条件はやや異なるが、SX16も何らかの呪術的行為との関連が推定できるかも知れない。

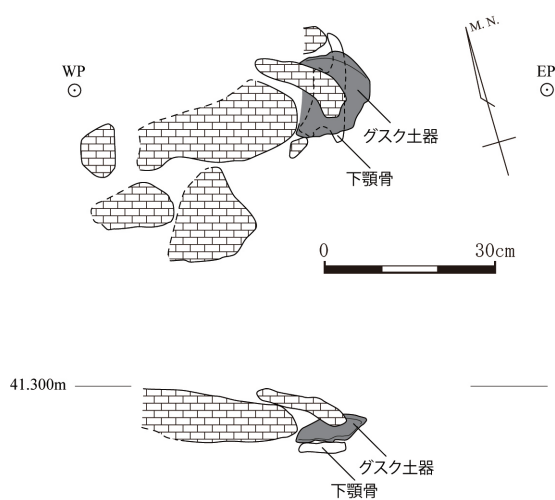


図9-17 SX16平面・立面図



図9-18 SX16写真(南西より)

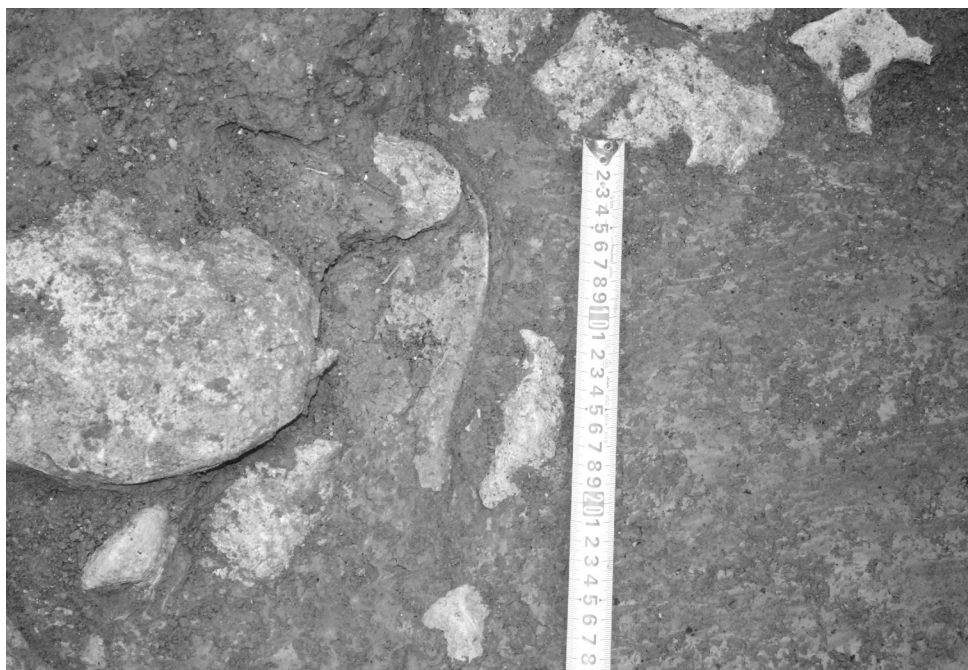


図9-19 SX16下部ウシ下顎骨(下顎肢)検出状況写真(南より)

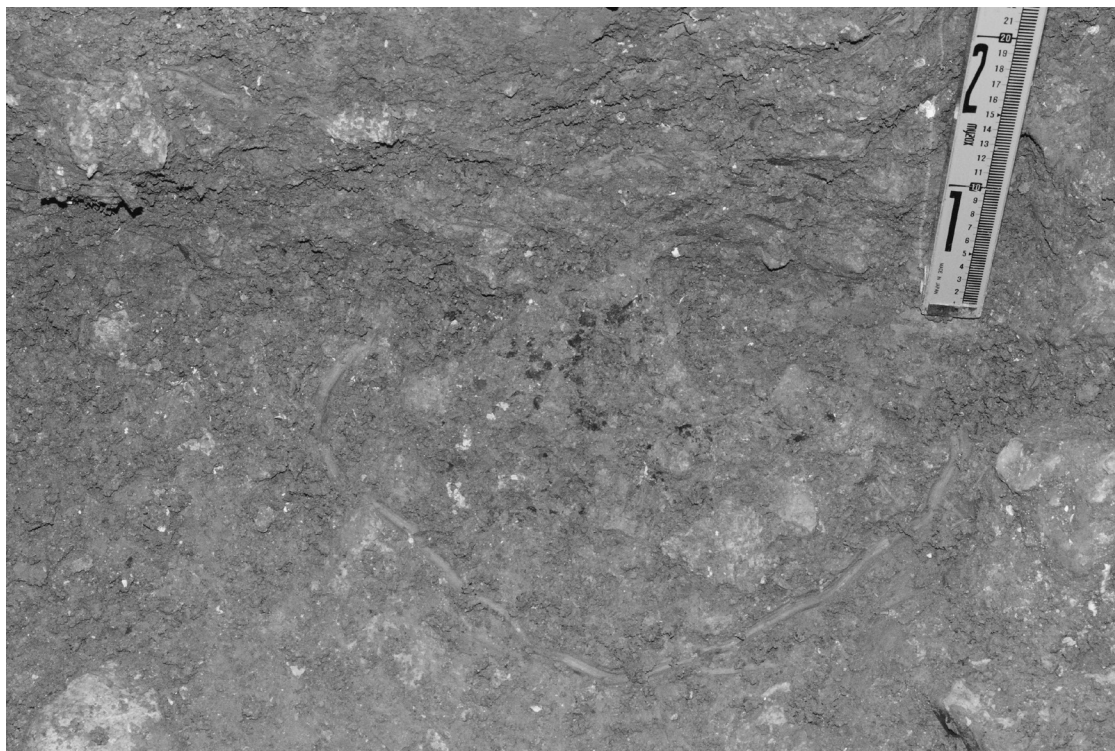


図9-20 SX11 写真 (南より)

3-6 SX11 (図9-20・21)

07区Ⅶ層中から検出された直径25cmほどの小規模な赤色土集中部で、この赤色土は焼土と推定された。磁化研究を実施した結果、被熱の可能性が示されている(分析・考察編Ⅴ参照)。周辺では陸産貝類が多く見られたが、炭化物や動物遺骸等の遺物は乏しい。年代は未詳であるが、層位的にⅤB層(約9000年前)以前の遺構である。

3-7 SX12およびO・P/7・8区赤色土・炭化物集中(図9-21~25)

O・P/7・8区にまたがって、Ⅶ層中から検出された1体分の埋葬人骨である。SX11に近接しているが、層位的にはSX12がⅦ層上部に位置するのに対して、SX11はそれよりも下位に位置しており、直接の関連性はない(図9-21参照)。SX11同様、年代は未詳である。層位的にⅤB層(約9000年前)以前の遺構と考えられる。

この人骨は、2013年2月、07・8区の北壁清掃中に壁面に上腕骨近位端が露出したことから、その存在が明らかとなった(図9-21・22)。この時点では、左側の上腕骨、橈骨、尺骨と肋骨の一部が確認できたが、手掌骨は確認できなかった(後述するように左の手掌骨は、Ⅶ層上面の非整合面形成時に浸食されたと考えられる)。壁面を精査したところ、人骨はⅦ層中に含まれており、Ⅶ層の上位をⅥ層が覆っていることが確認できた。このことから、人骨が非常に古い年代のものであり、人類学・考古学的に重要な意義をもつことが予想された。また、上腕骨と橈骨、尺骨は交連しており、P7・8区側に個体骨格が埋没している可能性が考えられた。しかし、P7・8区には厚さ2mを越える堆積物があり、全容を明らかにするためには長期的な取り組みが必要であることが認識された。

そこで、人骨の発掘・分析手法の妥当性を検討するとともにその向上をはかるため、2013~2014年度の2カ年にわたって、考古学、人類学、地質学の各分野の専門研究者によるサキタリ洞

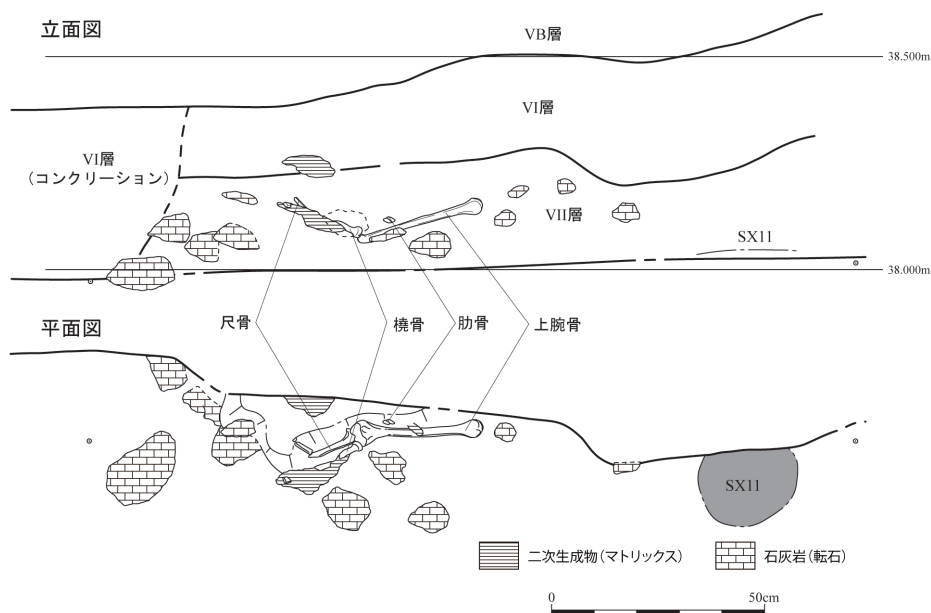


図9-21 SX11・SX12 検出状況



図9-22 SX12 (左腕部分) 検出状況写真

遺跡発掘調査手法検討会議（各年度2回開催）を開催し、調査精度の向上に努めた。また、人骨の測量については3Dレーザー測量を導入して高精度のデータ収集、記録を行った。こうした経過を経て、2014年度には人骨の全容を明らかにすることができた。2箇年に及ぶ調査データの解析や、回収された人骨の復元作業は現在進行中であるため、本報告では人骨の検出状況を中心に概要を記載し、詳細については別途報告予定である。

SX12 人骨は頭位を東に向け仰向けに横たわった状態で、寛骨を含む上半身の各部位と右大腿骨の一部が交連した状態で検出された。保存状態はおおむね良好であるが、右大腿骨の近位部を除く下肢骨と左側の手掌骨および橈骨、尺骨の遠位部は失われており、下肢の体位は不明確である。残

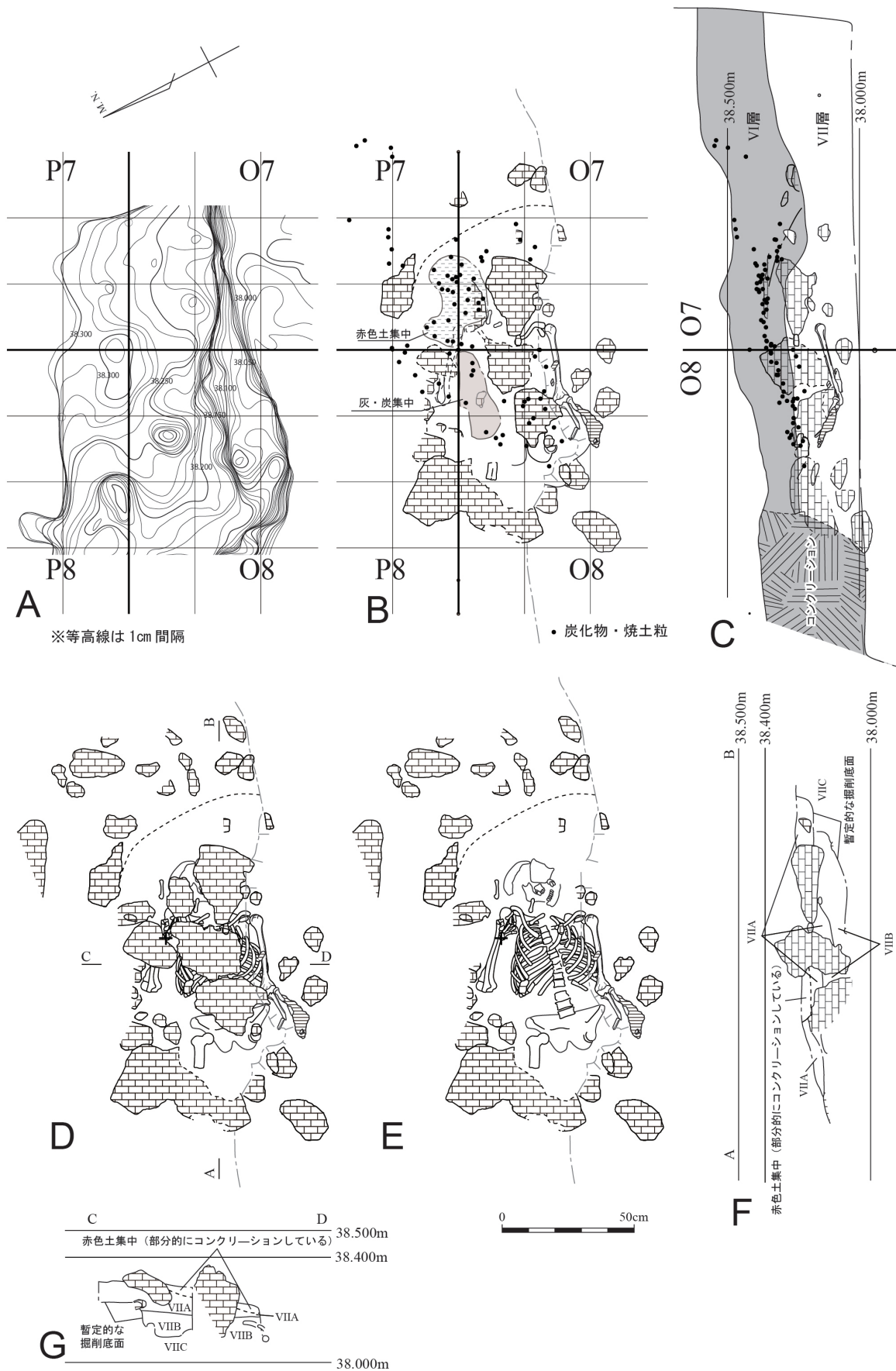


図9-23 SX12 調査・検出状況

A：VII層上面の等高線図、B：VII層上面での検出状況（赤色土・炭化物集中）、C：立面図（Bに対応）、D：人骨上位の礫検出状況、E：人骨全体検出状況、F：縦断面図（A－B断面）、G：横断面図（C－D断面）。

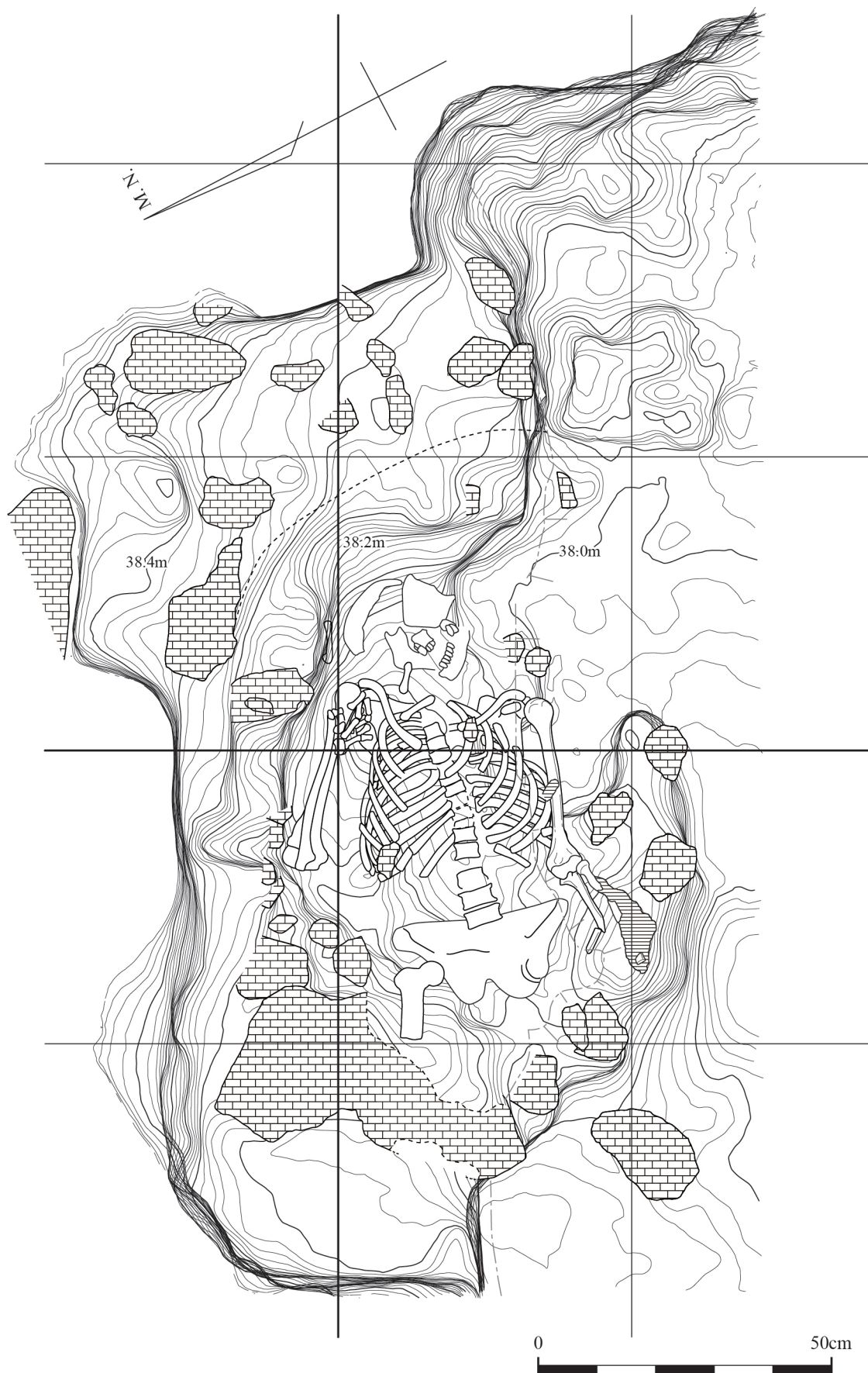


図9-24 SX12人骨微細地形図

等高線は1cm間隔。3Dレーザー測量データにもとづいて作成。



図9-25 SX12人骨調査状況写真
A → B → C → Dの順に調査の進行を示す。

存部位の状態から見て、少なくとも強い屈葬ではなく、膝をやや折り曲げる程度の状態であったと考えられる。この人骨が含まれていたⅦ層が粘土質の堆積物であるのに対して、その上位に位置するⅥ層はやや砂質の堆積物で、Ⅵ層とⅦ層との間には時間的なギャップが推定されることから（分析・考察編Ⅵ参照）、Ⅶ層中への人骨の埋葬後、Ⅵ層堆積以前に人骨の一部が浸食されて失われた可能性が考えられる。特に左側の橈骨、尺骨の遠位側にはマトリックスが付着しており、この部位が一時地表に露出していた可能性を示唆している（吉村ほか 2013）。一方、上半身は後述するように礫によって覆われていたため、浸食を免れたものと考えられる。

人骨の上位にあたる O・P / 7・8 区のⅦ層上面は、南西方向にゆるやかに傾斜しており、このⅦ層上面の傾斜面に沿って径 1m ほどの範囲に焼土と見られる赤色土や炭化物、灰層の分布が見られた。この赤色土集中部について磁化研究を実施した結果、被熱の可能性が示されている（分析・考察編Ⅴ参照）。このことから、Ⅶ層上面の赤色土集中部は炉址と考えられる。この赤色土集中部と埋葬人骨との関係が問題となるが、赤色土はⅦ層上面の非整合面に沿って分布していることから、人骨埋葬後一定期間を経た非整合面形成後の所産と考えられ、埋葬人骨と直接的に関連するものではないと考えられる。

人骨の頭部、胸部、腹部、右腕の上位にあたる位置からは、30～40cm 大の石灰岩礫 4 個が近接して検出されており、特に胸部の礫は、長軸を鉛直方向に向け立てられた状態であった。検出状況から判断して、これらの石灰岩礫は、遺体の上に人為的に配置された可能性が考えられる。腹部や胸部の石灰岩礫は、遺体の腐朽に伴って下方に落ち込み、ほぼ人骨に接した状態であったが、頭部や右腕部分では礫と人骨との間に数 cm 程度の土層が介在していた。なお、骨盤および大腿骨の下部からも、長径 50cm 程度の板状の石灰岩礫が検出されているが、現状ではこれが意図的に配置されたものか否かは不明である。

人骨に伴う掘り込み（プラン）の認定は非常に難しい状況であったが、人骨直近の堆積物（図 9－23F・G のⅦA・ⅦB 層）は、周辺の堆積物（同図ⅦC 層）に比べると、やや色調が異なり、小礫の混入が少なく、しまりがやや弱いなど、若干の層相の差異が認められた。また、プラン内外から採取したサンプルに基づく磁化研究の結果からも、人骨は地面に穴を掘って埋められた可能性が示されている（本書分析・考察編Ⅴ参照）。したがって SX12 人骨は、Ⅶ層中に掘り込まれた土坑中に埋葬された可能性が高いと考えられる。

土坑がどの層準から掘り込まれたかという点も問題であるが、SX12 人骨の上位を覆うⅥ層は、ⅤB 層やⅦ層とは明瞭に区別できることから（図 9－22）、この人骨がⅥ層中あるいはⅥ層よりも上位から掘り込まれた土坑に由来する可能性は否定できる。したがって、Ⅵ層堆積以前のある時期にⅦ層を掘り込む形で土坑が構築され、人骨が埋葬された後、土坑の一部が浸食されて人骨の下肢や左手掌骨等が失われ、その後、Ⅶ層上面の非整合面を覆ってⅥ層が堆積したと考えるのが妥当であろう。

以上のように、SX12 人骨は土坑内に埋葬されたと考えられるものであり、当時の人々の死者に対する風習や、精神性をうかがう上で貴重なものである。人骨の年代は未確定であるが、層位的にⅤB 層（約 9000 年前）以前の所産であることは明らかである。年代的には縄文時代早期以前に相当することから、日本最古級の埋葬人骨になるものと考えられる。今後、人骨の復元作業を含め詳細な分析を行っていく予定である。

4. 遺物

調査区Ⅱからは、土器、石器、貝器、動物遺骸など多くの遺物が出土した。座標を記録して取り上げた遺物は675点（土器208点、石器・石材23点、貝類147点、脊椎動物・甲殻類遺骸188点など）にのぼる。貝類、脊椎動物遺骸については別途報告されているので（分析・考察編Ⅱ・Ⅳ）、ここでは土器、石器・石材、貝器、ガラス製品、金属製品について報告する。

座標記録遺物のうち、主要な遺物のドットマップ（立面）を図9-26・27に、座標データを表9-4に示す。

表9-4 主要遺物（実測図・写真掲載遺物）の座標データ

図番号	種別	層	遺物名	X	Y	Z
図9-37	1	土器 VB層	SAK1013	15.119	7.457	37.184
図9-37	4	土器 V層	SAK656	13.873	8.175	38.599
図9-37	5	土器 IVC層	SAK704	12.394	9.012	39.521
図9-39	6	土器 IV層	SAK053	12.507	9.265	39.677
図9-39	6	土器 IVB層	SAK078	12.527	9.231	39.665
図9-39	6	土器 IVA層	SAK778	11.7	9.709	40.211
図9-39	7	土器 IVC層	SAK0947	13.421	8.069	38.927
図9-39	8	土器 IVC層	SAK169	13.76	9.678	39.273
図9-39	9	土器 IVC層	SAK0897	12.898	10.823	39.645
図9-39	11	土器 IVC層	SAK0898	13.126	10.895	39.093
図9-39	12	土器 IVC層	SAK174	12.925	8.645	39.244
図9-39	13	土器 IVB層	SAK134	12.687	8.647	39.355
図9-39	13	土器 IVB層	SAK099	12.803	8.702	39.439
図9-39	16	土器 IVC層	SAK166	13.468	9.428	39.276
図9-39	17	土器 IVC層	SAK1474	15.181	6.038	37.108
図9-39	19	土器 IVC層	SAK143	13.078	9.755	39.455
図9-39	19	土器 IVC層	SAK154	12.764	8.806	39.311
図9-39	20	土器 IVC層	SAK1042	13.601	10.022	39.303
図9-39	21	土器 IVB層	SAK113	13.076	9.782	39.486
図9-39	21	土器 IVC層	SAK170	13.715	9.612	39.254
図9-39	22	土器 IVC層	SAK0933	12.786	8.284	39.219
図9-39	23	土器 IVC層	SAK1369	15.502	6.712	37.465
図9-39	23	土器 V層?	SAK1401	15.388	6.759	37.416
図9-39	24	土器 IVC層	SAK146	12.74	8.777	39.354
図9-39	25	土器 IVC層	SAK1057	13.905	9.989	39.247
図9-39	26	土器 IVC層	SAK920	13.009	10.161	39.483
図9-39	29	土器 IVC層	SAK168	13.491	9.22	39.229
図9-42	30	土器 V層?	SAK1410	15.705	6.687	37.482
図9-42	31	土器 IVA層	SAK0818	12.819	10.696	39.838
図9-42	33	土器 V層?	SAK1411	15.697	6.672	37.392
図9-42	34	土器 IVC~VA層	SAK0956	12.559	7.708	39.178
図9-42	36	土器 IV層	SAK1388	14.847	5.515	37.034
図9-42	36	土器 IV層	SAK1389	14.652	5.442	37.033
図9-42	36	土器 IV層	SAK1390	14.844	5.435	37.028
図9-42	36	土器 IV層	SAK1392	15.181	5.304	36.999
図9-42	37	土器 IVA層	SAK0960	12.535	7.103	39.235
図9-42	38	土器 IVA層	SAK775	11.575	9.521	40.22
図9-42	40	土器 IV層	SAK039	13.347	9.04	39.432
図9-42	41	土器 IV層	SAK1373	16.329	6.059	37.154
図9-42	43	土器 IVA層	SAK779	11.805	9.998	40.25
図9-42	48	土器 II層	SAK727	12.18	7.749	39.834
図9-42	50	土器 IIB層	SAK746	11.626	7.109	40.11
図9-42	53	土器 II層	SAK0971	8.5	11.293	41.24
図9-47	2	石器 V層	SAK656	13.873	8.175	38.599
図9-49	4	石器 IVC層	SAK150	12.711	8.453	39.302
図9-49	5	石器 IV層	SAK041	12.445	8.608	39.809
図9-49	6	石器 IVC層	SAK0902	12.552	10.513	39.637
図9-49	8	石器 IIA層	SAK702	11.17	9.231	40.703
図9-49	9	石器 IIB層	SAK728	11.648	10.163	40.47
図9-51	12	石材 IVA層	SAK754	11.106	8.912	40.386
図9-51	13	石材 IVC層	SAK0951	13.094	8.17	39.002
図9-52	17	石材 IVB層	SAK0823	11.41	10.542	40.188
図9-52	18	石材 VA層	SAK1092	14.217	10.355	38.952
図9-52	19	石材 IV層?	SAK1430	15.191	5.174	36.921
図9-52	20	石材 IVC層	SAK0885	12.482	10.409	39.695
図9-52	22	石材 VI層	SAK1293	14.701	9.917	38.259
図9-53	23	石材 VI層	SAK697	14.128	8.696	37.918
図9-53	25	石材 IV層	SAK466	13.851	10.258	39.371
図9-53	27	石材 IVC層	SAK1470	15.46	6.068	36.949
図9-53	28	石材 IVC層	SAK1001	13.558	10.123	39.416
図9-54	1	貝器 IVC層	SAK1046	14.14	10.435	39.309
図9-54	3	貝器 IV層	SAK1329	14.516	5.994	37.158
図9-54	4	貝器 IVB層	SAK098	12.562	8.578	39.404
図9-54	5	貝器 IVB層	SAK104	12.328	9.429	39.656
図9-54	6	貝器 IVB層	SAK103	12.481	9.073	39.573
図9-54	10	貝器 IVC層	SAK152	12.844	8.425	39.279
図9-54	11	貝器 IV層	SAK051	12.482	9.581	39.724
図9-54	12	貝器 IVC層	SAK144	12.837	8.952	39.366
図9-56	14	貝器 IVB層	SAK118	12.935	9.416	39.471
図9-56	18	貝器 IVC層	SAK1368	15.481	7.019	37.51
図9-56	19	貝器 IVA層	SAK1455	15.541	5.568	37.29
図9-56	20	貝器 IVC層	SAK0965	13.769	10.409	39.373
図9-56	22	貝器 IV層	SAK467	13.943	9.902	39.299
図9-56	26	貝器 IVC層	SAK145	12.731	8.937	39.379
図9-59	28	貝器 IV層	SAK1432	15.113	5.862	37.053
図9-59	30	貝器 IV層	SAK018	13.782	9.73	39.298
図9-59	35	貝器 II層	SAK1349	14.768	5.137	37.175

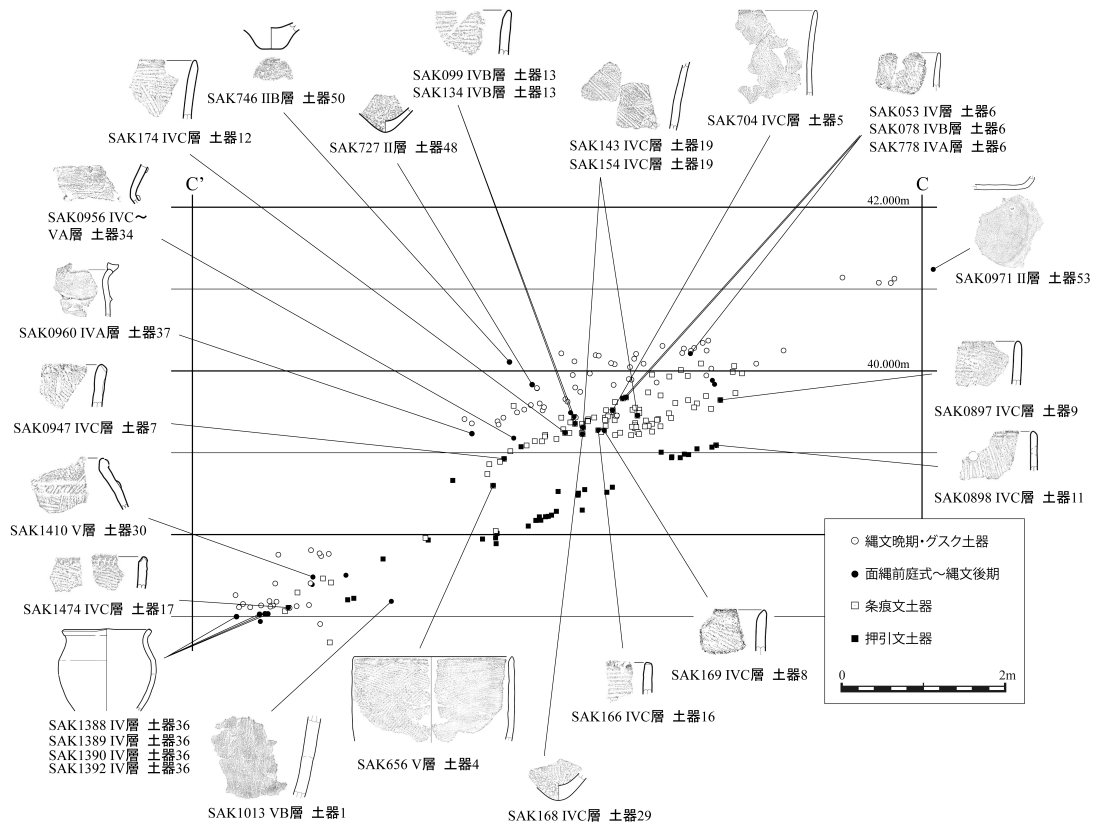


図9-26 調査区II主要遺物（土器）ドットマップ図（立面）

土器のドットマップ図（立面）（図9-35）に合成。土器番号は図9-36～45に対応。

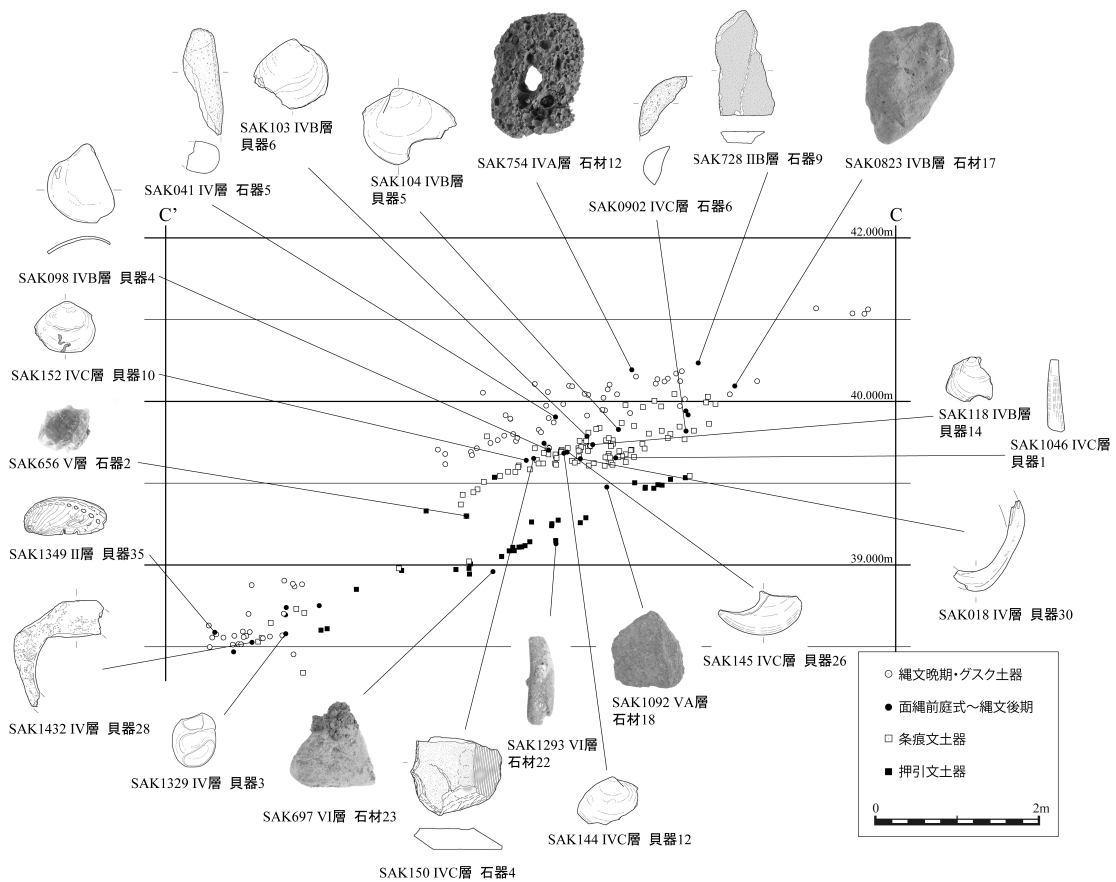


図9-27 調査区II主要遺物（石器・石材、貝器）ドットマップ図（立面）

土器のドットマップ図（立面）（図9-35）に合成。石器・石材、貝器番号は図9-47～60に対応。

4-1 土器

縄文時代早期（相当期）からグスク時代にかけての各時期の土器が出土した。胎土、文様等にもとづいて表9-5のように分類した。また、この分類にもとづいて破片数を出土層ごとに集計した結果（座標記録分のみ）を表9-6に示す。サキタリ洞遺跡では、時期ごとに土器の胎土が顕著に異なるので、小破片であっても分類は比較的容易であった。ただし、面縄前庭式と縄文後期土器、縄文晩期土器とグスク土器については、分類困難なものが含まれるため、表9-6では両者をまとめて計上した。なお各時期の土器胎土については、別稿（山崎・仲里 2016）において分析を行っている。

表9-5 土器の分類

分類	記載
I類 厚手土器	N8区V層下部から1点のみ出土したほか、採集資料がある。厚手の器壁（20～10mm）を特徴とする。いわゆる赤色条線文土器（山崎2017）に相当すると考えられる。色調は赤褐色～赤色で、胎土中に石英等の砂粒を含む。
II類 押引文土器	VB層中から1個体分の破片がまとまって出土した。胴上部に押引文が施される。色調は褐色～赤褐色で、胎土中には粗粒の石英、砂岩片を含む。
III類 条痕文土器	IVC層を中心に100点を越える破片がまとまって出土した。二枚貝の放射肋によると見られる条痕が内外に施される。色調は褐色～赤褐色、黒褐色で、胎土中には粗粒の変成岩片や砂岩片を含む。
IV類 面縄前庭式土器	IVB層とその上下の層準から少量出土した。口縁に並走する刻目隆帯と細い条線を特徴とする。色調は褐色～赤褐色、黒褐色で、胎土中には雲母や石英、斜長石を含む。
V類 縄文後期土器	点数が少なく、小破片ばかりであるが、面縄前庭式と似た出土状況を示す。面縄東洞式に同定できる破片が1点ある。この時期の土器は胎土に石英、チャートを含み、焼成良好で赤っぽい土器が多く特徴的である。
VI類 縄文晩期土器	肥厚口縁、口縁上の突起、小型の底部が特徴的に見られる。仲原式前後の土器と考えられる。明るい色調のものが多く、胎土は粘土質で、胎土中には生砕物（石灰岩片？）や石英、火山ガラスなどが含まれている。
VII類 グスク土器	明確にグスク土器と同定できる資料は少ない。破片では縄文晩期土器との区別が困難である。岩陰囲込墓（SX14）や土器・獣骨集積（SX16）から出土した。胎土はシルト質で、胎土中には石英、火山ガラスなどが含まれている。

表9-6 土器集計表（座標記録分のみ）

	VB	VA	V	IVC	IVB	IVA	IV	II	合計
I類 厚手土器	1 ※V層下層								1
II類 押引文	25	3	5						33
III類 条痕文	3		2	66	24		4		99
IV類 面縄前庭 V類 縄文後期				1		2	4		7
VI類 縄文晩期 VII類 グスク				1	6	32	14	16	69
合計	28	3	7	68	30	34	22	16	208

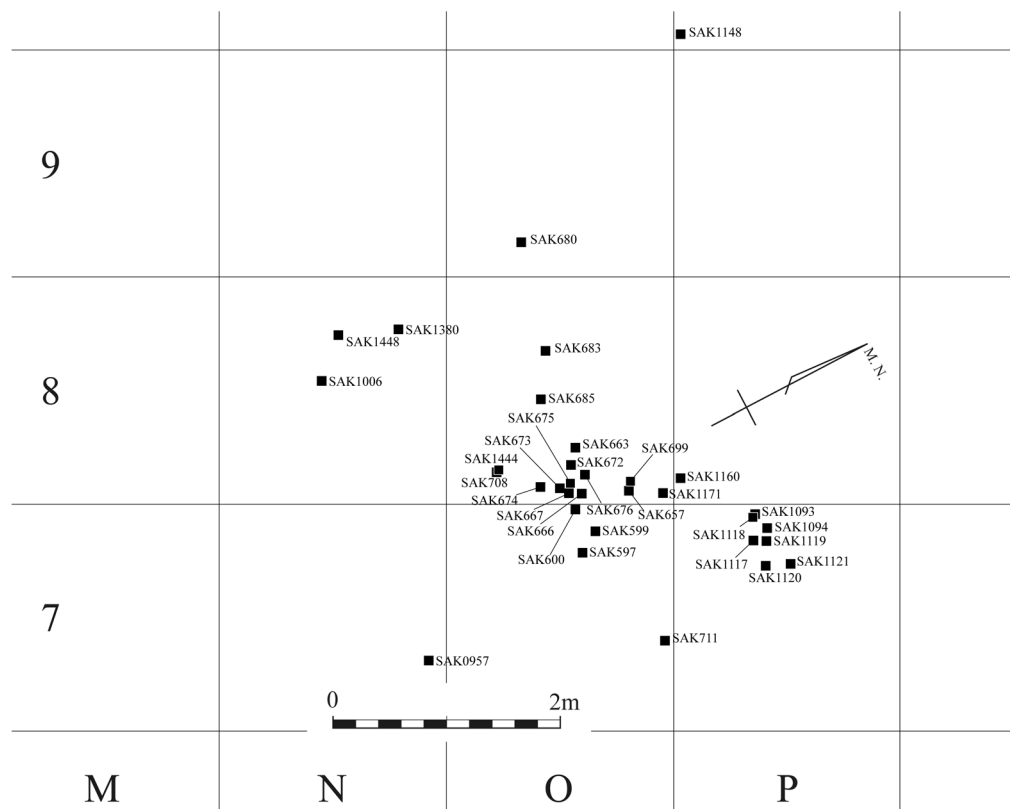


図9-28 調査区Ⅱ・Ⅱ類（押引文）土器ドットマップ図（平面）

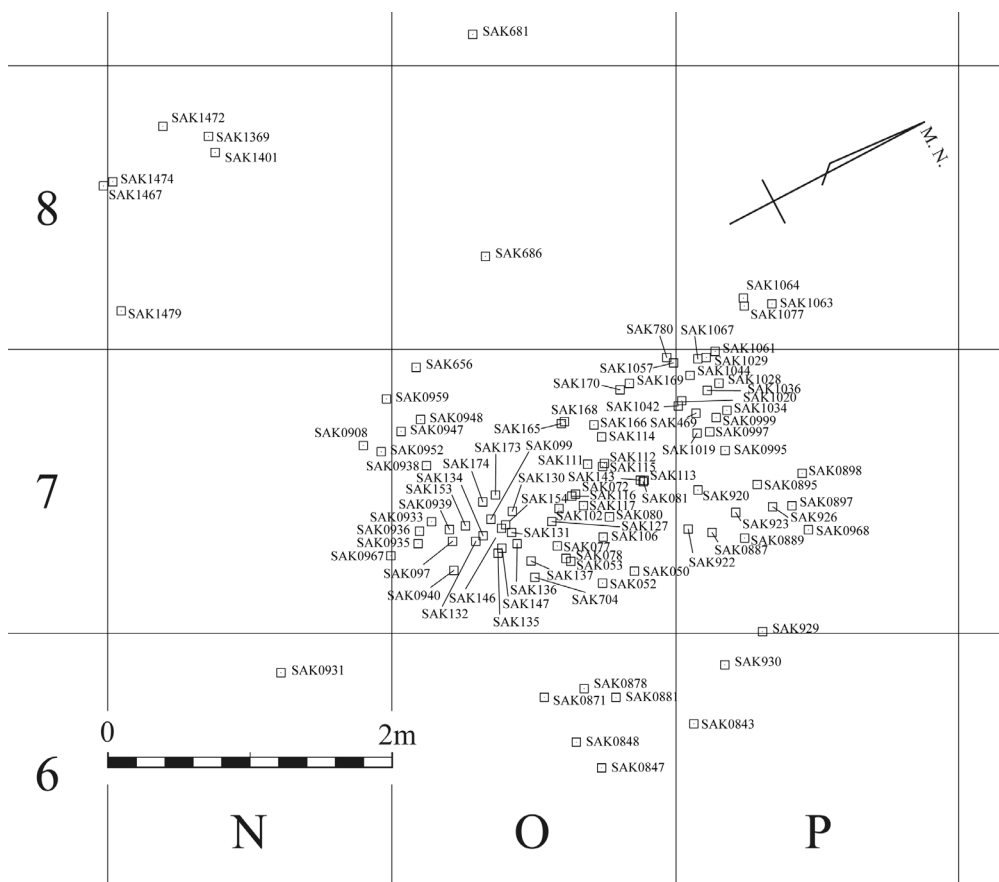


図9-29 調査区Ⅱ・Ⅲ類（条痕文）土器ドットマップ図（平面）

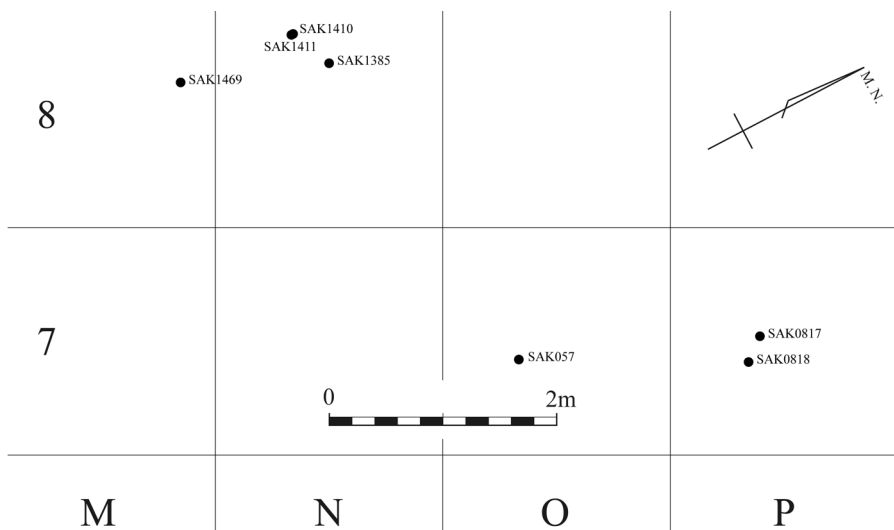


図9-30 調査区Ⅱ・Ⅳ類（面縄前庭式）・Ⅴ類（縄文後期）土器ドットマップ図（平面）

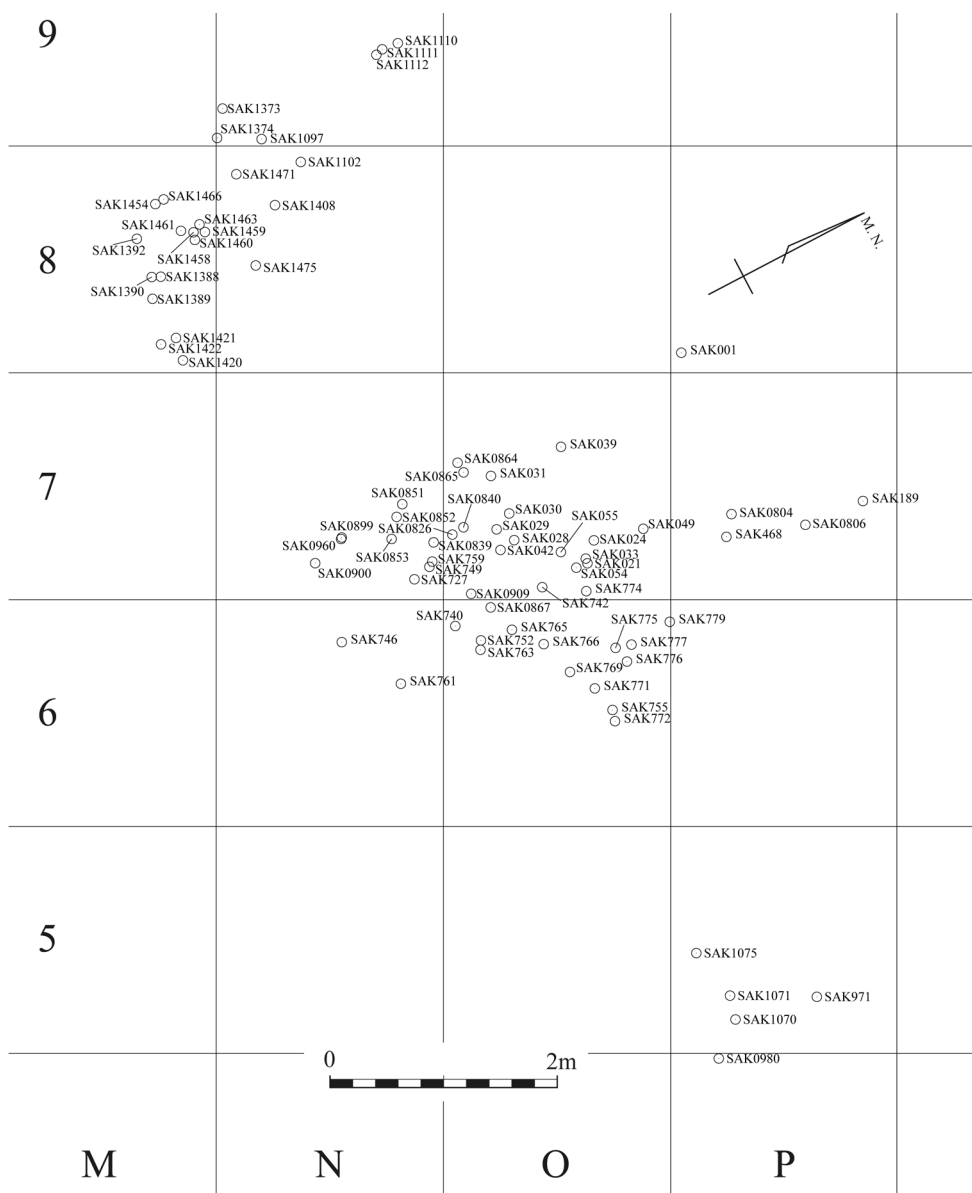


図9-31 調査区Ⅱ・Ⅵ類（縄文晩期）・Ⅶ類（グスク）土器ドットマップ図（平面）

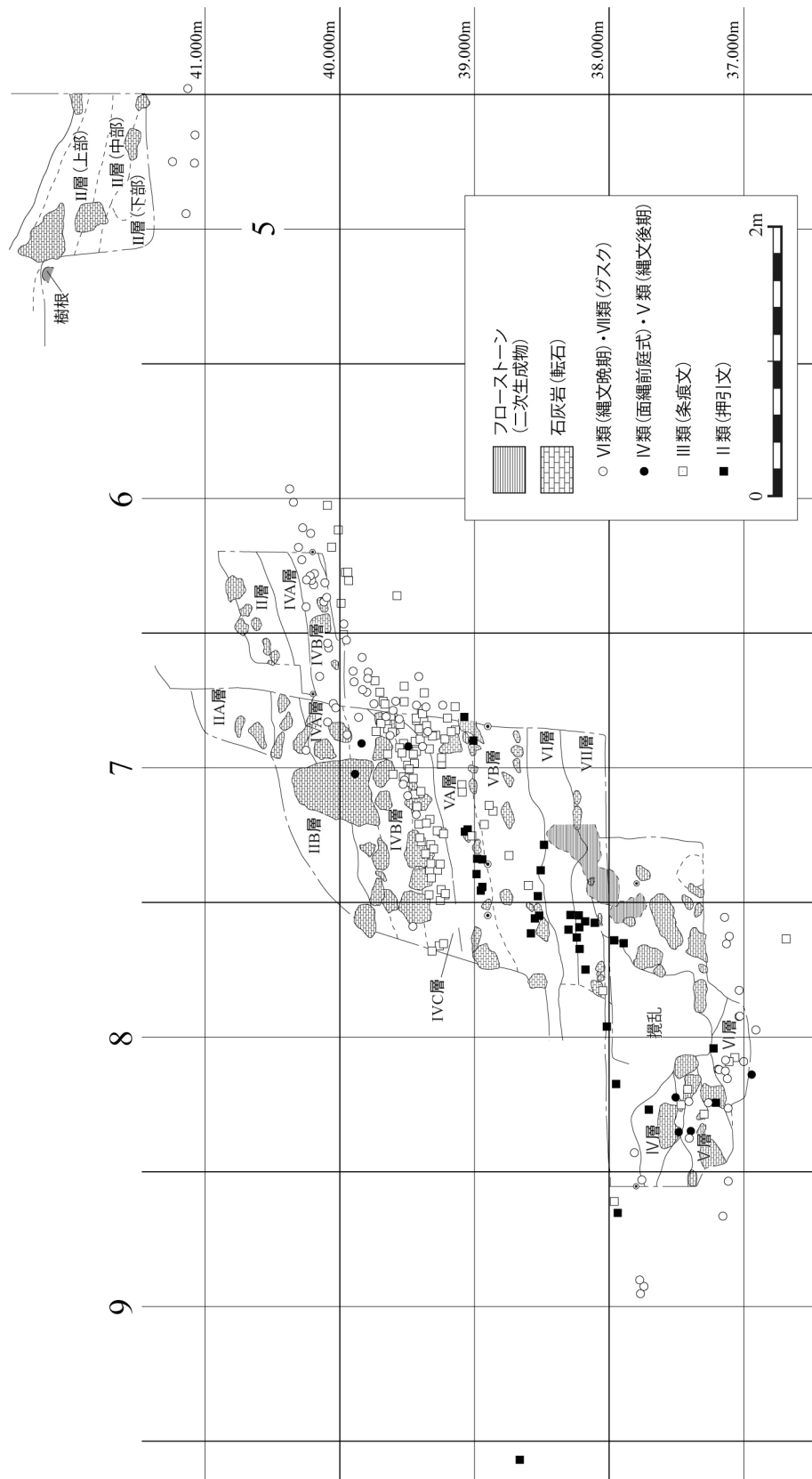


図9-32 調査区II各時期土器ドットマップ図（東西立面）

06・7・8区北壁、P5区北壁、N8区北壁への投影図。

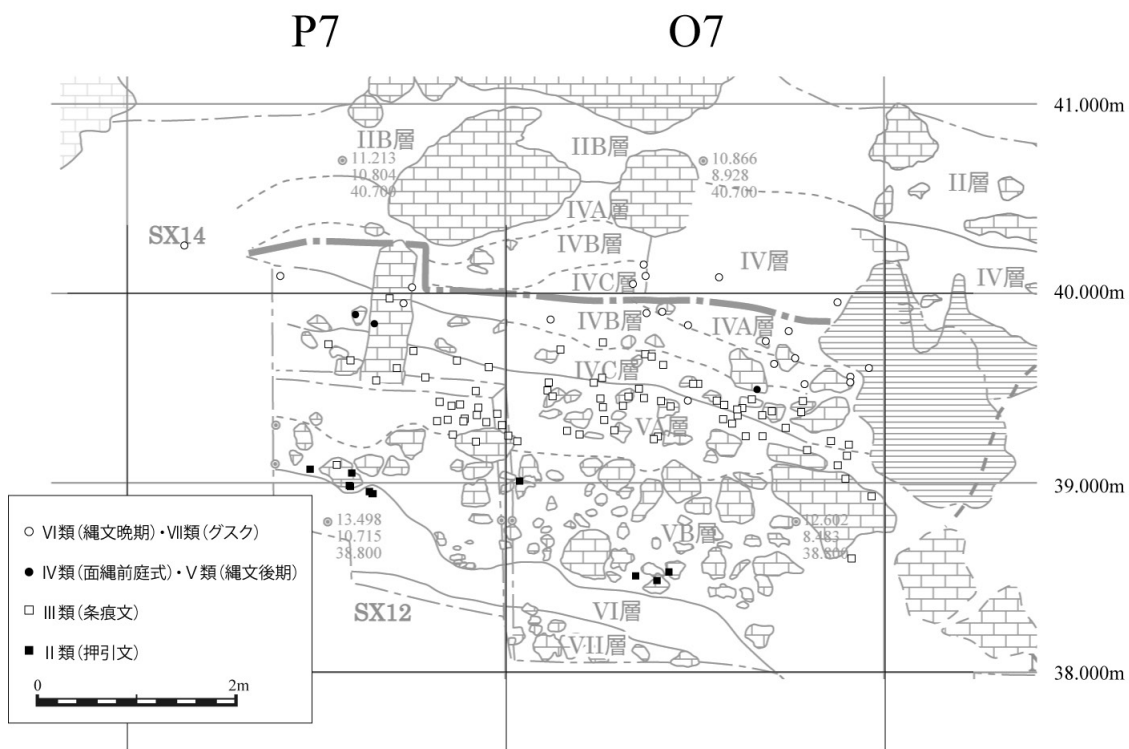


図9-33 調査区II各時期土器ドットマップ図 (O・P7区南北立面)
O・P7区東壁への投影図。

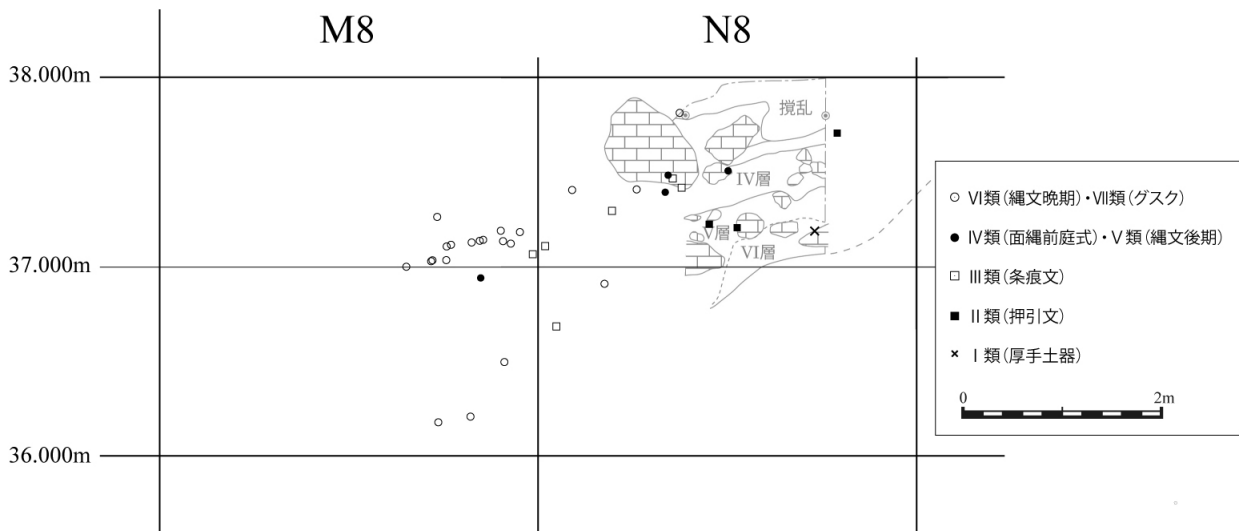


図9-34 調査区II各時期土器ドットマップ図 (M・N8区南北立面)
N8区西壁への投影図。M8区には開口部があり、堆積層はそこに向かって傾斜している。

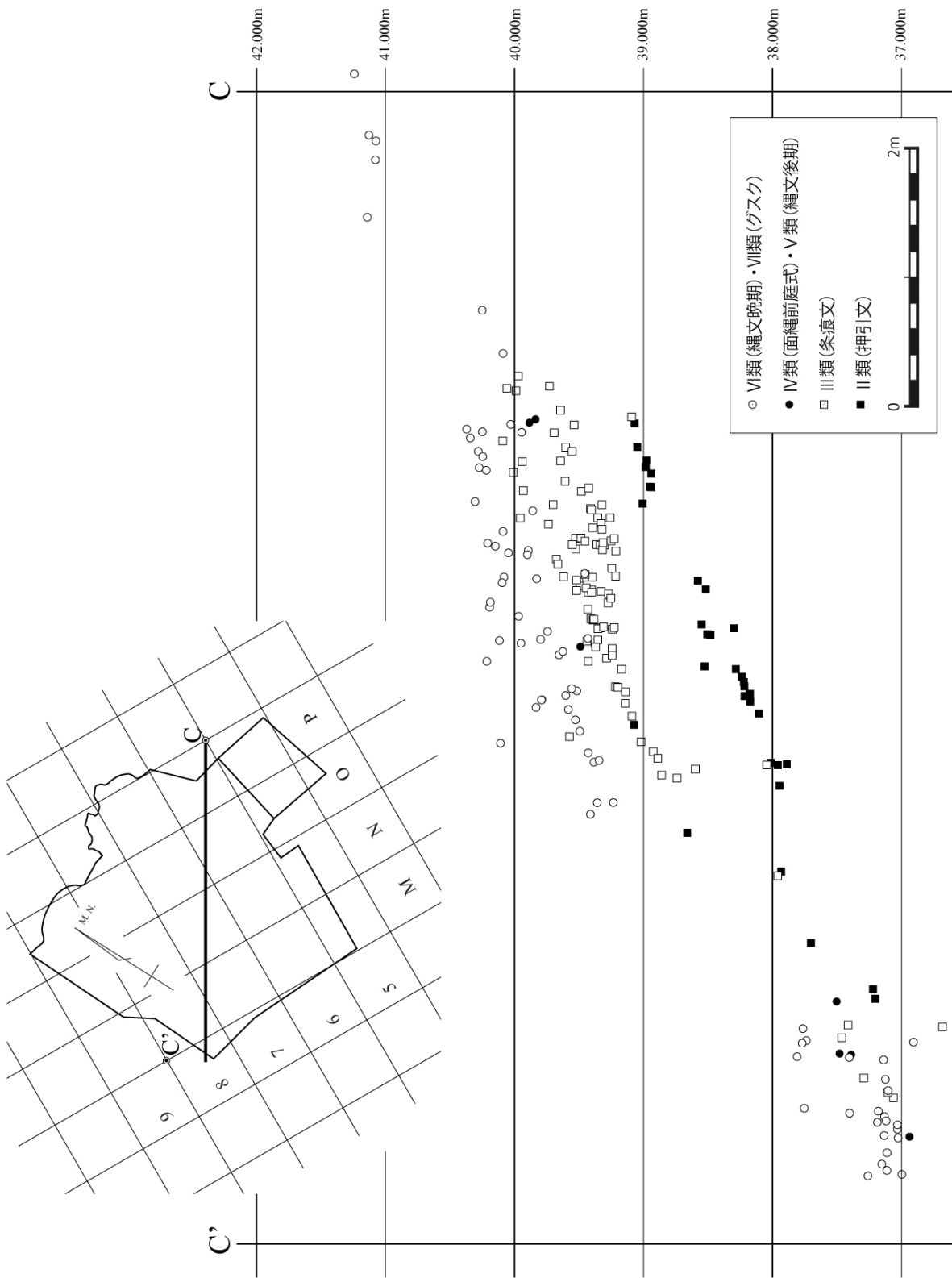


図9-35 調査区II各時期土器ドットマップ図 (東西立面)

グリッド軸 (X軸) に対して反時計周りに60度回転した軸線への投影図。

各時期の土器の出土状況は、おおよそ層位と整合的であり、放射性炭素年代も既存の編年と矛盾のない結果が得られている。分類群ごとのドットマップ図（平面・立面）を図9-28～35に示す。各分類群ごとの平面分布を見ると（図9-28～31）、年代を追って分布が南側に移動している様子が観察できる。また層位関係については、グリッドに沿った東西方向の立面図（図9-32）では、南北方向の傾斜の影響で分類群ごとのまとまりが識別しづらいため、O・P7区とM・N8区については別途南北方向の立面図を示した（図9-33、34）。加えて、グリッド軸（X軸）に対して反時計回りに60度回転した軸線に投影した立面図を図9-35に示した。

図9-36～45には出土土器の実測図と写真を示し、リストを表9-7に示す。

Ⅰ類 厚手土器（図9-36・37：1・2,表9-7）

N8区V層下部から1点のみ出土したほか、採集資料がある。いわゆる赤色条線文土器（山崎2017c）に相当すると考えられるが、サキタリ洞遺跡出土品には文様が確認できない。

1は焼締まりのあまり良くない土器で、器壁の厚さは約20mmと非常に厚手である。色調、胎土はティーラガマ遺跡（南城市）や藪地洞穴遺跡（うるま市）の赤色条線文土器とはやや異なる。伴出した炭化物から8670 ¹⁴C BP（PLD-24996）と3205 ¹⁴C BP（PLD-24995）の二つの年代が得られているが、後者は二次的混入の可能性が高い。2は採集資料で塊形になると思われ、焼成良好である。

Ⅱ類 押引文土器（図9-36・37：3、表9-7）

3は押引文土器で、従来沖縄では知られていなかった新発見の土器型式である。VB層中から1個体分の破片がまとまって出土した。40～50片ほどの破片になっており、径4～5mほどのやや

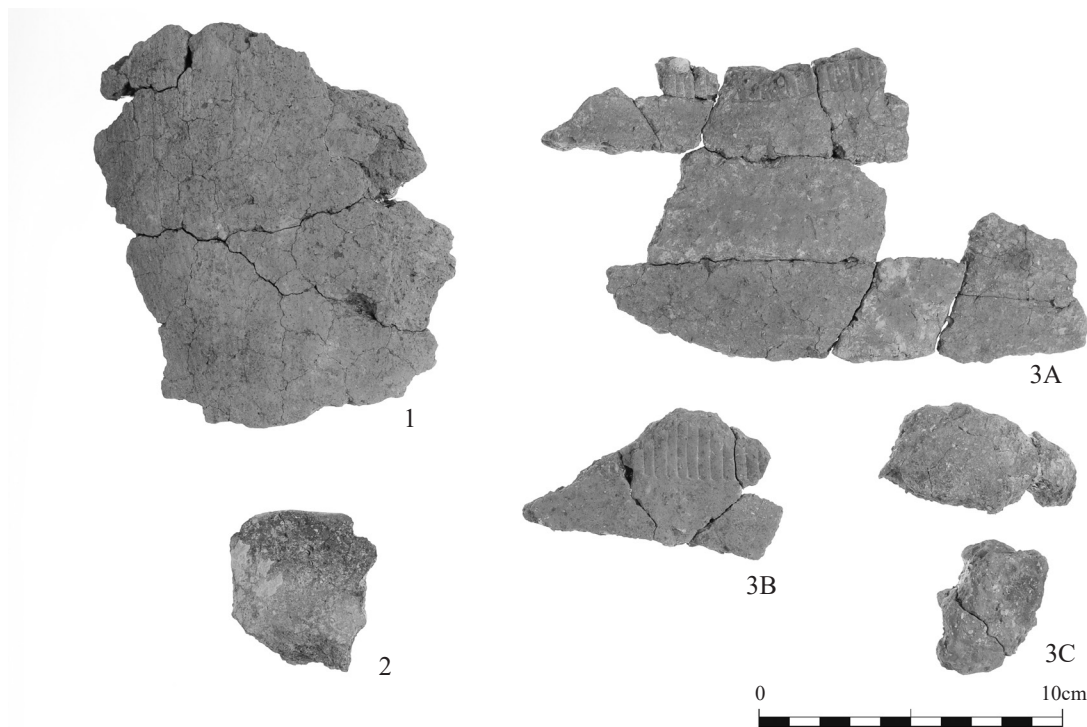


図9-36 調査区Ⅱ出土土器写真（1）

2のみ採集品。

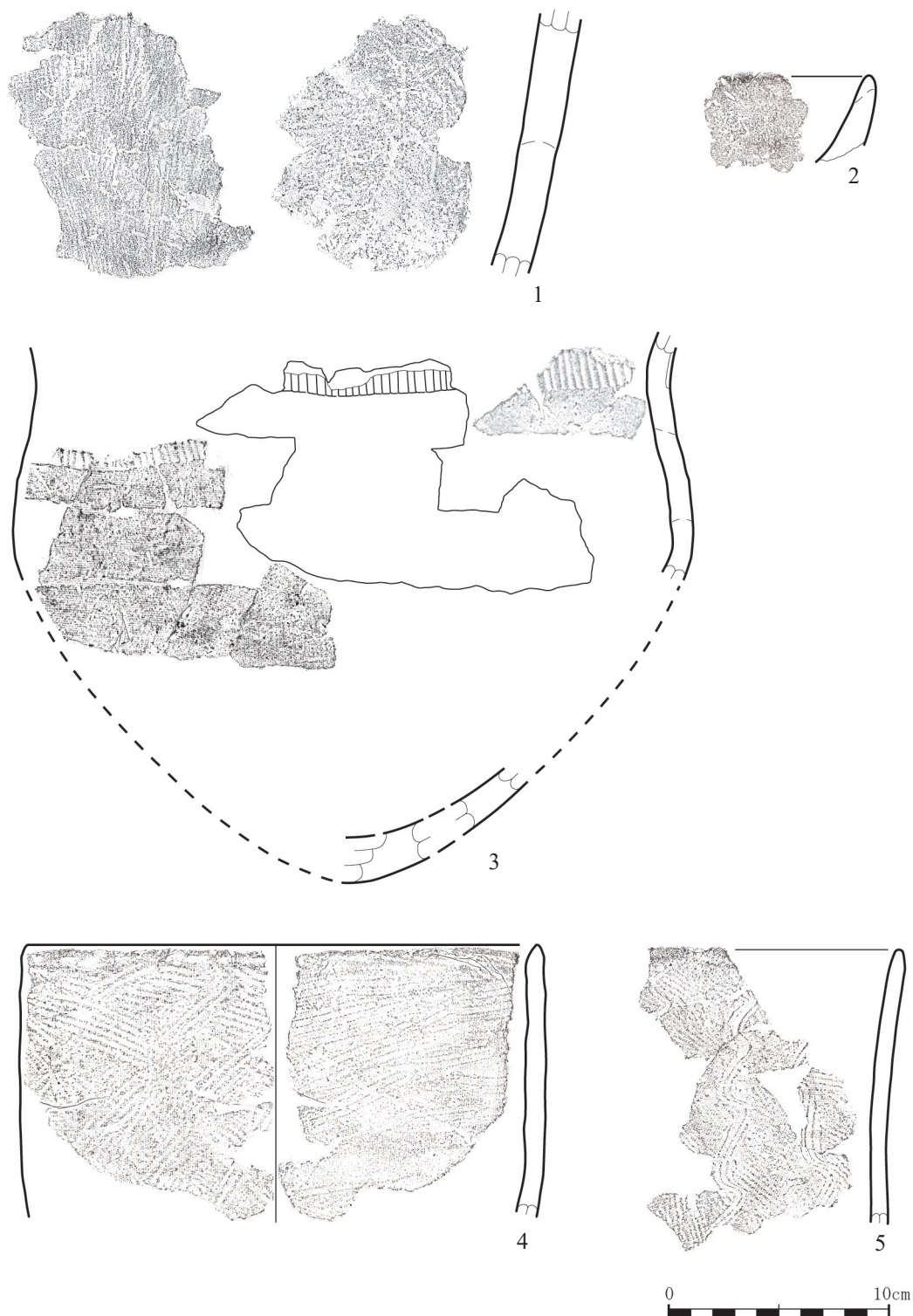


図9-37 調査区II出土土器実測図(1)
2のみ採集品。

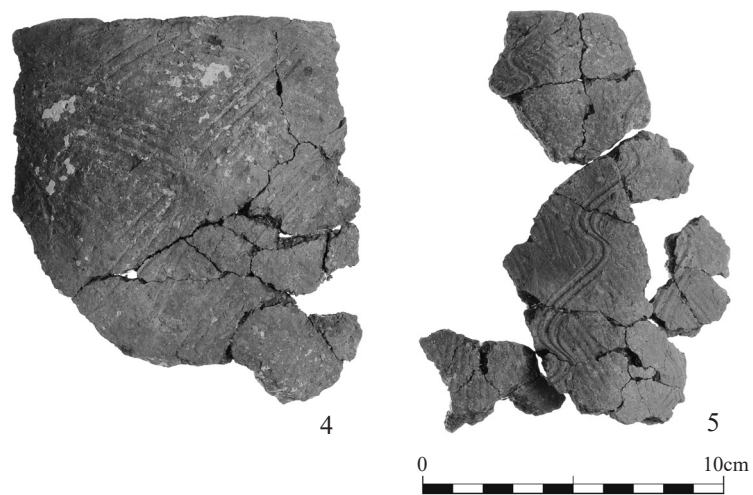


図9-38 調査区II出土土器写真(2)

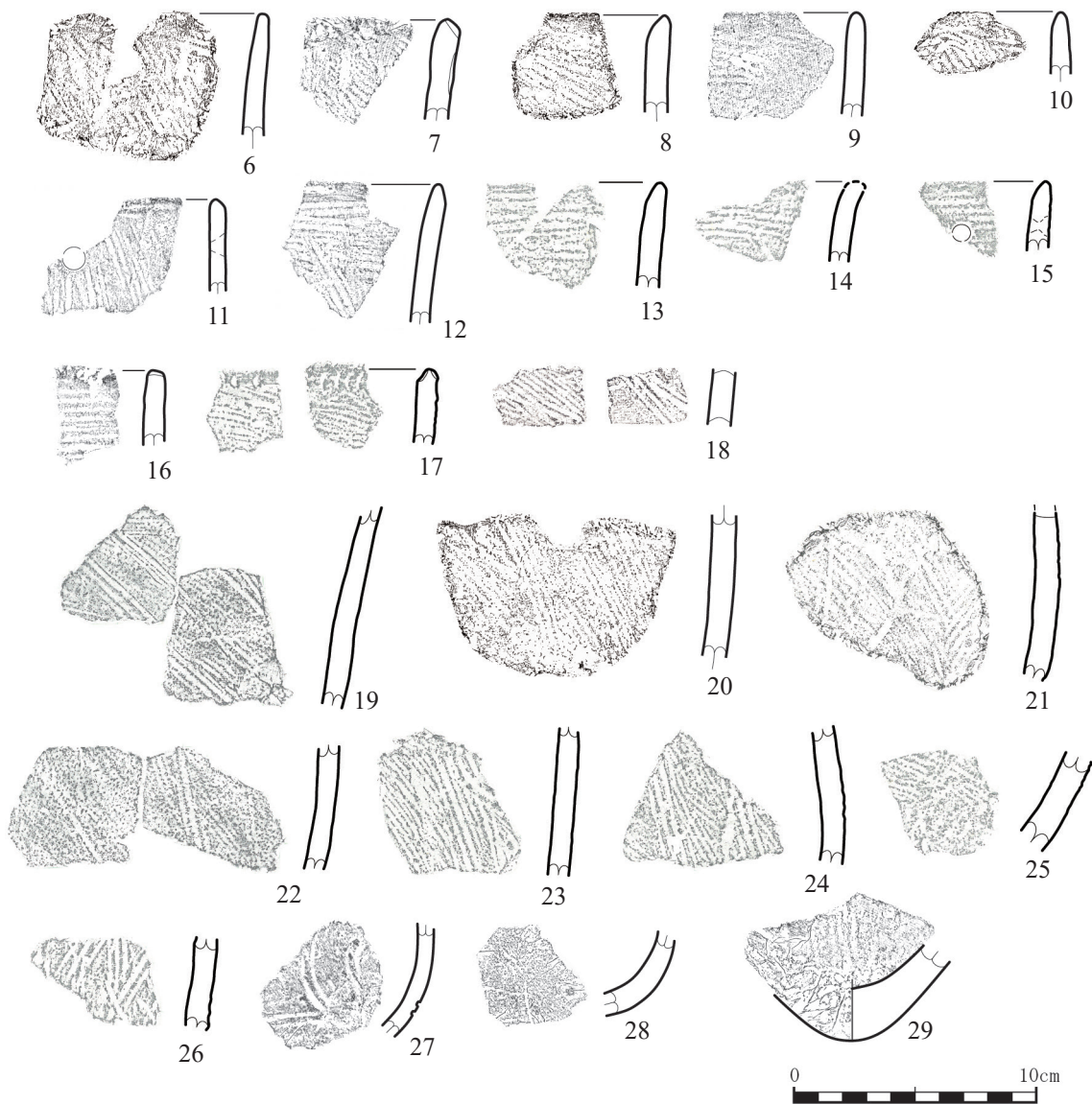


図9-39 調査区II出土土器実測図(2)

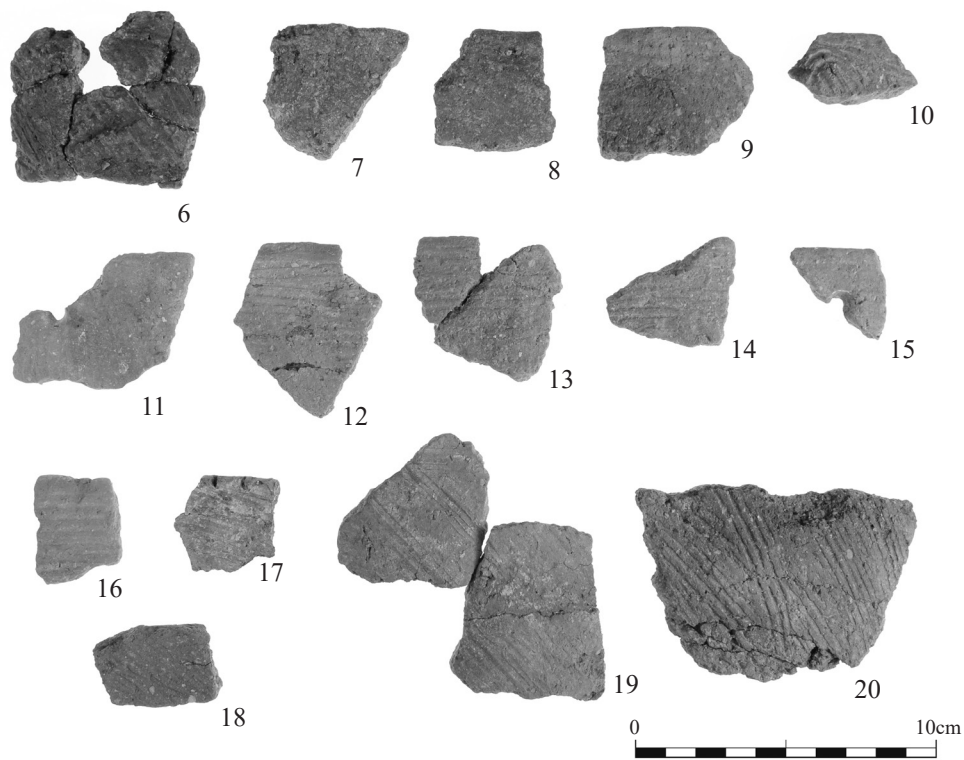


図9-40 調査区II出土土器写真(3)

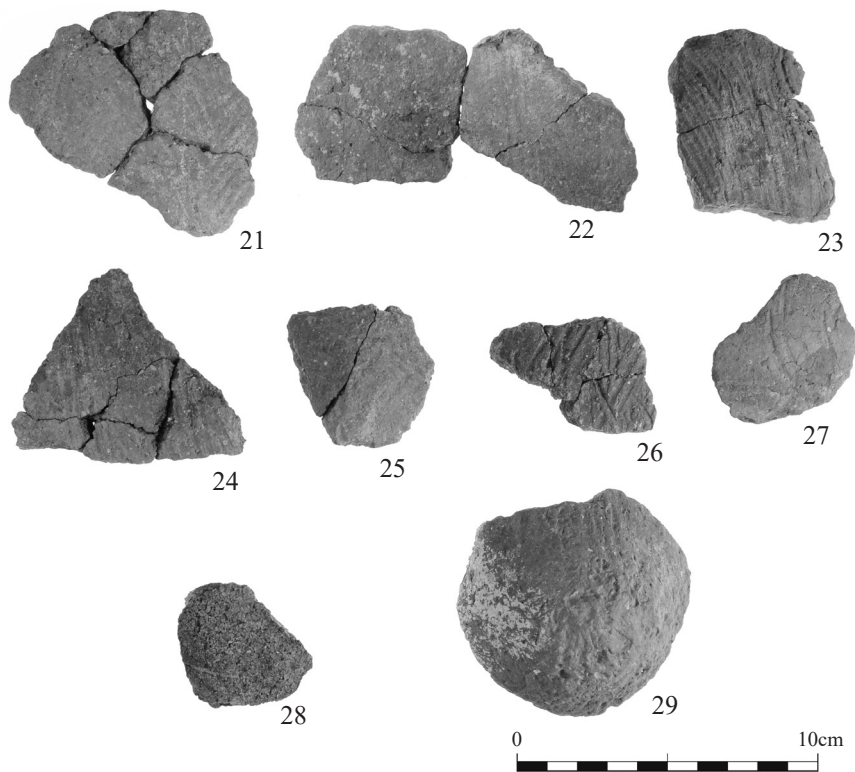


図9-41 調査区II出土土器写真(4)

第9章 調査区Ⅱ

広い範囲に拡散していた。破片はおおむね小さく保存状態は悪い。色調は褐色～赤褐色で、口縁部は明確でないが、底部と推定できる破片がある。胴上部に間隔の狭い押引文が施される。施文具は板状の工具と思われ、幅は2cm以上と大型である。焼締まりの悪い厚手の土器で、胎土中には粗粒の石英、砂岩片を含む。

なお、今回図示できなかったが、調査区ⅠのFS層中からも、押引文土器によく似た胎土、焼成の無文の土器片が少量出土しており、注目される。

Ⅲ類 条痕文土器（図9-37～41：4～29、表9-7）

ⅣC層を中心に100点を越える破片がまとまって出土した。色調は褐色～赤褐色、黒褐色で、胎土中には粗粒の変成岩片や砂岩片を含む。二枚貝の放射肋によると見られる条痕が内外に施される。幅の狭い原体で斜格子状（鋸歯状）（4、19、21）、波状（5）の条痕を施すものがあり、この種のもは九州の縄文時代前期末の轟C・D式に関連するものと考えられる（山崎2017b）。口縁端に刻み目のあるものとなないものがあり、後者が多い。口縁内面に刺突文のあるもの（17）、条痕による施文のあるものがみられる（18）。27は二条単位の弧状の施文が見られるもので、この種の土器としてはやや特異である。28は丸底の破片と思われ、やや異質な胎土である。29は厚みのある尖底で、条痕文土器に一般的な底部形態である。

Ⅳ類 面縄前庭式土器（図9-42・43：30～33、表9-7）

30～33は面縄前庭式に同定できる土器片で、ⅣB層とその上下の層準から少量出土した。図示できないが、調査区ⅠのFS層中からもこの時期の土器片が出土している。面縄前庭式は、近隣の武芸洞遺跡や宇和川原半洞穴遺跡でも出土しており、この時期には洞穴や岩陰が好んで利用されたようである。

Ⅴ類 縄文後期土器（図9-42・43：34・35、表9-7）

34は縄文後期の土器と見られるが、型式不明である。屈曲する器形で、3箇所にかろうじて貼付文が残る。35は肥厚した口縁部に密な押引文が施されるもので、面縄東洞式土器に同定できる。

Ⅵ類 縄文晩期土器（図9-42～44：36～51、表9-7）

ⅣA層を中心に100点ほどの破片が得られている。肥厚口縁（36～40）、口縁上の突起（36、37、39）、小型の底部（49～51）が特徴的に見られ、仲原式前後の土器と考えられる。ⅣA層からは3200～2500年前の放射性炭素年代が得られている。明るい色調のものが多く、胎土は粘土質で、胎土中には生砕物（石灰岩片？）や石英、火山ガラスなどが含まれている。小破片ではグスク土器との区別は難しい。

36はM8区付近からまとまって出土した小型の鉢形土器で、胎土中には角閃石と見られる針状の鉱物を特徴的に含んでいる。周辺からは貝輪や人骨も出土しており、あるいは供献品だったかも知れない。この土器に付着していた土壌中の炭化物（土器付着炭化物ではない）から2770¹⁴C BP（MTC-17927）、2580¹⁴C BP（MTC-17928）の放射性炭素年代が得られている（分析・考察編Ⅷ）。

Ⅶ類 グスク土器（図9-42・45：52・53、表9-7）

明確にグスク土器と同定できる資料は少なく、破片では縄文晩期土器との区別が困難である。52

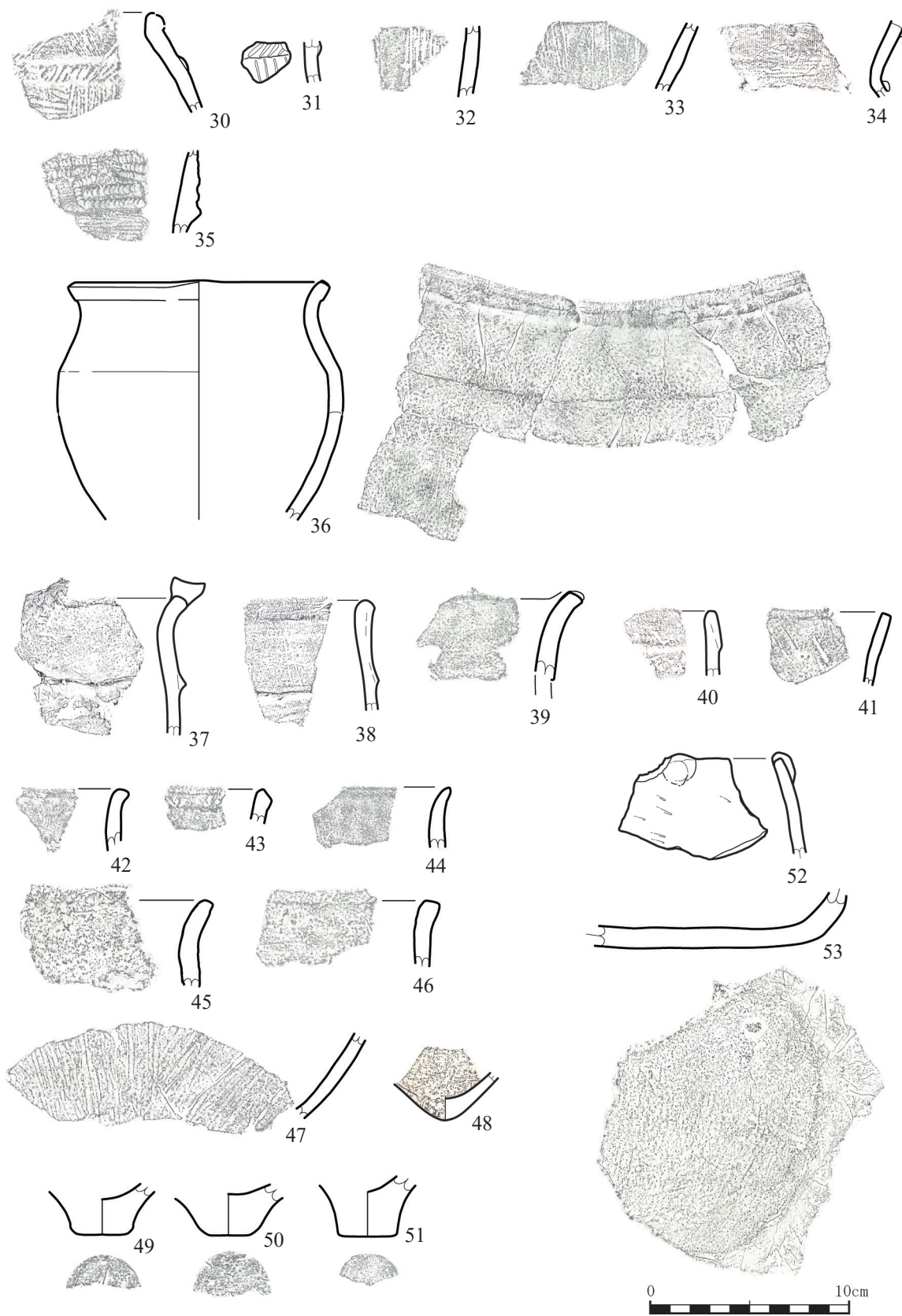


图9-42 調査区II出土土器実測図(3)

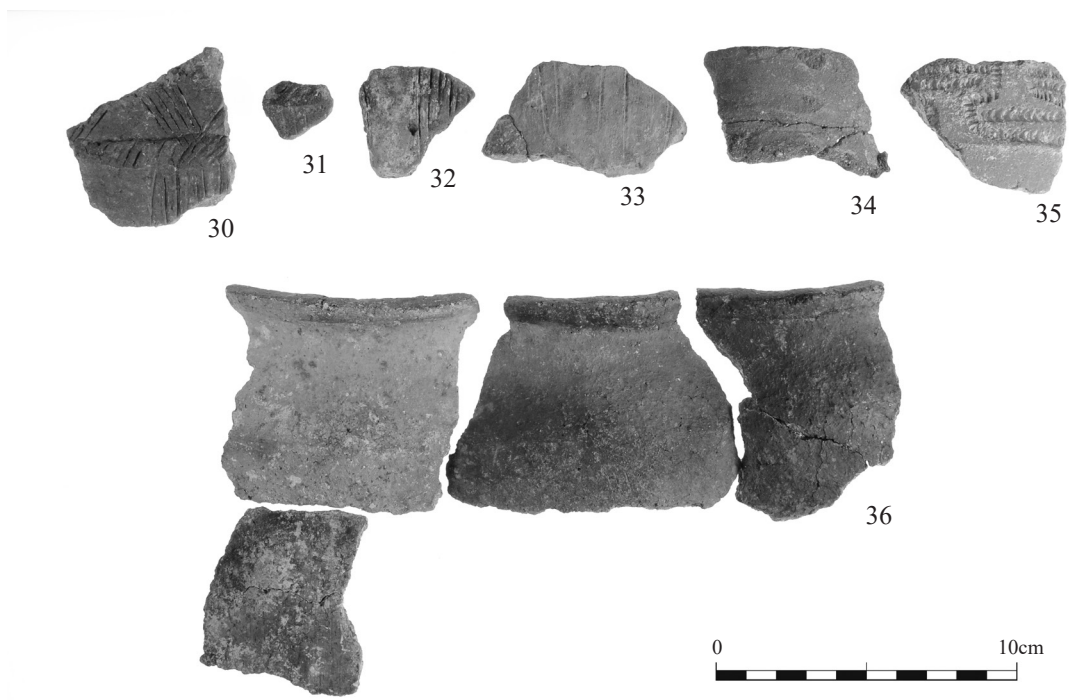


図9-43 調査区Ⅱ出土土器写真(5)

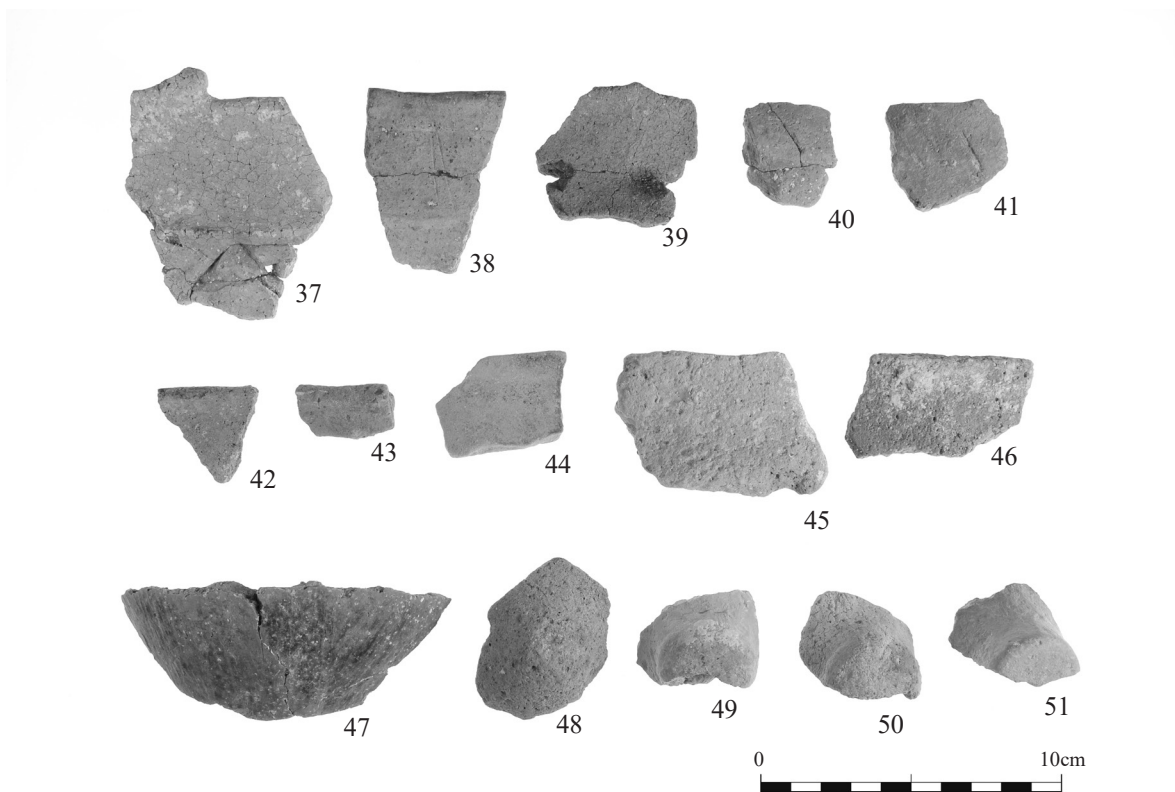


図9-44 調査区Ⅱ出土土器写真(6)

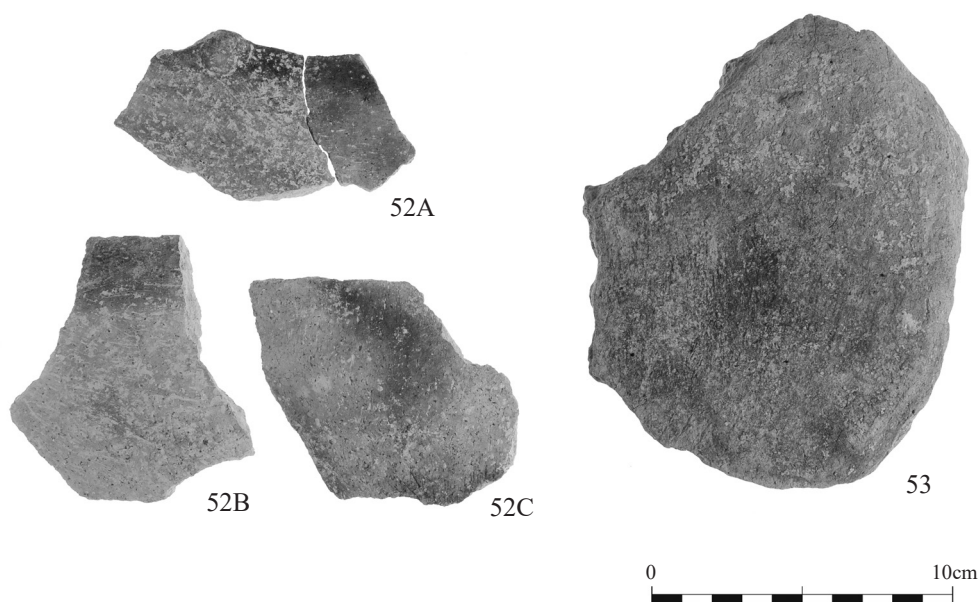


図9-45 調査区II出土土器写真(7)

表9-7 調査区II出土土器リスト(2のみ採集品)

No.	図	地点	層	番号	分類	部位	色調	厚さ (mm)	文様	備考
1	図9-37	調査区II	V	SAK1013	I類	胴部	明赤褐色	19.0		内外擦痕
2	図9-37	調査区I 周辺	表面採集		I類?	口縁部	赤色	14.5		碗形土器
3	図9-37	調査区II	VB	SAK661、SAK667、 SAK673、SAK675、 SAK1501ほか	II類	胴部	明赤褐色	10.0		胴径28cm
4	図9-37	調査区II	V?	SAK656	III類	口縁部	褐色	9.0	条痕文 (格子状)	口径23cm
5	図9-37	調査区II	IVC	SAK704	III類	口縁部	褐色	7.0	条痕文 (縦位波状)	
6	図9-39	調査区II	IVA IVB	SAK053、SAK078、SAK778	III類	口縁部	黒褐色	8.0	条痕文	
7	図9-39	調査区II	IVC	SAK947	III類	口縁部	暗褐色	9.0	口端刻み、口縁 下縦位、短線 文?、条痕文	
8	図9-39	調査区II	IVC	SAK169	III類	口縁部	褐色	8.5	条痕文	
9	図9-39	調査区II	IVC	SAK897	III類	口縁部	褐色	8.7	条痕文	
10	図9-39	調査区II 07	IVC		III類	口縁部	褐色	7.5	条痕文	
11	図9-39	調査区II	IVC	SAK898	III類	口縁部	黄褐色	7.0	条痕文	焼成後穿孔
12	図9-39	調査区II	IVC	SAK174	III類	口縁部	明赤褐色	8.5	条痕文	
13	図9-39	調査区II	IVB	SAK134、SAK099	III類	口縁部	明赤褐色	8.9	条痕文	13~15は 同一個体か
14	図9-39	調査区II 07	IVC		III類	口縁部	明赤褐色	8.1	条痕文	13~15は 同一個体か
15	図9-39	調査区II 07	崩落土		III類	口縁部	明赤褐色	8.5	条痕文	13~15は 同一個体か 焼成後穿孔
16	図9-39	調査区II	IVC	SAK166	III類	口縁部	黄褐色	9.0	口端貝殻、腹縁 刺突、条痕文	
17	図9-39	調査区II	IVC	SAK1474	III類	口縁部	にぶい褐色	7.9	口端外面刻み 口縁内面C字形 爪形文、条痕文	
18	図9-39	調査区II 07	IVB		III類	胴部	赤褐色	10.0	内文?	
19	図9-39	調査区II	IVC	SAK143、SAK154	III類	胴部	褐色	8.4	条痕文	
20	図9-39	調査区II	IVC	SAK1042	III類	胴部	褐色	9.0	条痕文	
21	図9-39	調査区II	IVB IVC	SAK113、SAK170	III類	胴部	明赤褐色	9.8	条痕文 (鋸齒状)	
22	図9-39	調査区II	IVC	SAK933	III類	胴部	にぶい褐色	8.2	条痕文	磨滅
23	図9-39	調査区II	IVC~V	SAK1369、SAK1401	III類	胴部	褐色	8.6	条痕文	
24	図9-39	調査区II	IVC	SAK146	III類	胴部	褐色	9.0	条痕文	
25	図9-39	調査区II	IVC	SAK1057	III類	胴部	褐色	12.8	条痕文	
26	図9-39	調査区II	IVC	SAK920	III類	胴部	黒褐色	8.6	条痕文 (鋸齒状)	
27	図9-39	調査区II 07	IVC		III類	胴部	にぶい黄褐色	7.0	ナデ 条線文	

表9-7 調査区II出土土器リスト (続き)

No.	図	地点	層	番号	分類	部位	色調	厚さ (mm)	文様	備考
28	図9-39	調査区II 07	IVC		III類?	底部	黒褐色	7.0	ナデ	鉋物粒を 多く含む胎土
29	図9-39	調査区II	IVC	SAK168	III類	底部	にぶい赤褐色	12.5		外面アバタ状 の窪み顕著
30	図9-42	調査区II	IV	SAK1410	IV類	口縁部	黒褐色	8.2	条線文 隆線上刻み	
31	図9-42	調査区II	IVA	SAK818	IV類	胴部	黒褐色	6.2	条線文 隆線上刻み	
32	図9-42	調査区II	トラパー チン中		IV類	胴部	褐色	7.2	条線文	
33	図9-42	調査区II	IV	SAK1411	IV類	胴部	にぶい赤褐色	6.8	条線文	
34	図9-42	調査区II	IVC	SAK956	型式不明	胴部	赤褐色	7.7	貼付文3カ所	
35	図9-42	調査区II MS	IV?		V類	口縁部	赤色	6.8	押引文	面縄前庭式
36	図9-42	調査区II	IV	SAK1388、SAK1389 SAK1390、SAK1392	VI類	口縁部	黒褐色～ にぶい褐色			突起は4単位 ではない 口径13cm
37	図9-42	調査区II	IVA	SAK960	VI類	口縁部	にぶい黄褐色	7.0	リボン状突起 口縁下貼付文	
38	図9-42	調査区II	IVA	SAK775	VI類	口縁部	にぶい黄褐色	7.0	縦位刻線?	
39	図9-42	調査区II NG	IVA		VI類	口縁部	橙色	9.2		
40	図9-42	調査区II	IVA	SAK039	VI類	口縁部	にぶい橙色	7.7		
41	図9-42	調査区II	IV	SAK1373	VI類	口縁部	灰褐色	5.4	口縁下斜線文	
42	図9-42	調査区II MS	流土		VI類	口縁部	橙色	7.0		
43	図9-42	調査区II	IVA	SAK779	VI類	口縁部	橙色	6.3		
44	図9-42	調査区II MS	II		VI類	口縁部	にぶい黄褐色	7.7		グスク土器?
45	図9-42	調査区II MS	IV		VI類	口縁部	にぶい黄褐色	8.7		
46	図9-42	調査区II MS	IV		VI類	口縁部	明赤褐色	7.0		
47	図9-42	調査区II MS	IVA		VI類	胴部	にぶい赤褐色	7.0		
48	図9-42	調査区II	II	SAK727	VI類	底部	明褐色	5.0		
49	図9-42	調査区II	I		VI類	底部	橙色	19.7		
50	図9-42	調査区II	II B	SAK746	VI類	底部	橙色	20.6		
51	図9-42	調査区II NS	I		VI類	底部	橙色	22.2		
52	図9-42	調査区II	II	SX14-③	VII類	口縁部	にぶい黄褐色	5.7	口端貼付文	年代測定試料 (PLD-25000)と 同一個体
53	図9-42	調査区II	II	SX16 SAK971	VII類	底部	にぶい黄褐色	11.3		

は岩陰囲込墓 (SX14) に伴った土器で、付着炭化物から 995 ¹⁴C BP (PLD-25000) の放射性炭素年代が得られている。53 は土器・獣骨集積 (SX16) から出土した底部片。

4-2 焼成粘土塊・土製品? (図9-46、表9-8)

性格不明の焼成粘土塊や、土製品と考えられる資料がIV層を中心に少量出土している。

4-3 石器・石材 (図9-47～53、表9-9)

土器や貝器に比較して、石器の出土数は非常に少ない。特段の加工は見られないが、人為的搬入品と考えられる石材や軽石、サンゴなども出土しており、ここであわせて報告する。

1～3はチャート製の小型の打製石器。1は楔形石器、2は石核と考えられる。2、3は条痕文土器に伴う。4は一部に打ち欠きの見られる砂岩礫で、赤色物の付着が認められる (分析・考察編X参照)。IV C層出土。5は磨製石斧の基部と考えられるもので、IV A層出土。6は石灰岩製の磨石類と考えられるもので、IV C層出土。7～9は粗粒の砥石でII層から出土した。10は調査区IIの造成土中から出土した石斧で、磨製石斧から打製石斧への変形が観察できる興味深い資料である。11はジャマシチーサキタリ洞間の雄樋川河岸 (右岸) に堆積した粘土層中から採取された敲石で、周囲に研磨が見られ磨製石斧の転用品と思われる。採集時の状況を図9-48に示す。12、13は軽石で、特段の加工はないが、人為的に持ち込まれたものと見られる。14～23は加工の見られない石材で、さまざまな石質のものがある。18はV A層、22はVI層から出土した。20、23は島尻

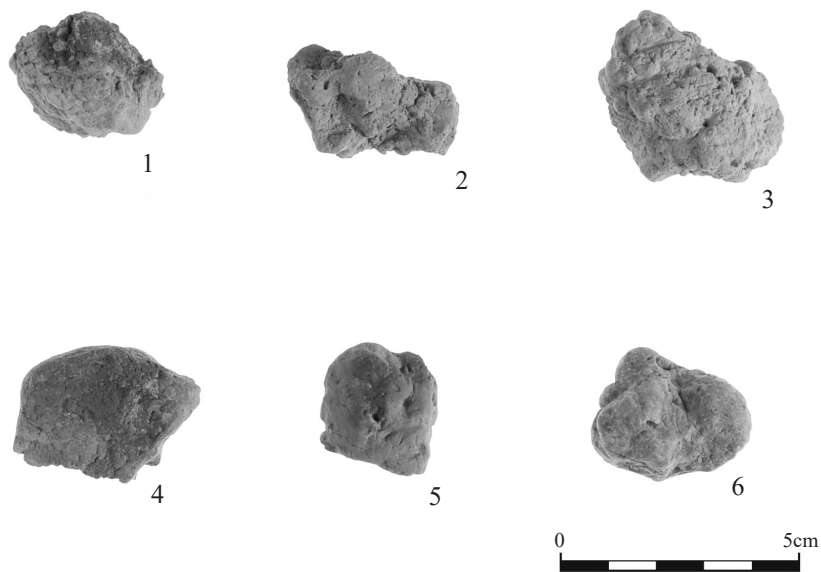


図9-46 調査区II出土焼成粘土塊・土製品?写真

表9-8 調査区II出土焼成粘土塊・土製品?リスト

No.	図	地点	層	番号	分類	色調	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	図9-46	調査区II N8・9	I		焼成粘土塊	橙色	29.7	22.3	22.7	10.3	
2	図9-46	調査区II M8	IV		焼成粘土塊	橙色	36.0	22.3	23.0	10.1	
3	図9-46	調査区II	II B	SAK092	焼成粘土塊	にぶい橙色	40.5	30.2	23.8	16.7	
4	図9-46	調査区II 07	IV C		土製品?	橙色	35.5	26.3	12.6	10.0	表・側面 滑らか
5	図9-46	調査区II M8	IV C		焼成粘土塊	橙色	24.1	23.4	12.2	6.4	
6	図9-46	調査区II	VB	SAK682	焼成粘土塊	橙色	31.1	26.9	19.2	13.1	

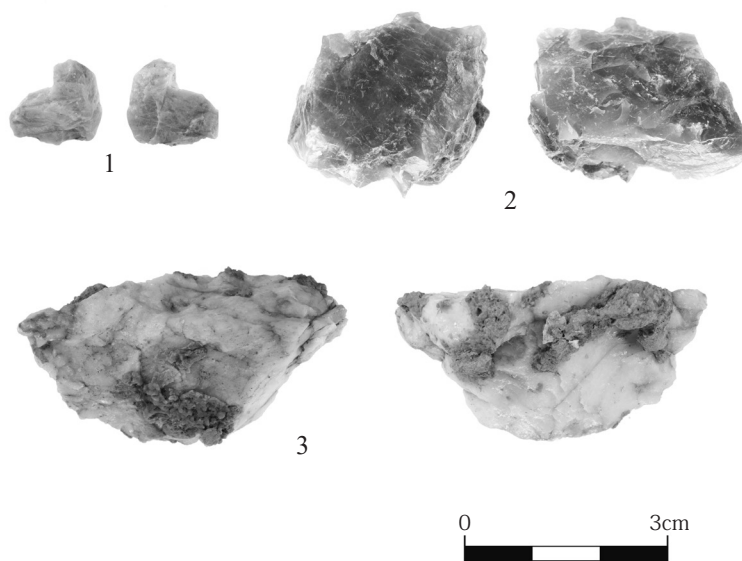


図9-47 調査区II出土石器・石材写真(1)



図9-48 雄樋川河岸（右岸）敲石（図9-49：11）採集時の状況写真

表9-9 調査区Ⅱ出土石器・石材リスト（11のみ雄樋川河岸採集品）

No.	図	名称	地点	層	番号	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	図9-47	楔形石器	調査区Ⅱ P7	IVB		チャート	14.0	13.0	5.3	0.9	磨滅顕著 (特に稜線)
2	図9-47	石核	調査区Ⅱ	V	SAK656	チャート	24.3	27.7	17.4	13.9	未発達円錐頭著 一部に稜面残る
3	図9-47	碎片	調査区Ⅱ 07北トレ	IVC		チャート	42.5	24.6	19.0	13.8	白色
4	図9-49	台石?	調査区Ⅱ	IVC	SAK150	片状砂岩	73.8	88.0	28.9	168.7	赤色付着物あり 使用痕は不明瞭
5	図9-49	石斧	調査区Ⅱ	IVA	SAK041	緑色岩類	13.4	33.0	34.0	166.8	石斧破損品と推定 残存部に研磨は見られない
6	図9-49	磨石類?	調査区Ⅱ	IVC	SAK902	石灰岩	74.0	18.4	27.0	49.0	円礫破片 使用痕は不明瞭
7	図9-49	砥石	調査区Ⅱ	ⅡB	SX2-2 No. 18	火成岩類	57.5	46.8	53.5	178.3	
8	図9-49	砥石	調査区Ⅱ	ⅡA	SAK702	火成岩類	33.8	23.1	42.8	38.6	
9	図9-49	砥石	調査区Ⅱ	ⅡB	SAK728	砂岩	102.2	54.1	11.6	89.8	
10	図9-49	石斧	調査区Ⅱ	造成土中		緑色片岩	104.4	56.5	24.3	229.0	磨製石斧から 打製石斧に変形
11	図9-49	敲石	雄樋川	河岸粘土 層中採集		緑色岩類	78.1	50.8	36.4	273.0	磨製石斧から 敲石に変形
12	図9-51	軽石	調査区Ⅱ	IVA	SAK754	軽石	70.5	51.2	30.4	43.1	灰褐色 目だつた加工なし
13	図9-51	軽石	調査区Ⅱ	IVC	SAK951	軽石	27.1	18.9	13.4	1.2	灰褐色 目だつた加工なし
14	図9-52	石材	調査区Ⅱ	Ⅱ		火成岩類	92.8	63.3	41.5	240.0	細粒の有色鉱物と 無色鉱物が斑状に 見られる特殊な石材
15	図9-52	石材	調査区Ⅱ 07	ⅡB		火成岩類	77.8	48.9	9.0	53.4	
16	図9-52	石材	調査区Ⅱ N7	IVA-IVB		片岩	39.0	38.8	17.8	28.2	縁辺打ち欠き?
17	図9-52	石材	調査区Ⅱ	IVB	SAK823	不明	93.0	69.8	35.1	323.0	目だつた加工なし
18	図9-52	石材	調査区Ⅱ	VA	SAK1092	不明	57.1	50.9	12.8	50.2	表面擦れ?
19	図9-52	石材	調査区Ⅱ	IV?	SAK1430	ケイブパール	25.4	23.8	21.4	13.8	
20	図9-52	石材	調査区Ⅱ	IVC	SAK885	泥岩 (シルト質)	42.8	37.0	25.2	43.1	島尻層群中の粘土 層のノジュール?
21	図9-52	石材	調査区Ⅱ 07北トレ	IVC		石灰岩	56.9	41.8	28.3	81.4	
22	図9-52	石材	調査区Ⅱ	Ⅵ	SAK1293	砂岩	61.6	18.5	9.0	20.5	やや擦れ?
23	図9-53	石材	調査区Ⅱ	Ⅵ	SAK697	泥岩 (シルト質)	97.0	85.0	34.2	435.0	島尻層群中の粘土 層のノジュール?
24	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ	造成土中							
25	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ	IV	SAK466		65.4	33.4	13.5	12.1	
26	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ 06	IVB-IVC			48.4	17.9	14.7	8.6	
27	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ	IVC	SAK1470		50.3	31.3	21.3	18.1	
28	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ	IVC	SAK1001		32.0	18.1	10.4	5.2	灰色化(焼け?)
29	図9-53	サンゴ	調査区Ⅱ N・07ベルト	VA			45.8	32.2	21.0	17.3	



図9-49 調査区II出土石器・石材実測図
11のみ雄樋川河岸採集品。

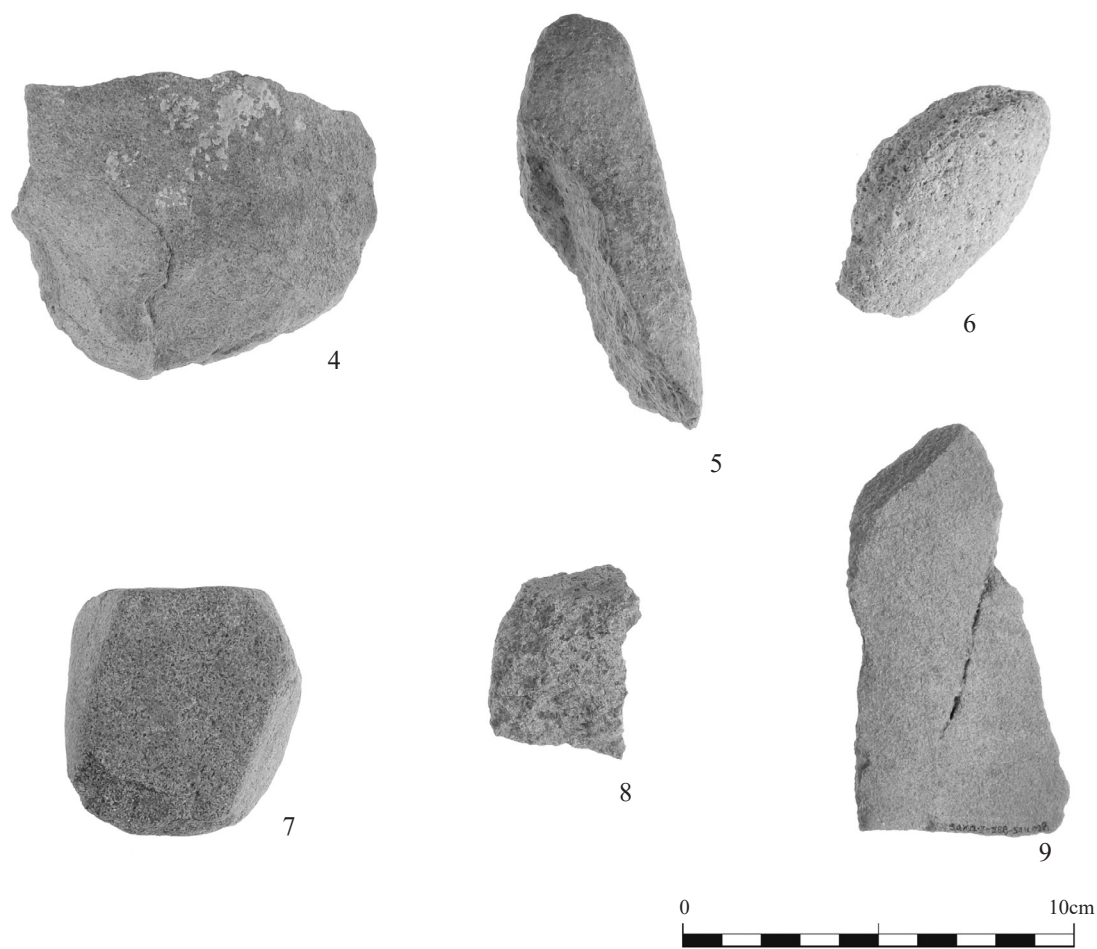


図9-50 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(2)

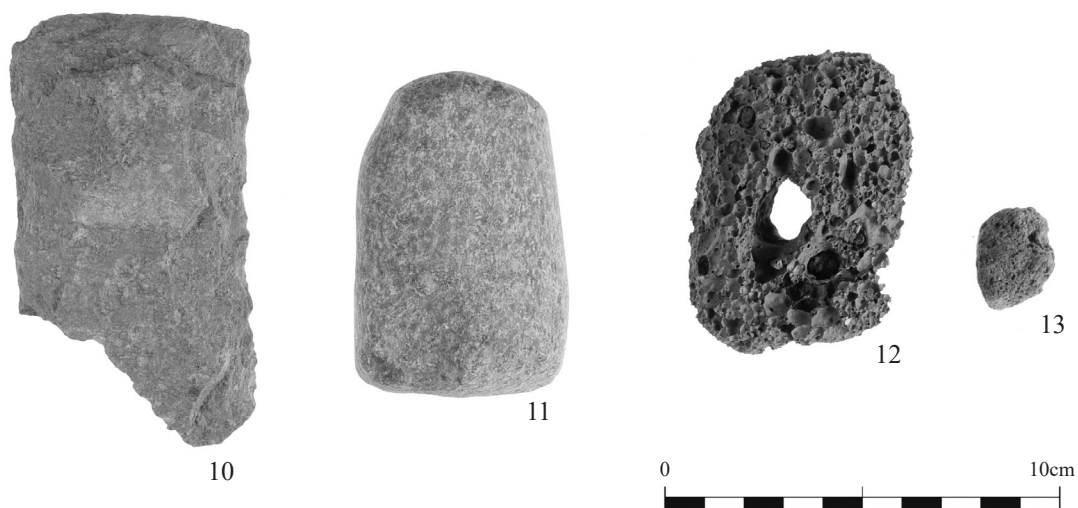


図9-51 調査区Ⅱ出土石器・石材写真(3)

11のみ雄樋川河岸採集品。

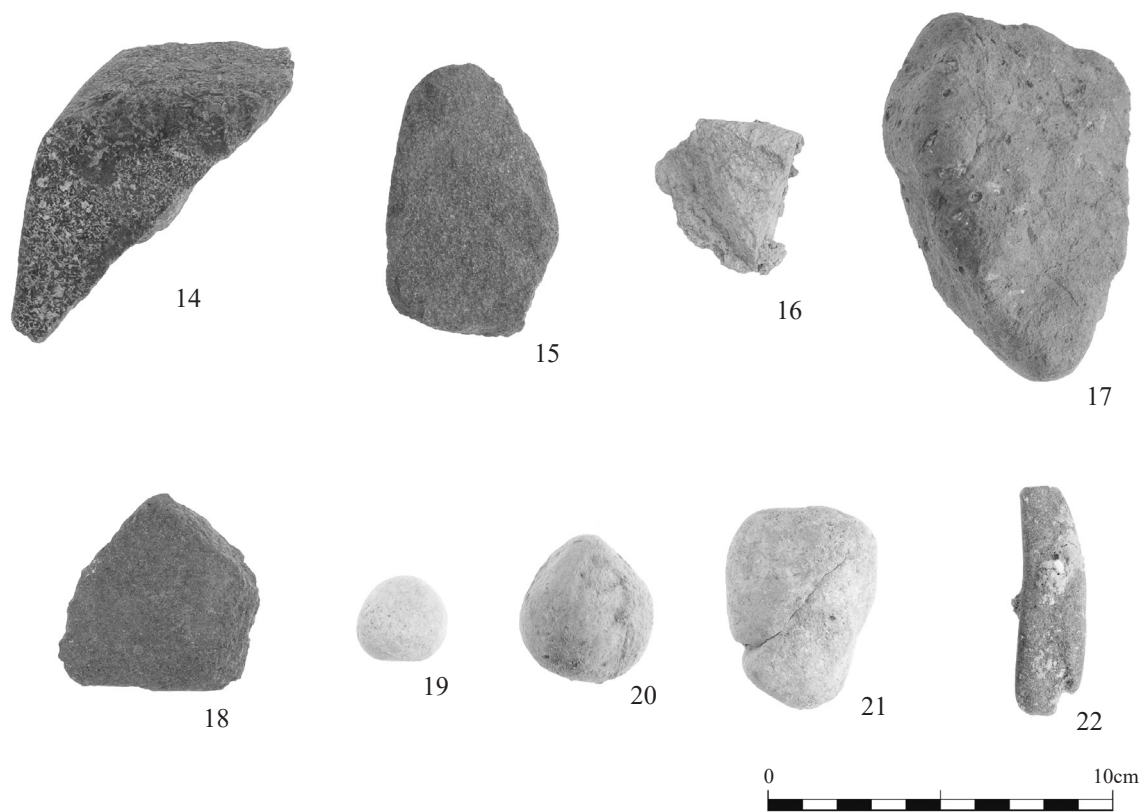


図9-52 調査区II出土石器・石材写真(4)

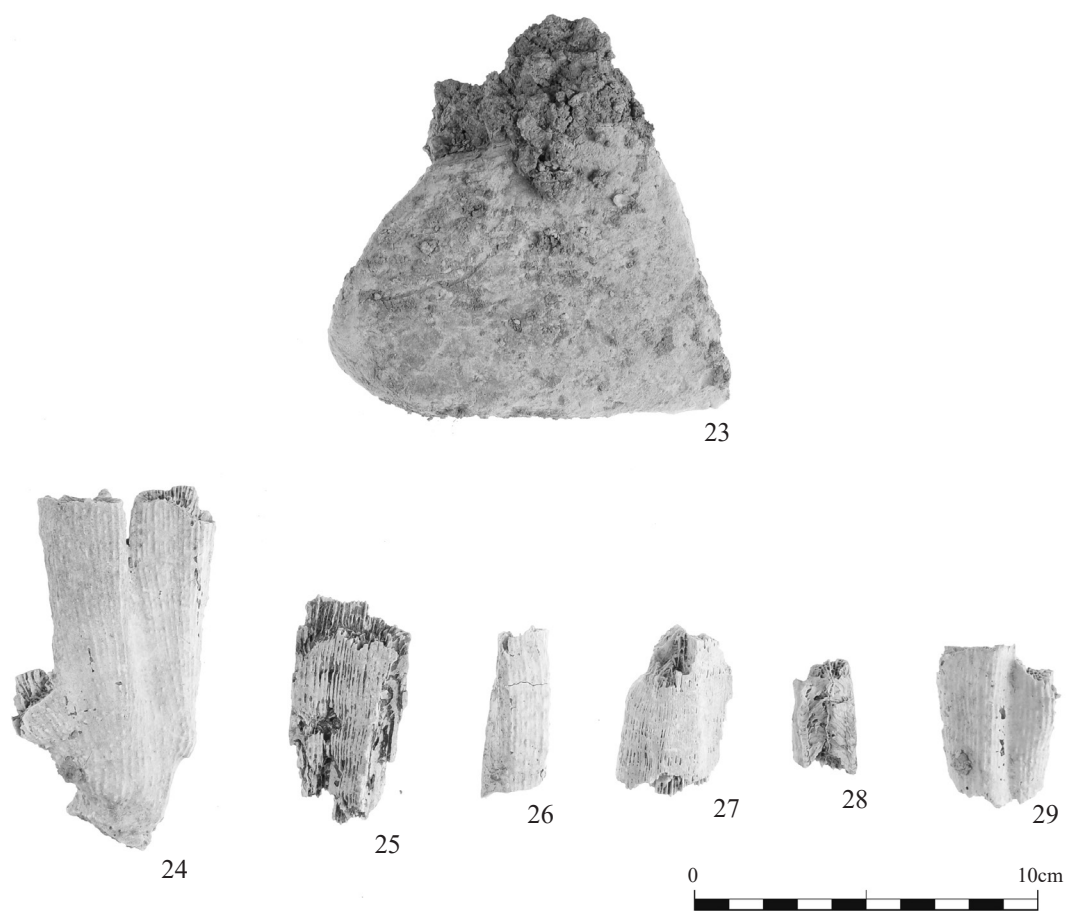


図9-53 調査区II出土石器・石材写真(5)

層群の泥岩ノジュールに由来すると考えられる礫で、雄樋川の洪水によってもたらされた可能性も考えられる（石原与四郎氏私信）。23はⅥ層出土。24～29はサンゴ骨格（セファロイド型）で、ⅣC層を中心に出土した。イシサンゴ目キクメイシ科タバネサンゴなどの可能性が考えられるようである（山崎仁也氏私信）。

4-4 貝器（図9-54～60、表9-10）

採集品も含めて装飾品9点（1～3、28～33）と利器26点（4～27、34、35）があり、このほかにおきなわワールド保管のゴホウラ貝輪の破片1点がある。

1はマルツノガイ類で、島尻層群由来の化石と考えられるもの。装飾品として利用されたと考えられる。ⅣC層出土。2、3は穿孔されたトミガイで、貝玉の一種。縄文晩期のものと思われる。4～20、22～24はシレナシジミを素材とするもので、4はシレナシジミ製の貝匙、24は調査区Ⅰ周辺の採集品であるが形態的には貝匙と見て良いであろう。5～20はシレナシジミ腹縁粗加工品（山崎2017a）で、ⅣB、ⅣC層を中心にまとまった点数が得られた。主として条痕文土器に伴うものと考えられる。10、12、24については、直接放射性炭素年代測定を実施した。結果として、10は4760 ¹⁴C BP (MTC-16905)、12は5605 ¹⁴C BP (PLD-23296)、24は5420 ¹⁴C BP (TKA-18565)という年代が得られた（分析・考察編Ⅷ参照）。24は年代的には12に近く、条痕文期としてはやや古い年代である。

21はサメザラの腹縁内面側に加工痕が見られるもので、貝刃の一種と思われる。ⅣB層出土。22、23は破片資料で、本来の形状は不明であるが腹縁部に平坦面が形成されており、貝匙的なものであるか。25はⅤA層出土のマクガイの破片で、内面側に線条痕が見られる。刃器的な使用が想定できるもので、類似のものは武芸洞遺跡でヤブチ式に伴って出土している（山崎2014、図6-5：13参照）。26、27はⅣC層出土のハマグリ類で、加工品と思われる。

28はゴホウラ腹面型貝輪で、縄文晩期の土器（図9-42：36等）に伴った。29、30はアツソデガイの腹面型貝輪で、出土状況からは条痕文土器に伴ったと判断されるが、なお検討を要する。31もⅣC層から出土したゴホウラ製品で、貝輪破片の可能性も考慮されるが一端が薄く研ぎだされており、短冊状の製品（加工具？）になるのではないかとと思われる。32、33は貝輪破片である。34は真珠層の発達した二枚貝を素材とする貝鏃の優品で、先端部には研ぎ出しによって鑄が形成されている。基部に二孔を穿つ。沖縄では二孔の貝鏃は珍しい。採集品のため帰属時期は不明である。35はミミガイで、特段の加工はないが腹縁に使用に伴うと考えられる摩滅が見られる。Ⅱ層出土。

4-5 ガラス小玉（図9-61、表9-11）

調査区Ⅱ M8区のⅣA層中からガラス小玉が4点検出されている。はじめ1点が *in situ* で検出され、周辺の土壌についてフルイ選別を実施した結果3点を追加で確認し、計4点のガラス小玉を回収することができた。これらはM8区開口部付近の石灰岩礫の隙間を充填する堆積物中から出土したもので、周辺からは縄文晩期の土器等がまとめて検出されている。縄文時代晩期の土器に伴うことが予想されたが、田村朋美氏による材質分析の結果、カリ鉛ガラスであることが判明し、12世紀以降のものである可能性が高いことが明らかになった（分析・考察編Ⅷ）。鹿児島県トマチン遺跡（伊仙町）でも、縄文晩期の包含層中から同様のカリ鉛ガラスが検出された事例があり（新里編2013）、カリ鉛ガラスは比重が重いため、状況によっては下位層に沈み込むこともあると考えられる（田村朋美氏私信）ので、注意が必要である。

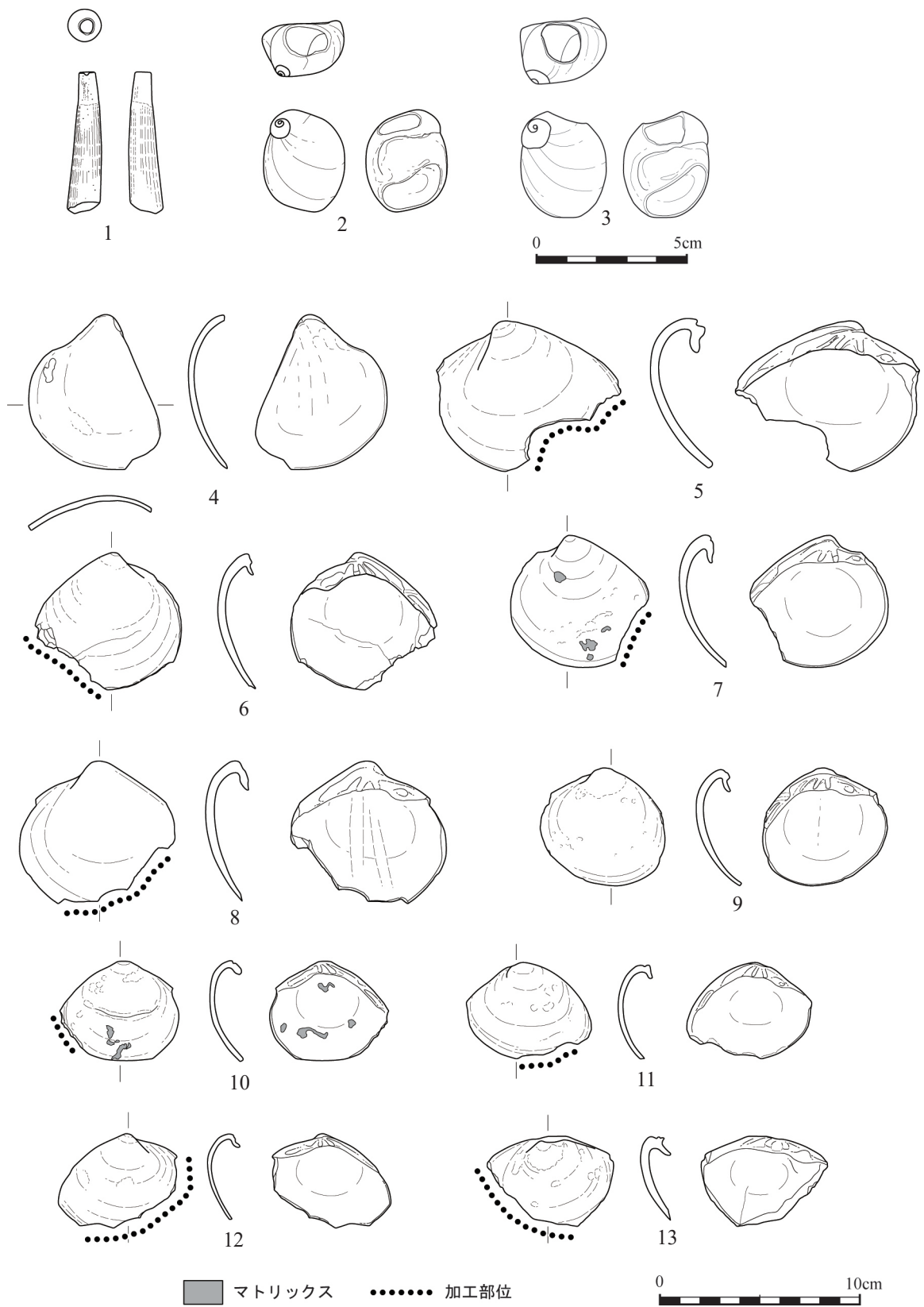


図9-54 調査区II出土貝器実測図(1)

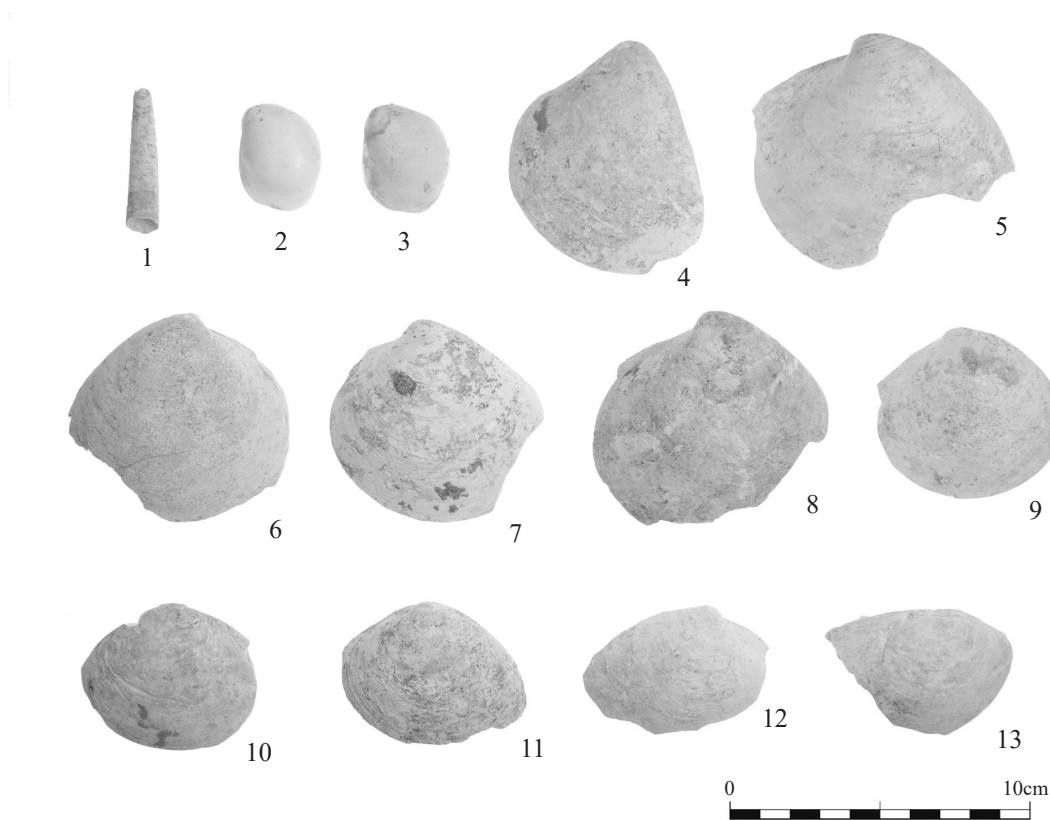


図9-55 調査区Ⅱ出土貝器写真(1)

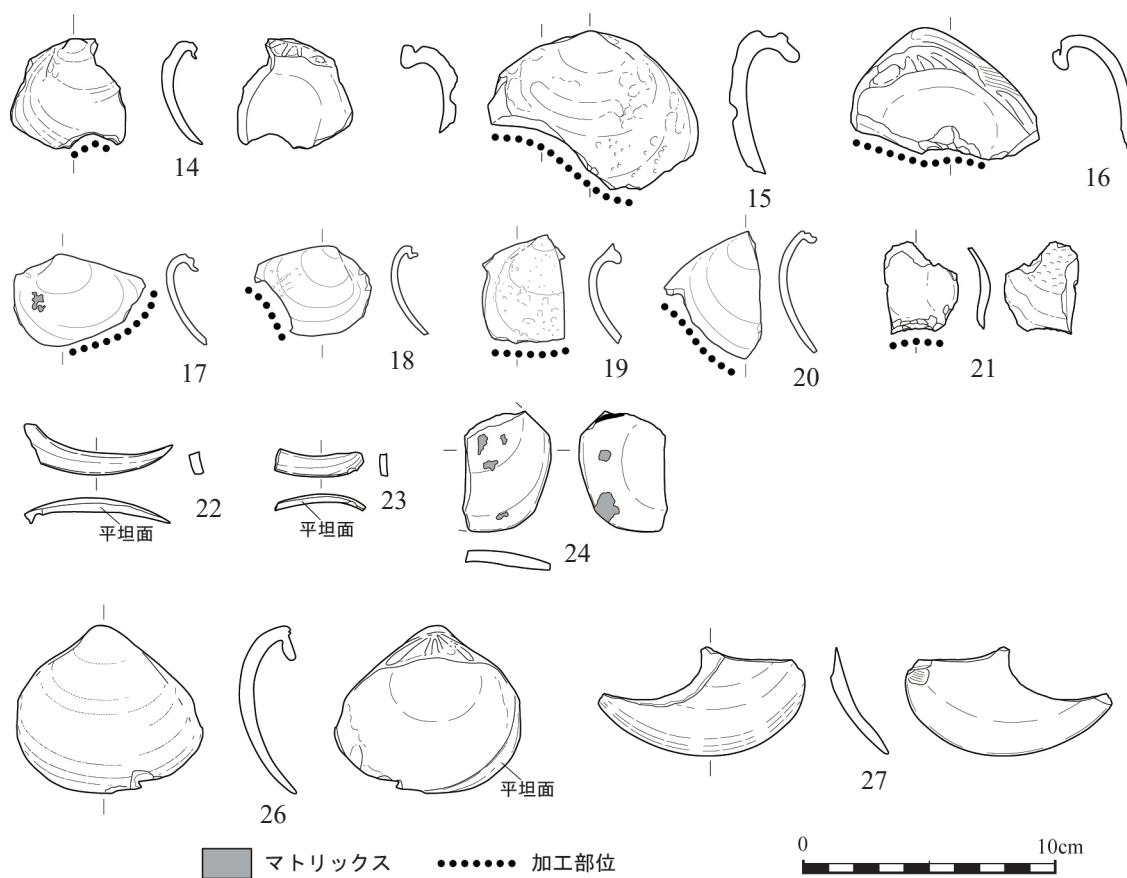


図9-56 調査区Ⅱ出土貝器実測図(2)

24のみ採集品。

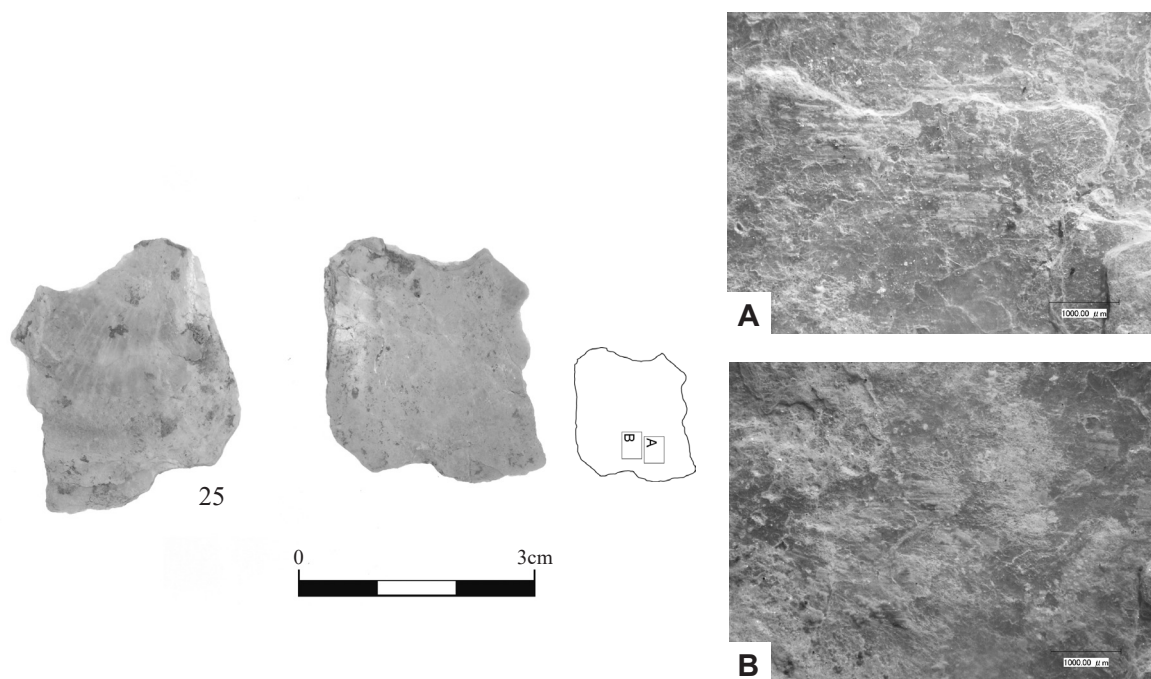


図9-57 調査区II出土貝器写真(2)

A・BはNo. 25の内面に見られる線条痕のマイクロスコープ写真。

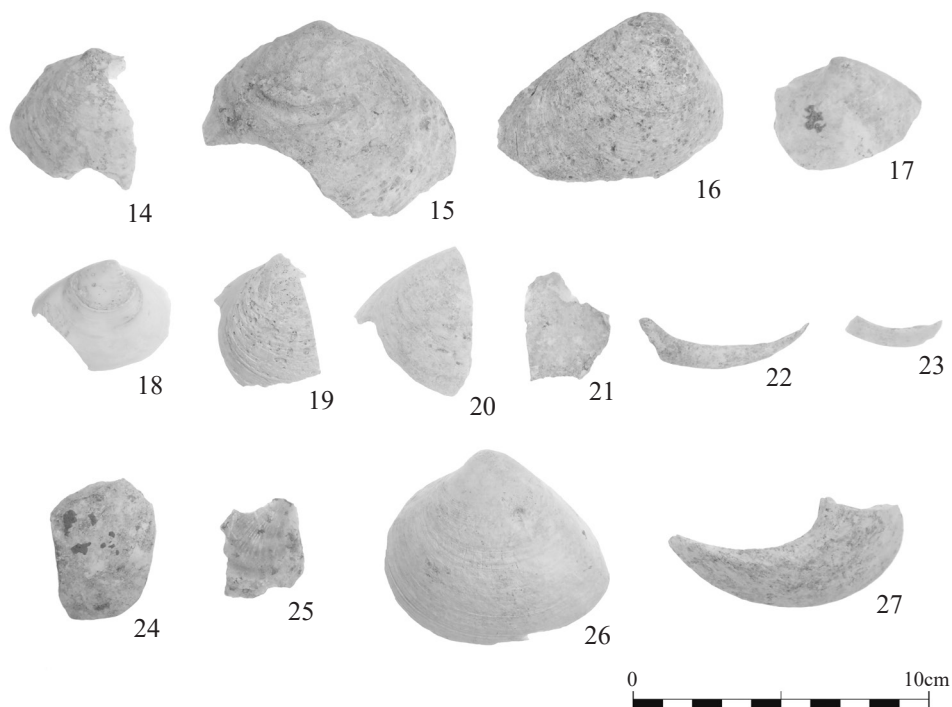


図9-58 調査区II出土貝器写真(3)

24のみ採集品。

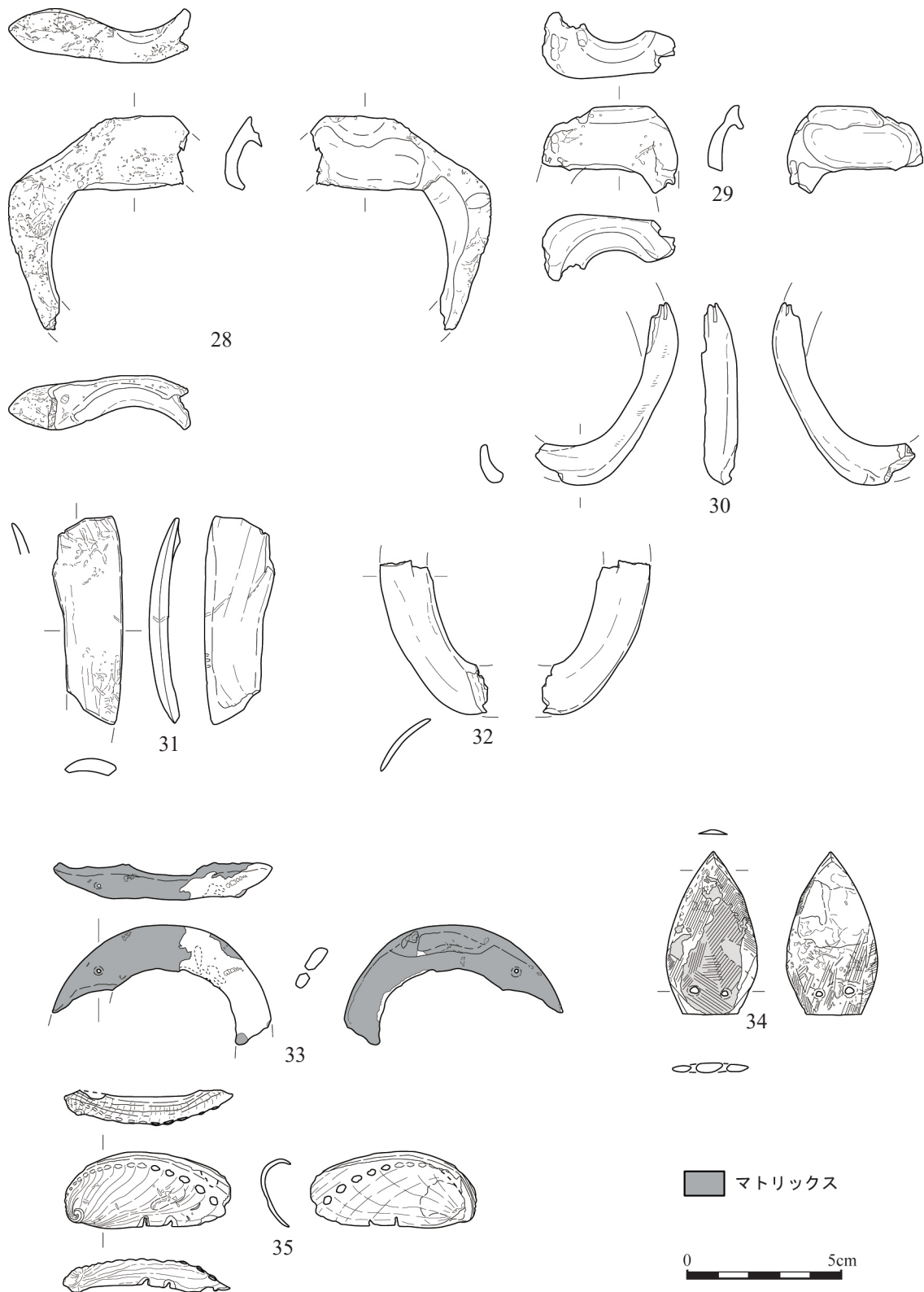


図9-59 調査区II出土貝器実測図(3)

33、34は採集品。



図9-60 調査区II出土貝器写真(4)

33、34は採集品。

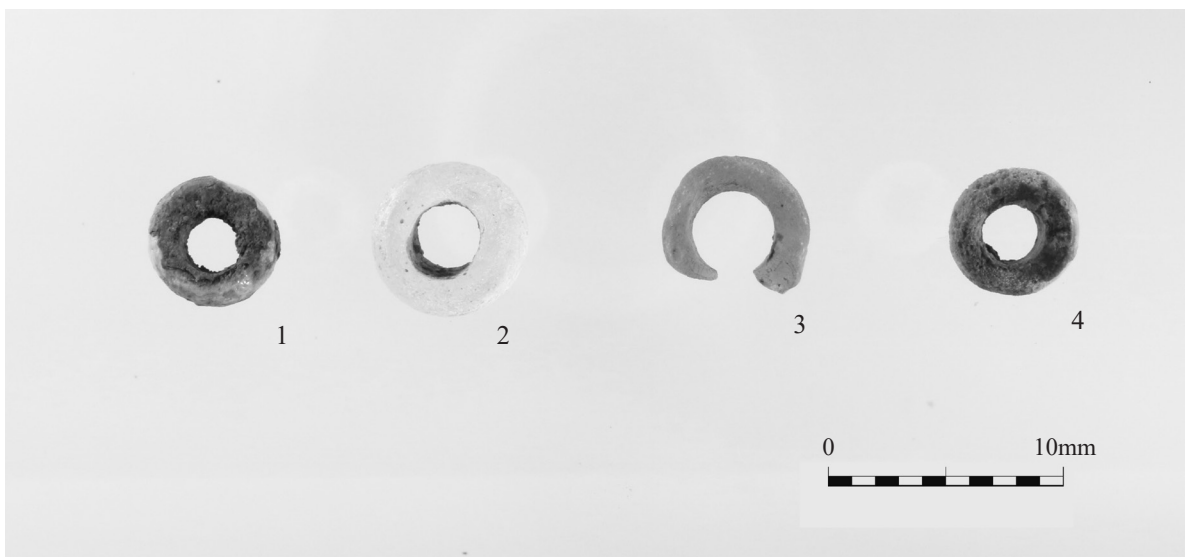


図9-61 調査区II出土ガラス小玉写真

第9章 調査区Ⅱ

表9-10 調査区Ⅱ出土石器リスト (24、33、34は採集品)

No.	図	名称	地点	層	番号	貝種	部位	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	加工等
1	図9-54	装飾品 (貝玉)	調査区Ⅱ	IVC	SAK1046	マルツノガイ類		46.0	10.2	3.5	殻頂付近磨滅 表面傷み
2	図9-54	装飾品 (貝玉)	攪乱			トミガイ		33.4	26.4	12.5	穿孔あり
3	図9-54	装飾品 (貝玉)		IV	SAK1329	トミガイ		35.3	27.4	13.8	穿孔あり
4	図9-54	貝匙	調査区Ⅱ	IVB	SAK098	シレナシジミ?	左殻	76.2	58.5	24.0	全体的に磨滅
5	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ	IVB	SAK104	シレナシジミ	左殻	89.0	73.0	61.4	ノッチ状の加工痕
6	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ	IVB	SAK103	シレナシジミ	右殻	66.8	71.3	37.1	鋸歯状の加工痕
7	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ 07	IVC		シレナシジミ	左殻	66.3	68.0	40.9	鋸歯状の加工痕
8	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ N7			シレナシジミ	左殻	68.0	73.5	52.1	鋸歯状の加工痕
9	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ N8	I		シレナシジミ	左殻	57.9	61.5	26.8	成長線に沿った割れ
10	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ	IVC	SAK152	シレナシジミ	右殻	49.2	56.4	16.7	年代測定試料 (MTC-16905) 成長線に沿った割れ 鋸歯状の加工痕
11	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ	IVA	SAK051	シレナシジミ	左殻	45.1	62.7	14.2	鋸歯状の加工痕
12	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ	IVC	SAK144	シレナシジミ	右殻	40.0	54.3	12.4	年代測定試料 (PLD-23296) 鋸歯状の加工痕
13	図9-54	粗加工品	調査区Ⅱ N7	IV下部		シレナシジミ	左殻	42.5	59.2	22.4	鋸歯状の加工痕
14	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ	IVB	SAK118	シレナシジミ	左殻	45.9	43.9	16.5	ノッチ状の加工痕
15	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ 07	崩落土		シレナシジミ	右殻	65.1	81.1	64.2	ノッチ状の加工痕
16	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ	造成土中		シレナシジミ	右殻	51.6	75.4	46.4	ノッチ状の加工痕
17	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ 07	IVB		シレナシジミ	左殻	35.3	51.3	12.7	鋸歯状の加工痕
18	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ	IVC	SAK1368	シレナシジミ	右殻	36.1	45.6	7.8	ノッチ状の加工痕
19	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ	IVA	SAK1455	シレナシジミ	左殻	40.7	32.2	13.7	鋸歯状の加工痕
20	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ	IVC	SAK965	シレナシジミ	右殻	48.9	38.7	9.9	ノッチ状の加工痕
21	図9-56	粗加工品	調査区Ⅱ 07	IVB		サメザラ		36.0	27.4	4.3	腹縁内面側に加工
22	図9-56	加工品?	調査区Ⅱ	IV	SAK467	シレナシジミ		58.7	9.7	3.0	腹縁端面面取り状
23	図9-56	加工品?	調査区Ⅱ 07北トレ	IVC~V		シレナシジミ		34.1	7.8	1.4	腹縁端面面取り状
24	図9-56	貝匙	調査区Ⅰ 周辺	採集品		シレナシジミ	左殻?	46.4	34.5	11.9	年代測定試料 (TRA-18565)
25	図9-57	使用品?	調査区Ⅱ 07ベルト	VA		マクガイ		31.8	28.3	1.7	内面側に 線条痕あり
26	図9-56	加工品?	調査区Ⅱ 07	IVC		ハマグリ類		63.7	74.0	47.5	腹縁部破損 内面側腹縁に平坦面
27	図9-56	加工品?	調査区Ⅱ	IVC	SAK145	マルスダレガイ科 (ハマグリ類?)		81.0	25.5	25.5	腹縁部の破片
28	図9-59	貝輪	調査区Ⅱ	IV	SAK1432	ゴホウラ		71.0	59.5	22.7	腹面型貝輪
29	図9-59	貝輪	調査区Ⅱ N・07	IVC		アツソデガイ		29.3	43.3	9.7	腹面型貝輪
30	図9-59	貝輪	調査区Ⅱ	IV	SAK018	アツソデガイ		63.3	43.1	8.5	腹面型貝輪
31	図9-59	加工品	調査区Ⅱ P7ベルト	IVC		ゴホウラ 外唇部		66.0	22.4	9.4	短冊形の製品?
32	図9-59	貝輪	調査区Ⅱ	攪乱		ゴホウラ?		58.2	34.4	5.2	非常に薄い (約2mm) 良く研磨されている
33	図9-59	貝輪	調査区Ⅰ 付近	採集品		ゴホウラ		71.1	16.2	10.1	背面型貝輪 補修孔あり
34	図9-59	貝鏃	西洞口外	採集品		クロチョウガイ?		53.8	29.4	5.8	厚さ3mm
35	図9-59	ミミガイ	調査区Ⅱ	II	SAK1349	ミミガイ		54.9	25.0	2.7	腹縁に磨滅あり

表9-11 調査区Ⅱ出土ガラス小玉リスト

No.	図	名称	色調等	地点	層	径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	図9-61	ガラス小玉	青緑色透明	調査区Ⅱ M8	IVA	5.1	3.0	0.2	in situにて回収
2	図9-61	ガラス小玉	透明	調査区Ⅱ M8	IVA	6.2	4.0	0.3	フルイ選別にて回収
3	図9-61	ガラス小玉	青緑色 半透明	調査区Ⅱ M8	IVA	6.1	2.7	0.1	フルイ選別にて回収
4	図9-61	ガラス小玉	不明	調査区Ⅱ M8	IVA	5.2	2.2	0.1	フルイ選別にて回収

4-6 銭貨・コイン (図9-62・63、表9-12)

攪乱層やⅡA層から銭貨・コインが検出されている(1~5)。1、2は寛永通宝、3、4は不明、5は一銭(昭和13年)である。おきなわワールドにもサキタリ洞遺跡から出土した銭貨、コインが保管されており、合わせて報告する(6~8)。6は淳熙元寶(南宋、初鑄1174年)の折二銭(永井1996)で、背文は十■(■は判読不能)である。ガスク時代に持ち込まれたものと考えられる。7は一銭(大正7年)、8は1セントコインである。

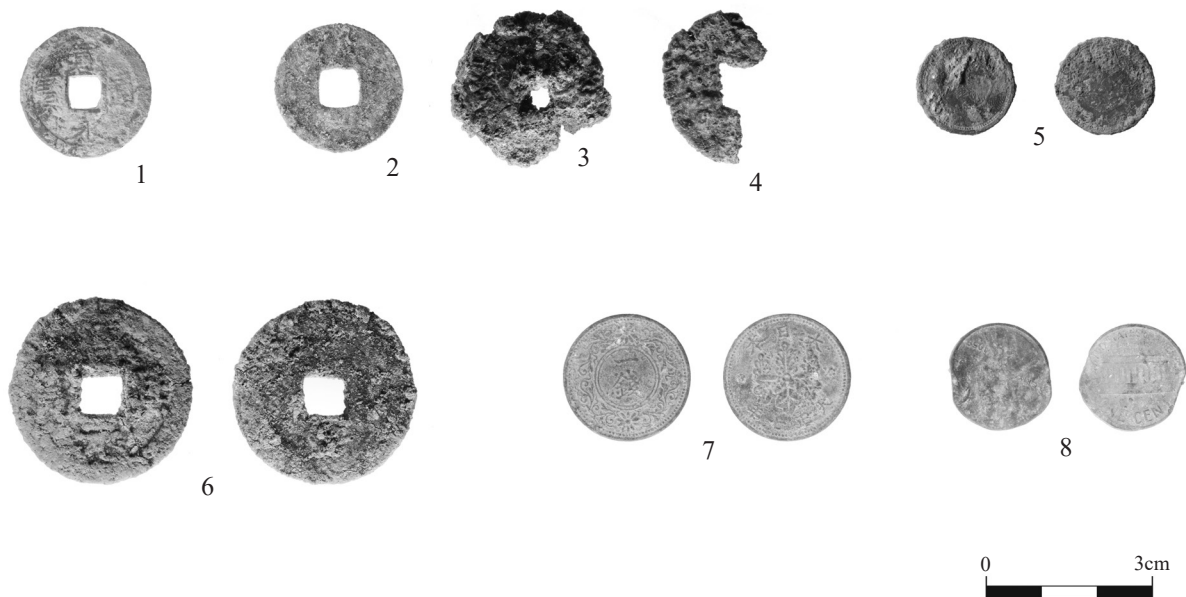


図9-62 サキタリ洞遺跡出土銭貨・コイン写真

6～8はおきなわワールド保管資料。

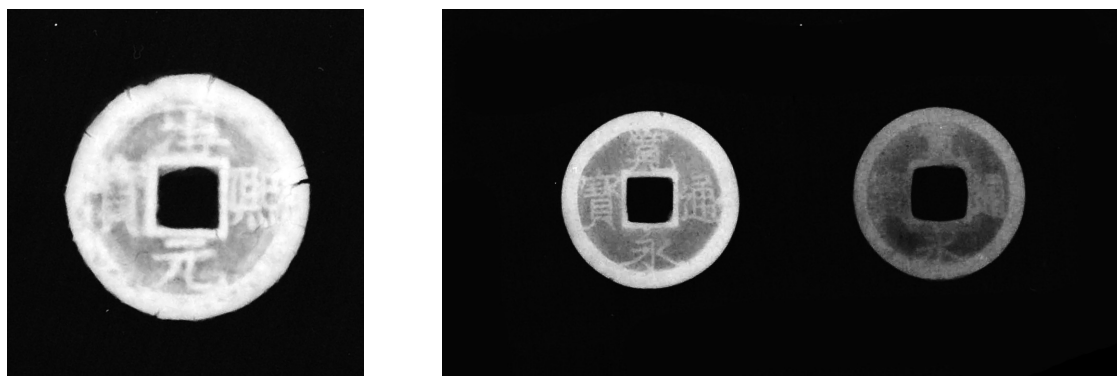


図9-63 サキタリ洞遺跡出土銭貨のレントゲン写真

左は淳熙元寶 (6)、右は寛永通宝 (1、2)

表9-12 サキタリ洞遺跡出土銭貨・コインリスト

No.	図	名称	地点	層	番号	径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	図9-62	寛永通宝	調査区II P7	IIA		23.7	9.0	2.7	
2	図9-62	寛永通宝	調査区III	攪乱		23.2	1.0	1.8	
3	図9-62	不明	調査区III	攪乱		27.8	6.9	6.5	二枚の銭が癒合している
4	図9-62	不明	調査区III	攪乱		27.4	2.6	2.2	半欠
5	図9-62	一銭	調査区II	II上面		17.6	1.5	0.9	昭和十三年
6	図9-62	淳熙元寶				33.5	2.7	7.8	折二銭 背文は十■ おきなわワールド 保管資料
7	図9-62	一銭				22.9	1.6	3.8	大正七年 おきなわワールド 保管資料
8	図9-62	1セント				19.4	1.3	3.1	1959年 おきなわワールド 保管資料

4-7 その他の資料

図9-64、65は、以前に島袋林信氏らによってサキタリ洞遺跡から採集された土器で、おきなわワールドに保管されている資料である。1～2は条痕文土器、3～6は面縄前庭式と考えられる資料、7～42は縄文時代晩期～弥生・平安並行時代の土器である。14～17は鹿児島県上城遺跡（与論町）などに見られる細沈線を有軸羽状に施す土器（堂込2005）で、胎土には雲母を含む。今回の発掘資料には見られない弥生・平安並行時代の土器（37、40、41）や、薄手の特殊な土器（38～39、42）が含まれていることが注意される。43はグスク土器であろう。44～46は胴部、47～51は底部である。52は宮古式土器で、蔵骨器として用いられていたものと推定される。今回の調査において西側洞口付近で採集された頸部の破片が、おきなわワールドに保管されていた胴部破片と接合した。

引用文献

- 新里貴之編 2013『徳之島トマチン遺跡の研究—トマチン遺跡第1～5次発掘調査・南西諸島葬墓制研究』鹿児島大学
- 新里貴之編 2014『沖永良部島 鳳雛洞・大山水鏡洞の研究』鹿児島大学
- 堂込秀人 2005「上城遺跡」『先史・古代の鹿児島 遺跡解説』鹿児島県教育委員会
- 永井久美男 1996『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
- 那覇市教育委員会 2007『銘川古墓群—重要遺跡確認調査報告』那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会 1998『銘川古墓群（1）』
- 山崎真治 2014「ヤブチ式土器と貝器文化—沖縄県南城市武芸洞遺跡出土資料の分析から—」『考古学研究』61-1
- 山崎真治 2017a「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡（調査区Ⅱ）出土のシレナシジミに関する考古学的検討」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』10
- 山崎真治 2017b「沖縄・奄美の曾畑式土器をめぐる諸問題」『南島考古』36
- 山崎真治 2017c「南島爪形文土器以前の土器を探る—新出資料の解釈にむけた作業仮説の提示—」『沖縄考古学会 2017年度研究発表会資料集』沖縄考古学会
- 山崎真治・仲里 健 2016「サキタリ洞遺跡出土土器の胎土分析（予報）」『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ』沖縄県立博物館・美術館
- 吉村和久・片桐千亜紀・藤田祐樹・山崎真治・土肥直美・鮎沢 潤・栗崎弘輔 2013「固結堆積物から見た化石骨の埋没環境」『Journal of Speleological Society of Japan』37



図9-64 サキタリ洞遺跡出土土器(1)

おきなわワールド保管資料。

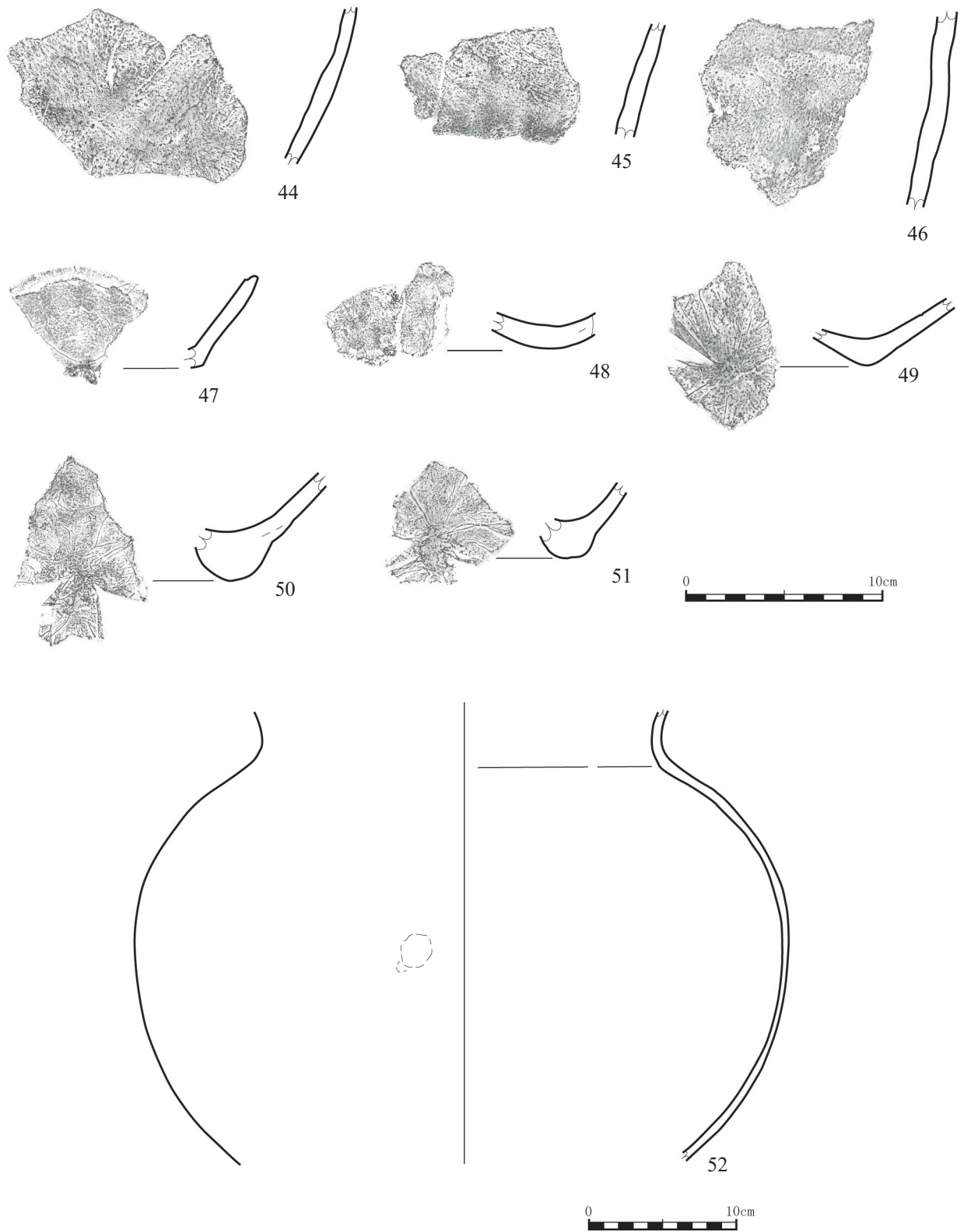


図9-65 サキタリ洞遺跡出土土器(2)
おきなわワールド保管資料。